ムラ

なぜ現代は「死ね」が横行するようになったか

九折空也

それでもわたしは文学として書かねばならない 1
かつて怒りに "寄った" われわれの魂 3
雨が降る午後の空に馴染まないクリーム色の用紙の冊子 6
身体と「かわいい」について 10
「かわいい」は我慢で作られる 14
ムン 17
ムンの循環と解決 20
一般、しばしば、ムンに取りつかれた考えと挙動 22
慟哭するムン 24
雑多なムン 30
ムンは言いたがり、黙り、敵対する 32
芸術と宗教にかかわるムン 35
ムンチャカの法則 41
湧き出てくる「我慢します」 43
我慢のメカニズムと、その蓄積 46
生命軸の報酬 49
「傷つく」という不明の言い方 52
現代の新入社員は入社した時点で傷ついて我慢している 55
「傷つく」という分岐点 60
甘え、公私混同、「あなたは我が強いんだってば」 67
身が救われないムンは異軸翻訳をする 70
ありがとうの逆転 74
生死軸の例外が「かわいい」という現象 80
幻想を強化したインタラクティブ性 83
「かわいい」と「ファン」は相互幻想によって成り立っている 85
パフォーマンスが錯覚され、あこがれの生命軸が逆転する 87
「計算が合わない」と感じるムン 91
ムンが魔境入りする 95
ムンは自分を恐いもの知らずと思い込む 97
イラストを模すムン 101
役割になりきるムン 107
余談①アニメ「推しの子」が流行している 111
余談②じつは何もかも「わからない」と感じている人がいる 114
余談③アイドルのアイドルたるゆえん 119
順転魔王 123
high-ムンは実績を捨てられない 128
ここまでのまとめと、最後のムンに向かって 132
居直るムンはピンと来ないことを威張る 135
終わりに、予選落ちうんぬんを述べて 141

それでもわたしは文学として書かねばならない

いまから十年前、わたしは未だ別の街にいたことを思い出す。その当時も書斎の窓から見える景色を横目に見る座席とライティング・デスクの位置をもって、このようなことが永遠に続けばよいと望んでいた。わたしには永遠の場所が必要で、わたしはそのことを当時、魂の帰る場所だと言い張りつづけていたはず。当時の東京葛飾区からいまは目黒区に移ったのだが、現在の書斎から見下ろす窓からの景色については、葛飾区のそのときほど趣きはないにもかかわらず、いまはそれは新たな永遠の場所としてわたしにひたむきに肯定されようとしている。やはりこのようなことが永遠に続けばよいとわたしは望むし、いまは、いくらでも自分は永遠の場所へ旅に出てもよいのだということも知るようになった。いかにも陳腐なわたしなりの発見を言うと、窓からの景色はその眺望というより、いつもその場所から見える形式が変わらないということじたいが景色になっているということなのだ。仮に観光客が見下ろすならつまらぬ街の一画が騒々しく窓枠に切り抜かれているのみでその旅の期待に応えるものではないだろうが、わたしがずっと自分の書き話しをつづける中、いつも左手にはこの景色があった。いかなるときも春夏秋冬はこの窓から吹き込み、家屋の逆側の窓へ吹き抜けていった。惰性的に流れる商店街の電柱スピーカーからのポップスらしいＢＧＭ――いまこのときはビートルズのYesterday が弦で弾（はじ）かれている――も、高架を走り抜けていく東急東横線のけたたましさとあいまって、ついにわたしの意識には何ら干渉しないものとなった。わたしはさいわいなことに、この窓からの一切を高級なものとは認めない冷静さのまま、自分の窓との付き合いを永遠のものとして独りで隠し持つことができるようになったわけだ。

ささやかな自負とよろこびとして、わたしはいまこのときも、何らウソや誇張を盛り込むことなく、あるがままのことを正直に書き話すことができる。そのことは十年前もいまも変わらないわけだ、わたしが永遠の場所にいるかぎりは。わたしは今回、もっと淡々とした、必要とされる物事の見方と捉え方を、学門の形式で示そうとしているのだが、にもかかわらず冒頭からこのような言いようと文体を示してかかるのは、わたしがすべてについてどこまでも文学として書かねばならないらしいということの〝しるし〟だと受容してもらいたい。わたし自身にそのようなこだわりはないつもりだが、わたしが己の名を冠して文章を書こうとするとき、文学の呼びかけを排したそれを示そうとすると必ず途中で手が止まる。そしてそこまで合理的に書き示したはずの数万字を読み返そうとしても、はじめの数行さえ読む気にならず、印刷された縦書きの用紙はそのままゴミ箱に捨てられるのだ。隅をホッチキスで留めた甲斐もなしに。

「現代と恋愛」と冠した講義口調の文章を、十年前、わたしは自分の運営するウェブサイトに掲載している。いまは古くなって気恥ずかしい感触がする恋愛レクチャーという分類の、Vol2. として掲載したもの。あのときから十年が経ったわけだが、わたしは誇るでもなくどうやらあのときに予測した、あるいは予告したとおりのことがこの十年後に起こっているということをここに報告したい。ただし、予告したとおりのことが起こったとしても、そのじっさいの破壊力と悍（おぞ）ましさのインパクトは予想の範囲内になかった。そしてあのとき予告したことは、たしかにそのとおりになったけれど、いくらか変化球が掛かってのものにもなったということ、そのことまで含めて説明と報告をここに済ませたいと思う。わたしはこのとおり、いまも当時と変わらぬ声をまったくあたらしいものとしてここに乗せて書き話すことができるわけだから、わたしはあのときから十年間をなんとか生き抜いてきて、いまもここに生き続けているのだと誇ることができよう。この十年間をくぐりぬける道中では、無謀というほどの前傾姿勢にならざるをえなかったこともあったし、また旅路とは言い難いようなぬ

かるみの踏破をわたしなりにしてきたということもあった。そのことのデブリーフィングをここに刻むと共に、いまはあのときよりもはるかに精密な学門を、より有益な形で書き示すことができるようになったのだ……と信じているところのわたし自身の姿をもあきらかにしよう。もしわたしがそれらのことを正しく為し遂げることができるのなら、それらのすべてが未来への扉を無音で開錠するものとなるに違いない。

十年前のそれを各講のタイトルだけ取り出してみても、当時に何を警告していようとしていたのかが如実に汲み取れる。いわく、ＩＴ技術は情報量を減らした／「頭が弱くなる」時代／営みの魅力が失われる／わざとらしさが横行する／陶酔がよろこびに取って代わる／麻痺型と陶酔型、等々。

十年前には、いまのように誰も彼もがアニメやアイドルパフォーマンスの、稚気あるいは痴愚めいてさえいるかもしれないそれを「推す」というようなことはなかったわけだ。あのときよりわれわれは確かに「頭が弱くなった」に違いない。十年前は平成二十五年、まだ年末にシンボリックに行われる紅白歌合戦は人々に年越しのムードを提供していただろう、あのときよりたしかに営みの魅力は失われて、いまわれわれは紅白歌合戦が前もってシラけるだろうことを予想の大前提にしている。Youtuber という一語をおいてみれば、それだけで「わざとらしさが横行する」ということに適合はしようし、「エモい」という一語をもって「陶酔がよろこびに取って代わる」ということも事実の説得力を持つだろう。わたしはこれらの十年前の予告が的中したのだといって肩をそびやかす気にはなれないが、自分なりにはいじらしく、このときの予告をもって、いまからわたしが話そうとすることにもささやかな信頼性の担保を示したいということなのだ。誰にも保証できないことだが、わたしはきっと場当たりの思いつきや物事へのただの感想を投げ放っているのではない。

麻痺型と陶酔型と題された第九講では、メンヘラという言いように触れている。誰も彼もが心療内科のいうメンヘラになるわけではないにせよ、メンヘラ"的"にはなりうるじゃないかということ、それによるメンヘラ文化も起こるだろうということが予告されている。それで……メンヘラという言い方はそれじたいが荒んでいて、そのわりに表面的にはカジュアル化した言い方になっているので取り扱いに危険が伴うといまも惧（おそ）れるが、その実際的なクラッシュのリスクがついに眼前のテーマになってしまったという状況に現在ある。かつてそのリスクは"迫ってきていた"のだが、いまはもうその表現が当たらない。眼前まで洪水が襲ってきているとき、目の前にあるのは洪水のリスクではなく洪水の実体だ。そのときになってようやくノアが方舟を造り始めるという話はないだろう。

十年前、わたしは当の話をなるべくフェアに合理的にしようとこころがけて、すべては脳のはたらきと意識のはたらきの違いにあると説明しようとしている。そのやり口はいまもって妥当だし誠実だったと自分で言いうると思うが、それだけだと説明のつかない未来への入口に直面してしまっている以上、いまは新たな書き方をもってこのことを説明しなくてはならない。そこで十年前には用いなかった魂・命という語での言いようもやむをえず持ちだそうというわけだ。

十年前の言いようでは、最大のリスクはあなたがメンヘラ文化の人になってしまうかもしれないことだということで話は締めくくられている。そのときは、

――「メンヘラ文化」などというのは、もちろん本講義の造語です。「幸いに」と言うべきですが、そのような語でネット検索をかけても、今のところ該当するページは出てきません。

と安堵の材料を述べているが、とうぜん、いま同じ語で検索をかければシレッとそれなりの該当ページは出てくるわけだ。わたしは予告したとおりのそうした十年間を、わたし自身としては避け、かといって単に遠ざけるのではなく、無謀な前傾姿勢で切り拓き活路を見い出そうとしてきた。その中で出会い、発見してきた魂のはたらきと現象をもって、あのときから十年後のこの話をしたいと思う。メンヘラ文化うんぬんはもう言及する対象でもなくなった。それよりも想像しが

たい変化球のクラッシュが、魂のこととしてわれわれに訪れようとしている。そのことに本質的に対抗する唯一の方法はやはり魂の命そのものであって、よってわたしはこのことを説明ではなく文学として書かねばならないということなのだ。

かつて怒りに〝寄った〟われわれの魂

発見の端緒は、わたしが怒りを発したときだった。わたしが怒りを発したとき、誰が悪いかとかどちらが悪いかではなく、〝無条件〟で、それに対抗する力のはたらきが生じるのがわかった。それは反発する無言の圧力である場合もあり、あるいは断絶の距離をとるバリアのようである場合もある、あるいは局所的な認知症を起こして夢遊病化する逃避のような場合もある。わたしは予感のうちにも、こうしてわたしの怒りに対しては〝無条件〟でそれに対抗あるいは反発する力が出るであろうことを覚え、そのことにふと違和感を発見した。発見してみるとその違和感は巨大なものだった。わたしが古くから知る仕組みにそぐわない、それは異例のことだったからだ。

わたしの知る古くからの仕組みにおいては、人は怒られると寄ってくるものだった！　意外かもしれないがそういうものなのだ、詳しい説明は後の段を愉しみに待ってもらうとして、たとえばわたしがかつて学生のころ（とても古い話だが）「お前がちゃんとやらんとあかんところやろが！」と、酒の席とはいえ後輩を平手で打ったところ、周囲は肝を冷やしたが、打たれた当人は顔をあげてよろこびに満ちて「そのとおりです」といい、それ以来わたしに最も懐いたということがある。あるいは集団に向けて、物事の運びが陰鬱になることに対してその理由を「お前らが冷たいからやろうが！」と怒鳴りつけ、そのとたん全員が直観的に「救われた」と体験したことがあった、むろんなぜそのように体験されたのかは当人らにもわからないのだが。

このことはさかのぼればむろんわたし自身にも経験があるのだ。あるいは現在のわたし自身、そうして怒られて魂が〝寄った〟ことだけで救われて構築されているといっても過言ではない。小学校から中学校に上がったとき、わたしを含めあたらしいクラスメートたちは体育の授業にノロノロと向かっていると、そして見慣れぬ中学校のグラウンドにきょろきょろしていると、前方には体育のＩ先生が仁王立ちしており、

「お前ら何をやっとんじゃ、このボンクラが！」

とわれわれを圧倒的な気魄で怒鳴りつけた。

「もうとっくにチャイム鳴っとんぞ！　お前ら小学校で何を習ってきたんじゃ！」

その怒声と眼光は、わたしがそこまでの短い生で聞いたこともなければ見たこともない、天地までとどろくような威力であったし、その単純な威力でいえば、いまこのときまでのわたしの生を振り返っても、あのＩ先生ほどの見事な怒号は記憶に見当たらないというほどなのだ。まだ思春期ともいえない子供でしかないわれわれは、肺腑も胃の腑も撃ち抜かれ、ひたすら恐懼するばかりだった。

そこからさらに、わたしをハッとさせ顔をあげさせたＩ先生の文句がこう、

「このボンクラが！　おれの仕事はな！　お前らみたいなボンクラを叩きなおすことなんじゃ！」

Ｉ先生の怒声も、またその強い眼差しも、われわれを貫いて身動きさせない。Ｉ先生は自身が謹厳実直ということではまるでなかったし、また、よく怒るからといってヒステリックな人ではまったくなかった。それどころか、怒りに該当しないときはわれわれをいつも冗談とユー

モアで笑わせてくれる親しい先生だった。どの教師よりも職員室から遠く、生徒たちに近く、それでいてじつに教師の権威を見せつけた人だとわたしは思う。自らの人間的な弱みも抱えたまま、そんなことよりも優先することだけがI先生を怒りに爆発させる。われわれがその怒りに該当しないときというのは、つまりわれわれがその〝ボンクラ〟でないときなのだ。I先生はわれわれの低能を攻撃しているのではなく、ボーッとしていることでわざわいを呼び込みかねない、そのことについて天地にとどろく怒声を発した。

　われわれが体育の授業中にふざけ、走り回るクラスメートと不意にガツンと衝突する。その瞬間、

「しまった」

　とわれわれは即座に青ざめるように教育された。そのときは案の定、怒りの鬼と化したI先生がこちら向かってガニ股で歩んできており、時すでに遅し、後悔先に立たず、例の怒声で、

「お前、今のでもし、相手がケガしとったらどうするつもりなんじゃ！」

　わたしはかつてそのようにI先生から〝ボンクラ〟についての教育を受けた。そして現在のくだらないわたしも、ボンクラということに関わっては引き続きI先生に受けた教育のまま――命じられたまま――なるべくボンクラはすまい！　と生きている具合なのだ。かつてのI先生の怒号がわたし（たち）に向けられることがなかったら、少なくとも「ボンクラ」への警戒を抱えている現在のわたしはない。野暮な言い方に対する冷笑をすべてわたしが引き受けるという前提でいえば、I先生はたしかにわたしの恩師のひとりだ。

　わたしがこうして描写するI先生のエピソードは、いま現在においては、わかるようなわからないような、一種のファンタジーとして多くの人に聞き取られる。現在（二〇二三年）の中学一年生たちはそのようではありえないだろうし、いまの中学校教諭がかつてのI先生と同じような〝落雷〟をすることはできないだろう。それは気構えのつもりのものやあこがれだけで真似をしようとしてはならないことだ。もしこのようなエピソードと同じようなことが現代でも起こりうるのであれば、わたしはいまここにしているような話はしていない。

　わたしはいま、なぜかつてのI先生とわたしの体験がファンタジーではなかったのかということを説明し、そのことから、或る学門への道筋を示そうとしている。現代のわれわれがぼんやりとこのような光景へのあこがれで真似事をしたとしても、ファンタジーの真似事を現実に持ち込もうとした罪で大きなわざわいを呼び込むことになるだろうということを念押ししてから話を進めたい。

　わたしはこのように説明する。I先生の響き渡る怒号、その余韻の中には、

「お前ら、そんなんでどうやって生きていくつもりなんじゃ！」

「お前はこれから生きていかなあかんねんぞ！」

　という怒号まで聞こえていたのだということ。

　強調して書き記すならば、<<I先生はわれわれのボンクラぶりに「死ね」と言いつけたわけではない>>ということ。どないして生きていくつもりじゃ、生きていかなあかんねんぞ、そうしてこちらが生きることへ、強制というほどの肯定を怒号でぶつけてきていたというのが本当のところなのだ。そしてその怒りを受けたわれわれの魂は、I先生の怒れる魂のほうへ〝寄った〟。右も左もわからないボンクラたちとはいえ、この人はわたしが〝生きる〟ことについて全力で触れようとしてくれている、それぐらいのことはわかる……そうしたことが繰り返し起こった。

　説明のための対照として、ここで「死ね」の声の持ち主に、同じ台詞を言わせたらこうなるだろう、

「もうとっくにチャイムは鳴っているんですよ？　みなさんボンクラすぎやしませんか？　あなたたち、小学校でいったい何を習ってきたんですか？　ハー、そんなのでみなさんどうやって生きていくんですかね、先生ふしぎです」

「学校は、あなたたちのようなボンクラを修正するための場所なんですからね。そのことがわからない人は、もう学校来なくていいと思い

ますよ」

現代のわれわれは、自分の声に「死ね」の周波数を含ませて、こうした嫌味を上位の立場から弱い立場のほうへねじ込むことができる。いいか、おれの話を聞いている者ども、おれはお前に死ねと言っているのじゃない、ボンクラのまま生きていくわけにいかないから、耳をふさがず聞けと言っているんだ。おれもお前も生きていかなきゃいけねーんだから。

よろしい、それでは、芝居をしてみましょう。部屋の片側を舞台に見立て、反対側を客席に見立ててよろしい。公園や駅のホームでもかまわない。平場があって、その他の何の仕掛けも要らない。

先のI先生の怒りを、舞台上のフィクションで示そうとしたときどうなるか。

「このボンクラが！」

その怒号に、右も左もわからないボンクラ生徒たちが"寄る"……

われわれはすでにそうした光景と音声を、フィクションではなくファンタジーとしてしか示せないではないか。もっとはっきり言えば、そういう「ネタ」としてしか取り扱い・表現できないではないか。

それに比べて後者の教師、名付けるならシネ先生とでも言うべきか、このシネ先生の嫌味たっぷりな怒りあるいは不快の表明は、自分の中のちょっとしたスイッチを入れればただちにそれなりの迫力をもって演じることができるのじゃないか。

教師役のあなたはわざとらしく首をかしげて、

「もうとっくにチャイムは鳴っているんですよ？　みなさんボンクラすぎやしませんか？　あなたたち、小学校でいったい何を習ってきたんですか？　ハー、そんなのでみなさんどうやって生きていくんですかね、先生ふしぎです」

われわれは怒りの中に、「死ねスイッチ」を入れることはできるが、「生きろスイッチ」を入れることなどはとうにできなくなっている。

この十年間で、世の中に「死ね」の周波数が濃厚に満ちたのは誰の感覚にも明らかだろう。根本的な変質が起こった。あるいは、かつてのわれわれと現在のわれわれは、<<いつのまにかまったく別のものに入れ替わってしまっている>>と言ってもよい。

十年前にわたしが予告あるいは警告した、メンヘラ文化へのリスクうんぬんは、このような思いがけない変化球となってわれわれにおいて実体化した。

怒りあるいはその他の「ダウンフォース」と呼ぶべきもの、その下向きの力とはたらきかけが、無条件で「死ね」になっている。だからこそ、人はそのはたらきかけに無条件で対抗あるいは反発する。その対抗処置じたいは正しい反応だ。だが本来は違う。本来は怒りであれ何であれ、ダウンフォースには「生きろ」という声が乗っかっていた。

わたしが若いころ後輩を「お前がちゃんとせなあかんやろが」と引っぱたいたとして、いまさら裏側を暴露すれば、わたし自身そうしてまったく同じ台詞と共に引っぱたかれたことが昔にあったのだ。そのことを自覚していたわけではないが、それがとっさに出たらしい。思い返してみるとなるほどなあとわたし自身が苦笑させられることだ。

「お前（ら）がちゃんとせなあかんやろが！」と、M先輩から一同が引っぱたかれて、驚き、その続きを生きていたものだから、わたしから後輩に向けてもまったく同じようなものが出たというわけ。

怒られるのは恐いものだから、かつての後輩はわたしに対して当時のことを「もうカンベンしてくださいよ」と笑って言うだろうし、わたしもM先輩に会うことがあったら「もうカンベンしてくださいよ」と笑って言うだろう。現時点で、どこまでが生存し、どこからが死に絶えているかはわからないが、わたし自身はいまもそうしたことの続きの中を生きている。わたしは怒りと共に「生きなあかんねんぞ」と怒号のように命じられたことによっていま現在も生きているのだ。

雨が降る午後の空に馴染まない クリーム色の用紙の冊子

他人事を軽んじるわけでもないけれども、われわれは単純な愚かさにおいて、物事への恐れについて、気楽に捉えて強がっているときと、真の体験に晒されてあっけなく怯えているときがある。たとえば医療にかかわる特集がテレビ番組で放映されれば、重病患者の映像に向けて「病気は怖いものだ、避けたいものだ」という感興が起こるが、その恐れは進めている夕食の手を止めて喉を詰まらせるほどのものではない。われわれは自分がそうした病気には「ならない」という前提をどこかにもってそのテレビ特番を恐れつつも眺めているのだろう。そのことと、自分がじっさいに検査服を着せられ、検査機にかけられたところピイーという警告音を聴かされるのとでは体験の性質じたいが異なる。テレビ特番で眺めているそれは、病気にかかわる実在とはいえ概念においての恐れだ。そして病気はそもそも恐ろしいものなのだから、どれだけテレビ特番を見ていても自分自身が大きく変容するわけではない。けれども自分が検査機にピイーと警告されたとき、主題は病気というより自分だ。自分が健康に生きるものから、そうでないものへ変容される。若い医者が「あれ？　ちょっと再検査しましょう」と、平静に言ってくれるものの、その声音に緊迫感が予断を許さないものとして滲み出ている。そんなことのぜひないように！　われわれの単純な祈りにおいて、この再検査の結果は、「あ、大丈夫ですね、問題のないレベルです」と落ち着いたということにしておこう。二度目の検査もピイーと鳴り響いて、若い医者が「うーん、ちょっとねえ」とむつかしがって言い渋るというようなことは、ぜひいつまでもないことであってもらいたいものだ。

もしわれわれが、ダウンフォースやらリフトフォースやらの検査機にかけられるとして、

「それではダウンフォースを検査しますね、大きな声で、『ちゃんとやれ！』と言ってみてください。それではおねがいします、3、2、1」

そのような検査にかけられたとき、われわれは気恥ずかしさから苦笑あるいは照れ笑いしているだろう。そうして照れくさそうな笑顔のまま、検査技師の誘導にしたがって、

「ちゃんとやれ！」

と空中に発声する。ところが技師は手慣れた言いようで、

「そうですね、それではちょっと、笑ってしまっていますんで。きっちり、ダウンフォースでお願いします。大きい声出してくれていいですからね。それではもう一度いきます、3、2、1、はいどうぞ」

技師自身が被検者にちゃんとやれと言いつけている調子だが、それに気おされて、うさんくさい笑い顔も静まっていって、もう一度、

「ちゃんとやれ！」

と発する。それでもうまくいかないのだろう、技師は、

「もう一度いきますね。3、2、1」

「ちゃんと、やれ！」

ピイー

「はい検査終了です、診察室の②番に進んでください」

あなたの声、あなたのダウンフォースから何が検出されるのだろうか。

言われたとおりの診察室②で、義務的に思える医者からの診断と説明を聞いた。

検査機関から帰るところの彼の手元にはひとつの冊子が抱えられている。その冊子は、丸っこい文字と意図的にありふれたトーンに整えられたイラストが表紙にレイアウトされているのだが、そのタイトルは「ダウンフォース検査で何がわかるの？」と書かれているのに対し、サブタイトルに書かれているのは、

「あなたの声には死ねが含まれています」

彼は帰りのバスの中で冊子の表紙を開いた。窓の外、雨が降る午後の空に馴染まない具合に、その冊子の用紙はピンと張りつめたクリーム色だ。

目次にならぶ各項目は、それぞれ妥当かもしれないが冷淡で彼を突

き放す感触がする。医療というのはそういうものかもしれないけれども！　それでも彼は、反発の裏側でどこかすがるような情けない気持ちを隠し持ち、それぞれの項目を目で拾った。

なぜ声に「死ね」が含まれるのですか？　４Ｐ
生死軸の人の生はリフトフォースになっています　６Ｐ
生命軸の人はどうなっているのですか？　９Ｐ
生死軸の人が取るべき生活習慣　１１Ｐ
生死軸の人と生命軸の人とのあいだで起こるディスコミュニケーション（異軸翻訳）　１４Ｐ
その先にＱ＆Ａがつづいて、
Ｑ１：生死軸の人は生命軸になれるのでしょうか？　１７Ｐ
Ｑ２：どうして生死軸になってしまったのでしょうか？　１９Ｐ
Ｑ３：このどうしようもない「やってしまった」感じは何なのでしょうか？　２１Ｐ

むろんそのような馬鹿げた検査は存在しないし、そのための機械も施設もじっさいにはない。けれども、このような説明的なことを示していくのに、文学の手法としては、「この冊子の中を覗いてみたいものだ」というスリルに括り付けて展開していくよりないのじゃないか。冊子の内容は短いので、彼はバスを下りるまでにそれを簡単に読み切るだろう。

◆なぜ声に「死ね」が含まれるのですか？

人の魂が所属する上下の軸があります。

人の魂は、その下端から上端へ向かおうとするはたらきを持っています。

生死軸の人は、その軸の下端が死、その軸の上端が生になっています。

下降していくと死んでしまい、上昇していくと生きていける、ということです。

よって生死軸の人のダウンフォースは相手に対する「死ね」となります。

言葉の内容や、当人の意図によらず、ダウンフォースの性質じたいが「死ね」の周波数になるということです。

◆生死軸の人の生はリフトフォースになっています

人の魂は、下端から上端へ向かおうとする性質を持っています。

ですから、生死軸の人の魂は、死から生へ向かおうとしています。

けれどもこのことには矛盾があります、生きものはすべて生まれながら死に向かっており、生に向かっているとは言えません。

ですから本来は生死軸は順転していなくてはいけないことになります。

下端が生、上端が死、下から上に向かってゆき、生きものとして死に向かっているというのが本来の生死のメカニズムです（これを順生死軸といいます）。

とはいえ、われわれは生存本能においてこのメカニズムを自ら受容したものとして選択できません。

そこで、自動的にこの軸の反転が起こります。

そうして生死軸は一般に、下端が死、上端が生というあべこべの形になります。

ここからダウンフォースが「死」、リフトフォースが「生」ということになります。

自我が高揚することや、ごほうびをもらうことがあると、「生きていこう」という気になるのはこのためです。

生死軸の人の生はそうしてリフトフォースになっていますが、あくまで本来のメカニズムでいえばそれは逆転していると知っておいてください。

◆生命軸の人はどうなっているのですか？

生命軸は、下端が生、上端が命になっています。
地上に生まれ落ちたその「生」が始まりで、そこから上昇してゆき「命」に到達しようとします。
命は死でありませんので、生命軸には死がありません。死のない命は一般に永遠の命と呼ばれます。
生命軸においては、ダウンフォースが「生」、リフトフォースが「命」となります。
上から下へは「生きろ」という命令（※）がなされ、下から上へは命に生を捧げるというはたらきが起こります。
生命軸の人の高揚は、己の命を果たすことに向けて起こります。
未だ己の命を果たすところから遠い者に向けては、そのときまで生きろ、という命令が下されます。
よって、言葉の内容や、当人の意図によらず、ダウンフォースの性質じたいが「生きろ」の周波数になります。

※「命令」は命の現象です

◆生死軸の人が取るべき生活習慣

生死軸では、なるべく厳密に「平等」をこころがける必要があります。
社会的な平等はもとより、魂の平等をこころがけてください。

生死軸において上下が発生すると、上だけが生き、下には「死ね」が作用することになってしまいます。
あなたが誰かの下につくと、あなたは上が生きるために自分が死なくてはならない、という魂の体験をします。
そのことでいわゆるマウントが発生し、このマウントは魂のレベルで「生き死に」の問題になります。この問題は生存本能によって苛烈になり、おのずと生存競争が発生してしまいます。
ですので、なるべく厳密に平等をこころがけ、それでも誰かからダウンフォースを受けてしまうという場合は、そこから無関係になるよう距離を取るようにしてください。
あなたがリフトフォースを受ける場合、向こうがそのリフトフォースを捧げてくれる場合は、受け取って自分の生きる糧としてかまいませんが、詐欺犯罪の手口かもしれないので注意しましょう。詐欺師はあなたの生を持ち上げるかたちであなたのふところに入り込んできます。
向こうがリフトフォースを捧げるつもりではない場合、あなたがそれを勝手に吸い上げるようなことをしてはいけません。そのとき向こうは「死ぬ」ほどの我慢をしているということを知っておいてください。あなたとその人の魂は、無関係な存在です。無関係な存在であって、平等に横並びにあるだけです。

◆生死軸の人と生命軸の人とのあいだで起こるディスコミュニケーション（異軸翻訳）

生死軸の人と生命軸の人がやりとりをすると、異軸翻訳が起こるとされています。
最もよくあるのは、生命軸の人が「生きろ」と言っているのに、生死軸の人にはそれが「死ね」と聞こえるということです。
言葉の内容や当人の意図によらず、ダウンフォースとリフトフォー

スはそれぞれの軸によって翻訳されてしまうので、誤解が起こるのです。

生死軸の人は、生命軸の人に対し、「自分が生きるには持ち上げやごほうびが必要だ」と求めるのですが、そのことはどうしても生命軸の人には意図したとおりには伝わりません。

また、生死軸の人が生命軸の人に「死ね」と怒っても、そのダウンフォースは意図したとおりに生命軸の人には作用しません。

あるいは生命軸の人が、生死軸の人に対し、いかなる使命を果たすべきかという呼びかけをしても、生死軸の人はそのすべてを自分が生きる高揚にのみ費やし、意図したことはやはり作用しません。

異軸翻訳によって空振りしたコミュニケーションは、そのまま自分に返ってくるという性質があります。

よって、死ねという呼びかけをした生死軸者は、自分に内蔵する「死ね」を強めてしまいますし、使命について呼びかけをした生命軸者は、自分が到達する「命」をさらに高くします。

お互いが噛み合わないまま、このことが繰り返されると、それぞれのリフトフォースとダウンフォースが制御できないほど強くなってしまうことがあるので、前もってこの異軸翻訳で空回りしあうことは互いに自重しあう必要があります。

◆Q1：生死軸の人は生命軸になれるのでしょうか？

A1：理論上は可能ですが、主義のため現実的にはたいへん困難だとされています。

生死軸で生きてきた人は、生死軸による恩恵を受け、力強くなり、じっさいに活躍し、権威も得てきましたので、それを放棄することは困難です。

生命軸の発見あるいは継承じたいが困難ということに合わせて、それ以上に、これまでの生死軸を放棄はできないということがそのことの困難さを形成しています。

また、このことは「ムン」とも呼ばれています。

◆Q2：どうして生死軸になってしまったのでしょうか？

A2：生命軸への所属は、「命」の発見あるいは継承が必要ですが、そのことが容易ではなく、差別的な部分があったので、次第に否定されていくことになりました。よく知られた言い方として、「死は誰にでも平等に訪れるが、命は誰にでも平等には与えられない」というのがあります。

過去、差別的な生命軸に対し、平等な生死軸でそれに抗せる、あるいは超克できるのではないかという社会的なムーブメントがありました。それにより生死軸の力は研究されて発達してゆき、現在は「ムン」と呼ばれています。それ以来、多くの人が生死軸に所属することになったということです。

◆Q3：このどうしようもない「やってしまった」感じは何なのでしょうか？

A3．生命軸に対抗するムンをぶつけたときによく見られる体験です。

生命軸者の声は、上に向けては命じられることを求め、下に向けては生きることを欲します。命じられたことに生を捧げる下から上への勢い、また、捧げられる生には果てしなく命を分配しようとする上から下への慈愛があります。

その生命軸者の空間に巻き込まれると、あるいは首を突っ込むと、生死軸者は最善のことをしようとして、生命軸者のそれと「同調」しようという発想をします。ところが同調してみても、ダウンフォースとリフトフォースは生死軸のものですから、同調したつもりとは裏腹

に違う周波数の声が発されます。その周波数にはあまりに違和感があり、そのとき多くの人が「自分はムンではないか」と疑い始めます。

このときムンは、生命軸者から慈愛によって分配された命を、消費して自我の生を高揚させることに用います。いっぽうで命に向けて生を捧げようとする者に向けては、死ねという周波数を発します。そのことはたいてい当人の本意ではないのですが、その本意とはあべこべの行為はやむなく発生し、やがてその行為が当人の本意を呑み込んでいきます。

つまりムンは無条件で、生命軸者の空間に対して破壊と勝利を収めようと挙動するということです。

^^もともとムンは生命軸に対抗するものとしてこれまで研究され発達してきたもの^^ですから、そのように挙動するように設計されているということです。その設計通りの挙動が起こったとき、当人はその不本意さと、その行動が自分を呑み込んでいくさまから、直観的に「やってしまった」と体験することが多いようです（次第にその「やってしまった」という感触も呑み込まれて消えてゆきます）。

身体と「かわいい」について

身体は「しんたい」とも読むし「からだ」とも読む。身と体はほとんど同じ意味のように思われているし、国語の試験ではそのように解答するべきだが、実際の使用を見てみるとやはり字が異なるぶんだけ意味も異なる。魚の切り身のことを切り体とは言わないし、体育のことを身育とは言わない。体調のことを身調とは言わないし、身勝手なことを体勝手とも言わない、解体作業のことを解身作業とも言わない。

体、もともとは「體」の字は、「生きもの、あるいはそれになぞらえるべき有機的なつながりのもの」の象を指している。たとえば「ディズニーランドの全体図」というときに「体」の字が当てはめられているが、アドベンチャーランドとトゥモローランドを分離してしまってはディズニーランドにならないので、それらの有機的なつながりが一体になっているということを指して「全体」という言いようが当てはまっている。

われわれの踵から頭頂部までの長さを「身長」と言うが、動物全般では尻から頭頂までの長さを「体長」と言う。それはわれわれが霊長類ヒトとして起立した特別な存在だと信じようとする思想から生じていて、つまり他の動物はより生々しく「生きもの」だから、その長さを言うには身長ではなく体長の字を当てはめるべきだと感じられている。われわれだって他の生きものと同様、体で生きていることは事実ではあるにせよ、文化を持たない獣のごとくにただ有機的なタンパク質・臓器の連携で生を為しているものとは考えたくないというわけだ。

霊長類ヒトの体長をわざわざ身長というように、「身」のほうは、肉に具わるか宿るかしている、霊なるものを捉えてそれを「身」と呼んでいる。よって、身分や身内などの、物理的な観測ができないものに関わっても「身」という字を当てはめている。一尾の魚ははじめ「全体」をもっているが、それをただバラバラにしたならばその作業は「解体」だろう。けれどもわれわれはその解体しただけの生々しいものを自分たちの食事にはしたくない。「解体した魚肉を摂食している」のではない。われわれの食事に供するものは霊なるものであってほしいから、料理として捌いたそれは魚の「切り身」となるわけだ。

「身」はそのように霊魂を信じてのものだから表現の定義がしづらい。その定義のしづらさはつまり、身というのはその意味じたいが「具体的」の反対にあるからだと言いうるわけだ。身の程を知れとか人の身

になって考えろとか、「身」ということにかかわっては常に〝具体性に反する〟のがとうぜんの仕組み。

体は生きものの象であるから、それが死んだときに「死体」と呼ぶのは当然かつわかりやすいこと。これが「身」ということになると、身は霊魂と肉のものだから、それじたいに死はなくなる。よって死体のそれを「死身」とは呼ばない。代わりに死なない者を仮想するならその者のことを「不死身」とは言いうる。われわれは病院に行って「体の調子が悪いのです」とは相談しうるが、「身の調子が悪いのです」とは相談できない。身の調子が悪いのなら、神社に行って先祖供養でもすればどうかねといなされてしまうだろう。

女性のカラダがかわいいというとき、このカラダにはやはり「体」が当てはまる。女性の身がかわいいという描写はいかにも聞き慣れず無理があるだろう。「体」についてはこのとおりだが、ではここで言う「かわいい」とはどういうことだろうか。体は「生きもの」で、それが「かわいい」ということにはどのようなつながりがあるか。

「かわいい」といえば、たとえば典型的に子猫の象とその無邪気な挙動が当てはまる。ニーニー鳴く声や、母猫の乳房に吸いつこうとするときのひたむきさ、何に対しても好奇心から真ん丸な瞳を向け、無限に遊び続けるかと思いきやどこででも突然眠るというありさま。これらのすべてを見て多くの人は無性に「かわいい」と感じるのだが、このことは、まだ生きものとしてか弱い子猫が、生きるために強者のバックアップを必要としていて、そのバックアップを要請するシグナルとして発していると捉えてよい。じっさい腹を空かせているらしい野良の子猫に道端でニーニーと鳴きつかれたら、その子猫が生きようとするシグナル、生きるために庇護・バックアップをくださいと要請するシグナルをそうそうは無視できないという人が多いだろう。そのシグナルに強く反応する仕組みは、われわれの生きものとしての体にいわゆる本能として具えられている。

「かわいい」とはこのように、生きものとして強者にバックアップを乞う発信とその受信のことを言う。だから、あくまでその「かわいい」が成功している場合に限るけれども、「かわいい」と感じられるものに対して人は「死ね」という声を向けない。自分がかわいくないという劣等感の者から嫉妬として「死ね」を向ける場合はあるが、その場合はあくまで「こんなのぜんぜんかわいくない、死ね」という文脈になっているはずだ。「かわいい」と感じられているのであればそれに「死ね」という声は向けない。「かわいい」とそれが感じられるということは、どうかそれが健やかに生きるようにと願ってやまない協力的な状態になっているはず。いつまでも元気で、どこかうっかりしているおじいちゃんは、周りの者にとって「かわいい」と感じられる可能性があるが、病床についてすでに生命維持装置がつながれている昏睡状態のおじいちゃんを見て「かわいい」と感じる可能性は低い。「かわいい」というのはさしあたって〝生へ上昇しようとしているように見える〟者に関わって受発信される本能へのシグナルだ。このことの本質的な説明はさらにむつかしくなるが、その説明が可能になるのは今回の話のずっと後のほうになる。

現代は生死軸の時代だ。誰の足許にも死があり、生きることに向かうことが上昇だと共有されている。この中で、「かわいい」は生きることに強者のバックアップを要請できるシグナルだから、「かわいい」ができる人は生死軸で上昇するのに大きな有利さを覚えているはず。もっと「かわいい」になれればもっと生に向けて上昇することができるし、あるいは自分が生きていくにはもうこの「かわいい」を拡大強化するしかない・または拡大強化するだけでよいと感じて考えている人も少なくないはずなのだ。

現代においては、極論すると「かわいいなら生きろ、かわいくないなら死ね」という声が満ちていると言える。またその声が、極論というよりはけっこう生々しい事実なのだと感じている人は多くあるだろう。何もアイドル活動をする人に限らず、就職活動をする人も、いわゆる婚活をする人も、「かわいい」のあるや否やという一点で、豊かに生きられることにもなるし、ひたすらの「死ね」をこうむることにもなるのだと、そう感じている実情があると思う。

現代は生死軸の時代だから、主題は生きものである「体」となる。その結果、「体を鍛えている」「ジムに通っている」「筋トレをしている」ということが上昇のひとつの王道になっている。体のかわいさということではけっきょく男性は若い女性に及ばないだろうけれど、それでも男性もいまや、体を鍛えてマッチョになり、旧来のマッチョイズムとは違って「かわいい」ということが単純に言ってウケている。体を鍛えていてマッチョなのにキャラクターや振る舞いが「かわいい」という形でウケている芸能人を、詳しい人であればただちに数人は思い浮かべることができるはずだ。現代はそうして男女にかかわらず「体・かわいい」の時代だと言うことができる。じっさいわれわれがウェブブラウザを開いたとき、飛び込んでくる画像はアニメーションであれ実写であれ、さらにはＡＩによる生成画像であれ、「体・かわいい」のそればっかりだ。

そして付け加えるならば、現代は身の時代ではないので、ここで男の身で・女の身でなどという文脈を持ちだすと、それじたいが攻撃を受ける。「身ひとつ」で何かを為し遂げようとする者などより、体・かわいいが強化されている者のほうが魂の価値観として圧倒的に賞賛され肯定されるというのがわれわれの――二〇二三年での――実情だ。ひいては単刀直入に申し上げれば現時点でわれわれの「身」のほうがしかるべき命に到達するという可能性は、数的に言えばほとんどゼロに等しい。

生死軸・生命軸の沙汰に入り込む前に、われわれはさしあたりわれわれの現在の事実について、ひとつのことに気づいておかなくてはならない。それは、「体・かわいい」の大ブームにおいて、生死軸の上昇にかかわって有利さと称賛は明らかなのだが、その「体・かわいい」の当人の内部には、下向きに「死ね」の声がどうしても発生してしまうということだ。むろんそのことをやたらに振り回すわけではない。どうしても振り回さざるを得ないときは、賢明に匿名か、いわゆる「裏垢」を作ってそれをウェブ上にこっそり吐き出すだろう。

「体・かわいい」の代表は、やはり女性のアイドルだと思われるが、代表的に彼女らの魂には、下向きに強烈な「死ね」の声が発生するということを知っておかなくてはならない。彼女らはそれを表沙汰にはなるべくしないが、仕組み上その声は内部で巨大なものにならざるを得ないということだ。自分が受けている「体・かわいい」によるリフトフォースの大なるぶんだけ、隠し持った「死ね」のダウンフォースも強くならざるを得ない。

（そのことはじっさいもっと巧妙な仕組みで隠蔽あるいは逆転されているのだが、その詳細はまた後段に語られる）

「かわいい」を売りにする、そうした稼業に取り組んだことのある人は、あえて自白する必要はないと思うけれど、内部に下向きの「死ね」が膨大に発生するということにこころあたりがあるはずで、そのこころあたりについては整理しておいてよいと思うのだ。知らないうちに内部をむしばまれきられないうちに。

生死軸の時代の中で、素直に魂の上昇を求めた人は、どのように操縦桿を工夫しても、けっきょくのところ現代の主流たる「体・かわいい」に吸い込まれていったはず。そして「体・かわいい」に接近していって、この時代での実力と頭角を現しだしたころ、自分の内部に圧倒的な「死ね」の声が、けたたましさの笑いを伴って下方向に噴出し始めた、そういうことがあったはずだ。あるいはいまこのとき、その真っ最中にあるという人もあるかもしれない。二〇二三年の六月現在、まだウェブ上で歌曲「可愛くてごめん」が流行している状態にあるが、この歌曲が要するに「死ね」の声を発しているのは誰の直観にも明らか。この歌曲は単に制作者個人の悪趣味として発生したというわけではなく（個人の悪趣味であったら全体に流行はしないはずだ）、時代に鳴り響いている隠された声・表沙汰にするわけにいかない声を顕在化させたものと言い得よう。つまりこれが本当に時代の歌なのだ。可愛くてごめん、わたしはこの時代に上昇しちゃうけど、あなたは下降しちゃうのよね、ざまあ、と。

こころあたりを点検しておく必要がある。たとえば「ジムに通って」「体を鍛えている」場合、それが使命を果たすための兵士のトレーニ

ングというようなことではなく、生死軸の現代で上昇しようとする意図のものだった場合、そのトレーニングのたび、筋肉をたぎらせるいちいちに、内心での「死ね」がはたらいていることがあるのだ。わかりやすさのために陳腐な言い方をするならば、つまり「死ねパワー」で筋力トレーニングをしている人が潜在的に少なくない。それは仕組み上そうなるのだ、生死軸において自分が自分にリフトフォースを大きく与えるということは、逆方向に「死ね」のダウンフォースを強くするということなのだから。

われわれは、表立ってじっさいの交際においては、人に向けてそのような「死ね」の声を明らかにはしない。だが時代全体にその潜在した声が大音量で鳴り響いているのはすでにわれわれの首肯するところの事実だ。

表沙汰にはしない「死ねパワー」で筋力トレーニングをする人もあれば、同じ「死ねパワー」でメイクや服装を整える女性もいる。アイドルじみたパフォーマンスをする人もいるし、いわゆるインフルエンサーとしての活動をする人もいるだろう。「可愛くてごめん」と歌い踊る人もいる。若い人々は、そうは言っても自分がそのような「死ね」の声を鳴り響かせる当事者とは信じたくはなく、自分は本質的に清楚でやさしく、平和に聖なるものに貢献する存在のはずだと思っているだろう。

ところが自分の内部から出てくる声が、そうではない、じっさいに「死ね」の嫌味と汚らしさを帯びたものになってくる。あるとき、自分で出した声にびっくりして、思わず自分の口に手を当てて、よくわからない笑顔の表情を示してごまかすというようなことがじっさいに起こりうる。またあるとき、ふと街中の鏡に映る自分を見て、「これ誰？」とその蝋人形のような顔にギョッとするということがじっさいにある。

このとき、まさか魂の上昇に向かっている自分が、その反面で「死ね」の声を養育しているなどとは考えようもないものだから、人は漠然と「自分の中に毒素が溜まっている」「どこかから毒をもらっちゃった、あるいは悪霊をもらっちゃったかな？」というように考えがちだ。つまり他人のせいや環境のせいと考える。そして発想はいわゆるデトックスや浄化というほうへ傾く。そこでデトックスや浄化らしきことをしていくと……確かにそれなりにすっきりして、「憑き物が落ちたよう」とも感じられるから厄介だ。その毒素の主はすでにあなたの内に棲んでいるのだから、浄化によって清掃されたあなたの内部において、毒素の主は「これは快適だ」といわんばかりに、さらに広く根を張り巡らせることになる。毒草のために花壇の雑草を引き抜いてやり、肥やしを与えて畝（うね）まで整えてやったようなものだ。

一方で、現代の王道である「体・かわいい」から脱落した者について考えてみよう。そちらの者は、「死ね」の声が、自分の下方に向けて出るというのではなく、自分の上方から押し付けられてくるように感じられるはずだ。かわいいなら絶賛で「生きろ」と言ってもらえるが、かわいくないなら憐憫と共に「死んだほうがよくない？」と笑われるのが現代。

どれだけ精一杯「かわいい自分」になろうとして、その気になりきって眠ってみても、翌朝目覚めたときには、どことなく四方から「死ね」と言われている気がする、そういう中で目覚めを迎える。そして自分はどこというあてもなく、上に向かって「生きたいよう、生かしてくださいよう」と懇願しているような心地になるのだ。いわゆる現代の陽キャ・陰キャというのも、表面的にはこのことで生成しているのかもしれない。自分が上にいて下方に「死ね」を言う側が陽キャ、自分が下にいて上方から「死ね」を言われるのが陰キャという単純な仕組み。単純な仕組みかつ、両者はまったく同一の軸上に存在している。陰キャも自分の立ち位置で我慢を強くしながら、裏側ではやはり陽キャから聞こえてくるものに対して「死ね」を反撃として発している。

主題は「死ね」の声だ。なぜなら生死軸はそもそも、本来は死に向かっているもので、それを反転させたものだから、生に向かって上昇しようという声はどこまでもウソっぽさを含まざるをえない。

「死ね」の声に押しつぶされる側のまま生きていくことは、あまりにもつらすぎ、しんどすぎ、とてもじゃないが安らかにやっていけるものではない。どこかで限界を迎え、人はこう考える、「何がなんでも、自分が死ねを言う側にならないと」。そうしてある意味、現代人は各個に死ねパワーに〝覚醒〟するという言い方もできる。

死ねパワーに覚醒した彼は、始終、どこに向けても基本的に「死ね」を向けることになる。そのとたん、彼は自分の一種の憂鬱が消し飛び、自己存在の問題がすべて根本的に解決したというほどにも感じるだろう。自分は魂の最上位にあり、よってすべてに向けて下向きに「死ね」を言う側だ。わたしにおいてすべての憂鬱は解決されている。わたしに向けて「死ね」を言う資格者は存在しない。よって、誰かが自分にそれを向けてきたとしても、そんなものは聞き取る価値がないのだ。いつも五月に聞こえてくる蠅の羽音にすぎない。それなのに、自分に向けられる声にいちいち動揺するというような人は、単に「メンタルが弱い」というだけだろう？　覚醒した彼はじっさい他人に向けてこうアドバイスする、「目を覚ましたほうがいいよ」。

覚醒済みの彼が、例外的に敗北を認めるのはどのようなときか。何に対して敗北を認めるか。それはやはり、突出した「体・かわいい」に対してだ。男性であれ女性であれ、とにかくそれが「かわいい」というときには、自分の敗北を認める。かわいい女の子、かわいい男の子、特にその強化とアピール技術に長けた者、それらは漠然とアイドル的な捉え方をされ、「生きる」ことのリフトフォース、そのシンボルや目標となる。そのかわいさにおいて、

「これほどまでに、生きろという声、リフトフォースを集める実力者がいるのだ」

そういう輝かしい――と錯覚される――目撃体験がされ、それに対する敗北と共に、自分もそうしてリフトフォースを受けるものになりたいものだという、生きる励みさえ見つけていく。そのことを指して現代のアイドル活動は、仕手側からは「みんなを元気にさせたい」という捉え方がされ、受け手側からは「元気をもらった」という捉え方がされる。そこでいわゆる「推し」や「担当」も出てくるわけだけれど、ここでアイドルたちがその「かわいい」のルールに反すると――つまり生きるのにか弱い者という立場を逸脱していることを暴露されると――これまでのリフトフォースは一気にダウンフォースに転じ、ファンたちからは一斉に「死ね」の声が向けられる。あるいはそうした逸脱をしなくても、加齢やトレーニングの不足、アピールの消沈などによって「かわいい」を失ったときには、すでにまったくリフトフォースを受けないものとしていわゆる「オワコン」の扱いをされる。

こうした仕組みの中で、もし、機械的にこの「体・かわいい」の実現者になろうとした場合、どのような手続きを踏めばいいだろうか。もちろんそのことを推奨しているわけではなく、その手続きを理論的に抽出できたときに、われわれが現代に目撃しているものの真相が浮かび上がってくるだろうということ。「体・かわいい」という、生きもの、かつ生きるのにか弱いから強者のバックアップを要請するシグナルを発信するということは、じっさい生きものそのままである子猫においては自然発生することだ。一方で、それを自然発生でなく意図的に発生させるというのはどういうことなのだろうか。いわゆる「かわいいは作れる」という標語がコマーシャルメッセージとして知られてあるが、その割にはそのことがあまりうまくいかないという人だって少なくないのでもある。だから安易にそれが「作れる」とも言い難い。

本当にその「体・かわいい」をずば抜けて実現している人はどのようなことをしているのだろうか。

「かわいい」は我慢で

作られる

生死軸においては、上昇が生、下降が死だ。下向きには「死ね」の声が生じるが、上向きに生じるものにはどのような趣きが起こるだろう。それは驕慢と言ってよい。生といってこの場合生きるのはとうぜん自分なのだから、上向きに生じるのは「わたしの生」、自分の生を最上に奉るということから、それは吾我の驕慢といってよいものになる。下向きに他者への死ね、上向きに吾我の驕慢が生じること、このことを総じて「我慢」と呼んでよい。つまり生死軸は同時に「我慢軸」だと言ってよい。

辞書に書かれているとおり、我慢はもともと仏教用語であって、本来は「忍耐」の意味を持っていない。称えるべき忍耐心や辛抱のことを「我慢」というのは単に誤用であって、ここでいう「吾我の驕慢」のほうが我慢という語の正しい意味になる。親が子供に対して「ガマンしなさい！」と言っているのは、じっさい「吾我の驕慢をしなさい！」と言っているわけなのだ。これは言いがかりでも何でもない。われわれが「我慢」の本義、吾我の驕慢というメカニズムを知らなさすぎるだけだ。親御さんが子供に「ガマンしなさい！」と言いつけ、その結果「よく我慢しましたね、偉いですよ」と褒めるのであれば、じっさいその子供は他者よりも自分がそのぶん偉いのだと自己の地位認定を調整するだろう。

節度の面から気が引けてならないけれども、わかりやすさの代表として、また一般によく知られた姿のものとして、アイドル活動をしている女性の例を示したい。そして、あなた自身がそうした女性の立場にあったとして、あなたの気分が最悪になりそうなイベントを考えよう。あなたは、いわゆるキモオタが行列を為して、あなたと握手をしにくるということを、人気稼業のプロがするそれとしては別に、具体的なこととしては喜ばないだろうし、ファンの彼らが異様な接近や、馴れ馴れしさを向けて来ることには、率直にいって嫌悪感あるいは抵抗感を覚えるだろう。そのときあなたはどうしなくてはならないか。一般に言われるところをそのまま言うと、あなたは「我慢」しなくてはならない。

一方、あなたは裏側では、不気味で精神的に歪んだプロデューサーに対して、気に入られるための御機嫌取りをしなくてはならないかもしれないし、ライバルとの兼ね合いによっては、やむをえず性接待をみずから仕掛けていくことをしなくてはならないかもしれない。またかわるがわる、スポンサーとの宴会に呼び出され、そこでやはり野放図なセクハラを受けたり、枕営業の誘いを受けなくてはならなかったりするかもしれない。

一般にはそれらは汚らしいことで、尊厳の汚辱される、苦痛に満ちたことだ。ふつうそれを「我慢する」となったら、その我慢によって人は消耗していきそうなもの。ところがここで言う我慢ということについて、一般的な感覚のそれではない、限度の向こう側、一般には知られていない仕組みのところまで到達するということがありうる。つまり、極端な我慢、極点を超えた我慢がありうる。周囲の何もかもに対して天地をつんざくような「死ね」の声を内部で破裂させていながら、表面的にはまったく逆に、無垢によろこぶ聖女のように、清らかに愛らしくニッコリ笑ってみせるということがあるのだ。我慢の極限を超えたことだが、あえてそのことを自らで選ぶ。このとき仕組み上、「死ね」の声が極大化するのに合わせて、逆側の、生への上昇も極大化する。このアイドルの女性は「かわいい」で生きていくことを選んでいるので、その「かわいい」も極大化する。ここで、その「かわいい」は素人のそれとは違うものになるわけだ。果てしない「かわいい」は、無限の「死ね」と共に双極的に発生していると言っていい。生きていくための"武器"があったとして、それは武器なのだから、内部の「死ね」が最大化したときに、最も鋭利な切れ味を具えるのではないか？　ニコッ！

単純な話、たとえばわれわれは、アイドル業の女性が、すぐれて美麗で経済的にも優秀な、屈託のない洗練された男性たちの前で、ソフ

アにくつろいで談笑しているところを見ても、それを「かわいい」とは思わないではないか。その逆、多くの女性から見てきっと近づきたくもないと感じられるような不作法な男性たちに向けて、ファンだからといって全力で愛嬌をふりまく、そして親しげに握手をしてグッとその笑顔を近くに寄せる、その行為を見て人々は彼女を「かわいい」と感じ、一部には「天使かな」というような言い方もするではないか。

人工的な「かわいい」は、その我慢ぶりが「かわいい」のだ。ただしそこで我慢ぶりが漏れ出ているようでは不完全で、内部に起こっている下向きの「死ね」の声は完全に裏側に隠しきられていなくてはならない。完全に隠しきられて、無垢な聖女のような親しさとほほえみを見せる。そのとき彼女の「かわいい」が本当に作られる。このとき彼女が「かわいい」ということは一般に疑いないが、知られていないのは、その内部では激烈な「死ね」が天地を引き裂くほどに叫ばれているということだ。自分に対するリフトフォースの「かわいい」と、周囲に対するダウンフォースの「死ね」が真実であって、他者に向けられている愛は存在していない。厳密に、それはただ人工的に「かわいい」のであって、愛なる現象はまったくない。

われわれはここで愛を誤解しているのだ。誤解ないしは錯覚が生じていると言っていい。われわれは子猫が「かわいい」のを見て、それを死ねと思うことはまったくなく、ごはんを欲しがって鳴くのであれば、なんとかそれを健やかに生かしてやりたいと思って空腹の当事者以上に焦りさえ覚えるもの。そうして「かわいい」に対しては「生きさせよう」とはたらくものだから、人工的な「かわいい」に対してもわれわれはそれを「生きさせよう」とはたらく。ここで、子猫に対するそれは、われわれの生そのものへ対する愛かもしれず、あるいはより上位の何かがわれわれにそうして生きとし生けるものの生をなるべくまっとうさせよと慈愛の命令をしているのかもしれないが、それは自然発生のもので、人工的なそれは仕組みが異なるのだ。われわれに対してバックアップを要請する子猫はこちらに何の思念も向けていないが、アイドル女性の場合はこちらに「死ね」の強烈な思念を向けてきている。われわれがアイドル女性を子猫ちゃんと思い込むのはどう考えても誤りだ。彼女らは事実、子猫ではないのだから。

彼女らは子猫ではないのだとすると、彼女らは何なのか、そこで彼女らは「我慢」だと言えばよい。奇妙な言いようだが仕組みがわかりやすく受け取られよう。われわれは「我慢のかわいさ」を見ているのだ。それで、親が幼子に言うように「がんばったね、偉かったね」と言いたがっている。我慢のかわいさ、このことはホステス業の女性たちもよく知っていよう。彼女らはよろこびと共に酔客の相手をしているのではない。しばしばまったくの逆で、酔客に対する「死ね」の声と共にその相手をしている。ホステス業の人たちが、その業態とは裏腹に、男性不信、男性に対する根本的な嫌悪があってその業務をしているということは、そちらの方面の人には昔からよく知られたことだろう。ホステス業の本職が、その肢体とほほえみに妖しいほどの力を持つのは、極点を超えるほどの我慢に至り、天地を引き裂くほどの「死ね」の叫びに相応した生への上昇を体に得ているからなのだ。

現代人はこの仕組みの中を生きている。ここではわかりやすく、流行の「体・かわいい」の例を採ったが、その例を取り外しても、われわれは生死軸の中を生きているのだから、われわれはともかく我慢の中を生きているのだ。現代におけるわれわれは何なのかといえば、子猫ではない、われわれも「我慢」だと言っていい。その気配と実体はどのように現れてくるか、その我慢にはどんな音が鳴っているか。そのことが今回の話の中枢だ。

くれぐれも、わたしは忍耐を否定しているのではない。つらさや傷つく中にも平然と立って見せようという「忍耐」は、積み重ねられた鍛錬によって度量ごと得られてくるこころや魂の強さに他ならず、内部的にはヒステリックに生じている「我慢」とは性質がまったく異なる。

忍耐とはまったく異なる「我慢」というもの。それはどのようなものなのか。われわれはそれを知り抜くことで、自分たちの生きている時代と状況がどのようなものなのかを明瞭に視認することができる

だろう。

ムン

われわれは今日も生きねばならない。ぜひ生きていこう。ここだけ急におれは生命軸の者に戻るけれど、お前のようなわけのわからんアホはとにかく生きるのだ、とりあえず生きるのだ。生死とかいって知ったかぶりしてんじゃねえよ。お前みたいなアホにとってどうしても命というのがわからんというのはよくよくわかっている、お前よりおれのほうがわかっている。わかった上で書き話しているのだ、おれの書き話しを読んでいる者に対しておれが死ねということは決してない。おれが死ねというのは、どうしてもおれの話を聞かず、どうしても自分の所属軸で物事を決定したい奴に対してだけだ。おれが彼に死ねと言っているのではなく、どうしてもその軸にしがみつくというならしょうがないからその軸にディープキスしたまんまゴールインしろと言っているだけだ。それはそいつの話であっておれの話じゃない。おれの話には生と命しかない。おれはアホのあなたに、生きることを、勧めているのではないのだ、生きろと命令しているのだ。死ぬならおれの話したことすべてを口頭で操れるようになってからだ。そうしたらあなたは寿命までどうやっても死ねないだろう、おれの話したことすべてを口頭で操るなんてあなたには一生かかっても無理だからだ。

われわれは生きねばならない。われわれが生きるというのは、月曜日に出社するということで、月曜日に出社するということは、話のわからない一方的な上司や、やりとりをしても噛み合わなくてしんどくなる同僚と業務時間を過ごすということだ。あるいは自宅にいても洗濯物を干すということや、ベッドから起き上がって先月から目標にしている資格試験の勉強をいよいよ少しでも進めることだ。鼻炎がひどくなって病院に薬をもらいにいかなくてはならないというとき、そのことを面倒くさがらない人はいない。われわれが生きるということには、愉しみもあるけれども、生々しさにおいてはあちこちがおっくうなものだ。それがまだ、つらいというほどではない場合、まだ自分は恵まれているほうだと思えるけれども、それにしてもベッドから起き上がるときにおっくうと感じたらそれはおっくうには違いない。

「まあでも、しょうがない、生きるっていうのはそういうことだから。きょうも一日がんばろう！」

われわれはなるべく前向きに考えたいと思っている。この場合の前向きというのは、「生」を肯定してそちらに向かう力を受けること。つまり自分自身にほどこすリフトフォースだ。このことを悪く言う人はいないだろうし、悪く言われる筋合いはもちろんない。

けれども、ここで急に冷ややかに、その前向きなものも小さなスケールにして観察してみれば、なるほどたしかに「我慢」をしていると言われたらそのとおりなのかもしれない。おっくうなのだから……おっくうだといって、すべてに背を向けて寝転び続けているわけにもいかない、だから前向きに、生へのリフトフォースを受けて、せめてさわやかに。けれどもそれらの総体についてつまり「我慢」じゃないかと言われたらそのことは否定しづらい。

なぜ我慢をしなくてはならないかというと、それがおっくうだからだ。おっくうでないことは我慢しなくていい。目の前にお茶請けのまんじゅうが置かれていて、それをつまみあげてほおばることに「我慢」は必要ない。目の前のまんじゅうを食べることにはリフトフォースもダウンフォースも必要ない。だが納期について取引先の数社に電話でプッシュをかけて回るのはおっくうだ、何かしらの力が要る。せっかくの晴れの日だからふとんを干そうということも、すんなりできる日もあれば、何かしらの力の追加が必要に感じられることもある。仕事の帰り道にトイレットペーパーを買う予定だったが、折悪しく雨が降

り出したというとき、それでもなおドラッグストアに寄って、傘を差したままかさばる荷物を運んで帰るのだとするときは力が要る。
力が要る。おっくうなことに対する、リアルな力、気力のようなものが要る。こうしたとき、あなたは一度、今から説明するようなことを実験してみてもいいかもしれない。
たとえば手元のスマートフォンで、いまいち人気の出そうにないYoutuberや、長く表舞台には残りそうにないお笑い芸人の映像を観る。そして、その内容はどうでもいいので、ほとんどまともに視聴もせずに一方的に、
「うわー、サムいなあ、こういう人たちって自分で自分のことつまらないって、わからない人たちなのかな？　そのくせ信者というか、取り巻きたちがついているのが一番気持ち悪い。こういうの、両方ともそろって死んだほうがよくない？」
と毒づいてみる。けっこう甲高い調子で。内心で毒づくだけで十分だろうし、発声までする必要はない。ましてそのような書きこみをウェブ上のどこかにすることはおすすめしない。いまはそうしたことが刑法や条例で処罰されるようにもなってきたし、処罰されなかったとしても人の魂としてやってよいことではない。
赤の他人の、自分とは無関係なことに毒づいたところで、帰り道にトイレットペーパーを買うことのおっくうさは変わらない。変わらないはずが、
「あー、めんどいけどしゃーない、トイレットペーパー買って帰るかあ」
と言いだす気力が湧いている。同じような甲高い調子で。
あるいはさらに、著名人のスキャンダルが、報道とは言えないような猟奇性で報道されているのを見て、
「人気商売なのにバカだねー、こんなのスポンサーから損害賠償請求されて何億にもなるのに。この先まともに街歩けないし、あんまりいびられすぎて、この人、マジで首くくっちゃうんじゃない？　まあ、そういう商売だからしょうがなくて、自業自得なんだろうけどさ」
そのように他人を死へ追いやるふうへ言うと、やはり、
「ダルいけどトイレットペーパー買って帰ろ。そんで、荷物置いたらやっぱりジム行こ。しんどいけど、やっぱこんな若いうちから、生きるってことオリちゃだめだわ」
という気力が湧いている。
同じようなタイミングで、動画サイトで子猫の動画などを観る人もいるだろう。あるいは「推し」の動画チャンネルで、短い動画が新着で表示されていることがあれば、それをタップして視聴する人もいるはず。
するとそこには「かわいい」ものが映し出されるので、それに対して鼻息がふがふがし、
「よーし元気出た、癒されたわ」
と気力を得るということがあるはず。
あるいはその場合、動画のコメント欄に、
「笑。きょうの服とても似合っていますね、かわいくてすてきです。きょうも元気もらいました、ありがとう！」
と書きこみをする人もあるかもしれない。
われわれはこうしたことを（ほとんどの人においては「内心で」だが）、習慣的に、無自覚にしており、それについて自分が本質的にはどのようなことをやっているかを、あまり考えはしない。ましてここで書き話しているようなところにまで穿って解き明かそうなどとは考えないだろう。
われわれは何をやっているのか？　冷静に見ると、「おっくうさに我慢で対抗している」のだ。我慢から力を得て、おっくうさを乗り越えている。よくよく見ると、それは確かに忍耐ではない。忍耐と言えばただ無言でトイレットペーパーを買って帰りそうだが、ここでの例はそのような忍耐というやり方を採ってはいない。
おっくうなことは「我慢してやるしかないでしょ？」と甲高くいうとき、われわれはこの自分たちのしている「我慢」の仕組みを捉えられていない。

捉えられていないまま、習慣的に、その「我慢」にブーストをかけることをしているのだ。

ここで示した例の、カギカッコ内部の印象的なところを集めるとこのようになる。「うわー、サムいなあ」「死んだほうがよくない？」「あー、めんどいけどしゃーない」「人気商売なのにバカだねー」「若いうちから生きるってことオリちゃだめだわ」「笑。きょうの服とても似合っていますね」。これらの言いようにはいわゆる前向きなものも含まれているように見えるけれど、ふと気づくと、どれもこれも決して〝低姿勢〟とは言えないものになっているのではないだろうか。前向き・後ろ向きということではなく「腰高」ということがあって、その腰高な自分の高揚感から、トイレットペーパーを買って帰る気力を得ているのではないか。もし純粋に雨の中を〝忍耐〟してトイレットペーパーを買って帰るだけならそこに「高揚」は必要なく、腰高になることもまったくないはずなのに。

我慢というのは何かを耐えることをいうのではまったくない。我慢というのは、「かわいい」動画にサムアップ・ファボのボタンを押し、そのときに腰高な自分に高揚を得ること、および、見下すべきものを見つけてそこに「死ね」をあてがい、そのときに腰高な自分に高揚を得ることをいう。

女性ならきっと誰でもこころあたりのあることとして、新しい服やあたらしい髪型、あるいは肌の調子がよいときや、若さと体形が自分でも「かわいい」と思えるとき、鏡に映った自分からきっと上等な部類の「生きる気力」を得るだろう。その高揚があるかぎりは、どんなおっくうなことも乗り越えて、生きていけるという気がしているのではないだろうか。

そうして「かわいい」なり何なりで吾我の驕慢を得て、それでおっくうさを乗り越えていけるということを「我慢」と呼ぶ。それは忍耐とはまったく意味が違う。

もしこの「我慢」が得られなくて、おっくうさに対抗できなくなるとどうなるか。そのときは、もちろん本格的な意味ではないにせよ、「はー、死にたい」というようなつぶやきが口をついて出ることがあるはず。リフトフォースが得られなくて下降に向かわされているということだ。生死軸においては誰でもその足下には死がある。その足下の死を見つめて、意味を持たせたものではないが「死にてー」というような言い方をわれわれはする。

われわれはおっくうさに直面したとき、あるいはその他、何であれ力が要る局面に立たされたとき、その力をこの「我慢」に頼る。我慢から力を持ってくる。甲高い調子、腰高な自分の高揚感から力を得るか、そうでなければ「はー、死にたいです」と冗談の言いようであれうつむく。気力が出ないんです、と。

その甲高い調子が出るとき、腰高が出るとき、あるいはうつむきが出るとき、体つきや体勢、呼吸の変化を伴って、肉体に「ムン」とした気配が出る。体内に流れている気魄か霊魂か、その様子が露骨に変化して「ムン」と、音が鳴ったかのように圧迫する何かが出る。これはつまり「我慢」が腰高に立ち上がったときの気配なのだが、このことを直接言い表すのには、その気配そのものの「ムン」の語を当てるのが一番よい。ムンは我慢の音であり、生死軸が唸る音だ。このごろは本当に生死軸の時代になりきったから、我慢の極点を超えたほどの人の「ムン」という音については、人々はむしろ「オーラがある」と称賛までする向きになっている。

日々、おっくうさを乗り越えなくてはならないとき、うつむいて死にたがってはいられないとき、あるいは不安に立ち向かわなくてはならないときや、自己実現や意識の高さを気取らねばならないとき、そうしたすべての力が要るときにわれわれは「ムン」を使う。腰高になる音、我慢の音、生死軸の唸る音。そのときわれわれの内部では下方に向けては「死ね」の声が響き始めている。

さまざまなことが複雑に絡み合っているように見えて、じつはわれわれの本質的な状態というのはひとつの軸と音で現わされるぐらいにシンプルだ。シンプルだからといって気楽だということにはならないにせよ、シンプルであればわれわれの思考の整理については一息つ

ける。^^要するに、腰高になって自分に高揚しないと納得しないんでしょう><。^^要するに、下方を設定して「死ね」と言わないと納得しないんでしょう><。吾我の驕慢と、その音。甲高くなった調子。

ムンの人よ、恐怖と共に思考を単純化せよ。わたしが怖いことを言っているのではない。あなたが怖い人になったのだ。ここから大事なことは、あなたがその怖い人をやめることだ。

ムンの循環と解決

人々に巣食うムンの恐怖。その恐怖に対抗するために、わたしは前もってこう言っておきたい。^^未だ命を見つけていない者においては当然のことだ><と。何の罪もなくふつうに生きていますと、自分の無罪や善性を信じて生きている人は、想定外の恐怖に出くわすことを前もって知っておいたほうがよいように思う。いまは文学のスリルを愉しんでいるのだという厚かましさを添えるぐらいの豪気をもって。あなたは何の罪もなくふつうに・命など見つけずに生きているかもしれない。命など見つけていないあなただとしたら、あなたはどうやって日々のおっくうさを乗り越えるエネルギーを得ているのだろう？あなたが「それは……」と答えようとしたとき、すでにあなたの全身は「ムン」という音を立てている。命を見つけていないあなたは何の音も立てずに力ある答えを示すことなどできない。意地悪で言っているのではなく、あなたがいちいち発見する手間を省略するために申し上げている。あなたにとってこのことにかかわる時間短縮はきっと貴重なことだろう。

命を見つけていない・そこにつながっていないということは、性質としてその「身」は未だ存在していないということになる。体だけが存在している状態だ。体は生きもの、そしてその生にバックアップが欲しいときは体が「かわいい」必要がある。それは本来、生きものの嬰児に宿される庇護訴求の機能だが、人工的にそれを作ろうとするときは、最終的には「我慢」の極点を超える必要がある。我慢がかわいいのだ。天地を引き裂くような「死ね」の叫びを内側に隠しきり、裏腹にニッコリとほほえんでみせる。すると確かに見慣れないほどの「体・かわいい」が得られてくる。ただしこのことの先には、当然ながら「かわいい」と「死ね」しかなく、その他の世界にかかわる芳しき霊魂は一切ない。

「死ね」が「かわいい」とつながっているのは思いがけないことだ。しかしじっさいに、特に若い人においては、「死ねと思われたくないからかわいくなりたいんです」という直接の感覚はあっておかしくない。「とにかくかわいかったら生きていけるけれど、かわいくなかったら正直なところ人権ない」、そういう感覚がいかにもありうるだろう。どちらにせよ現代では誰も彼も我慢しなくてはならない。われわれの存在じたいが「我慢」だと言っても差し支えないほどだ。「かわいい」じたいが我慢から発生しているので、「かわいい」を得るためには我慢をしなくてはならないし、「かわいい」と扱ってもらえないならば、そのこともやはり我慢で対抗するしかない。

腰高の「ムン」。腰高になったときに得られる、自我の高揚。吾我の驕慢。それだけが自分を落ち着かせ、それだけが自分を解決し、それだけが自分を救済する。まったくそのように感じられるし、そのように体験される。下方に発される「死ね」の声。初めはそれを躊躇するが、いったんそれを内心にでも発すると、ふっと自分は楽になり、「これでいいじゃない、これで正しいじゃない」という確信に変わる。下方に「死ね」を向けたら自分は今日もすんなり上方の「生」へ向かうことができる。そのとき自分はもちろんムンムンなのだが、ムンムン

であれ自分は楽になって解決したのだからそのムンムンとやらに疑問を持つ気にもなれない、とその腰高はさらに補強される。

そのことに特に問題はないのじゃないか。そう感じて、われわれはこの十年間をやってきたのだ。だがそうしたムンのやり方は、生死においては初めから完成した結論であっても、ひたすらわれわれを命から遠ざけるという一点において肯定できない。もちろん、魂だの命だのということを永遠に否定するという前提であれば、それはもうムンだけが生涯すべての真理となるわけだが、そのように信じる人は信じるとして、そうではないと信じる人に向けてわたしは話を続けてゆこうと思う。

ムンの恐怖は、まるで迷いの森をモチーフにしたホラー映画のようなのだ。森の中にムンの木なる邪悪な樹木があって、主人公はいまこの樹木から離れようとしている。「もうムンとはおさらばだ」「この木はなんといってもおっかないのだから！」、そうして森の中を、右往左往ではあるが踏破していく。星を頼りに、風を頼りに、せせらぎを頼りに、何かに導かれているに違いないと信じて。さんざん苦しい思いもするけれど、わたしはムンの木とは縁を切ることを決めたのだ。森を歩くうち、知ったふうの顔をしたフクロウに馬鹿にされて、心底から腹が立った。なぜこんな侮辱を受けないといけないのか。なぜこんなつらい思いをしなくてはいけないのか。いや、それでも自分は正しい道へ踏み出したのだから、胸を張って進んでいいだろう。そうして進むうち、なんだ、ただこうして歩きだせばよかったのか、と気づかされて気持ちがすっと軽くなっていく。まだまだ道のりは遠いにせよ、もうここまで歩けば大丈夫だ。このすがすがしい、解決した気分が何よりの証拠だ。自分をバカにしたフクロウのことも、いまはもうどうでもよくなった。それどころか、いまここまで来ればすべてのことを朗々と、誰に対してでも語りたいほどの気分だ。そうして背伸びをして、自分の絶好調を信じたとき、ふと後ろを振り返ると、自分はもとのムンの木に寄りかかるほど近く立っているのだ。そのときの恐怖といったら、本当にギャーと悲鳴をあげて恐慌に陥ってもおかしくないほどのものだ。

ムンの循環について、その絶望感に取り込まれる前に、筋の通った合理的な説明をしておこう。これは単純な話なのだ。この物語の主人公はこれまでに、さまざまなおっくうさを乗り越えていくことや、その他の、力が必要な局面のすべてについて、ムンから力を借りることでやってきた。人によってはそのムンから「かわいい」まで与えてもらったという場合さえある。ムンはその意味では主人公の恩人でもあるのだ。主人公はこれまですでにムンで実績をあげてきている。

本来は、それらのすべての実績を得ていくにあたって、人はいちいち「命」との接続を見つけ、その接続においてのみすべてをやりこなしていく、ということをしてこなくてはいけなかったのかもしれない。単純に言うと、この主人公はこれまでそれを〝サボって〟きたとも言える。命の発見やそれへの接続ということに、生意気に首をかしげてみせて、ムンですべてをやってきたものだから、そのぶんの借り入れがムンに対して残っている。いっときに、ムンから借りたものをすべて返済できたような気がしたのは、やはりムンから借り入れをしていたからなのだ。借金を借金で返したということ。だから以前の借り入れはすべて消えてなくなったように見えたのだが、やはり借り入れは相変わらず残ったまま、何なら借入総額は増えさえしたというわけだ。それじゃあ、旅立とうとしたところいつのまにかムンの木のもとへ戻ってきたということも単なる妥当な結果だと言うよりない。

厳密に言えば、雨の日にトイレットペーパーを買って帰ることのおっくうささえ、命との接続を見つけてそれをやりこなさなくてはならなかった。そうしたことのすべては、ふつう「ムン」の力を借りて済ませてきただろう？「我慢して、やることはやるしかないでしょ」と行動してきた。

だから単純に言って、すべてのことを本当にやらないといけないときが来たのだ。いちいちのことについて、これがわたしの命なんですということに結びつけて、すべてのことを本当にやらなくてはならないときがきた。そのことは、あなたにとって決して不幸なことではあ

るまい。あなたにとってちょっと気が遠くなるかもしれないせよ。

それにしたって、わたしが十年前に、すべてのことは意識ではなく脳でやらなくてはダメだと、そうでないとあなたはメンヘラ文化的なものに取り込まれてしまうと、じゅうぶんに警告したじゃないかと言えば、あなたとしては頭を掻いてごまかすしかあるまい。あなたはこの十年間、あるいはもっとさかのぼっての数十年間、ムンでやりこなしてきたことを、けっきょく自分の命と接続してすべてやりなおさなくてはならない。それはまだ佳い話ではないか？　ここでさらに投げやりになった先に待ち受けている話は、もうそのやりなおしを〝させてもらえない〟という、真の恐怖のストーリーに決まっているのだから、そのことに比べれば現在のあなたは未だ希望にあふれている。課題の巨きさに見合った希望がちゃんと用意されている。

ひとつひとつのことを、いまさら、本当にやっていくのだ。自分の命につながったことなのだと、音もなく馬鹿正直に。そのことは気の遠くなるような行為だけれど、それは果ての無い行為ではないし、その行為のさなかにあるときに恐怖はない。気が遠くなるけれど循環はない。ムンの木の葉が、一枚枯れて落ち、塵になって消え去る。あなたはもうそれをムンでやらなくなったのだから。二枚、三枚とそれは続いてゆき、やがてひとつの枝がバサッと落ちて消え去るだろう。そのときあなたは、そのことについてムンっとしようとしても、もうできなくなっているのだ。

すべてのことを、自分の命につながったこととして本当にやりなおしていくのだ。あなたにたとえば、架空の日本酒の銘柄、その名前をひとつ決めてもらおう。一升瓶に貼られているラベルは未だ白紙だ、そこにあなたが銘柄の名前と図柄を書き込む。

そんなことでさえ、あなたはエッとなって動揺する。そんなことでさえ力が要るもので、あなたはムンとしてしまう。腰高になって、ムンとした声と表情で、思いついた銘柄の名前を言ってしまう。それだとまたやりなおしだ。そこで書きこまれるのは、本当にあなたが決めた銘柄の名前でないといけないから。

一般、しばしば、

ゴルフの練習をする人が、腰高になってムンとなって、その打球を飛ばしているうちは、未だ一球も彼の打球は出現していないことになる。わずかも腰高にならずムンとならず、彼のままスイングしてボールを打つということがいかにむつかしいことか。単なる練習でなんとかなることじゃない。そこに命が見つからなければ彼のスイングも出ないし彼の打球も出ない。学門が要るのだ、彼の体をいくらムンムン振り回しても、彼の身はゴルファーにならない。

また、たとえばあなたにこう問いかけてみよう。人は労働するべきだろうか。学生は勉強するべきだろうか。人は人を愛するべきだろうか。これに対する答えようはいくらでもある。だが、答え方やその内容が問題なのではない。あなたがわずかもムンとならず、本当にあなたが見てきたもの、本当にあなたが視ている世界、本当にあなたが知ったこと、信じること、情熱のほとばしること、それに基づいて、本当にあなたが答えなくてはならない。わずかもムンとならずに答えなくてはならない。それはそんなに簡単なことではない。

ふつうわれわれは何かひとつを考えるにしても、また話すにしても答えるにしても、半分は自分のムンに頼るし、もう半分は「一般」ということに頼るものだ。人は労働するべきだと、一般に言われている。学生は勉強するべきだと、一般に思われている。人は人を愛するべきというほうが、一般に聞こえがよい。そうしたものに頼るのだが、きっと言わずもがなのこと、そのときその一般というやつもムンとしている。

ムンのひとつである「一般」ということについて考えてゆこう。

ムンに取りつかれた考えと挙動

一般という存在を否定する必要はない。たとえば、一般に赤信号は「止まれ」で、青信号は「進んでよし」だ、このこととケンカする必要は誰にとってもまったくない。いかなる芸術家でもそんなところに闘争を仕掛ける理由はないだろう。われわれは信号の規則についてはまさに一般人でよい。だが自分の魂にかかわることまで一般ということに保証をなすりつけてはいけない。

われわれが見かける最も濃厚な「一般」の気配は、テレビ番組としてよく知られるいわゆるワイドショーだ。誰もワイドショーで誰かの魂を見かけることは期待していない。そして「ムン」と言えば、ワイドショーじみた光景のすべては笑いたくなるほどにムンムンだ。ＰＴＡの会合や、親戚の法事、地域の慣習行事など、じつに一般と呼ぶべき一般が強調されるそうした場は、ムンがわかりやすく圧している。

赤信号や青信号に関しては、われわれは一般のまま、一般人そのままでよい。けれどもわれわれがワイドショーそのままの人間になってよいのかというと、そんなことを肯定する人はまずいまい。この差分は何から生じているかというと、これは単純な話、信号の規則にはダウンフォースやらリフトフォースはないからだ。信号の赤色や青色に関わって上昇したり下降したりする魂はない。だから、そうしてダウンフォースもリフトフォースもないことについては一般そのままでよいのだが、十八歳でお酒を飲んでよいか、十五歳とキスしてよいかという話になってくると、それはけっきょく一般がどうこうということに括り付けていられなくなる。もちろん一般にはどうなっているか、法律や条例のことは知っているべきだろうが、法律や条例やワイドショーに言われるままにするということは、けっきょく本当には自分では何一つやっていないということになる。ワイドショーで「十八歳でお酒はいけませんよね」と言うとき、当たり前だがその一般というやつが体にムンと出現している。

ワイドショーに映っている出演者のほとんどは、じっさいには十八歳のときには飲酒経験があったと思うけれどね！　コメンテーターとしてはシレッと「十八歳でお酒はだめですよね」と言う。そう考えると、われわれはけっこう不気味でいかがわしいものを見せられているわけじゃないか、その「一般」というやつの中で。

十八歳は未だお酒は飲んではいけないという、遵法的な、お堅い一般論があり、片側には、「もちろんダメですけれど、若気の至りでちょこっとというぶんには、そこまで責め立てなくても」という、寛容さの一般論がありうる。ここではもちろんそのどちらが正しいというわけではなく、それが一般のこととして言われるときには、どちらも同じように「ムン」としているということだ。大げさでなく、たとえばツイッターなどのＳＮＳ上でこの飲酒と年齢の問題についていわゆるレスバトルが起こると、どちらの論者も、余裕を持っているふうでいながらその体勢は腰高だ。そして遵法側は寛容ぶる者らにうっすら「死ね」と思っているし、寛容側は遵法ぶる者らにうっすら「死ね」と思っている。レスバトルがヒートアップすればはっきりと「死ね」と思うだろう。「話が通じないのでもういいです、死んでください」。

そうしてムンとムンがやりあうことに命はなく、その中ではそれぞれに対立する吾我の驕慢があるだけで、誰かが本当の何かをやってはいない。十八歳の少年少女の前に置かれたワイングラスについて、「いいじゃん飲めよ」と言うにせよ「やめとけよ」と言うにせよ、それがムンとせず自分の本当に考えたことになるかどうか、そんな小さなひとつひとつのことにわれわれの命が掛かっている。

ワイドショーに代表される「一般」というやつが、われわれの魂を真に案じてくれるということはありえないだろう。ありえないし、そんなことを期待するのは、さすがに期待するほうがどうかしている。

昔の話になるが、東京で得たわたしの友人が、夜の銀座で殴り合いをしたという話を人づてに聞いた。男Ａが男Ｂの愚痴っぷりに呆れ、さらにその愚痴の中に女性を冒涜する言いようが混ざりこむことに

腹を立て、「お前ちょっと表に出ろ」ということになったらしい。その時点では酒精もあって、売られたケンカを買う男Bは「なんだよ、やんのかよ」と強気だったらしいが、じっさいに表に出ると男Aは本当に全力でやる気マンマンだったらしく、そのことを看取した男Bは男Aを「ちょ、ちょっと待て」となだめようとしたらしい。しかしときすでに遅く、男Aから男Bへの一種のケジメのようなものはブチ込まれてしまった。その光景はさいわい、戦闘の勝ち負けというような血腥（なまぐさ）いものでなはく、ただガラス張りの銀座の路面店からは恰好の見物だったそう。これはいわば短期的に生成した決闘のようなものだと思うが、このようなことを肯定するワイドショーは存在しない。「一般」でいうと、暴力はいけませんね、ということで初めから締めくくられている。法律上は決闘に関する罪というものも定められており、法的に決闘は許されていない。

けれどもわたしはその時点でわたしの友人らが、遠い場所ではあれ、気合の入った生きようをしていることをすなおにうれしく思ったのだった。

同じように、わたしはたとえばその気合の入った生きようをしている友人が、十五歳の少女にせがまれて「しょうがないからキスしてやった」ということがあったとしたら、わたしはそのことにワイドショーのようなムンとした腰高を向けるつもりはない。「ふーん」あるいは「そりゃまあそうだろうな」というようなことしかわたしからは出ないだろう。

わたしがこうして話していることは、いまここではどこにでもあるようなエピソードのひとつとして、平穏に聞き流されるだろうが、このようなことに対してもムンの勢力は見逃さなくて激怒する。ワイドショーに出ているタレントが、夜の銀座で友人をブン殴って見世物になり、あげくに十五歳の少女にせがまれたとはいえキスをしたとなったら、ただちに謹慎させられて芸能界を干されるだろう。それが一般的なことだが、こうして見ると一般というものは正常なのか異常なのかよくわからなくなる。冷めきった無言で銀座から帰宅してアニメキャラクターで自慰をするほうが正常だと本当に言うのだろうか？

われわれがここで明確に知らなくてはいけないのは、ムンが反応することは、<<自分で考えたことではない>>ということだ。ムンはただ、「一般」に頼りきり、「一般」によって自分の側の安全が保障されていることを確認すると、吾我の驕慢からダウンフォースを爆発させることにタガが外れるというだけだ。

彼ら自身は、何かを本当にやったことはないし、自分で何かを本当に考えたことはないし、自分で何かを本当に話したこともない。彼らはただの強弱がついた「ムン」なのであって、彼らおよび彼らの話というものは存在していない。

その証拠に、あなたはムンムンしたワイドショーの出演者と酒を飲みかわしたいとは思わないだろう。一方、愚痴っぽさと女性への侮辱に対してケジメの一発を銀座の路上ショーで決めてやった男Aとは、あるべき酒杯を交わせるような者でありたいと望んでいる。

慟哭するムン

ムンとは我慢のことだ。そして現代は生死軸の時代で、われわれの存在じたいを「我慢」だと自己紹介してよいような状況がある。われわれの存在は生命ではなかったのか、われわれの存在は我慢なのか……そんなことを本当に受容して平然としていられる者はいない。受刑者たちが長年、塀の中で懲役暮らしをしてゆくのにも平然としていられるのは、逆に完全に塀に囲われているからだ。もしその塀の一部が堂々と繰り抜かれてあって、その向こうには賑やかなシャバの街がず

っと見えているとしたら。昼休みにも全力で駆ければ、看守たちを置き去りにしてあの街の向こうへ消えてゆけそうだ。そのような状態であれば受刑者たちはずっとその塀の穴に向けて思いを馳せて煩悶しつづけることになる。ムンは我慢を平然と自己そのものと受容しているふうに見えるが、それは状況のなせる見せかけであって、生命への入口を目の前に見せられればまったくそのように泰然自若を決め込んでいることはできなくなる。それどころか、もしその入口を見せられたのに、その入口の向こうへは行けないのだとなると慟哭し、その慟哭は数年にわたることさえある。

短い動画を投稿するＳＮＳで、高校生の女の子たちが、流行に乗っかって「遊ぶ」あるいは「はしゃぐ」という言い分で、けっきょくのところアイドルふうのパフォーマンスを示し、いわゆる「ファボ」がどれだけ稼げるものかというスリルに興じることがある。彼女らは直接の感覚として、いま世の中を支配している生死軸から、自分たちの「若い」「体」「かわいい」が最強格に強いということに気づいていて、その強さの実験に踏み出してみるということをしていると言える。彼女らはあくまで遊びと言い張り、純粋さ・無邪気さ・平和さ・そしてどこか一所懸命なところを示してなるべく多くのファボを稼ごうとするが、それはむろんそうしたものが「かわいい」と評価されるということをしたたかに知った上での、デザインされたパフォーマンスではあるわけだ。あくまで若気の至りからの遊びという言い分にしてはいるものの、そこでバズることで自分の権威や権勢を拡大したいという企図もあるし、そのことがもしあまりにもうまくいくようなら、どこかで収益化に切り替えて、何なら「そっち方面でやっていく」ということも可能かもしれないという夢想もいくらかは膨らませていよう。ただ彼女らは馬鹿ではないので、そうしたものがたいていは夢想でしかなく、やはり若いうちにはしゃいで遊んだこととして霧散していくだけだろうということも知っているのだ。せいぜい、目立つようになって、上等な男子と交際できる可能性は高くなるだろう、それだけでもすごいプラスではあるけれど……と、そうした思考まで含めた、やはりスリルを伴う遊びだと言えば、まったくそのとおりだということでこの話は妥当に収まるだろう。

ただ彼女らが真に「一所懸命」なのかどうかについては疑義が残る。「懸命」という熟語には命の字が組み込まれているが、彼女らは本当に「命」への入口を見い出し、そこに踏み入るということを得ているだろうか。彼女らが、現在の世の中を支配する軸において最強格といっていいほど強いとして、強いということはそれだけで彼女らの勝利や成功を示してはいない。「強い」というのはただ「有利」なだけだ。じゅうぶんに有利であるはずが、ついに勝利や成功には至らなかったというケースはいくらでもあるし、むしろ現在の支配軸において有利ということは、本質的には彼女らを命から遠ざけることにはたらく可能性もある。

古臭く、大真面目に考えるならば、純粋かつ無邪気にはしゃぐように見える彼女らは、じつは真に懸命になるものを見つけられずに、もがいているのだとも言えるのかもしれない。はしゃぐ彼女ら、しかも大量のファボをこともなげに稼ぐ彼女らは、表面的には「無敵」の時期と立場にいるように見えるが、それが命を見い出すことのない青春であるなら、一度限りの青春ということがのしかかり、彼女らは自分たちでも気づかないどこかで慟哭しながら生きているということもありうる。

じっさい、彼女らにファボ稼ぎをやめさせたとして、代わりに彼女らに何をさせたらいいというのだ？　もし彼女らが内心の奥深くでそうしたやけくそじみた感情を持っているのだとすると、彼女らを純粋で無邪気だと見立てるのは、単にわれわれの視力が浅く不見識だということになる。彼女らの、拡散用の動画はレタッチ加工を含めてよく仕上がっているとしても、収録されていない日常の時間においては、彼女らは友人らと「マジうざくない？」「死んでほしい、ってか死ね」というような言いようを、下向きに発していても違和感がないように思えるのだ。彼女らは純粋で無邪気で平和で一所懸命なのか、それとも奥底には慟哭がありうると穿つべきなのか……

ある男性が、若いうち、友人らと共に世界一周の旅に出たとする。その旅の動機は、自分たちの青春時代をたしかなものとして刻むこと、そのために何かひとつ、困難かつ大きなことを為し遂げたいということだった。そのことにはタフな冒険がふさわしいと思われた。それが、なるべくヒッチハイクをアテにした世界一周の旅という形になったのは、かつてそうした企画のテレビ番組を観たことがあり、そこで映像越しに見たものに――あるいは思い描いたものに――あこがれを覚えたからだ。また、以前に観たロード・ムービーからあこがれに近いイメージを得たということもあったかもしれないし、昔の男たちの語る冒険譚を耳で聞いたり本で読んだりして、自分もそうした語り草を持っている男になりたいという望みがあったからかもしれない。

彼が友人らと、旅の支度を整えて、いよいよその旅程に踏み出すというときには、やはり相応の胸の高まりがあった。それはもうムンムンあって、彼らを上気させ、その声がどこかひっくり返っているのも無理はないというところだった。「あらためて、けっこうヤバくない？」「ワンチャン、途中で死ぬとか殺されるまである」「それな」「でももう、マジで行くしかないっしょ」。彼らが集って勇ましく拳を突き上げている写真、そのように撮影された画像は、ＳＮＳにアップロードされるとただちに多くのファボがつき、見ず知らずの人たちからも「いってらっしゃい、道中楽しみにしてます！」と励ましのコメントが書かれた。「楽しそうで嫉妬するわ、マジで青春だ！」。もしこれが若い女性たちの企画したことであったら、彼女らが「かわいい」場合、旅費相応を超えた額のクラウドファンディングさえ達成したかもしれない。

われわれは安易に、こうした彼らに青春の命、世界の命、友誼の命がもたらされることをイメージする。そうしたかけがえのないものがもたらされるという願望が審査もなく通っていくのだが、彼らがそこで青春や世界を得るか、友誼をたしかめあうかはイメージとはまったく別のことだ。期待はされるだろうが予定までされてはおかしいことだ。じっさいにどうなるかを前もってわかっている青春や旅など、マンガやテレビドラマを除いては存在しないのだから。

彼らは初日、上海のホテルにチェックインし、宿泊する部屋のベッドに寝転んでスマートフォンを操作する。ホテルには当然じゅうぶんな通信速度の Wi-Fi 回線が入っている。

「いやはや、着いたわ」

「あー、エアコンまじありがたい、生き返るわ」

「とりあえずシャワー浴びるわ、自分が汗臭くて死にそう」

「あ、コンセント先に使っていい？　おれもう充電ないわ」

企画した旅が始まったとはいえ、彼がスマートフォンで操作するアプリケーションや、ウェブ上で閲覧するページは、いつもどおりであって特に変わりはないわけだ。そうして考えれば、上海であれどこであれ、寝ているベッドのシーツやスプリングの具合に特に変わりがあるわけではない。

彼は同じく寝転んでようやくの休憩に馴染み始めた友人らに向けて、

「あ、とりあえず写真撮ろうぜ」

と呼びかける。

「そうっすね」

すでにホテルのガウンに着替えている一名がいて、彼について一同は笑い、

「あのさ、いちおう、旅していますって恰好にしてくれよ」

彼はすでにシャワーを浴びてシャンプーで髪を洗ってすっきりしたところだったので、その様相はまるでいつもの風呂上りというふうだったのだ。

「えー、まあそうだけど、この汗まみれのやつもう一回着るのキツいっす、せっかくシャワー浴びたのに」

「じゃあもう一回シャワー浴びれ笑」

彼らは「一日目」と題して、自分たちが上海のホテルに投宿したことをＳＮＳで報告した。

出発時のそれよりは半分以下になったけれども、やはりファボはつ

いて、知らない誰かからの励ましのコメントは、
「くぅ〜、いいですねえ、うらやましい！　友人たちと、今しかできない旅を楽しんできてください！」
　と胸を高まらせているようだった。
　その胸の高まりは、ひょっとしたら、上海にいた彼ら自身よりイメージにおいて上回っていたかもしれない。
　ＳＮＳのインターフェイスをフリックしながら、
「すげー、秒でコメントつくわ」
「なんかめっちゃ注目してもらっているよね、正直アガるわ」
　彼はふと、居並ぶＳＮＳのタイムラインに、いつもの「推し」のアイドルの新着動画がアップロードされているのを見つけた。探偵役に挑戦です！　というタイトルがついているが、動画のサムネイルに表示されているのは彼女の下着姿だ。いちおう頭には、たしかに探偵という記号のような帽子がかぶせられているし、ふだんはかけない眼鏡をかけている。誘惑してくるような表情は、下着姿とよく合っていて、探偵がどうこうというキャラクターとは無関係のようだが……
　彼は再生ボタンを押した。彼はベッドに寝転んだまま動画を視聴した。
（腹筋がうっすら割れてて、マジエロいな）
　誰かが窓の下を見て、
「あ、あそこ、ファミリーマートあるわ」
　と言った。
　この後の予定といえば、とりあえず食事をしに出かけるのが楽しみだった。
　このような旅が続いたとして、彼が帰国してきたとき、たくましくなって青竹を割ったようなつきぬけぶりの男が凱旋のように帰ってくるかと思いきや、そうでもないということがじっさいによくある。壮大な旅から帰ってきたはずが、まるで一泊二日の出張先から帰社してきましたというように、
「お疲れさまでした、無事戻りました」
　と、こちらを拍子抜けさせるような調子で現れるのだ。玄関に荷物をおろしてフウと一息つきながら、その視線は斜め下を向いていて、口は半開きになっている。疲れているのか、あるいは何か厭（いや）なことでもあったのかと、こちらをためらわせることさえある。それで、こちらがややムードを誇張しながら、旅について「どうだった」と訊くと、彼は「そうですね、いや、よかったですよ」と恬淡と言う。
　それからずっと後になっても彼は、若いころに友人らと世界一周の旅に行った、ということはよく口に出して言うのだが、その旅路のどこで何がかあったかというようなことについては、特に言わない。同道した仲間たちとの友誼についても言わない。いっぽう、時事に関わって外国のニュースが映像ともどもテレビに流れると、「あーこれって、○○国の文化では見え方が違っていて」と、当地を経験した者の口調で説明を示すという向きになるのだが、じっさいに彼が○○国を体験したのは二日間だけ、しかもそのほとんどの時間は国道を長距離バスで移動していただけだったりもする。バスの車内で自分も友人らもずっと寝ていたし、その国の誰かと何かを語り合うということはなかった。
　彼の、旅の話はここまで。
　そのような、彼のしてきた体験とはまったく無関係の場所、無関係のタイミングで、彼は別の誰かのことを目撃する。
　そのとき、時刻と光景はすでに夕闇の趣きを見せ、東の空は藍色で、西の空は赤紫色が粘っているのだが、そうしてまるで東西の空が佇立しているような大気の下、ある者が T-shirt 姿で地面に座ったまま、
「あのさあ、○○岬ってよく名前聞くじゃん」
　と言い出している。
　するとこの男は、周囲の者たちに何かしら信頼されているらしく、周囲の友人らは彼の言い出すことに〝寄って〟いくようなのだ。周囲は男が言うことにウンウンとうなずいている。
「もうこんな時間なんだけど、今からクルマ転がして、その○○岬ってとこ行ってみん？　何があるというわけでもないし、たぶん何もな

いんだとは思うんだけど」
男がそういうと、別の男が、
「いいっすね、いきましょう」
と、鼻息で笑いながら、すでに腰を浮かせている。
別の誰かは、
「ぜったいそんなとこ、何もありませんよ」
と言いながら、その同道に加わることじたいを無性に楽しみにしているようだ。
別の誰かは、よくわからないけれどヤッターという形に両手をあげている。
男が、若いひとりの女性に向けて、
「お前も来るでしょ」
と呼びかけると、呼びかけられた女性は、
「え！　わたしも連れて行ってもらえるんですか？」
と驚いて、素直に気色ばんだ。
彼らはのそのそと立ち上がって、誰かの父親から譲り受けたらしい中古車に向かい、じつに小さな、どうでもいいような旅路へ踏み出していく。
「晩飯をどうするかだよな」
「こういう場合、ぜったい道中にいいところありますよ。わけわからんぐらいおいしいところが」
「たしかにな」
旅に向かって歩みはじめる男たちの姿を観たとき、なぜか、いつか観たロード・ムービーの景色がそこに重なるように見える。なぜ？　◯◯岬まで自動車ならせいぜい一時間半、まったくどうでもいいような、見分も造詣も深まりようのない道のりにすぎない。それをいちいち旅と呼ぶのは過分なはずだが、彼らがいま踏み出していこうとしているその先には、確実というほどの旅の予感がひしめいている。小石を踏みつけてゴム底がじゃりじゃりなる足音さえ際やかに、旅を飾るように聞こえ、ふと、なんだこれはと疑いたくなるような古代の風が一行のあいだを吹き抜けていく。
彼は、自分がかつて友人らとした世界一周の旅を想起して、男に、
「旅っていいですよね」
と呼びかけた。それはとてもムンとした調子の声で、周波数が噛み合わない。その噛み合わなさを押しつぶそうとするかのように、ムンとした笑顔が生じて彼の面に貼りついた。
言われた側の男は、
「うん、まあ、そうっすね」
とだけ、彼のほうを見ずに答えた。男の側には、まったくムンとした様子はない。
男の旅にあわただしく同道する友人らにおいても、どこにもムンとした様子はなかった。
すでに日も暮れているのに、今さら、文化としても景勝地としても値打ちは見当たらない◯◯岬に向かう。せいぜい展望台や、みやげ物屋ぐらいはあるだろうが、すでに閉店しているだろうという、初めから閑散とした旅。そのようなことに吾我の驕慢はありえないが、そうした自我の高揚とは異なる何か、男を中心とした一行には、見慣れぬ世界にいくらでも向かおうとする命があった。まるで何かからの不意の命令を受けて、男は◯◯岬に行ってみるという様子で、その男からの命令がまた、周囲にも分配されているようなのだ。そうなってしまえばいつのまにか、すでに◯◯岬の側から「来い」と呼びかけられているような錯覚を、冷え始めた東の空から感じる……何はともあれ今夜は、この藍色の空の下、そこへ行くことが命題なのだという確信が魂の中枢を捉えている。
ムンの慟哭は、自分はこの命の旅の車には乗れないということ、乗せてもらえないということに生じる。もし無理やり乗り込んだとしても、自分は車内でずっと、無言でさえ噛み合わない別の周波数を発し続け、命の旅を阻害し、否定し、侮辱しつづけるユニットになるだろうということ。むろんそのような破壊的なことを、彼がしたいわけではない。したいわけではなくても、彼の「ムン」は止まらないのだ。

彼は自動的にそのような破壊的なことをし続けるしかない。
もしこの命の旅の車中に、彼が居座りつづければ何が起こるだろう。彼はどのような体験をするのだろうか。それは、命に向かって生きる人たちがうらやましい、ということだけに留まらない。
生死軸が順転する。生に向かって上昇するように思い込んでいたが、そのことはやはりウソだ。
男とその一行は、いま命に向かってリフトフォースのさなかにいる。上から何かダウンフォースたる命令を受け、下から生を奉じることで応えようとしている。
自分もリフトフォースのさなかにいる。
自分のリフトフォースは……
彼はすっとんきょうな声で、
「生きているっていいですねえ、生きているって実感しますねえ！」
というようなことを、無理に言いだそうとするかもしれない。
彼のリフトフォース、上昇する方向は「生」なのだと、彼は言い張ろうとする。
ところがどうしてもごまかせないことがある。男とその一行が、いま命に向かって生きていることは明らか。それに対して、自分は何に向かって生きているのか。生に向かって生きているという言い方はどうしてもおかしい。なぜすでに生きているものが、生に向かうというような意味不明のことを言わなくてはならないのか。仮に、死んでいる者が生に向かうというのならばまだ話はわかるが、生きている者が生に向かうというのは意味がわからない。
生きている者が向かうのは……
彼は、自分が死に向かっていることを体験する。男とその一行は命に向かっているが、自分は彼らと同じ行先に向かっていない。
自分は死に向かっているのだ。
自分は何に対して「我慢」をしてきたのか。「我慢」で何に対抗しようとしてきたのか。
順生死軸を我慢して逆生死軸にひっくり返している。

「我慢」によって、自分が死に向かっているという真相に対抗しているのだ。生きものとして、生まれつき死に向かっているという一方的な摂理に対して、「いいえ、わたしは上昇している」と言い張ること、また他に対して「そっちが死ね」と言い張ること、それをもって対抗とし、その対抗のことを我慢と呼んでいる。
彼としては、ちゃっかり、しれっと、命の旅に向かっているその車中にもぐりこみ、同じ所属を得ている者なのだという幻想にしがみつくことが赦されて、その雁首を彼らと共にあつかましく並べていたい。どうか自分についてだけ、その「ムン」としている証拠が明らかなまま寛恕されたい。我慢の徒であること、生死軸の者であることが、明らかだったとしても、見ないでいてもらえるようにしてもらいたい。ぼくはここにいていいですよね？　わたしってここの一員ですよね？　そのことから突き落とされれば、その先には果てしない慟哭が待っている。命への旅から弾き出され、そこには死に向かうだけの男が孤独に残されるのだから。
誰でもが命への旅に同道できるわけではない。そのことについてムンの者は、「そりゃそうですよね」と、他人事のうちは賢明で理性的にいられる。だがそれは塀に区切られた受刑者の理性でしかない。目の前に命への旅が、栄光の列車として停車したとき、自分だけそれには乗れないらしいとなれば慟哭する。誰でも乗れそうなあけすけの列車に見えるだけに慟哭する。自分だけ駅のホームに取り残され、その孤独に押しつぶされて振り向いたとき、そこには「ムン」の顔ぶれが無数にほほえんでいてあなたを待ち受けている。彼らが純粋で無邪気だとか、平和で善意に満ちているとかいうのはウソなのだとわかる。「命に向かえないだけじゃないか！」。強烈なムンの群れ。そこにあるのは、死へ向かうことへの我慢だけなのだと知っていても、けっきょくはそれに吸い込まれていくしかなくなる……
われわれはこうしたことを、あのときから十年後のものとして、学門として捉えていこうということなのだ。学門として割り切って捉えるのは、それだけ本気で勝利を目指そうということ。甘い顔を見せら

れるところではないけれど、学門があなたに背を向けることはない。あなたが学門に背を向けることはあっても、学門の側があなたに背を向けることは決してない。

覚えやすさのために、いささかの揶揄のはたらきもこめて、よく知られた名画にあてこすり、このことは「ムンの叫び」とでも呼んでおこう。いつも美術館に展示されている、よく知られたパターンのようなものであれば、それについて毎回われわれが怯え続けるというわけでもあるまい？　今回の話はつまり、命の旅とその同道を求めるとうぜんのすべての人々について、ごく冷静なひとこと、「あなたは『ムン』ってしているじゃないか」が建設的な解決になるよう、その仕組みの全貌について解き明かそうという企てなのだ。

「ムンが止まらないです」

「だろうな、そりゃ見たらわかるよ」

雑多なムン

ハードな話が続くと、読むのにも負担が大きくなるので、閑話休題というほどではないが、雑多なムンについての話をしよう。ムンは我慢であり、我慢とは吾我の驕慢のことだが、吾我の驕慢といえば、そうしたものはそれなりにわれわれにはどうしたってあるだろう。お釈迦様じゃあるまいし、そうしたものがゼロというわけにはいくまい。そのムンを強化して命の代わりに対抗させようという試みは失敗に終わってわざわいをもたらすにせよ、そこまででもないかぎり、ささやかなムンについては笑い話で済ませられるところがありそうだ。あくまで程度の問題であって、なにごとも行きすぎれば笑い話ではなくなってくるとしても、ひとまずその笑い話のようなムンについて考えよう。

たとえばわれわれは、社会的に消費者として振る舞うとき、その消費者としての立場にもムンとなる。じつにくだらないがそういうものだろう、

「あー、このケーキ、上に乗せたアーモンドが余計だなあ、これがなかったらたぶんわたし買っていたのに。あー惜しい、残念でした」

いったい何様のつもりだという感じだが、まあいいじゃないか、この場合は消費者様なのだ、メーカーも卸も小売も、このときはあなたをすなおに消費者様と認めている。「ぞんぶんにムンとしてください」とみんな思っているのだ、なにしろ少なくとも、お客さまが、買おうかどうか迷ってくれているのだから！　われわれはそうやって互いに生きている。

女性などは特に、甘いものを食べる、それも食べ始める以前に、「これからわたしスイーツを食べるんだよね」という時点でのムンがあるように思う。そのことはまったく責められたものではない、ともども笑いたくなるだけの楽しいことだ。褒める、とまではならないにしても。地上を見下ろす二階のテラス席で、白く小さな宮殿のように成形されたシフォンケーキにいまからフォークを入れるというとき、地上では外回りの営業らしい若者がスーツを着て足早に歩き、片耳にスマートフォンを当ててやりとりをしている。それを見て、何の優越感か知らないが、

「んふふ、わたしはねえ、これからシフォンケーキを食べるんですよ、いいでしょう、んふふふふ」

というようなことを考えている。こんなことのムンならいちいちマウント合戦にもなるまい。われわれは互いに生きることを励まし合っているべきだ。

会社で、話のわからない上司とさんざん揉めるようなやりとりをして、ストレスたまるわぁと感じているところ、男性ならビールと焼き

鳥を買うだろうか、女性ならお菓子を買って帰ることが多いように思う。そして、

「ったくもう、なんなんだあのバカたちは！」

と、死ねというほどではないがむこうずねを蹴っ飛ばしてやりたいというぐらいの思いは持って、その個包装されたお菓子をつぎつぎに食う。バクバク食う。それがストレス発散になるらしいが、たしかによくよく見ると、自分は生に向けて上昇して、気に食わないものに対しては下方へのキックを食らわせている。男性の場合はよく、

「ビールってけっきょく、ストレスがないと旨くないんですよ」

と言う。わたしはビール党ではないが、ストレスがないとビールが旨くないということは、ビール党でないわたしでさえなんとなくわかる。

そしてだからこそ、ストレスが掛かった男は、その帰り道で、コンビニエンスストアの前を通りかかるときに「ムン」とし、勇ましくその扉を開いて冷蔵棚に詰め寄り、この日は発泡酒ではなく缶ビールを買うのだろう。わたしの友人などは、このあたりが逆転してしまって、むしろその夜のビールを旨くするために、日中のストレスを待ち受けているというようなところさえある。ストレス解消のためのビールではなく、ビールのためのストレス付与を待ち受けているという具合なのだ。なんと力強くてたのもしいことだろう。

そしてそうしたオジサンはきっと世の中に珍しいものではなく、

「この一杯のために生きているという気がする」

という言いようも、冗談に見えてじつは当人が思っている以上に冗談ではないようなのだ、彼の上司も、彼のビールを旨くするために叱責させられていると知ったら憮然とするに違いない。

オジサンが晩酌しながらプロ野球中継を観たり、オバサンが茶をすすりながらワイドショーを観たり、オタクがどこかをこすりながら深夜アニメを観たりすることには、視聴というより半分がた「批評」が入っているように思う。

「向こうは明らかに変化球狙っているのに、あんな甘いカーブ投げたらあかんわ、そら打たれるわ」

「この女優さんも、まだ若いからねえ、やってはだめということが、肝腎なところではまだ分別つかないんでしょうねえ、はあ、若いからねえ」

「うーん、このアニメ二期になってから、あきらかに作画の手抜きを感じる。声優はがんばっているのに、これは制作会社の問題だよ、こんなの視聴者に見捨てられるよ、ちゃんとやってよ、ただ今日のおっぱい揺れのシーンはシチュエーションがよかったな、それは認めよう」

そうした、いわば「批評ムン」が、それぞれの自室で発揮されて（自室だけにしておいてくれよ）、それが生へのリフトフォースになっているのだろう。半分がた批評するためにそれを視聴しているというのは少しばかり趣味が悪いのかもしれないが、でもそれでも趣味といえば趣味の範疇にじゅうぶん収まろう。趣味で生きる力を得ているのだからすばらしいことだ。たくましくて、人間らしいことだ。

われわれはそんなものなんじゃないかと思う。ささやかに雑多なムンを起こしながら、死にたくはないので生きているし、自分を楽しく生きる気にさせようとしている、そういうものだろう。

「そうだ、自分へのご褒美をあげよう」という、わざとらしい言いようにに乗っかったとき、われわれはささやかにムンとするし、「学生時代にアパレルでバイトしていたから服をたたむの得意なんだよね」というときにもささやかにムンとする。「おれこの手品のタネ知っているんだよね」「わたし地理だけはすごい成績良かったんだよ」「子供のころ、二階のブラウン管テレビがついているの、なぜか一階からでもわかったんだよね」「カレー作るのはけっこう自信ある、一時期凝っていたから」、そんなことでさえわれわれはささやかにムンとする。そんなささやかなムンまでが責め立てられて否定されるわけではない。そんなせまっ苦しい話をおれがするわけねえんだから。

ただ、われわれは命への旅の中にあるべきで、ささやかで雑多なムンは、その道中のちょっとした寄り道、愉しみ、それはそれでいて欠かせない味わいのものであってほしい。命への旅を失って、そのムン

を無理やりに強化し、ムンじたいを命にすり替えようという試みはさすがに酸鼻なのだ。

原理的には、ささやかなムンをさえ、選択的に「消しちゃえ」と発想するのは悪くない。生死軸に起こるそのムンという音を消し、わずかも発生させず、生命軸の中で営むのであれば、こだわりのカレーを作るのでも、「けっこう自信ある」なんてものではない、その料理と食事じたいに命があるようなカレーが出現することになるだろう。「映え」に長けた料理研究家のおばちゃんが厨房に立つとき、そのおばちゃんはムンとするが、何をやっているのかわからないような超一流の、歴史に残るような日本料理の料理人が厨房に立てば、すべての所作はわれわれが寝ているときよりもずっと静かだ。大胆な動きの中でも、わずかもムンとしていない。そこまでいって初めて「命」が現れてくる。原理的にはすべてそうしたことに向かうのが最善ではあるだろう。

とはいえ、すべてのことをそうして最善にするという発想じたいが、あまりにもわれわれに適していない。

われわれは日常、そうした命のことは「さておき」、お菓子をむさぼったりビールをかっくらったり、テレビ番組を観て内心で批評ぶったり、ちょっとした自慢でちょっとだけ鼻を高くしたり、しているわけなのだ。われわれがそうした、われわれらしく欠かせない味わいを失わなくて済むようにも、われわれは根本的には命の旅につながっていたいと思う。雑多でささやかな、笑える範囲のムンに囲まれながら旅路を行くのは、つまりわれわれのほとんどはエコノミークラスに乗って旅路を往くということなのだ。自慢にはならないが批判されるにも当たらねえよ。

ムンは言いたがり、黙り、敵対する

もともとムンはどこから発生したか。生命軸が見当たらないことから発生した。接続すべき命を発見することができず、継承するというほど素直にもなれず腰を低くもできず、また継承させてくれる環境は時代と共に根絶やしにされていった。命が見当たらないのであれば生命軸には所属しようがない。となると、自分は生死軸に所属するしかないが、かといって毎日「死に向かっています」ということでわれわれは意気揚々と生きていくことはできない。それで生死軸を逆転させて、上方に生、下方に死とし、「生に向かっています」ということで前向きに生きていこうとする。構造上の、いささかの違和感を押し隠したまま。それでもムンと笑って。この構造上の逆転している違和感を押し隠すことじたいが「我慢」の本質なのだった。

ムン者は、生死軸者であって「我慢」の力を用いている者だが、だからといって彼らが自分たちについて「命はないです」と傲然と言い放つということはない。彼らの自負や性分においてもそのような負け筋めいたことは言わないし、単純にいって命とは何なのかということの知識じたいが彼らにはない。彼らにはないということは、われわれにはないということだ。

ムン者は自分たちの上方にも命があると言い張るのがふつうだ。このことが、じつにわれわれを混乱させる。ムン者の上方に設定されているのは本当は「生」だが、生も命もほとんどの場合で区別がついていないので、「生きているって実感、その高まりが、つまり命でしょ」というような粗雑な言い方でこの筋違いは押し通ってしまう。

われわれが体験的にそのムンおよびムン者を知るのは、むしろその「命」にアプローチするときだ。「命」にアプローチするとき、最も赤裸々に「ムン」が露出する。命にアプローチする……たとえば作品の命、物語の命、芸術の命、音楽の命、場所の命、思い出の命。恋あい

の命、青春の命。表面的な恋愛経験を多数重ねたからといって恋あいの命が得られるわけではないということはほとんどの人が知っていることだし、十代のうちに運動部に入ったからといって、またクラスメートと文化祭に参加して夕暮れに性的接触の気分になったからといって、それで青春の命が得られるわけでもない。

命のあるなしについて。そこまで大規模なものでなくても、ちょっとしたひとつの話でも、そこに命があったりなかったりする。先の段で示した◯◯岬への旅でさえ命を持つのに対し、大きくアピールした世界一周の旅でも命を持たないことがありうる。そうしたことに最もムンが露出するので、その露出の傾向と性質について述べておきたい。

命へのアプローチにかかわって、ムンはまず^^言いたがる∨∨という性質を示す。

「この映画のこの部分、この演出は、じつに構造化されていて……」

「あっ、わたしも思った！　そこ何かありますよね」

「歴史的に見て、こうして国家転覆が企図されるとき、首謀者たちはまず大義名分として……」

「あっそれわかります。こういうとき、だいたいそうなりますよね」

「お吸い物は、スープではないから、この具材を……」

「あ！　なんかそれです、スープとは違うんですよね、お吸い物って」

ムンはそのときの自分の高まりが、命に接続しているものだと思っているから、ムンムンに高潮して、ときにはほとんど歯止めが利かないというほどに、その命につながるところを「われこそが」という調子で言いたがるという反応を示す。

もともと人の魂は、本当はそれほどに命たる自分を求めているということの表れかもしれない。人の話の命を奪ってでも、それを自分の命としたがる。

次にムンは^^黙る∨∨。

「お吸い物ってスープと違うの？」

「はい。え？　違いますよね」

「うん、それってどう違うの」

「えー？　お吸い物っていうのは、日本の料理だし、スープって、外国の言い方だから。でもそれだけじゃなくって、うーん？」

「国家転覆を企むとき、その首謀者は大義名分をどうするの」

「それは……国家転覆とか、そういうときって、大義名分が要るってことですよね」

「大義名分とは何だろう」

「なんというか、自分たちが正しいんだ、これこれこういう理由で、ってやつです」

「その正しさはどう担保される？」

「それが正しいっていうのは、けっきょく誰も言えないことですよね。だから、たぶんそこは、それぞれが言いたいことを言っているだけなんじゃないですかね。歴史の必然ってやつで。わからないですけど。勝者が歴史を決めるって言いますよね、本当にそういうもんなんだなーって思います」

「あの映画のあの部分が、どうだって」

「あの部分が、こう、なんというか、全体に対して効いているじゃないですか。ここすっごいこだわって撮っているなあって！　見ていてわかりますよね？」

ムンは、自分がムンムン昂る先が命につながっているような気がしているけれど、じっさいにその命たるを示そうとすると、命にはつながっておらず迷走が示される。その迷走で、ひとつひとつの命は死んでいったような感じになる。

その死の感触と、ひとつごとに恥をかく自分がいやで、ムンは次第に黙るようになっていく。ただし黙ってはいても、先の「言いたがる」が消えたわけではないので、ムンは黙ったまま言いたがる気配を継続し、ますますその様子は体にムンムン現れてくる。

次にムンは^^敵対する∨∨。

ムンは命について、誰よりも第一人者のように言いたがっているが、それがじっさいにはうまくいかないので黙っている。黙っているが言いたがっているので、これはつまりフラストレーション（挫折）にな

る。このフラストレーションが急速にストレスになってゆき、苛立ち、憤怒、敵意、やけくそなどが湧いてくる。

この耐えがたいフラストレーションはどのようにすれば消去できるだろうか。至急の処置が必要なところだ。

フラストレーション発生の処置をするならつまり、その発生源を絶てばよい。それで、命などというものがつぶされてしまえばいいという発想になる。

誰だって生きているし、生きているだけですよね。それがいちばん大事で、それ以外にないと思うんですけど？　ハーつまんない。ハー楽しい。最近わたし楽しいんですよね。お吸い物とスープの違い？　そんなのありますかね、ちょっとそれ、わからないです笑。なんかそういうことにオタクみたいな芸能人とかっていますよね、おじいさん系のタレントで。国家転覆に大義名分？　なんですかそれ、右翼っぽくて笑える、というか引きます。そっち系の人なんですか？　ハーわかんない。というかそういうのってわたしたちが生きていくのに関係ないですよね？　ただのしんどい話なんじゃないですか笑。あの映画のあの部分のどうこう……なんか、映画ってそんなややこしい見方します？　フツーに楽しく観たらいいんじゃないですか？　わたし映画って楽しく観るものだと思います。うふ。ハッピーエンドの映画っていいですよね。あ、そんなんじゃなくて、もっと胸糞なやつのほうが好きですか？　頭のいい人ってそういうところありますよね。すごい穿った見方する、みたいな。

さらに言えば、ここから^^ここぞとばかり^^という現象が出てくる。ここぞとばかり、生、生、生、命とは無関係な生の側面にすべてを振り切ろうとするはたらきが起こってくる。

「弟さんがいらっしゃるんですか？　へえー、いまおいくつなんですか。どちらにお住まいで、弟さんはどちらにお勤めなんですか。もう結婚はされているんですか？　大学を出てからそちらに就職されて……じゃあ、進学費用でご両親は大変でしたよね。いまは賃貸に住まれているんですか？　じゃあご家業のほうは弟さんが継ぐかもしれない、と。でもそういうのって長男が継がないと周りの目が厳しかったりするんじゃないですか？　周囲はそういうことに割と理解があったりするんですかね。あ、あるいは弟さんのほうが、これまでのお客さんにウケがよかったとか。以前の交際相手とは、結婚という話にはならなかったんですか？　それって向こうはどういう感情で別れたんですかね。その、もとの彼女さんがやっていることって、お金にはなるんですか？　その彼女さんはご両親からの仕送りで、つまり、自分で身を立てるというつもりではなくて、半分趣味でやっているってことなんですかね？　言い方は悪いですけど。あ、ところで、最近は電気代が高くなっちゃって、大変ですよねー。少しでも安いところに変えようと思っているんですれど、面倒くさいですよね。毎月の通信費ってどれぐらいになってます？　あとポイントカードってどこの使ってますか？　わたし最近Ｘマートに行ったんですけど……あ、Ｘマート行ったことあります？　わたし税金関係とかちゃんとしていない人って、大人として認められないんですよね。いつまでも子供でいたい人なんだなーって、すごい冷めて距離を感じる笑。だってそれって大事なことですよね？　あと、わたしも人のこと言えないですけど、もうちょっとやせたほうが健康にいいんじゃないですか？　いまって年齢おいくつでしたっけ。わたしこれから生きていくのに、本格的に何か資格とか取ろうと思っているんですけど、何か資格とかって持っていたりします？　わたし最近ダイエット食にハマっているんですけど、いまのコンビニのダイエット食ってすごいんですよ、ぜひおすすめです」

モネの絵には光景の体験がある。絵画を観たはずが、その記憶が残らないので、モネの絵には絵画の体験がないとさえ言いたくなる。だから美術館で困惑する。美術館にいけばふつう絵画を鑑賞するものだが、モネが飾られているとそこのカンバスだけ美術館に穴があいて向こう側に光景が広がっている。もちろんカンバスの大きさ以上の光景はないのだが、そのサイズの中にあってはおかしい光景がそこにある。そのカンバスの中で、えんえん光景の中にたたずんでいられるような

感じだ。わたしは友人に芸術論としてこう話した、

「もしおれがモネに話すことがあったとしたら、お前はおかしい、と全力で言いたい。ふつう、カンバスに油絵具を置き重ねていったとして、あんなふうにはならねえんだよ。おかしいんだよ。ある意味テメーは絵画がわかっていないんじゃないのかとさえ言いたくなる。光景という"現象"を絵の具で創るなや、すごすぎておっかねえんだよ。おれは以前、本当の超一流の、日本料理をカウンター席で食ったことがあるんだけれど、そのときも『んなアホな』と思った。席から崩れ落ちそうになった。その料理人は、季節を大切にする人だったんだが、ふつう季節の料理というと、料理の中に季節を感じるってもんだろ。そうじゃないんだ、不気味なんだよ、料理を食っているはずなのに季節を食っているみたいになるんだ。料理はどこへ行ったんだって。季節感じゃなくて季節そのものを食わされるんだ。そんなのもう、メシとか食事とかの次元じゃねえだろ。フツーに怖かったよ。食材を使って季節を作るってどういうことだよ。だからおれは言いたいんだ、菜の花やら鱧（はも）やらをどう置いたって、こんなことにはふつうならんって。おかしいって。それと同じように、モネもおかしい、絵の具をどう置いたってふつうあんなことにはならねえんだよ、絵画って領域から逸脱してしまってんだ」

生命軸と生死軸は、極端に示せばこのように分離している。絵画にも料理にも命があり、それは命につながって現れているという一点のみですばらしい。すばらしいという語さえ正しくは当てはまらず、そこにあるのは評価ではない、ただの命そのものの歓喜だ。この歓喜は、そもそも評価など必要としない。

命につながったものは、さらにはその極限までいけば、もはやジャンルさえ見失われて、そこで体験するのは命そのものというほどにもなるだろう。おいしいですねとか上手ですねとかではなく、

「お前なあ」

と言いたくなる。

ムンはこのことの現れに、「ムン」をもって対抗する。ムンを持って言いたがり、それがうまくいかないと、恥をかかされたとしてムンと黙り込んで不快を表明する。次に、ムンは命を攻撃しはじめる。そして「ここぞとばかり」に、命とは無関係な生、生、生、の大洪水をしかけてくる。その大洪水で命を押し流すことができたらムンの勝利だ。この勝利に向かって「ムン」は果てしなく加速し、止まらなくなっていく。

ムンはもともと、ここで命に対して勝利するために作り出された。

ムンはこのように、言いたがり、黙り、敵対するという性質がある。

「ここぞとばかりに」という性質もある。

命はその逆だ、命は聞きたがり、語り、寄るという性質がある。いつでも、いかなるときでも、という性質もある。

芸術と宗教にかかわるムン

あなたがもし芸術を手掛ける、あるいは芸術に挑戦するとしたら、あなたは「どのように」それをやろうとするだろうか。上手とかヘタとかいうことを抜きにすれば、芸術（あるいは芸事）に挑戦することじたいは簡単だ。絵画でもいいし音楽でもいい、小説でも、陶芸でも、演劇でも、漫才でも落語でも、歌や踊りでも何でもいい。歌といえばわれわれはこの瞬間にも唄えるのだし、踊りといえばわれわれはこの瞬間にも踊れる。絵画というのも目の前に紙とペンがあればできる。演劇といえば、床の上に立ってさえいればどこでもできる。設備や雰囲気に投資しなくてはそれに取り組めないということはまったくな

い。

あなたが芸術を手掛けるとき、十中八九、あるいはその百倍ほどの確率で、あなたは「ムン」っとする。これほどわかりやすい話はない。あなたが友人に向けて「ちょっと一曲唄います」と言ってみる。そのとたん、空気はヘンなことになり、あなたは友人に向けて「ムン」っとする。そこから照れ笑いをしたり、一般的なことを言ってみたり、「これはどういう〝空気〟のやつなのだろう」と読み合ったり、いろんなことをするだろうが、それらのすべては「ムン」っとしているというひとつのことだけで説明できる。あなたがメモ用紙にカバの絵を描こうとしたとき、特にそれを人に見せる絵にしようとした場合、あなたは「一般」的なカバのイメージに頼り、また「一般」的なイラストのタッチに頼ろうとする。その「一般」というのも、先に説明したようにじつにムンっとしている。あなたは芸術を手掛けようしたすべての入口で「えーっと……」と言い、このえーっとがすでに強力というほどの「ムン」を放っている。こんなささやかなことになぜ人はいちいちムンっとするのだろう？

芸術やら作品やらということになれば、その入口はただちに「命があるかどうか」が問われる。芸術にかかわるすべては、その表現に命があるかどうかが入口で、命があるかどうかが最終到達点だ。どれだけ上手でも、そこに命がなければそれは作品として「要らない」ものになってしまうし、どれだけ下手でも、そこに命があればそれだけで無上の値打ちがある。

命があるかどうか、命につながっているか否か、それだけが問われる。その点で、芸術と宗教というのはよく似ている。たとえばキリスト教などの聖書方面では、つまり人の魂が「永遠の命」を与えられるということが教えの到達点なのだし、仏教方面でも、その魂は仏に「帰命する」という言い方をする。どれだけ神像を拝み倒しても、念仏や聖音をつぶやきつづけても、それで魂が「命」につながらないのでは、宗教といっても何をやっていることにもならない。いくらチャリティ行為をしてみたり、それっぽいほほえみを浮かべてみたり、聖典に書かれていることをマニアックなほど暗記してみたりしても、己の魂が命につながっていないのであれば、それらはきっと神仏とは無関係の、人為的な願望が膨らんだだけの空虚な営為だ。

宗教にかかわっては、宗教施設側の習慣的権威が強く、首を突っ込むと誰にとっても危険しかないので、もちろん誰でもがじっさいそうしているように、このことは遠くから内心で思うだけで、宗教がどうなっているものなのかに興味は持たないほうがよいし、手出しも口出しもしないほうがよい。われわれが知っているのは、勧誘にくる「宗教の人」が何はともあれわれわれの玄関先でムンっとしているということだけだし、そのことだけでわれわれにとって判断の材料としては十分だろう。

芸術にかかわっても同じようなこと、本来それは命につながっていなければならないように思うが、じっさいにはどうか。われわれが現代で目撃するほとんどのそれは「ムン」だ。命ではなくムンが芸術の主体となっている。ムンはもともと、命が見つからない者がそれを代替品とするために発明したもので、その意味ではいまやムンは代替品として正しく活躍し、何であればそれは代替品どころではなくこちらが真の芸術なのだと言い張りさえするところまでのし上がってきたと言える。

けれどもあなたが、どうしても命ということに鋭敏な魂の持ち主であれば、どこまでもその「ムン芸術」には違和感を覚え続けるだろう。本来の命を忘れたとしても違和感は残り続けるだろう。そこでムン芸術を、他人事として眺めているぶんにはまだいいが、自分がそれをやらされたり、巻き込まれたりすることには、率直に言って「カンベンしてほしい」と思う。とはいえもし、あなたが親の意向でバレエ教室に通わされていたり、あるいはプロとして舞台上でパフォーマンスをしなくてはならない立場だったりすると、あなたはスポンサーに言われたとおりにその「ムン芸術」を、いちおうちゃんと全力でやっていますというていどにはやって見せなくてはならない。あなたはそれについて命がどうこうというような詳しい知識や学門は持っていない

し、その実物を唐突に示す実力も未だ持っていない。ただ、命のない猿回しじみたことをやらされて、そのことには深い屈辱を覚える。そしてそのぶんだけ「十分なギャラはください」と炎のような憤怒があなたの腹の底に起こるのだ。これをやらなければあなたは生きていけないと言われているようなところ、「わかりました、じゃあ生きていくことを潤すだけのじゅうぶんな金銭を支払ってくださいよね？」という文脈が起こる。「そうでなければあなたが死ぬべきですよ、舐めないでくださいね？」。やがて数億の収入にもつながっていくかもしれないという期待と可能性からそのような馬鹿げた猿回しの猿役でも引き受けているのであって、もしそのことへの妥当なペイメントが履行されないのであれば、そこには憤怒と憎悪、軽蔑と怨恨しか残らないだろう。

ムンは命ではないので、ムンで芸術に取り掛かろうとするのは邪道だと、わたしはわたしの主義として言いたい。己を生命軸に所属させて取り掛かるのがわたしの思うところの正道だが、理屈ではそうでも、「命」とのつながりなどというのは、言うは易しであってじっさいには何もかもが五里霧中だ。

それに比べてムン・我慢の、いかに簡単でわかりやすいことか。「何もかもを我慢にして、芸術をやれ！」と言えば、あなたは意味もわからないまま「はい！」と答えることができて、そのままそれを実作に転じさせられそうなほど、ムン芸術というやり方はわかりやすい。その尻を鞭で叩き、その叩かれた痛みについて「我慢しろ！」と言えば、「はい！」となって、自我の高揚が起こってくる。そこで起こってきた高揚を何かしらの表現形式にぶつけていくというようなことは、技術としてはともかくやり方そのものとしては、そのことに取り掛かって二日目の中学生でもすでに完成の域に達しそうなほど簡単なやり方だ。

それに比べて「命」というと、

「命の中に立っているなら、あなたはただそこに立っているだけでも存在があるはずです。天地の情熱たる〝場所〟に立っており、人々が〝寄って〟やまぬものがある。どこか知らないところへ響いている姿と声。無限遠点に響いているその姿と声は、なぜか知らないところのもののはずが、何よりもこころに親しく響いてくるのです。時間軸を超えたどこかにある、永遠のその場所へ、もともとわれわれは帰るはずではなかったか？　それだけでもう緊迫と安息が調和した芸術がそこにあるはずです」

というようなことになってくる。なんなんだその指導は。どう考えても、

「そんなこと言われましても……」

という困惑しか起こらない。

具体的にどうしたらいいかさっぱりわからない、と誰でも思う。とりあえず「命につながっているんですね」と空気を読んだような声で言い、神秘主義の幻想に浸ってニッコリほほえんで見せればよいのだろうか。そんなことが真に建設的であるわけがない。

そうして困惑したまま、よくわからずに、あなたはほんのりそれっぽいカッコつけだけしてみたとする。命の〝つもり〟で、あなたがそこに立っていたとする。「場所」などと大げさに言ってみたが、そこに何も珍しいものはない。真新しいものや輝かしいものは何もないし、迫る力を持つものも現れもしない、滋味も崇高さもない。あなた自身でさえ内心では意識とは裏腹に「なんなんだろうこれ」と思っている。何の装置も演出もなく、衣装もなくサクラもいない。すると、そこには当然とてもマヌケで無様なあなたが生々しく突っ立っている。カッコつけも不覚悟で不徹底、傍目には「何やってるのこの人」と憫笑されるようなものだ。あなたはその無様さをもって「命……」と言い張るようなでたらめな気概は持ち合わせていないだろう。もちろんそのようなでたらめな気概を振り回したところで、それは何ら勇敢ではないし、誰から見ても「放っておいてやれ」と言って目を背けたくなる気の毒なものにしかならない。

しかもそのことを何日、何ヵ月、何年続けても無様なままだ。傍目にも「恥ずかしくて見ていられないからやめてほしい」と言われるも

のが、なおも寒々しくそこに立ち続けている。通りすがるすべての人が「才能ないんだからやめなよー」と、同情を通りこして逆に励まそうとするぐらいの気持ちで否定を投げかけてくる。たしかにどのように思い込もうとしても、客観的に見て自分の姿は恥ずかしいぐらいカッコ悪いのだ。周囲が同情的になってまで向けてくる諌言のほうが理性的で正しく、何であればまともな権威さえ伴っている。

それに比べて、別の誰かは、パフォーマンスを始めた初日からでもその立ち姿が、

「カッコいいじゃーん」

と言われている。取り巻きにちやほやされて、照れくさそうに、しかし捨てがたい華やかな充実が周囲を圧している。

装置や演出にも投資がされていて、衣装もじゅうぶん高級にあつらえられている。性的露出も大胆で煽情的だ。そこにちょっとした振る舞いの角度や見せ方のコツを仕込まれただけで。周囲は「おお?」「いいじゃん!?」と囃し立てるようになり、

「やっぱり才能ある人は違うよね」

「こういうのって、容姿もセンスもぜんぶ含めて、やっぱ〝持っている〟んだよね。持って生まれてきているんだよ、ギフテッドってやつ」

「かわいい上に、上品で、しかもエロいというのはヤバいわ、どうしようもなく正義だわ」

この横であなたが、さきほどの無様さとマヌケさでみじめなまま立ち続けていられるかというと、そんなことは不可能だ。

あなたは隣で言われているところの「ちょっとしたコツ」に聞き耳を立てて、それを導入しようとするだろう。そのときの「聞き耳」はアフリカゾウのように巨きいに違いないし、視界に得たイメージの印象は、盗み取ろうとしなくても網膜に焼きついたまま持ち帰られることになるだろう。

「ちょっとしたコツ」とはどういうものだろうか。コツは「ムンっとする」ことだ。ふだんは控えている、本当は自信のある「体・かわいい」の自分をムンっとせよ。思い出してみれば、本当は隠し持っているだろう? 子供のころにどこかに抑圧した、本当のわたしとその万能感。貪欲で性的で、何も恐れない、本当は何もかもについて無敵のわたし。それを抑圧することはないのだ、解放せよ、あなたはあなたが本当に持っているすべてを、気ままに泣いたり笑ったり甘えたり、「あるがまま」堂々とさらけ出していい。あらゆるBGMを味方につけたまま! そしてその自己実現をもって周囲にうらやましがられるぐらいがあなたにとって当然であってふさわしいのだ。あなたのその姿に内心で屈さない人はひとりもいないだろう。〝ノッてきた〟あなたは本当にすごいよ!……

若い女の体は〝高額〟だ。それでいて「一般」をムンっとせよ。それだけではまだまだ素人くさいだろうから、「我慢」をムンっとせよ。我慢の極限を超えるところまでムンっとせよ。本当はこんなところにいるべきじゃないあなた。あなたは本当は、ここまで受けてきた不当な侮辱と屈辱にずっと「我慢」をしてきただろう? 本当はこんなシケたところにいるはずじゃないのに。本当はもっと高貴な扱いをされるべきなのに。あなたはその本当のことをすべて我慢してきただろう。それらをすべて呼び起せ。その我慢の中で、あなたはさらに、あえて最も不快なものにほほえみかけ、内心でその底辺どもに「死ね」を爆発させよ。我慢、我慢、究極の我慢。そうして極大化した「ムン」をあなたの肉体に引き起こせ。その極大化したムンにふさわしいだけの高級品を要求して身にまとえ。下方への死と上方の生たるわたしの当然として黄金をまとえ。そうすればあなたも、

「なんか、オーラあるー」

「目力が違う、迫力がありすぎる」

「本人は気さくなのに、なんか近寄りがたいムードあるよね」

と言ってもらえる。

おめでとう、そのかわり、そこまで行くとほとんどの場合、もう命のところに戻ってこられる可能性は残らない。

それで多くの場合、芸術うんぬんに関わっては、人はムン芸術とはいえそこまでは行こうとせず、「ほどほど」というていどに留めようと

する。多くの場合はそうした直観のブレーキがはたらくものだ。ムン芸術といってもあくまで趣味の範囲で、なるべく若いうちに表情や肢体を良い角度でムンっとさせてみせて、

「けっこうサマになっているでしょ」

「このときのこれは、われながらうまく盛（も）れていて、すごいかわいいよね」

と見せつけて満足するというところに留まる。同時にそれは、本当には満足していない、不満だという状態に留まりつづけているのではあるが。

そこからさらに表現を強めていくということは、ムンを強めていくということ、我慢・吾我の驕慢の極点を超えていくかどうかということになるから、直観のブレーキがはたらき、

「いやあ、そこまでやるつもりはないなあ、そこまで才能あるとも思わないし」

と思いとどまることになる。

それでも、趣味のていどとはいえ、ムンっとしたものを上位に置き、あたかもそこに権威が現れているふうに唱えはしたので、そのぶんはやはり命からは遠ざかっている。

だからあなたの知るとおり、宗教と同じで、芸術をやっている人は多くの場合で「ややこしい」のだ。そっち方面の人に対してあなたは、前もって「あまり関わり合いにならないほうがいい」ということを前提にしているだろう。その前提はまったく正しく、いまや芸術といってもほとんどはプレイヤーの「体・かわいい」をジロジロ見て興奮し、そのわざとらしい声で煽情されて、生きる元気がもらえた気がして満足するだけというのが主流になっている。ややこしい思いまでしてそれ以上の芸術うんぬんに首を突っ込む気などほとんどの人は持っていない。たいていそこから先にまで踏み出そうというのは、もう芸術うんぬんの話ではなく、プロとして収入にかかわるか、出世欲や病的な自己顕示欲によるブーストが掛かるか、人を見返したいという強迫からのブースト、あるいはセックスを欲しがるブーストが掛かって、その先まで押し出されていくかどうかという話であって、そこからはいっそ芸術うんぬんなどは無関係になる。

あなたが芸術を手掛けるとき、十中八九、あなたは「ムン」っとする。これほどわかりやすい話はなく、このことを「ムン芸術」と呼ぶことはあなたの理解を大いに助けよう。

あなたは自分の手掛けた・挑戦しようとした芸術の実作が、自分の姿ともども無様なとき、その無様さがとてもイヤなので、その無様さだけなんとかしたいと思い、それを解決する方法を探す。

いいかげんしつこすぎる「命」の一点張りで、芸術の命うんぬん、魂うんぬんなどと言い続けていても、ますます自分が無様でみじめになっていくだけだ。もっと具体的で、自分の要求を満たしてくれるコツのようなものがあるはずだろう。「みんなどうやっているんだろう？　教えてほしい」とあなたは思う。

あるときあなたは、「もっとムンムンやってよ」という、一方的な強制を受ける。そんなことがしたいわけじゃないのに、しぶしぶやらされることになった。それをしぶしぶやらされることは、そのときとてつもなく不快だった。憎悪や怨恨が残るほどの侮辱と屈辱を受けた、とそのときは感じた。

「こんな思いを、我慢しろっていうの？　我慢しながら、ずっと媚びて、笑っていなさいって？」

ところがそんなときに限って、なぜか、そのときの自分の実作は無様でなかった。何か迫力があって、芸術としての権威がちゃんと表れているように思えた。自分の体は生々しく性的な魅力をムンムン放っており、その後に示したほほえみは確かにとても「かわいい」ものだった。すでに数人の、安上がりではあるが「ファン」がついてくれて、いちおう自分のことを「推し」と言い出しさえするようなのだ。

あなたはついに、無様ではない自分を発見した。あなたはみじめさの立場から、人にうらやましがられる立場に転じ、ついに自分の望んでいたようになった。そうなってみるとすべてのことはまんざらではなくなっていった。ここまでに課された膨大な「我慢」も、見方を変

えれば自分の根性、自分の歴史だったと思える。ここまでの我慢の積み重ねが、自分の誉（ほま）れなんだろうなと、揺るぎない自信に思えて、己の腰高をさえ毅然と支えるのだった。

ムン芸術に深入りしていくとしたら、だいたいそのような筋書きになる。

芸術は宗教と同じで、入口からただ「命」のあるなしを問われる。命のあるなしが問われて命が「ない」なら、あなたのすべては無様の極みだ。もう二度とそんなところに立ちたくない、という壮絶な傷つき方をするだろう。

そこで代替品を用意すれば、あなたは初日からでも絶賛を受ける何かになれる。あっというまに、あなたはあなたの望んでいた自分になれる。

そうした代替品として発明されたのが「ムン」だ。

この段では芸術の周辺をターゲットとして話している。多くの人にとって、芸術など自分とは無関係なものだから、この段で為されている指摘は自分には無関係だろうと思えるかもしれないが、案外そうでもないということを注意喚起しておきたい。

多くの人にとって、自分が芸術とは無関係というのは、「いまのところ」「まだ」無関係というふうなのであって、生涯あるいは永遠に無関係と思っているわけではないのだ。多くの人にとって、これは当人が知らない内心の奥底にひそむものということになる。

もし、自分は芸術には無関係だし、無関心だと言い張る人がいたとしても、そうした人の大半は、もし目の前に永劫取り消せない誓約書が差しだされ、そこに「わたしの魂は永遠に芸術のいっさいに無関係です」という文言が書かれており、そこに署名と捺印を求められたとしたら、

「うーん、それはちょっと。いくらなんでも」

とためらう。ためらった上でけっきょくは捺印を拒絶するだろう。

人は、芸術に無関係なつもりでも、何かのきまぐれで陶芸教室などに行き、

「おや、手つきが落ち着いていて、なかなか筋がよろしいですよ」

とでも言われれば、ずいぶん後々までそうして褒められたことをうれしそうに覚えているものだ。

多くの人は、芸術に無関係でもないし無関心でもなくて、ただ小学校のころから描いた絵が、コンクールで金賞を獲ったことなどないから、才能がどうこうといって自分の芸術への関心を遮断しているだけだ。子供のころから一度も落書きのひとつもしたことがないという人は存在しないし、何かしらのアーティストになって喝采を受けるということを夢想したことがないという人も現代にはきわめてまれだ。

もしわたしが誰かに対して、

「ああそうか、あなたは生まれてこの方、また死ぬときまで、芸術には一ミリも関係ない人でしたね」

とでも言えば、その人はありふれて傷つくだろう。もしこのことを故・岡本太郎が見ていたら、怒って、

「そんなことはない、あなたも絵を描くべきだ」

と言うだろうし、そう言われた人は、きっと岡本太郎に言われたことのほうを信じるだろう。

それでも一般論としてふつうの人は芸術うんぬんとは縁遠いものだけれど、理論というよりは経験から申し上げておきたいのは、むしろ一般の人・ふつうの人のほうが、潜在的に芸術に対するこだわり・コンプレックスが強いことが多いものだということだ。ちょっと気が引ける例え方で言うなら、恋あいにまったく縁がない人のほうが、恋あいについてのこだわり・コンプレックスが大きくあるということがいかにもあるだろう。芸術についても同じことがある。単に、われわれが恋あいをちやほやしてきたほどには、芸術をちやほやはしてこなかったので、その潜在下のこだわりやコンプレックスの存在があまり知られていないというだけだ。

芸術に無関係のはずの人が、いざ実作を手掛けると、こだわりや思い込みが強すぎて話にならない、いくらなんでも遅々とし過ぎて、頑固すぎて、独善的すぎて……そういったことがじっさいにある。

これまでに暴力を振るったことがない人が、その内部まで暴力的でないとは決して言えないように、これまで芸術に取り掛かったことがない人が、その内部まで芸術に無頓着だとは決して言えない。

わかりやすく暴力を例にして、暴力には一般に知られていないことがある。それは、自覚的にも印象的にも暴力などには縁がなさそうなお上品な人が、何かの弾みで人のすねを蹴飛ばしてみた途端、火がついたようにその人を蹴り出して、止まらなくなるということがあるということ。これは残念ながらごくありふれたことだと報告しなくてはならない。そこから、見たこともないようなその人のきつい笑顔が出てきて、別にこんなことがしたいわけじゃないしと言い出したその声が、黒々とした強い自信に満ちているということは、やはりごくありふれている。

ＤＶというような問題は、すでに誰にでも知られているぐらい一般化しているが、そうして暴力を被（こうむ）る妻あるいは夫だって、結婚する前からその暴力を受けると知っていて結婚したわけではないだろう。じっさいの暴力が始まってから改めて知らされるのは、その人の内部には「我慢」と「死ね」が充満していたということだ。その人の内部、あるいはときには、双方の内部に、潜在していたものが婚姻生活や出産を契機に解発されていった。

ここでタイムマシンに乗って過去に飛び、その婚姻への成り行きを遮断したとすれば、その両者はＤＶという結果を回避できるだろう。ではそれによってＤＶの当事者は「暴力」そのものから離脱できたのかというとそうではない。潜在的なそれが未発のままのものになるということへ話が切り替わっただけで、彼あるいは彼女の内部には「暴力」はれっきとして存在している。

われわれにとっての芸術というのも同じような状態にある。われわれはふだん、死のことなど考えないから、日常的に自分や親しい人の死をそんなに直面的に「怖い」とは感じていない。だがそれは死の恐怖から離脱しているというわけではない、ただ遮断されているだけだ。

われわれは本当は、ふだんから自分の姿や自分の声が、自分のする話が、自分の振る舞いや仕事ぶりが、性的な魅力が、しばしば言ってみるジョークが、芸術的なものかどうかをずっと気にしている。芸術的なものであってほしいという願望を抱いている。自分のすべてが、ただ生きているだけではない、命あるものであることを願っているし、どこかそのように期待もしている。それらすべてについて、命の代替品としてムンが入り込む余地を持っている。芸術家というのはわざわざその自分の命のあるやなしやを確かめにいって証さえ示そうとする人種ということにすぎず、芸術そのものに対する衝動やこだわりは芸術家でないすべての人々にも等しく具わっている。

ムンチャカの法則

「命」があるかどうかが問われる局面に、ムンが現れる。「命」があるかどうかが問われる局面とはつまり、生死には無関係な局面だ。芸術は生きものの生死には関係がないし、恋あいというのも生死には関係がない。青春も生死には関係がない。なんでもないジョークや、浦島太郎や桃太郎の話、映画のワンシーンや音楽が演奏されること、五七五で花鳥風月が詠まれることなども、生きものの生死に関係がない。食べ物を飾り切りしたり華やかに盛り付けたりすることは、栄養摂取とは無関係だから生きものの生死には関係がないし、舞台上でロミオとジュリエットがどうなろうが、そのフィクションの話はわれわれの生死に関係がない。漫才師がどれだけ人を笑わせても、それは娯楽産業ということ以上に生死に関わりはないはずだ。

生死に関係がないにもかかわらず、そこには上手だったりヘタだっ

たり、素敵だったり寒々しかったりが現れてくる。そしてなぜか、そのことについてヘタだったり寒々しかったりすると、どことなくそれが「致命的」なことに感じられるのだ。「ダサい」ということはそれだけで致命的に感じる。理由もわからないまま。

そこで、その致命性に抵抗するものとして「ムン」の力を立ち上げて来る。致命的だったとしても、「命」はムンで代替できるのだった。

そこで「ムン」の力を立ち上がらせてくるにして、じっさいにはもうひとつのはたらきが付随してくるということを述べておきたい。この付随してくるはたらきまで把握しておくことで、われわれの知識はぐっと実践的なものになるだろう。

「ムン」が立ち上がるにして、そのじっさいの場面では「茶化す」というスタイルが、一種の便利なものとして付随してくるのだ。いかなる局面も茶化してしまえば、そこで命うんぬんを問われることはなくなる。命うんぬんといって、それは生死にかかわりがないのだからいくらでも茶化すことができるじゃないか？　茶化すことで、命がどうこうという局面はノー・ゲームになり、自分は致命性のシーンに立たなくて済むことになる。一安心だ。これはうまい手だ。命をムンで代替するといっても、毎回そのような、パワフルな代替品をあてがうこともない。毎回そんなことをしていたら疲れてしまうだろう？　そこで、ムンに付随してくる、いわばリセットボタンのようなもの、それを押してノー・ゲームにしてしまう方法は、われわれにとって次第に使い慣れた、便利な常套手段のひとつとなる。

われわれは、誰かがもたらしてくれた命の場所・命のシーンに対しても、それを破壊してキャンセルするということ、「茶化す」ということを割と平然とやる。だってそれは生死に関係ないんだろう、というような調子で。そんな、何の足しにもならない、あいまいで根拠の不確かなことは、人それぞれということでその場ごとに茶化してもかまわないじゃないか、そういう個人の権利があるはずだ。もっと生死にかかわってシリアスなことなら受けて立つけれど、なんでもないジョークや五七五、あるいはロミオとジュリエット、漫才じみたものやフィクションの映画にかかわるようなこと、そんなことがいったい何だというのだ。

「はは、まあ、こういうことはちょっとね！　なんだろうねこの空気」

ムンの裏側にはこうして「茶化す」ということが付随している。命がどうこうという局面で、ムンがいまいち決まりそうにないというときは、ただちに茶化すという方法に切り替える。そちら方面の人々にとっては常套手段だ。このことは、実験してみると機械的に検出されるから、学門としてはそのことを面白がるほどでよいだろう。

人は「ムン」とするのだ。それが決まるときはそれでよいが、それが決まらないときは恥ずかしいから「茶化す」ということをする。茶化すのをやめたらどうなる？　ムンとするしかない。ムンとしたらどうなる、それがうまく決まればいいが、そうでないときは恥をかく。恥をかきそうな予感を覚えたら茶化すということに切り替える。茶化すような局面じゃないなと思いとどまり、茶化すのをやめようとする。すると、やはり自分はムンとするが、それがいまいち決まらないので、やっぱり茶化すということに引き返す。

我慢には「ムン」という音が鳴ることに引き当てれば、茶化すことには「チャカ」という音が鳴るようだ。「ムン」と「チャカ」が交互に入れ替わる。しくじったムンを取り消すにはチャカしかないし、節操のないチャカを引き取れば、やはりムンが出てくるほかない。この機械的に検出される往復の現象は、いかにも法則じみているので「ムンチャカの法則」あるいは「チャカムンの法則」と呼んでいい。

肝腎なところで茶化すべきではないのだが、茶化すということをやめると、ムンの人はただ自分が「マジ」になる様子を感じ取る。そして、この人にとってのマジというのは大半の場合、どうしてもただの吾我の驕慢であって、その音がムンと鳴るのだ。そこで、そんなマジでムンっとしないでくださいよと言われて、それもそうだなということになると、ステータスはチャカに入れ替わる。かといって、茶化すことも場違いに思えて、往復が繰り返されていく、ムン、チャカ、ムン、チャカ、ムン、チャカ……

精神や人間関係にかかわって、「ムン」があまりにも強すぎ、何かを破壊してトラブルまで生み出しそうだというとき、そのステータスをチャカに切り替えるのは妥当ですぐれた方法だ。だがそれによってムンが解決・消失したわけではまったくない。チャカはムンの裏面でしかない。

われわれのじっさいとしては、大半の時間をムンというよりチャカの時間として過ごさねばならないようだ。ムンの時間は我慢パワーが露骨に出ている時間であってそれなりにしんどくもある。そのしんどさよりは、無為でけだるいチャカの時間のほうがマシだということが体力や気力の実情としてある。ムンに対してチャカはノー・ゲームをもたらすものだから、少なくともムンのように下方に「死ね」が噴出することは避けられる。下方に向けて「死ね」を発し続けるムンよりは、むなしいだけのチャカのほうがマシ、という局面が実情として多くある。われわれはそうしてこのチャカムンを、賢明なこととしても、またやむをえないこととしても、無自覚のまま運用している。

湧き出てくる「我慢します」

「我慢」はもともと仏教用語で、サンスクリット語ではアートマ・マーナと言う。わたしはこの現象をときに悪魔じみているとも思うので、悪魔(マーラ)の語を当ててアートマ・マーラとも言いたくなるのだ。わたしが初めてこのことに気づいたとき、しばらくはその悪魔のヴィジョンを抱えて息を切らすほどだったことを夢うつつのこととして記憶している。

われわれには何が与えられるだろうか。まず、われわれには何もかもが与えられるだろうか。きっと、何もかもが与えられるわけではないだろう。たとえば世の中にいま、いわゆる婚活に焦る女性が一定数いたとして、そのすべての女性が、いわゆる上級の男性を伴侶に獲得できるわけではあるまい。容姿・器量に恵まれていない女性もあるし、年齢的にすでに不利となった女性もある。また社交性や知性、美徳や生産性について自己を高いレベルまで研鑽はしきていない女性もある。彼女らのぜんいんが「あこがれの彼」とゴールインできるわけではないだろう。けっきょくはそこそこの、傍から見ればていどの釣り合っている誰かと縁談を進めていくということが有為にありえて、そうでなければ、最後までそのお相手は見つからずじまいということもありうる。

誰でもが、自分の欲しがったものをそのまま与えてもらえるわけではない。それが不平等だと言い立てる口もあるかもしれないが、そのことはさておき、事実として最上のものが全員に分配はされない。希少なものを全員に分配することはできない、全員に分配できるならそれは希少なものではないのだから。

ではここでその例に引き当たる婚活女性はこのことをどのように受け止めるだろうか。自分が欲しいと思う最上のものは、どうやら自分には与えられず、その次点というのも与えられそうにない。となればその次の、そのまた次の、そこそこの、ということになっていくが、そのことについて、一般的にはいかにも、

「それはまあ、しょうがないことですよね。残念ではありますけど、我慢します。そこそこの相手でもしょうがないです。自分だって大したものではないのですから、当然ですよね」

ということになりそうだ。

"我慢"します?

ある少年が自転車を欲しがったとする。少年の友人が裕福な家庭の子で、その子は最新式の、高価で見栄えのする自転車を買い与えられていた。それにアテられて少年も自転車を欲しがるようになったのだ

が、少年の家庭はその友人ほど裕福でないため、最新式どころか新品じたいを買ってもらえず、いとこが使っていたおさがりを与えられることになった。いとこのおさがりは自転車として問題なく使用可能ではあるが、見た目にも傷んで貧相で、かっこうのよさなどはどこにもあしらわれておらず、形状はいわゆるママチャリだ。体格にもまだ合っていないし、漕げばキーキー耳障りな音が鳴る。

このママチャリで、友人のそれと並んで走れというのか？

少年はぐずるかもしれない、

「もっとカッコいいやつ買ってよ！　電動のやつ、テレビでＣＭしているやつがいい」

「ダメです、なんでもかんでも欲しがって！　我慢しなさい」

「えーだって、欲しいんだって、ないと一緒に遊びに行けないんだって」

「我慢しなさい！」

「買ってよ！」

「我慢しなさいって言っているでしょ！」

少年はやがて癇癪（かんしゃく）を起こすかもしれない。のたうちまわって叫び、暴れまわるかもしれない。こんなものをどうやって説得することができるだろう？　なぜ友人が買い与えられて堂々と乗り回しているものを、自分は買い与えてもらえないのか。自分はその友人より身分が低いとでもいうのか。そんな、説明もできないことを、無理やり納得しろというほうが横暴なのではないか。

少年はただ自転車を欲しがっているだけだ。ただ欲しがっているというだけの彼を、どのように断罪することができるだろう。彼は何かを盗んだわけでもないし、誰かを傷つけたわけでもない。彼はただ、ひたすら、欲しがっているだけだ、欲しいものを要求しているだけだ。

母親はしばらく、泣き叫ぶ子供を無視していたが、いいかげんその騒音に我慢の限界が来て、ツカツカと子供に詰め寄って、その頬を平手で打つかもしれない。

打たれた子供は痛みでますます泣くだろう。

母親は、

「こんなことも我慢できないんか！　あんたアホの子か！　あんたみたいなのはウチに要らないから、もう出ていけ！　出ていって二度と帰ってくんな！」

子供の爆裂した叫び声と、母親の激昂が激突する。こうしたことにおいて、果たして母親のやりようが正しいのか誤っているのか、はたまた正しいやり方などというものが存在するのか、誰にもまったくわからない。

ただただ、鳴り響くのは「我慢」の一語だけだ。

やがて少年が、泣き疲れたのか腹が減ったのか、それとも作戦を変えたのか、わからないが、

「わかった、我慢する」

と言った。

それを受けて母親は、

「そうよ、いい子ね、ちゃんと我慢できるもんね。ごめんね強く言って。でもあなたはいい子だもんね、ちゃんと我慢できたから、偉いよ」

と子供を褒めるだろう。

“我慢”する？

少年は、自分が友人のような高価な自転車を買い与えられないということを「我慢」するのか。

友人の自転車と並んで走れば自分の自転車はみすぼらしくて憐憫を受けるということを「我慢」するのか。

「我慢」というのは本当には何をどのようにすることなのだろう。

アイドル・オタクの人々は、いくらアイドルに入れあげたところで彼女と恋仲になって褥（しとね）を共にできるわけではないだろう。彼らはそうしてアイドルの女性と交際できるわけではないことについて、

「そうですね、そこは我慢します」

受験勉強や、学生のうちの勉学や活動に、そこまで力を入れたわけでもない、また就職活動でも全力を注ぐことができなかった青年は、

漠然とあこがれていた派手で高収入な職業には就けなかったけれども、
「そうですね、そこは我慢します」
自分で作ってみたシチューは、あまりおいしいものにはならなかった。夕食に自分でしぶしぶ食べるという感じになったけれど、
「そうですね、そこは我慢します」
我慢というのはいったい何をしているのだろうか。
わたしが誰かを旅行に連れて行ったとしよう。新幹線に乗り、当地でレンタカーを借り、料理屋で食事をして、ホテルに泊まった。
それについて、
「すっごく楽しかった、最高」
と言ってくれる場合もありうる一方、次のようにも言いうるわけだ、
「新幹線はグリーン席ではなかったけれど、わたし我慢したし、レンタカーもふつうの安い乗用車だったけれど、わたし我慢した。料理屋も地物が食べられるってだけで高級店ではなかったけれど、わたし我慢したし、ホテルだって三ツ星ではなかったけれど、わたし我慢したよ。わたしって偉くない？」
これだけ聞いているともちろん、お前は何様なんだと言いたくなるけれども、そこで次のように言えば話は混迷していく、
「あのね、わたしの知っている人は、新幹線って言ったらグリーン席なの。わたしの知っている人が車に乗るといったら、ベンツとかポルシェとか、そういう楽しめる車なの。わたしの知っている人がホテルに泊まるといったら、ちゃんとミシュランガイドに載っているホテルの、コーナースイートかロイヤルスイートなの」
「たとえば子供がさ、自転車を買ってもらうとして、自分の友達は電動機能つきのかっこいい新型を買ってもらっているのに、自分だけ親戚のおさがりだとしたら、かわいそうだと思わない？　そんなみじめなことを、その子は我慢しないといけないの？　子供はかわいそうだよね、どうして自分だけそんなみじめな思いをしなきゃいけないんだって。ぜったいバカにされるに決まっているし、そんなのぜったい傷つくよ」
「それに比べたら、わたしはちゃんと我慢できる人だから、われながら偉くない？　文句言っているわけじゃないよ、じっさいわたし文句言わなかったでしょ。少々のことは我慢するよ、なんだって手に入るわけじゃないってことぐらい、わたしわかっているからさ。我慢しなさいっていつも両親に教わってきたし。わたし偉くない？　その点わたしのこと、それなりに褒めてくれていいと思うんだけどな」
ここで、新幹線の指定席に乗り、ありふれたレンタカーを借り、ありふれたホテルに泊まることは、標準的でふつうなことだと、彼女を諭したとしよう。すると彼女はどう答えるか。
「うん、まったくそのとおりだと思うよ。だから、わたしちゃんと我慢しているじゃない。あなたの言うとおり、ふつうの、標準的なものでいいと思うよ。上を見たらキリないし、こんなの、我慢すれば済むことなんだから」
我慢というのは本当には何をどのようにすることなのだろう。我慢するというのは、必ずしも標準未満のことについて我慢するという文脈で成り立つわけではない。
このことについては彼女のほうがよく知っている、
「標準のていどを与えられているのに、それを『我慢する』って言い方はおかしいって？　うん、それはそうだけど……あのね、よく聞いてね。標準がどうこうっていうことも勿論わかるけど、一方でじっさいに、新幹線といえばグリーン車、車といえば外国の高級車、ホテルといえば星付きのところっていう、そういう人もいるんだよね、事実として。事実としてそういう人がいるのは確かなことじゃん。それと比べたら、わたしはそういうものを与えてはもらっていないけれど、そこはまあ我慢しようと。そういうことなの。わかる？　文句言っているわけじゃなくて、わたしはわたしのしている我慢をわかってほしいの。わたしはちゃんと標準的なもので我慢しているよって言っているの。あのさあ、ぶっちゃけさあ、グリーン車と外車と三ツ星ホテルを与えられたら、誰だって本当はそっちのほうがいいわけじゃない？

そっちのほうがいいから値段が高いわけでしょ。だから、みんな本当はそっちのほうがいいけれど、与えてもらえないから我慢しているんだって。ただそれだけのことで、こんなの誰にとっても当たり前のことじゃない？」

この女性の例はいま、わかりやすさのために極端な形で表示している。その極端さのせいで「さすがにこんな人はそうそういないよ」と思えるのだけれど、本質的にはそうではない。本質的には誰もが同じだ、生死軸・ムンに所属するかぎりは。ただこのことのあらわれが、ふつうは目立たないように隠蔽されるので、このメカニズムが起こっていることが気づかれない。「我慢」のメカニズムは、極端には見せびらかされないだけで、ここでの彼女が言うものとまったく同じものがわれわれのうちに仕込まれている。われわれはむしろ「我慢」の真相をここでの彼女の見事な語り口から真摯に学ばねばならない。

<<我慢するというのは、そのことを受容するということではまったくない>>。水面下で、まったく別のプロセスが起こっている。

この知られざるプロセスが、知られざるまま「蓄積」していくとき、われわれにはどのようなことが起こるのだろう？　わたしはかつてそのことに悪魔のヴィジョンを見て息を切らすほどだった。

我慢のメカニズムと、その蓄積

オンボロの自転車のスコアを 10 とする。
新型の高級自転車のスコアを 100 としよう。

そのスコアの差は 90 ある。

自我は、そのスコアが他人と同等なら納得し、他人より勝るならよろこぶ。

他人未満のスコアだと、そのことを「許しがたい」と怒る。他人未満のスコアというのは、自我にとって恥辱であり冒涜だ。そして恐慌であり「死」だ。

なぜ「死」なのか。

生死軸において、下位のスコアは上位のスコアに比べて「死」だ。恥辱にまみれた死。

ダウンフォースは「死ね」であるから、

「はいはい、ぼくは死ねってことね」

ということになる。

このことに「我慢」というプロセスはどのような解決をもたらしているか。

オンボロの自転車の所有者に、「偉い」というスコアを付与してみよう。スコアを 90 付与すると、彼のスコアは計 100 になり、高級自転車の持ち主に並ぶ。

ただ、その「偉い」というものは実物として使えるものではないので、スコアとしてただ並ぶというだけでは溜飲が下がらないだろう。そこで、同じ「偉い」というスコアを付与するなら、スコア 100 を付与してしまえばいい。

そうすると、彼のスコアは計 110 になり、高級自転車の持ち主を凌駕する。高級自転車の持ち主を上から見下し、いわゆるマウントを取ることができる。

「どっちが死ねばいいかといえば、あっちが死ねばいいってことですよね？　ぼくのほうが偉いから」

彼の声も表情も明るくなる。

彼は恥辱に満ちた死の側ではないのだから。

我慢とは「吾我の驕慢」だ。忍耐ではないし、受容でもない、悟性でもない。

我慢というのは何の解決にもなっていない。
我慢というのは、もっと根深い、とてつもなくおそろしいものだ。
高級自転車の持ち主は、スコア 100 、オンボロ自転車の彼は、我慢スコアが追加されてスコア 110 となった。
ここでわたしが、畑でとれたキュウリを彼らに分配するとしよう。キュウリはわんさか穫れたので、本数はいくらでもある。
高級自転車の持ち主に 10 本のキュウリをやったとする。オンボロ自転車の持ち主に、同じく 10 本のキュウリをやったとしよう。
するとオンボロ自転車の持ち主は、
「……は？」
という納得のいかない顔をする。
表情は笑顔だが、その向こうにムンという強い音が鳴る。
オンボロ自転車の持ち主は、
「彼と同じ 10 本ですか？　ぼくには 11 本ではないですか？」
と主張してくる。
「ぼくのほうが彼より偉いんでしょう？　そのスコアが反映されていないように思いますが」
もしここで、彼にだけキュウリを 11 本やるのは不自然だからということで、やはり彼にキュウリは 10 本しか与えられなかったとする。
するとその 1 本のぶんはどうすればいいか。
これもやはり「我慢」するしかない。
彼はすでに我慢するということを知っているので、
「わかりました、我慢します」
と明るく言うだろう。
我慢によって彼はますます偉くなるのだから。
キュウリスコア 10 に、「偉い」を 2 ほど追加して、彼のキュウリスコアは計 12 になった。
この点でも彼はまた、高級自転車の友人よりもスコアとして上位になったわけだ。
我慢は我慢をよび、蓄積された我慢は、いずれどこかで相応する報酬を請求してくる。
「ぼくのほうが偉いんですよね？」
もしここで彼に我慢をやめさせたらどうなるか。我慢スコアを排除すれば、高級自転車とキュウリの合計は 110 、オンボロ自転車とキュウリの合計は 20 だ。
これまでスコア 12 ぶんも上位だったものが、急にスコア 90 ぶんも下位につくことになる。
すると生死軸の性質上、
「これってぼくに、死ねっていうことですよね」
ということになる。
先の段の冒頭にわたしは、このような問いかけを示した、「われわれには何が与えられるだろうか、まず、われわれには何もかもが与えられるだろうか。きっと、何もかもが与えられるわけではないだろう」。
自我においては、これは単なるウソで、自我というのはそんなに複雑な思考を持っていない。
自我というのは、他人に与えられるものは何でも自分にも与えられると思っている。
誰も翼なしに空を飛ぶことはできないし、誰も別の銀河系へワープしたりすることはできないので、そうして誰にも与えられないことについては自我もさして求めないが、そうではない、<<他の誰かに与えられるものについては、自分にも与えられるものだと思っている>>。
美女に上等な男性があてがわれるのを見ていた女性は、自分にも上等な男性があてがわれるのだと思っているし、上等な男性に美女があてがわれるのを見ていた男性は、自分にも美女があてがわれるのだと思っている。
自我はそういう単純な思考をしている。
誠実に生き抜こうと実践している男性を、美少女が慕うのだとしたら、すべての男性は、自分も美少女に慕ってもらえるものだと思っている。
誠実に生き抜こうとしていない男性が、美少女に慕われないという

現実があったとしたら、そのことは「いちおう理屈ではわかるけど」と捉えられるものの、根本的にはやはり、
「いや、納得がいかん」
と思われている。
自我は、なんでもかんでも与えてもらえると思っているのだ。
<<自我は理性ではない>>のだ。理性もそれなりに存在しているように見えるが、生死軸において理性の声が自我の声に勝るということはけっきょくない。
理性が何をどう言おうが、自我は、
「いや、だから、納得がいかない」
の一点張りだ。
他人がサッカー選手になれるのなら、自分もサッカー選手になれると思っている。
他人が人を笑わせることができるのなら、自分も人を笑わせることができると思っている。
他人が何かの名人になれるのなら、自分も何かの名人になれると思っている。
他人が称賛されるのなら、自分も称賛されるのだと思っている。
しかも無条件でだ。
無条件ですべてが与えられるものだと自我はどだい思っている。
だから幼児は短冊に、将来の夢として「総理大臣になりたい」「金持ちになりたい」「映画スターになりたい」と書くのだ。
自我が空想するとき、われわれは決勝点を決めるサッカー選手であり、人を笑わせるショーマンであり、誰にでも名を知られた名人であり、誰からも称賛を受けて紙吹雪の中にいる。
自我の空想でサッカー選手に「なれない」ことを空想するということはないのだ。
われわれは大人になって、その自我の思い込みという性質を克服したわけではない。
自我というのはもともとそういう性質のものであって、その性質じたいが変化することはないのだ。
われわれは大人になって、自我の思い込みが満たされないところを、我慢スコアで埋め合わせるという習慣を得ていくだけだ。
「我慢しなさい」という親の言いつけは、説明されないまま、
「我慢スコアで手当てして、あなたがスコアで上回りなさい」
ということだと、子供の自我で処理されている。
自我は、自分が無条件で他人と同等のものを与えられるもので、それが当然だと思っているから。
さらに自我は、無条件で他人より勝るものを与えられて、優越することだけが気持ちいいから。
先の例で、旅行にかかわって女性がわれわれに「我慢」の真実を教えてくれた。その旅行のエピソードをスコアリングすると、たとえば次のとおりになる。

グリーン席 200
外国高級車 1000
高級ホテル 2000
<計> 3200

普通指定席 100（我慢 120）
国産大衆車 300（我慢 800）
中級ホテル 500（我慢 1700）
<計> 3520

カッコ内の我慢スコアだけを足し算すると 2620 になる。この我慢スコアのぶんだけ、「わたし偉くない？」と彼女は言っているのだ。彼女がした「我慢」というのは他ならぬそれのことだから。
彼女は普通指定席と国産大衆車と中級ホテルについて文句は言わない。ただし彼女が文句を言わないのは、その我慢スコア 2620 ぶんに相応する報酬を、いつか請求して回収するつもりでいるからだ。そ

の報酬をもらうときまでは、彼女は「我慢」を続けようと思っている。彼女の自我にとっては何らマイナスはなく、誰の下位になるわけでもない、それどころかけっきょく「わたしが一番偉いよね？」ということなので、彼女の表情も声も明るいままに保たれる。

こうした「我慢」の一体どこが美徳なのか、ひたすら恐怖に値するメカニズムだと言わざるを得ない。

ところが困ったことに、われわれはこの「我慢」を否定して、本来のしかるべきメカニズムを示すことができないのだ。つまるところ、高級自転車を欲しがって駄々をこねる子供に対して、

「我慢しなさい！」

と言いつける以外の文脈を持っていない。

だからわれわれは、けっきょくのところ「我慢しなさい」と他人にいい、自らについてもけっきょく「わかりました、我慢します」と言い出すのだ。我慢します、という言い方が、いつまでもどこからか湧いてくるみたいに。

なぜわれわれは、「我慢しなさい」という以外の文脈を持たないのだろう。それは、理性が命に由来するものだからだ。命によって理性がもたらされ、理性そのものに命がある。そこで、生死軸に所属するかぎり、人には理性の「ようなもの」はあるけれど、その理性には命がなく、よってそれは真の理性ではありえないということになる。

自我は理性ではないということを決して忘れてはならない。自我はけっきょく、他人に与えられるものは何でも自分にも与えられると思っており、何なら他人に勝るものが与えられるということさえ当然ありうることと期待している。いかなる事実や理由を突きつけられたところで、自我がそれを納得するということはない。自我がこのことで何かを「譲る」ということは決してない。自我は理解した上ですべてを「我慢」するだけだ。我慢したそのスコアぶんだけ、自分は偉くなり、その偉くなったぶんだけ相応の何かが与えられるだろうと、その帳簿を管理しつづけている。我慢という魔法のような約束手形をどこからともなく仕入れてきて、それで採算が合ったので引き取りますという挙動を繰り返しているのだ。彼女はその約束手形が不渡りになるとは思っていないので好調を続けている。

生命軸の報酬

わたしは男性なので、女性に対してはとりあえず笑わせようという発想をする。わたしは以前から、

「モテるとかモテないとか、フラれるとか成就するとか、そんなことはどうでもいいの。相手を笑わせたら成功、笑わせられなかったらおれの負けだ、それだけだ」

「女に好かれるとか、そんなしょーもないことに興味持つなや。おれは目の前の女を笑わせるだけ、それで目の前の女がおれのことを好きになろうが嫌いになろうが、そんなことに興味持ったことねえよ」

という言い方をしている。それもずっと前から、かれこれ二十年以上前からそんな言い方をしている。

「自分が女に好かれていたとしても、それはどうでもいいことだし、自分が女に嫌われていたとしても、それはますますどうでもいいことじゃないか？　そんなどうでもいいことに関心を一ミリも持つな」

わたしが男性として女性を笑わせるためには、わたし自身が安物であるほうがいい。安物で「なんだコイツ」とおかしく思える奴であったほうが、笑わせることには有利だ。重厚なものはなくていいし、向こうから見て「コイツ」には大切なものなどないほうがいい。

そうしてわたしが自分を安物扱いすると、素直にそれを受け取った女性からは、たしかにそのとおり安物扱いされるし、それよりは、相

応に恰好をつけた男性のほうに女性はなびいていくかもしれないけれども、それでまったくかまわないだろうと、特に若いころのわたしはいつからか屈託もなくそう思うようになっていた。

わたしは、結果的に女性になびいてもらうために女性を笑わせているのではない。女性がなびくだのなびかないだの、そんなどうでもいいことにわたしが関心を持つと思うかね。わたしは男性なので第一に女性を笑わせようとするが、そのことに対する成果や報酬は必要としていない。報酬をもらおうという算段はわずかもない。なぜなら、報酬はもうすでにもらっているからだ。すでにもらっている報酬をふいにして、女性がなびくだの、女性に好かれるだの、そんなどうでもよいことを引き換えに頂戴するというような発想は一ミリも持たない。

わたしはすでに報酬をもらっているので他に報酬を期待する必要がない。

わたしは男性として、女性に対しては第一に笑わせろという命令を受けている。どこから受けた命令なのかはよくわからない。世界から受けた命令かもしれないし、あるいはわたし自身の主体性から求めて受けた命令なのかもしれない。わたしはその命令にしたがっているのみ、他のことは正直よくわかっていないし、わかる必要もない。

その命令にしたがって、命令どおりのことを果たせたときは、わたしは安物らしく素直にガッツポーズをしている。なぜか？　わたしはその命令どおりのことを果たしたことによって、「命」そのものを報酬として得ているからだ。命のとおりにしたからそのとおりのことができて、そのとおりのことを果たしたから命をもらえた。命は時間軸上にあるわけではなく、また生死軸の上にもない、永遠の、死なない命だ。これ以上のものはないし、命は命というだけでぜったいの無上のよろこびがある。おれにとっては目の前の女を笑わせるのが命なのであって、まさかわたしが女性に好かれるだのどうだので、いちいち生き死にのような気分を味わっているわけがないではないか。

生命軸の者は、万事についてそういう考え方、あるいはそれ以上の、どうしようもないそういう体験の仕方をすると思うが、「我慢」に対抗して解決する方法はこの生命軸そのものだと示すしかない。

わたしが新幹線のグリーン席に座っているとき、普通指定席は存在していないし、わたしが普通指定席に座っているとき、グリーン席は存在していない。わたしが高級外車に乗っているときは国産大衆車は存在せず、国産大衆車に乗っているときは高級外車は存在していない。

わたしは命の席に座り、命の自動車に乗り、命のホテルに泊まっている。命の自転車に乗っており、わたしにとってはわたしの命の自転車以外はすべて手の込んだ単なる鉄塊にすぎない。わたしはわたしの命の一日を生きるよりなく、わたしの命がない「高級な一日」など存在するものだろうか。美男美女のセレブリティが高級リゾートでキスしていようが、そんなところにわたしの命はなく、わたしの命は、彼らと同時刻にわたしが食べた冷凍ピラフのほうにある。それでいったいわたしに何の「我慢」のしようがあるだろう。わたしの命のキュウリが 10 本だろうが 11 本だろうが、命には個数がないので増えもしないし減りもしない。わたしの上位にあるのはわたしの命だけであって、わたしはその上位から命を果たすために生きろと命じられている。わたしの下位にあるものはわたしから同じように生きろと命じられているはずだ。

わたしの自我はわたしがサッカー選手になることを空想するだろうか。自我の性質はそのようなものかもしれないが、わたしはそもそも自我を使わない。我慢・吾我の驕慢をする機会がないのだから、自我を使う機会じたいがないじゃないか。わたしの自我はヒマそうに川べりに座り込んで居眠りをつづけている。じっさい、たとえば自我と高級な腕時計に自信のある人は、わたしの前に来てそれを存分に見せびらかしてみればいい。吾我の驕慢と共に見せびらかしてみよ、そのときその人はわたしの前で、えもいわれぬ、わけのわからない体験をするだろう。生命に向けてムンで対抗しようとしたとき、そのどうしようもない崩落の感じが体験される。彼の財産がわたしの一万倍もあり、そのすべてを服飾に乗せてきているのに、なぜか彼のほうがその姿がみすぼらしかったとしたら、彼としては何かが崩落していくよう

に感じられて当然だろう。
　わたしが気に掛けているのは、たとえばここで例として話したように、目の前の女性を笑わせることができるかどうかというようなことだけだ。じつのところ、わたしには目の前の女性を笑わせる能力などない。わたしの自我にそんな機能もなければ、そんなことができるという自負もない。だからわたしがそのことを果たせるとしたら、それはわたしの力ではなく他の何かの力だ。そのときかぎりのたまたまと言ってもいい。わたしは常に手ぶらで、徒手空拳で、わたしが持ち運んでいる自慢の武器など何もない。だから、目の前の女性を笑わせるだの何だの、昨日はそのことが出来たとしても、今日はそのことができるかどうかはわからない。五分前にそれができたとしても、いまこのときはわからない。すべてはわたしが命に生を奉じていることだけで成り立っているので、わたしがそれを見失えば、わたしは何一つまともなことは為せなくなるだろう。すべてがそのときかぎりであって、わたしの中に蓄積による保証は何ひとつない。蓄積といえば逆方向の、自我でどうこうするという発想はさすがに川べりに座り込むうちに引退したということぐらいだ、そんなことを今さらやらないだろうというほうの蓄積はそれなりにある。その蓄積が、他の何かの力を毎回「たまたま」強く引っ張り出してくるということについては、いいかげん逃げ回っていないで認めようとは思う。それは命の力であってわたしの力ではないので、わたしが偉そうに説明することにいつも筋違いを覚えてはいるのだけれど。
　わたしは命のあるやなしやだけを気に掛けている。気に掛けているというのも半ばウソで、気に掛けるという行為でさえそれなりにムンとするわけだから、じっさいにはそのようなこともしていない。ただ支配されているだけだ。命およびそれが命じられているということに支配されているだけで、正直なところ何をどうやっているのかはわたし自身にもわからない。いまこうしているときも、わたしの書き話すものに命がなければならないということを、わたしが知っているだけで、わたしが書き話すものの命は、わたしからひねり出されているのではなく、わたしの上位のどこかから命じられているだけ、それにわたしの指先が支配されているだけだ。命じられたものに応えてはいるのだろうが、それらをいちいち観測したり確かめたりはしていられない。わたしの考えることなどせいぜい、万が一この命の下されることが途絶えたとしたら、そのときはふたたび祈り求めるしかないのだろうなということぐらいだ。それだって、いつ途絶えるのかは知らないし、なぜ祈り求めたら再び与えられるのかは知らない。いつ、どこから、どんな形で与えられるのかは知らない。わたしの知っていることは、この命令に支配されていること、この命じたいが報酬であって、このほかに報酬はあり得ないし必要もないということだ。わたしは死ぬわけにはいかない、生死の問題でなく、命じられたすべてのことが済むまでは最大限に生を奉じなくてはならないので、そのときまで生きなくてはならない、すべて奉じたので休みなさいという命令が下るときまでは。
　少年よ、おれはお前に、そのオンボロ自転車に乗れと命じよう。
　まさかお前は、高級自転車のクソ同級生のささやきかけのほうを聞き遂げるつもりなのか。
　いとこのおさがりに乗れと言っているのではない。寝ぼけるな、それはもうお前を運ぶために与えられた、ほかならぬお前の自転車だ。
　おれはお前に「我慢しなさい」などと言わない、一度も言わないし永遠に言わない。
　お前がその同級生と違う自転車に乗るのは、お前の命がその同級生の命とは異なるからだ。
　お前の命はお前の命だ、お前の命として与えられるものにのみ従え。
　同級生の命と自分の命を比較することはない、お前の命はこの宇宙にお前かぎりにしか与えられていないのだから、他の誰かと比較するということはできない。
　お前だけの命だ。お前のことをお前自身しか知らないということのように、お前の命はお前だけの命だ。
　お前がお前の自転車で走るなら、お前はお前の世界を走ることがで

きる。
　世界を走ることができないなら、たとえ一億円する自転車であってもゴミじゃないか。
　お前はお前の命として与えられたものにのみ従え。そして、同級生の彼も、彼に与えられた命に従う者なら、彼のことを友人としなさい。
　そうでない場合は、彼のことは忘れなさい。どうせ時間と共に忘れることになるから。
　彼が彼の自転車で走る、お前がお前の自転車で走る、そのことを二人ともが栄光のように言い合えるなら、ずっとそのような友人でありうるように、お互いの命を励まし合いなさい。

「傷つく」という不明の言い方

　90年代の終わりから00年代の初めにかけて、「傷つく」という言い方が一種の流行になっていた。当時、傷つくという言い方は、よくわかる言い方であり、よくわからない言い方だった。
「恋愛って、好きになったほうが負けっていうか。自分からアタックしてフラれたら、自分が傷つくじゃないですか。だから自分から行くのはイヤなんですよ」
「でも、待っていたってしょうがないからなあ。自分から行くしかないんじゃないか」
「いや、自分から行くのは無理です。うーん、自分から行くことじたいはまだいいとしても、それで傷つくのはぜったいイヤなんです」
「そうか、じゃあもうそれはそれで、逆にはっきりしていることになるな。降って湧いた話でもないかぎりは、彼女とかそういうのは諦めるしかない、と」
「うーん、でもそれはそれでイヤなんですよ。だって、完全に諦めるっていうのはねえ、いくらなんでもさびしいじゃないですか」
「でも自分から行ってフラれたら傷つくからイヤなんだろ？」
「そうなんです。だからけっきょく、向こうから来てくれるのが、理想っちゃあ理想なんですよね」
「向こうからって言うけど、その向こうがいまいちなコだったらお前はどうすんの。けっきょくごめんなさいするんだろ？」
「いまいちなコの場合は……それはまあ、ごめんなさいってことになると思いますけど」
「それだと相手が傷つくじゃない」
「傷つく……うーん、それはそうかもしれないけれど、無理なものは無理なんで、そこはしょうがないですよね」
「言っていることがむちゃくちゃだと思うけどね」
　当時、傷つくということは何やら無制限の権威を持っていた。たとえばある女性が部活動のメンバーと諍（いさか）いになり、やりきれないので部活動を辞めようかと思っているという。わたしは部外者だったが、その件について、
「どう思う？」
　と相談されたので、そこまでのいきさつをなるべく入念に聞いたあと、次のように答えた。
「うーんそれは、聞いているかぎり、こちらから頭を下げるべきだと思う。あなたとしては、もちろんでしゃばったなんてつもりではなく、熱意からその役割をやりたくて、それが勢いあまって空回りしたってことなんだと思うけれど。でも、そこからのあなたの言いようが他の人に対してたしかに失礼で、単純にそのことが向こうにとって腹立たしかったんだと思うよ。もともと、あなたが分不相応を承知の上で申し出た話なのに、そこであなたが勢いであれ何であれそんな失礼な言

いようをしたというなら、向こうがそれでじゃああなたに任せようって話にはなりようがないもの。今回はひとまず引き取って、何はともあれ、出過ぎたぶんについて頭下げておくべきなんじゃない。それにこんなことでいちいち退部していたら、何につけひとつのことをやり抜くってことができなくなっちゃうじゃん」

わたしがそのように話したことは、じっさいの会話のときはそれなりに、相談者に順当に理解され、納得もされたように思う。

しかし後日になって、その相談者の友人が、やや血相を変えてわたしのところにやってきて、

「あのさ」

と詰め寄ってくるように言った。

「先日あなた、あのコの相談を受けたんでしょ？　それで、すごいキツいこと言われたって、あのコ傷ついているんだけど。それってどういうことなの」

わたしとしてはエッと戸惑わされる思いがけない展開。けれども同時に、当時としてはそれはいかにもありがちな展開でもあり、次第にそうした展開に慣れ始めているということもあったに違いなく、わたしはおおむねを察してヤレヤレという気分になった。

「うーん、わかるけど、聞いたかぎり、あれはあのコのほうから頭下げるのが筋だと思ったよ」

「それはそうかもしれないけれど。でも、あのコそれですっごい傷ついちゃったよ？　それってあなたどうするつもりなの」

「どうするといっても、しょうがないじゃないか」

「何かもっと他のこと言ってあげたらよかったんじゃない？　彼女もともと落ち込んで相談しに来ていたのにさ」

わたしはこういうとき、かつては主体性について苛烈な性分も明らかにしているところがあったので、

「それはつまり、こういうことか、おれは自分で考えたことを自分のことばで言うことも許されないってことか。彼女が傷つかないようなことを思いついて、彼女が傷つかないために話せということか」

というような言い方が矢継ぎ早に出ることがあった。

「そうは言っていないけど。あのコ、ただでさえ傷ついているところに、そんな傷つくこと言わないであげてよ。ちょっと考えたらわかるじゃない」

「おれはおれなりに、彼女の話から誠実に考えて、向き合って答えたつもりだけどね」

「そのつもりだったのはわかるけど、じっさいあのコ傷ついているじゃない」

「じゃあどうしろって言うんだ」

「あなたからあのコに謝ってあげてよ」

「おれがいったいおれの何を謝罪しろというんだ」

「傷つけてごめんって。それだけで済むと思うからさ」

「傷つけてごめんって、こんなの、彼女が勝手に傷ついたって話じゃないのか」

「うーん、あのさあ、どうしてわからないの？　彼女、じっさいにすごい傷ついているんだってば。あなたのほうこそ、あなたから頭下げて謝ってあげればいいじゃない。傷ついたあのコの身にもなってあげてよ」

「それで、彼女の部活やめるうんぬんはどうなるんだよ結局」

「それはもう、いまのところいいじゃない。彼女の好きにさせれば。ねえとにかく謝って。こういうときって、一般に男の側から謝ってあげるのがふつうでしょ？　あのコ傷ついて、このままじゃ立ち直れないから、そこのところの責任を考えてよ」

「傷ついた傷ついたって、いいかげんその〝傷つく〟ってのがどういう意味なのかよくわかんなくなっているけどな」

「傷ついたというのは、ただ傷ついたのよ」

「そんなの、あまりに言った者勝ちすぎて、実体がなさすぎるだろ」

「は？　じっさい彼女は傷ついているじゃない」

傷つくということが無制限の権威を持っていて、当時はとにかく、傷ついていない側は傷ついた側に謝らなくてはならないというムー

ドだった。どれだけの正当な事由や、推察しうる誠実さがあったとしても、そんなことはさておき、「傷ついた」ということだけが焦点になった。「けっきょく傷つけたのは事実なんでしょ？」。

あるいは当時、傷つく・傷ついたという当人の言いようのみが視認されていて、その他の事由や誠実さなど、誰も視認はしていなかったのかもしれない。「傷つけた」という罪だけが問われるのであって、まるで手形裁判のように、その審判にかかわる前後事情の証拠調べなどなかったように記憶している。

あのときから四半世紀が経ったいまも、この「傷ついた文脈」にどのように答えればいいのか、わたしにはわからない。あるいは現在のわたしから言いうることは、この傷ついた文脈というのは、じつは文脈でも何でもないのかもしれない。ただ傷ついたということに対する慰謝の請求、陳謝の要求、あるいは報復の意思が表明されているだけなのかもしれなかった。

いまここで、四半世紀前の話、二十五年も前の話をしていて、当時の「傷つく」という言いようについて話しているけれど、この話の中にさしあたり露骨な「ムン」は出てきていない。当時はまだ「レスバトル」というようなものは一般的にはなかったし、マウントとか映(ば)えとかいうものもなかった。入念な「自撮り」を作成するということもなく、もちろんそれをSNSで拡散するということもなく、せいぜい「プリクラ」を手帳に貼りためていくぐらいだった。

ここからどのようにして「ムン」は出現してきたのだろうか。

ムンは、ここで言われている「傷つく・傷ついた」の瞬間に出現する。少年の自転車が友人の自転車に比べてオンボロでみすぼらしかったとき、またそのことを指差して笑われたとき、ムンが出現する。

傷つく、ということにいて再考する。

「ごめん○○くん、ちょっとあなたの言っていることよくわかんないや」

「その色の服、なんかあまり似合っていないんじゃない」

「ちょっと太ったんじゃない？」

「さっきからさ、あまりにも口だけ大きいこと言いすぎじゃない」

ある男性が、A子の髪型について、その髪型いいよねえ、と褒めたとする。A子は褒められたことをよころんでいた。しかし似たような髪型のB子のことは褒めてくれなかった。B子はそれに〝傷ついた〟としよう。

傷ついたというのはどういうことなのか、どういう要件で「傷つく」が発生するのかは、現時点では不明だ（あとで説明する）。ただ、傷ついたと言いだせばそのことは、ここまでに示したように際限がなくなる。

「あなたさ、A子のことばっかり褒めて、B子はわざと無視されているみたいって、すっごい傷ついているんだけど。どうするつもり？ないがしろにして傷つけたぶん、ちゃんとB子に謝ってあげてよ」

就職活動に失敗したC男は傷ついた。卒論が評価されなかったD男は傷ついた。告白してフラれたE子は傷ついた。コンクールに落ちたF子は傷ついた。自分の記憶力が悪いことでG男は傷ついていた。体格が貧相なことでH男は傷ついていた。育ちが悪いことでI子は傷ついていた。恋人にもらった誕生日プレゼントが高級品ではなかったのでJ子は傷ついていた。自分の両親が金持ちではないことにK男は傷ついていた。自分より走るのが速い人がいることにL男は傷ついていた。自分の料理が下手なことにM子は傷ついていた。自分が帰国子女ではないことにN子は傷ついていた。自分が宇宙飛行士になれないことにO男は傷ついていた。ミスを上司に叱られたP子は傷ついた。

傷つく・傷ついたと言い出せば、それが何のことなのかは不明なままで、けれどもわかりやすく強力だ。少なくとも当時は強力だった。そして内心でさえ言いだされたそれは、いったん言いだされるともう止まらなくなる。

「屁理屈を言われてもピンときません。とにかくわたし、傷ついたんです」

傷つく・傷ついたときにムンは現れる。^^傷ついたときにムンは最強の味方だ^^。ムンがあなたを捕えるのではなく、あなたがムンを抱

きかかえて離さない。
　あなたに意図的にダサい服を着せて、あなたの隣に意図的におしゃれな女性を座らせてみよう。そしてあなたの隣の女性を、
「カッコいい、惚れるわ、エロかわいい、マジ天使、センス高いよなあ」
　と褒めつづけてみよう。あなたに向けては何も言わない。みんなで、あなたのことを見ず、あなたの隣にいるその女性だけを見続ける。
　そうするとあなたは勝手に傷つく。われわれであなたに何かをしたわけではないが、ただの配置によってあなたは勝手に傷ついていく。意地悪を言っているのではなく、ただそういう現象があるということだ。そのとき傷ついていくあなたの内部に、濃厚に「ムン」が立ち上がっていくことは、想像に難くないのではなかろうか。

現代の新入社員は入社した時点で傷ついて我慢している

　生死軸におけるダウンフォースは「死」だ。「死ね」、あるいはそこまでなくても、「死ぬべき」「死に追いやられる」という感触のものになる。そしてあなたは、せっかくがんばって生きている者として、死ねと言われる、死ぬべきと言われる、死に追いやられるというはたらきかけがとても悲しい。当たり前だ。誰もあなたに直接死ねとは言っていなくても、なぜか、そのように言われているような感じがする。少なくとも、魂がそちらのほうへ追いやられる。そのことはとても悲しい。
「傷つく」ということの正体はそれだ。死に追いやられる感触とそのことへの悲しみ、および、生を吸い取られる屈辱、その痛みと悲しさがなかなか消えない・なかなか癒えないことを指して、われわれは体感的に「傷つく」と言い充てるらしい。
　よって、生死軸に所属しているものは、何であれダウンフォースを受ければ「傷つく」ということになるようだ。
　先の段で、部活動を辞めるうんぬんを相談してきた女性がいた。いきさつを聞いて、なるべく真剣に考えて誠実に答えようとしたところ、どうしてもこちらからは「その件ではあなたに非がある」と言わざるを得ないことになった。道理としてはその話が正しかったかもしれず、その道理じたいは相談者の彼女にも理解できたのだ。少なくともじっさいの会話をしているそのときは。
　けれども彼女は生死軸に所属していた。その件で自分に非があるということは、自分が悪いということであって、自分が悪いということは、自分が下にあるということだ。だから自分の側から頭を下げる必要があるということだった。自分から頭を下げて、自分を誰かの下に置くということは、ダウンフォースを受けるということ、またリフトフォースを捧げるということ。
　生死軸の下風に立たねばならない。
　すると、自分は死に追いやられる力を受けねばならないし、生へ高揚させる力を捧げなくてはならないことになる。そのことが悲しく、そのことが屈辱的だ。そのじっさいの痛みや悲しみが、なかなか消えずに残り続けるということが「傷つく」ということになり、このことは受容不可能となる。
　それで「傷ついた文脈」は、道理はさておき、当人としてはどうしようもないこととして、次のような形で生じる。
「自分のほうが悪いのはわかっているけれど、どうしても、そちらから頭を下げてほしい。そうしたらわたしは生きられるから。本当にそれだけでいいの、だからお願い」
「わたしが悪いってことでいいから。お願い、上下関係だけは、わた

しを上にして？　そしたらわたし、いくらでも反省するから」
　もちろんそれでは、こんどは自分が相手にダウンフォースをかけ、相手を死に追いやるはたらきかけをすることになるが、もう正直なところそこまで考える気持ちの余裕がない。とにかく、死に追いやられる感触の悲しさと、生を吸い取られる屈辱、その消えない痛みと悲しみで耐えがたくパニックなのだ。もしこのことが受け入れられないなら、殺意さえ覚える。道理がどうとか、本当はどうでもいいの。それどころじゃないって、とにかく傷ついたってことがわからない？　道理といえば、これだけ傷ついているわたしがまず救済されるのが道理であるはず。道理を逸脱しているのはそちらのほうでしょう！？　ねえどうして、わたしを上にして、ただごめんねって言ってくれないの。わたしのほうが悪いって、そんなことわたしだってわかってるよ。でも、ただごめんねって、そう一言いってくれるだけで、わたしこんな死にそうな思いから抜け出せるんだよ？　どうしてそう言ってくれないの。ねえ、いいかげんにして、どっちが傷ついているかっていう、そんな単純なことがどうしてわからないの！？　そういう文脈になっていく。
　先の相談のくだりを精密に見るならばこうなる。わたしと彼女がじっさいにやりとりをしているとき、彼女はわたしとの会話を理性で捉えることができた。なぜか？　それは、彼女の目の前でわたしが生命軸に所属する者として存在しており、そのわたしからの影響づけが彼女にあったからだ。影響づけから彼女もそのとき、一時的ではあれ生命軸の中に立てた。生命軸の中に立てれば、命は理性をもたらす。理性は命のものだ。その理性が、わたしのそのとき話したこと、あなたに非があるからあなたから頭を下げるべきだということを、彼女に輝かしく理解させた。彼女の理性は、彼女自身の非を認めさせると同時に、彼女に「それがまともに生きるということです」ということも力強く教えたはず。生命軸におけるダウンフォースは「生」なのだから。
　ところが帰宅してから彼女は、日没のごとく影響づけを失ってゆき、自分の所属たる生死軸に戻っていった。ダウンフォースはふたたび「死」に変換される。
「けっきょく、わたしが悪いから、わたしが死ねってことよね、みんなしてそう言っているってことよね」
　そういう文脈に変化していく。
「それで、わたしが死んだほうが、みんな意気揚々として生きられるってことよね。ごめんね、わたしみたいな邪魔者がいて。たしかに、わたしなんか死んだほうがいいよね！」
　これが生死軸の現象であることは、次のことも踏まえればいよいよ蓋然性がある。じっさいによくあることとして、わたしが四方八方からのプッシュを受けて、まあ別に何でもいいやという気分になり、わたしから彼女の自宅へ押しかけるようにして彼女を呼び出し、
「ごめんね、傷つけちゃって」
　と頭を下げて謝罪する。
　するとそれだけで、彼女は「……大丈夫」と言い、数分後には、
「大丈夫、というか、いいの、わたしが悪かったの。こちらこそごめんね、あなたが謝ることじゃないの。もうじゅうぶん。もう謝ってもらわなくていいから」
　と、急速に冷静さと余裕、およびこちらへの気遣い・配慮まで取り戻し始めるのだ。
　このことはまったく機械的に起こる。こちらから頭を下げて謝罪すれば、内容がどうこうではなく、ただ上下関係が転換されて、死へのダウンフォースが遮断される。そして生へのリフトフォースが供給される。それで彼女はたちまち生気を吹き返し、「死ね」と言われていた悲しみと屈辱から解き放たれ、彼女の陥っていた恐慌は消失していく。彼女はひたすら「一息ついた」。もう先ほどのように死に追いやられ続けるというようなことはなくなったので、彼女はもともとの――と自分では信じているところの――他人に筋違いな絡み方はしない、まともな人格の者に戻っている。
　この現象を明確にするために、あえて意地悪とさえ思えるような言い方もしておこう。はっきり言ってしまうと、ここでまったく無関係

な誰かが彼女に向けてひたすら土下座をしたとすれば、それだけでもなぜか彼女の恐慌は収まっていくのだ。このことはまったく不気味なほど機械的に起こる。

彼女はその恐慌が収まっていくことを^^止められない^^のだ、「傷ついた」と感じている彼女は、ひたすら「誰もわたしのことを助けてくれない」と感じて恐慌に陥っているだけであって、道理的な整合を求めているわけではまったくない。

自分より下にダウンフォースを引き受けてくれる者がいて、その者が生のリフトフォースを捧げてくれるなら、彼女はたちまち立ち直ることができる。むしろ、そのたちまち立ち直っていくということが否定できない。

「傷ついた」というのは、じつは「配置・立場」のことを指しているのだ。自分がダウンフォースを受ける「配置・立場」じたいのことを、体感的に傷つくと表現している。

だから、生々しいこととしては、特に女性の場合このようなとき、「誰でもいいので言い寄ってくる男」に助けられるということがじっさいにありがちだということを、経験から知っているところがあるのではなかろうか。

「話聞いたけどさあ、○○ちゃんは何も悪くないって！　○○ちゃんの繊細なところがわかっていない人が周りに多すぎるんじゃない？　おれ○○ちゃんがすっげえイイ子で、尊敬できる子だって初めからわかってたし。ある意味○○ちゃんのそういうところが、周りの人を嫉妬させているんじゃない？　○○ちゃんはけっこう、ぶきっちょなところあるけれど、本質的にはどこにいても、もったいないぐらいの人だよ、おれはそう思うけどなあ。○○ちゃんはおれよりずっと頭いいし、なんていうか、おれなんかよりずっとこころがきれいだもん。ただ、まじめすぎるから、そうして傷つくことが多くなっちゃうんだろうね」

このような励ましあるいは慰めを受けた場合、その慰めの内容および、その発言の当事者が、いかにもアテにならない軽薄なものだということは、女性の側でもわかっているものだ。まったくアテにならない軽薄なものだということはわかっているのだが、それはそれとして「助かる」とほほえみたくなるところはある。さしあたり、男はへりくだっていてやりやすいし、何よりリフトフォースを向けてきてダウンフォースが遮断されるので、パニック状態からは恢復できる。この場合はあえて、この男の安っぽさと軽薄さ、アテにならない如何わしさが、ちょうど見下ろせる位置にあって息継ぎになるということもある。自分からその男へ、自然な軽蔑というダウンフォースが起こり、男から自分へは、露骨なおべんちゃらを含むとはいえリフトフォースが与えられる。とりあえず、「生きていくことはできそう」という気分になり、ありがとう、という素直な感情が湧く。

「ありがと。とりあえず、ハー、わたしが我慢すればみんな丸く収まるところだから、なんとかしてみるわ。こんなことで感情振り回されるの、いいかげん馬鹿馬鹿しいし」

「そうそう。けっきょくわかっていない連中は、いずれボロが出てきて自滅していくって」

「そだね。わたし、とにかくもっと、ふつうに生きたいよ笑。なんでみんなわかってくれないんだろうな」

生死軸におけるダウンフォースは、死ね、死ぬべき、少なくとも死に追いやられる感触のもの。それが耐えがたく悲しい。さらには、自分の生は向こうのリフトフォースとして吸い上げられる、そのことが耐えがたく屈辱的だ。

この耐えがたい痛みと悲しみを耐えるにはどうすればよいか。

どうしてもここで「我慢」が出てこざるをえない。

意図的にあなたにダサい服を着せ、あなたの隣に意図的におしゃれな人を座らせる。そしてみんなで一斉にあなたの隣の人をちやほやし、意図的にあなたのほうは見ない、一瞥もくれないようにする。そうするとあなたは自動的に傷ついていく。なぜか。それは、あなたの隣の人にリフトフォースが掛かり、あなたの隣の人が上位になって、無視されているかのようなあなたは自動的に下位にセットされるからだ。

ダウンフォースが降りかかる。あなたはそのときおしゃれな人の横で「死ぬほどダサい」人になる。隣の人は「ふつうの人とはまったく違うよね」と称されているが、比較されているそのふつうの人とはつまり隣に座らされているあなたのことなのだ。

このような傷つく配置にセットされたとき、あなたは自動的にその状況を「我慢」するだろう。また、我慢する以外に何をどうしろというのか。そして我慢というのはどういうものだったか。

この状況を我慢でしのごうとしたとき、スコアリングは次のようになる。

おしゃれ 100
<計 100>

ダサい 10 （我慢 100）
<計 110>

スコアのトータルではあなたのほうが「上」だ。この我慢スコアを付与さえすれば、あなたはこの状況を、ため息ひとつで済む、どうでもいい下位のものとすることができる。

あなたの様子を看て取って、誰かがあなたに、

「どしたの？」

と訊く。あなたは、

「は？　別に。フツーですけど笑。何？」

と答える。

このときのあなたがどれだけムンとしているか。ムンは我慢の音だ。我慢スコアが 100 なのだから、100 のぶんだけムンの音が鳴る。

このようにして、人は自分が傷つく・傷ついたときにそのムンを出現させるということを発明した。傷つくというやつは、生死軸においてはダウンフォースの「立場」それじたいに起こるのだ。内容は無関係に、ダウンフォースを受ければ傷つき、傷つけばその耐えがたさを我慢するしかなく、その我慢はムンという音を立てる。

つまり、あれから二十五年が経ち、誰も彼女に謝ることはなくなったということなのだろう。

かつて、

「あなたからあのコに謝ってあげてよ」

「おれがいったいおれの何を謝罪しろというんだ」

と交わされていたやりとりが、いまは、

「あなたからあのコに謝ってあげてよ」

「ありえなくて草」

というやりとりに変わったということ。

まあ、それはそうなるだろう。かつて、「傷ついた」という一点張りで、しょうがなしにこちらから頭を下げて回っていたときも、そうした振る舞いに対して、

「本当にお疲れ様です」

と、こちらを労わってくれる誰かはいた。それが粋なことだったのか、あるいは閉塞した酔狂でしかなかったのか、いまとなってはわからない。それでも、労わってくれる誰かはそれなりにいたので、憮然としながらもなんとか韜晦して、やり抜いていこうと思うこともできた。

いまは世の中が純粋に、すべてが自己責任という考え方なので、二十五年前のこの発想はまったく成り立たないだろう。

「傷ついた」と、場合によっては際限なく言いだしかねない、しばしばタチの悪かったものについて、ついに誰もケアはしなくなった。単純に付き合いきれなくなったのだろう。もちろん誰かが「傷ついた」として、いまでも同情的なケアの気持ちを寄せることは誰にでもあるとしても、こちらが頭を下げて飛び込み、彼女に生きる気を取り戻させようとするやり方やその発想を持つことじたいは完全に終息した。そもそも、それが正しいというわけでもなかったので、その終息を糾弾できる人はいないだろう。いくばくかの切なさを残しながら、とにかく事実としてそうしたものは終わった。状況は次のフェーズに進む。

誰もそうした身投げじみたケアはしなくなったので、各自でその手当てを発明する必要が出てきた。

それで発明されたのが「ムン」だということ。

「傷ついた」ということが「ムン」で手当てされるようになったのだが、いますでにその手当てのプロセスは、われわれの精神においてオートメーションされた、ほとんど同時のものになっていると言っていい。傷つくということとムンの手当てをするということがほとんど同時になされる。それがほとんど同時であるため、「傷つく」というプロセスはほとんど確認されず、ただ「ムン」とするということだけが視認される。

たとえば二〇二三年現在、企業に新入社員がきて、指導員が彼に業務を教えるとする。すると、それだけですでに彼は上司や指導員の下にいるのだから、もう傷ついているということになる。傷ついて、ほとんど同時にムンの手当てをほどこしている。<<彼は入社して出勤するという時点でもう傷ついており、その時点ですでに猛烈に我慢している>>のだ。ドキドキワクワクなどしていない。彼にとっては入社するということがまず我慢で、出勤するということが我慢、上司や先輩や指導員がいるということが我慢で、そこから教育や業務が与えられるというのはさらに我慢なのだ。

だから内部の文脈は、

「わかりました、これをやらないと生きさせてもらえないってことですね。じゃあ生きていくことを潤すだけのじゅうぶんな金銭を支払ってくださいよね？　そうでなければあなたが死ぬべきですよ、舐めないでくださいね？」

となり、その我慢の文脈が彼の体にムンと出る。

あらためて、生死軸、そのダウンフォースが「死」だというのは大変なことだ。

指導員と新入社員のやりとりが次のようにあったとする。

「この書き方だと、先方が誤解するので、こういう書き方に改めてね」

「承知しました」

これを、生死軸の副音声をつけて書きなおすと、

【生死軸】

「この書き方だと、先方が誤解するので、こういう書き方に改めてね。死ねよ」

「承知しました。傷つくわ、お前が死ねよ。お前が死んでおれに金を払って潤せ」

となる。

もしこれが生命軸ならば、副音声は、

【生命軸】

「この書き方だと、先方が誤解するので、こういう書き方に改めてね。生きろよ」

「承知しました。生きます、命じてください。わたしは生きて命令を果たします」

となる。

これではもう、ふたつはまったく別の世界で、ふたつの人々はまったく別の人々のようだ。

だからわれわれの現代はいつからか、まったく別の世界に入れ替えられたようにさえ感じられるのだ。

いまから四半世紀前、「傷つく」という不明の言い方が流行して、それが無制限の権威を持ち始めたとき、処理のしようもなくて、誰もがそのことを放ったらかしにした。そうして放ったらかしに――あるいは野放しに――しているうち、われわれの世界も魂もいつのまにか乗っ取られたということなのかもしれない。

新入社員の彼に、もし「我慢をやめたら?」と勧めたらどうなるか。

彼は何とはなく、

「死にてー」

と言うかもしれない。ダウンフォースに対抗する我慢をやめたら、そのまま死に追いやられることを受容するということになるから。

ダウンフォースを受容するのでなければ、

「誰もいない南の島とかに行きたい。あるいは、部屋でずっと寝転んでゲームしていたい。マジで」と言うかもしれない。じっさい、「なんとかしてお金貯めて、とにかく早期にファイアして、あとは悠々自適で暮らしたい。それがリアルな勝ち組だと思う」という人は少なくないのではないか。「誰ともかかわることなく、のんびり、自分の好きなことだけして生きていきたいです」。

あるいは、夢想のようではあるが、「何かの世界で頂点を極めて、そこでずっとあぐらを掻いてたいわ」と言うかもしれない。

ひたすら、死のダウンフォースが厭（いや）なのだ。当たり前だ。誰でもがんばって生きようとしているのに、なるべく明るく生きようとしているのに、なぜずっと「死ね」の風を受けて無理やりにほほえんでいなくてはいけないのか。

本当にはそんな風は吹いていないのだが、生死軸に所属し、他の軸がありうるというようなことは教わっていないし与えられてもいないから、事実として彼の魂が受ける風はそれになる。

新入社員は入社しただけで傷ついていて、もし上司も先輩も指導員も、あるいは社長や株主でさえも、彼にへりくだって土下座するような勢いなら、彼は慰められ、励まされるかもしれない。

「大丈夫、というか、いいです、ぼくが新人ですから。すいません、みなさんが頭下げることじゃないです。もうじゅうぶん、もう謝ってもらわらなくていいですから」

「傷つく」

という分岐点

恋愛を空想するとき、最悪だ、というシーンを空想する人はいない。二人の仲が険悪で、お互いにため息をつき、表情はお互いを否定しきって、最低の時間を過ごしている。お互いに、しんどいわ、うんざりだわ、そんなことを無言で言い合っている、そんなシーンをわざわざ自らで空想に思い描く人はいない。

われわれは恋あいを空想するとき、夢のような、不思議な、光に満ちた、そういうシーンの中にいるそういう二人を思い描くだろう。われわれは空想とあこがれの段階においては、恋あいや交際といった間柄のことを「うまくやれる」と思っているのだ。うまくやれると思っているし、若く経験が浅い場合には、

「いったん付き合ったら、相手を大切にするとか、思いやるとか、そういうことはおれはぜったいにやっていけると思う」

と確信さえしていることが多いものだ。男女どちらであっても。

にもかかわらず、ここで読み手のうち何割かは苦笑しながらうなずいているものと思うが、じっさいの交際となると、空想していた「うまくやれる」はまったく成り立たないことがよくある。

なぜか？

それは、空想の前提として、人が・自分が「傷つく」ということが想定に入っていないからだ。

人はきっと、なにひとつ傷ついていない、安息と安寧の中でなら、交際にかかわることをそれなりに「うまくやれる」のだと思う。だが当然、われわれが生きるのに「傷つく」ことがないという前提を立てるのは非現実的だ。

たとえば男性Aと女性Bが交際していたとする。この日、女性Bは仕事上のことでこっぴどく上司に叱責され、そのことで何やらダメージを負ったような、「傷ついた」と言いたくなるような状態になった。

ただでさえ体調が悪かったところ、自分の不注意が響き、ひとつのミスが大きなトラブルにまで発展してしまった。
　もちろん体調がどうこうということを言い訳にはできないので、Bは責められるまま反省するしかなかった。彼女は心底から反省して、
「申し訳ございません。今後このようなことがないように、戒めます。気を引き締めてまいります」
　と言ったのだが、上司は眉根を寄せたまま、
「いや、もういいから。これは別の人にやってもらうから。君には任せられないってよくわかったわ」
　と言い放って、彼女の担っていた仕事を取り上げてしまった。
　Bはエッと驚いた。担当していた仕事から外されるということがショックだったが、なぜかそのショックと同時に、
（え、そうなの？）
　と、急激に何かの熱が冷めていくように感じた。
　それはいくらなんでも、しらける、というような。
（今さら担当を外されるなんて、それはいくらなんでも感情的すぎない？　たしかにわたしが悪いかもしれないけど）
　それで、上司が投げやりに、
「何してんの。もうきみは帰っていいよ」
　とBに言うのも、そのまま恬淡と受けて、
「わかりました。では失礼します」
　とそのまま退社したのだった。
　Bは帰り道、首をかしげて歩き、鼻からフーとため息を漏らして、
「なんか、疲れた」
　と思った。目の端にはわずかに涙が浮かんでいる。
「あーあ、なんかもう、逆に全部どうでもよくなっちゃったな」
　Bはあまりに気分がくさくさするので、やりきれず、次第に腹が立ってきた。
　ふと思いついて、気晴らしに、むかし好きだったアニメの「まとめ」動画をスマートフォンで観た。
　過激な描写が特徴的だったそのアニメは、彼女の記憶の古巣を刺激して、
「あー、懐かしー！　このシーン、あったあった」
　と彼女を陽気にさせた。イヤホンから、エキセントリックなアニメキャラクターの声が響いてくる。
　そうしてなんとか気を取り直してBが帰宅すると、Aが先に帰宅していた。
　ドアを開けながら、
「ただいま」
　と言い、Bが玄関に入ると、Aはいつもどおり「おかえり」と応えた。
　Aは玄関のほうへ出てきて、
「おかえり。あのさあ、下駄箱の上に置いてあった青いメモリーステイック、どこに行ったか知らない？」
　とBに尋ねた。
「え？　知らないよ。てかわたしに訊かないでよ。わたしいじっていないよ」
「そうか。おかしいな、たしかにここに置いたんだけどな」
「Aくんきのう酔っぱらって帰ってきたから、どこか別のところに置いたんじゃない。てか、どいて。ここ狭い。わたしシャワー浴びたい」
　Bは自分でも少し怯まされるほど、つっけんどんな声を出していた。これじゃ八つ当たりだなという気持ちも湧いて、すべてのことはわずらわしく感じたにせよ、いちおう謝罪のつもりもあって、
「今日はもう、すっごい疲れてんの」
　といちおうの言い訳だけは残して、つかつかと脱衣所に入っていった。
　Aに八つ当たりしてしまったということを、Bは数秒だけ悔やんだが、ただちに別のことを見つけると、その悔やんだ気持ちも塗りつぶされていった。
（あ、もう！　また脱いだ靴下をこっちのカゴに入れてる）

苛立ちが湧き、Bはハーと大きなため息をついた。
（靴下はこっちじゃないって何度も言ってんじゃん、どうしていつまでたっても覚えらんないの）
Bは、
（とにかくシャワー浴びよ。とりあえずすっきりしないと、流れ悪いわ）
シャワーを浴び、バスタブに湯を張って、入浴剤でその湯を泡立ててしばらく過ごしていると、ぬくもりと香りにほだされて、ゆっくりとではあるが、Bは次第に鼻歌が出るていどには機嫌を回復させていった。
防水機能のあるスマートフォンをバスタブの縁に立て、先ほどのアニメの「まとめ」のつづきを観た。そのアニメのギャグシーンに反応し、彼女はバスルームに響く大きな笑い声をあげもした。
「これよ、このシーン、これって今見ても笑えるわあ」
脱衣所に出て、髪の毛の水分をぬぐい、顔にいつもより入念な保湿液を行き渡らせて、Bはパジャマに着替えてからリビングルームに戻った。リビングルームでは、Aがソファに寝そべって、テレビ番組を見るでもなく眺めていた。
見ると、ダイニングテーブルにはすでに二人分の料理が皿に盛りつけられてある。帰宅したときには気づかなかったが、先に帰宅した彼は食事を作ってくれていたらしい。
ダイニングテーブルの足許には、見慣れない紙袋が置いてあり、上から覗き込むと何やら洋菓子のようなパッケージが見える。それを見て、今日はAが出張から直帰してくる日だったということを思い出した。出張先からおみやげを買ってきてくれたのだろう。
Bがじっくり入浴していたあいだに、彼の作ってくれた料理は冷めてしまったらしい。
Bは、
「あのさあ、ごはんたべる？」
とAに呼び掛けた。
Aはつまらなそうにテレビ画面に向いたまま、
「あとでいいわ」
と言った。
Bは、
「あっそ」
と答えた。
Bはいくらか、自分が帰宅してすぐ向けたつっけんどんな声と態度に良心の呵責を覚えたが、それより内心に思ったのは、
（あーあ、すねちゃった）
ということだった。
Bはひとり、すでに冷めてしまった料理を食べながら、
（あーあ、この洋菓子みたいなやつ、正直、食べたかったなー。でも今日はもう無理だろうな）
と思った。
こうした一連のことは、じっさいの交際においてはいかにもありがちなものだが、われわれが恋あいを空想するときには、こうした現実的な交際のシーンは思い描かない。空想に思い描かれる「ただいま」と「おかえり」は、そのままあたたかく二人を和ませ、そのままふたりを快適で仲睦まじい食事のシーンへ連れていくはずだ。
Bが趣味として始めたロードバイク、その車体を、Bは玄関の下駄箱の斜向かいに置いている。
それについてAとBは次のように言い合っている、
「あのさあ、やっぱりこれ、ここに置くのは邪魔すぎるって。ここまともに通れないじゃん」
「だって、こういうの外に停めていたらすぐ盗まれちゃうんだよ」
「いやいや、このマンション、他の部屋でも出たところにロードバイクとかふつうに停めてあるじゃん。エントランスにはオートロックあるんだし。それで二重か三重かにカギとかつけておいたら大丈夫なんじゃないの」
「オートロックって言っても、じっさいいくらでも誰か入ってきてい

るし、逆にそういうところのほうが狙われるんだよ。それに、車体まるごと盗まれなくても、部品だけ取られたり、何かいたずらされたりすることあるから」
「いやだから、それはわかるけど、じっさい他の部屋でふつうに外に停めているの見るじゃん」
「でも、何かあったらどうするのよ。このロードバイクって、そんなに気軽に買いなおせる値段のものじゃないのよ。わたしにとっては大切なものなの」
「そうだけど、お前自身、こないだ玄関出るとき、思いきり引っかかっていたじゃないか」
人は、「傷つく」ということがないのであれば、こうした自転車の置き場所ひとつのやりとりについても、「やれやれ」という調子で友好的に、おしゃべりのひとつのようにやっていくことができるものだろう。
けれどもわれわれのじっさいは、そうして切り取って思い描いた空想のように単純ではない。
たとえば、お互いにいまいち話が通じないなと疲労感を覚えている中、Bが酔っぱらって帰ってきたことがあった。Bは酒精によって機嫌がよく、勢いのままAをベッドルームに呼び、Aを性交に誘った。
Bはそうして調子づいていたけれど、Aは素面（しらふ）のままなので、とつぜんのことでBに同調はしきれない。
そうしてAがためらう気配も、Bからは酒精のまま、
（あーもう、めんどくさいなあ。しゃーない、お姉さんがなんとかしてあげるから、こっちおいで）
と包容的に思えていたのだ。
ふたりはベッドの上でもつれあおうとしたが、やがて、Bの身体をまさぐるAの行為は気力を失って遅滞してゆき、
「ごめん、やっぱ無理だわ。いまちょっとそういう気になれない」
とAは言った。
Bはこのとき、気が大きくなっているし、日ごろのストレスも溜まっているので、行動は衝動的だ。Bはプッと笑いだし、
「えー？　それはちょっと、ありえなくない？　それは彼氏として、男として、どーなの。ちゃんとしようよ」
彼女としては酒のいきおいで、冗談を含めたつもりで言った。
それを受けてAは、
「うん。何かお前のそういうところも、本当に無理だって気が最近してきた。こんなこと言いたくなかったけど」
と言った。
Bは酔っぱらっているので、
「えー？　何その感じ」
と茶化して取り合わない。
そうして取り合わないだろうということも、すでにAの予測の範疇にあったようで、Aはこちらを向かず漠然としたうなずきを数回するだけだった。
Bは腹が立ってきて、
「なんかムカつくわ。わたし、飲みなおしに、外行ってきまーす」
と言い、荒っぽく服を着始めた。
Bが玄関でパンプス靴を履くのにガツガツ蹴りつけるような音を立て、ドアを強烈に叩きつけるようにして出て行ったとき、AはBのことを引き留めなかった。Bが乱暴に出て行く際、バッグの紐がロードバイクのハンドルに引っかかり、ロードバイクがガッシャーン！と倒れたことは皮肉を含んでいた。
その皮肉に向けて、いやらしい笑みを起こすというつもりも、すでにAにはないようだった。
このようにして、お互い抜き差しならず「傷つく」「傷つけあう」ということがあって、その上でロードバイクの置き場所について言い合うとなると、それは友好的なものではなくなっていく。
AとBは、互いのことを大切に思っていないわけではないのだが、じっさいのところAはBのことをすでに「けっきょくそういう人なんだ」と逐一、観察して確かめるだけという乾いた態度になっており、いっぽうでBは、新しく飲み屋で知り合った飲み仲間たちに向けて、

酒の席だからということではあるにしても、
「あーもう、彼氏まじウザい。上司もウザい！　みんなまとめて死んでくれ、わたしを自由にしてくれー。わたしはもっと、フツーに楽しいのが好きなだけなんだってば！」
と言い、わかるわかると飲み仲間たちを笑わせるようになっていた。
われわれは恋愛や交際を空想に思い描くとき、ここで示した一連の例のようなことを思い描きはしない。もしここに示した例のとおりのことを空想に思い描くなら、現代のわれわれは、
「恋愛ってじっさい、そういうクソな部分あるよな。トータルで見たら正直、自分の好きなゲームやっているほうが楽しいわ。恋愛とかしんどすぎる。そら少子化も進むわな」
と述懐するだろう。
われわれが恋あいを空想するというとき、ここで示した例のようなものは思い描かない。もちろん、交際していくということは、それなりにいろいろあるだろうと推定ぐらいはするけれど、それにしてもすべてのことはけっきょく「うまくやれると思う」と思って空想している。その「うまくやれる」という予定は、人が・自分が「傷つく」ということを前提に入れていないことから起こっている。
人は生きているうちに、いつでも傷つくし、現在のところ、傷つくということは同時にムンを引き起こす。
ここで示したAとBの話が、二十五年前のものだったらどうなっていただろうか。二十五年前であれば、スマートフォンでアニメの「まとめ」動画を観ることはなかっただろうし、ロードバイクを趣味にする人もずっと少なかっただろうが、そのあたりは捨象してもらうとして。
二十五年前だったら、この二人は、お互いに「傷つけてごめん」と言い合うことへ進めるだろうか、ということが話の続きになった。はっきりと涙を流して、何かに声を震わせて、苦しみながら悲しみながら、すべてを振り切って「傷つけてごめん」と。「本当は大切にしたいんです、でも、なぜかそれができないんです」と。その進みゆきは、見物人としては単純な応援の力が湧くところだけれど、当事者にとっては思いがけず苛烈な試練の道だ。
二十五年前でも二人はきっと、やっていけずに破局しただろう。きっと若さが二人を赦さない。やがて別れるしかなく、けれどもその別れにおいて、二人はやはりどこか相手を真正面に見るところはあって、
「きみにやさしくすることができなかった。ただそれだけだと思う。男として情けないよ、ごめん」
と悔い、またその相手も、
「わたしのほうこそ、あなたにやさしくすることができなかった。今さらどうしようもないけれど、最後にはっきり言わせて。ぜんぜんやさしくできなくて、傷つけるばっかりで、本当にごめんなさい。わたしってこんな奴なんだね、初めて思い知ったよ」
と堂々と言ってのけるところがあった。
そしていっとき、"何か"の風が舞い込んで、なぜか二人を急に気軽に明るくすることがあった。
これまでのことも、これからのことも、急にすべての重さを吹き払われたように。
「でも、なんかさ、楽しいことも、たくさんあったよなあ」
「それはもう、楽しいことすっごいあった。なんでか、正直そっちのことばっかり覚えているよ」
そしてまるで、何かいつものことのように、二人を互いに、
「じゃあ、ありがとうね」
と言わせ、二人を握手させ、二人の関係は過去のものとなっていくのだった。
最後に吹き込んだ"何か"の風は何だったのだろう。
それはきっと命の風だ。
二十五年前、「傷つく」という言い方は、しばしばたちが悪く、面妖な性質を持つものだったけれど、二人は別れ際にその「傷つく」という呪力を超克した。自分が相手を傷つけたとは言うものの、自分が相手によって傷ついた・傷つけられたとは言わなかった。

この二人は土壇場で、ついにこの恋あいにおいて勝利したとも言える。その勝利の証拠として、命の風が吹きこみ、二人を祝福して、二人の別れを暗いマイナスのものとせず、何もかも大丈夫なのだと何かが見守るものにした。

二人は別れてしまったが、最後の最後、

「このようでありなさい」

と命じる何かに従い、そのとおりに命を果たしたのだ。そうすることでついに、どのようにしてか出会い、どのようにしてか交際し、どのようにしてか別れた、そのことのすべてに恋あいの「命」が与えられた。

二人はきっとそれぞれに、恋あいと交際にかかわって大変な思いをしたと追憶するだろうが、このときのそれぞれに、恋あいはどのようなものであるかと訊いてみたとしたら、彼らはどう答えるだろうか。

「クソな部分なんてない。自分のクソな部分は出てくるけれど、恋あいにクソな部分があるとはまったく思わないな。自分の好きなゲームだけしていたいなんてまったく思わないし、しんどいなんて思わない。恋あいなんて、無理に意図的にするものではないと思うけれど、もしまたそのときが来たら、そのときはあるがまま、ただそのときはどうか人を傷つけないような自分、人にやさしくできるような自分でありたいとだけ思う。せめてそうでないと、さんざん傷つけた前の交際相手に申し訳が立たないから」

彼らはそのように答えるだろう。

傷つくということが分岐点になる。二十五年前の例になるけれど、傷つくということを超克して、命の風を呼び込んだここでのAとBのことを見よ。

傷つくということはあるけれど、必ずしもそれを忌避しなくてはならないというわけではない。

傷つくと知っていて、その中に立つことはできる。

その中に立ち、傷つくということを「当然」と引き受けることはできる。

傷つくといっても、それをこころの底から「かまわない」と言えば、それはかまわないということになるのだ。

雷が落ちようが核兵器が降ってこようが、蜂がこようが蛇がこようが、「わたしはここにいます」と言うのならば、その人はそこにいるだろう。

ムンっとすればわれわれはムンになるが、ムンっとしなければ、われわれはムンにはならない。

AとBは土壇場で、自分が相手を傷つけたことを詫び、相手のことについては「ありがとう」と言った。

彼らは土壇場で、自分が傷つくということに「我慢」という手当てをしなかった。

傷つくというのは、生死軸でのダウンフォースの立場に起こることだ。だからこそ現代のわれわれは、匿名のウェブページで、誰かを傷つけるためには瞬発的に「死ね」と書きこむことを発想する。

死ねと言われたら悲しい。生を否定されるのは悲しくて、生を吸い上げられるのは屈辱だ。その痛みと悲しみのダウンフォースの中で、それでも「かまわない」と本心から言うなら、それはかまわないということになる。

このとき、人がそうして傷つくことの中に自ら立ち、それを忌避しないのであれば、人はどうやら命の道を見つけることがあるようだ。

「傷つく」という場所に分岐点がある。われわれはいま、その場所が近づくと、「ムン」で急加速して素通りし、そこに分岐路があったとはまったく気づかないのだが、もしその傷つくという場所を当然として立つならば、そこはじつは交差点であって、分岐路があることを見つけるようだ。「あれっ？」と、その分岐路の先から命の風が吹いていることに気づく。その道へ一歩踏み込むと、空から命の羽根が舞い降りて来る。彼は生死の世界ではなく生命の世界を視る。

「これが世界なのか。こういう、世界なのか」

傷つくということは手当てされたのか？　そのように訊けば、彼は「いいえ」と答えるだろう。死んだ方がマシか？　と訊けば、彼はや

はり「いいえ」と言い、「生きろってことだ」と答えるだろう。
分岐点に立ち、見つけた分岐路に踏み出せば、そのときから彼の所属は生命軸であって、生命軸のダウンフォースには「死ね」はまったく含まれていない。ダウンフォースを受けるあわれな彼は、「生きろ」と力強く命じられているのを聞き取っている。
彼はいっそ、生命軸の者として、
「傷つくために生きているんだ」
とさえ言うだろう。
傷つくという場所に立たないかぎり、命への分岐路は見つからないのだから。
本当に傷つくという場所に立ち、それを「かまわない」とするなら、その場所で人は生死軸の順転さえ見つける。もともと生死軸はわれわれの生存本能によって逆転されて設置されているのだった。本当の生死軸、順生死軸は死が上位にあり、生が下位にある。上から下へ「死ね」の声が向けられているというのは、どだいフェイクのものでしかないのだ。どれだけその表面が業火によって強烈なものに加工されていても、それは見せかけのものであって実在はしていない。
呪詛の「生々しさ」がそのような軸の存在を錯覚させているだけだ。
（このあたりの説明はやや高度なのでいささか理解しきれないかもしれませんが、理解しきれなくても全体の把握には問題ありません）
生命軸の神が命の神であるように、順生死軸の神はじつは死の神だ。死の神は、やがてわれわれに必ず死を与えるだろう。そのことは誰だって確信があるはず。たいていこれから百年以内にその死は与えられる。その確信とまったく同じように、命の神はやがてわれわれに必ず永遠の命を与えるということが仕組みとして視えていなくてはならない。
己の魂が所属した軸の神がわれわれの魂に神そのものを与えるだろう。
「死ね」のダウンフォースは、本当はわけのわからない、成り立ってもいないでたらめなフェイクにすぎない。本当は、「生」を上にした軸など存在しないのだから（それを「生々しさ」で錯覚させているということです。これは魂の現象ではなく血・呪力の現象です）。
本当は、死の神はわれわれに死を分配し、われわれは死の神に生を捧げている。死の分配はわれわれにじつは「生きろ」と聞こえている。また、生をそのことに使い果たしたとき、われわれは確かに死を得るだろう。
二本の樹木が下から「生えて」いる。地表はどちらも生だが、片側の樹上にあるものは死、片側の樹上にあるものは命だ。われわれは死に関してはすでに獲得できるという確信がある。獲得したくなくても獲得させられるとまで感じよう。それはつまり、死の果実はすでに獲得済みだということだ。死はすでに内定をもらっている。命のほうは未だ内定をもらっていない。
よって彼が、
「傷つくために生きているんだ」
というのも、精神的な言い方ではなく、道理にかなった言い方となる。
このままひたすら直進するだけでは、内定どおりに死の結末に至るのみ。分岐点がないならその単一の道をまっしぐらだ。
分岐点は、「傷つく」という場所にある。
だからわれわれの生は、その「傷つく」という場所に立つためにある。そこで分岐路を見つけ、生命軸のほうへ魂を踏み出させるために生きている。
われわれは命の代替品として「ムン」を発明したけれど、「ムン」で傷つく場所をスキップできるとして、そのことはわれわれの生を有意義なものにはまったくしていない。
むしろこのままでは、「ムン」は、われわれを傷つくことのすべてから守るようでいて、われわれの生のすべてを無価値なものにしてしまうだろう。
われわれはいつだって命のあるやなしやを気にしている。自分の姿に、声に、振る舞いに、ちょっとしたジョークの言いようのひとつで

さえ、命があってほしいと思っているし、それがないと判明すると深く傷つく。自分の恋あいに、青春に、仕事に、芸術に、命はあるか、あってほしいと願っている。命がなければ自分は傷つく。まったく致命傷というように傷つく。

そこでムンの出番だ、というのが現代の定跡だけれど、じつはそうではないのじゃないか。

同じ生きるなら傷つくということ。われわれは傷つくために生きている。分岐点に立って何ひとつ曲げずに「かまわない」と言うなら、すべてのものはわれわれに生きろと言っている。死を得るために生きるのもひとつだが、それはすでに獲得済みのものだから忘れてしまえと、そして命を得るために生きろと言っている。わたしもそう言っているし、わたしでないものもそう言っている。

甘え、公私混同、「あなたは我が強いんだってば」

けっきょくのところ、わたしはムンに対する説得力を持たない。循環して出現してくるムン、その腰高の気配、湧き出てくる「我慢します」という言いよう、そのぶん請求される「わたし偉いですよね？」ということへの報酬。わたしは誰に向かって書き話しているだろう。何かに入り込んでか、あるいは何かから脱出してか。

わたしから出てくるムンへの説得のことばは、せいぜいのところ、

「だから、あなたは我が強いんだってば」

というぐらいなのかもしれない。そのようなわたしからの、ムンへの説得がありえたとして、わたしがけっきょくのところ説得力を持ってはいないと自らで認めることができる。

我が強いというのはどういうことか。たとえば白黒映像に残っているような、激しいシャウトを示すソウル・シンガーのありさまを観たとする。彼は激しいパフォーマンスを示し、まさしく彼の魂そのものをそこに現しているのだが、その魂の激しさをもって彼のことを、

「我が強い」

と言い当てることができるだろうか。いや、それはおかしい。彼に対して「我が強い」という言い当てようは何かが不当に思えるだろう。

同じシンガーというジャンルを現代で引っ張り出してくるとして、たとえば陰鬱な面持ちで、ぼそぼそと何かを言う様子で、目許も表情もなるべく露出しないように歌おうとする、ここでは架空の現代のシンガーがいたとする。彼は痩身で、血の気のないような姿をしているが、その印象と風貌をもって、

「彼は我が強くない人だ」

と言い当てることができるだろうか。それもいかにもおかしい感じだ。われわれは直観的に、

「この人たぶん、すっごい我が強いタイプだよ」

ということを看破していよう。

わたしはムンに対する説得力を持たない。たとえば、ここでは生命軸やら生死軸の話をしているけれども、そのことを直接のムンに向けて話したとしても、ムンから返ってくる反応は「ムン」なのだ。当たり前ではある。理性は命のものなのだから、ムンが理性での受け取りを示すということはない。

わたしがわたしの話すことにどのような命を得たとしても、わたしの示そうとする命に対して、ムンはそれ以上の量の「ムン」を返してくるだろう。そもそもムンは命の代替品なのだから当然のことだ。

ムンは必ず、

「ぼくの所属って、生命軸ですかね、生死軸ですかね」

ということを第一の関心として訊いてくるだろう。

じつのところ、彼にとってそれは第一というより唯一の関心であって、彼の関心は、けっきょく自分の立場を上等に言ってもらいたいということにしかない。
それぐらい我が強い。我しかないと言っていいほど我が強い。
といって、我が強いという指摘をしたとしても、その指摘は彼にとって愉快なものではないので、彼はけっきょくそれを受け入れることはせず、
「自分ではいちおう、生命軸に所属しているって思うんですよ。生命軸のことのほうが、ぼくにはむしろよくわかるかなって感じがすごくするんです。それってぼくが生命軸に所属しているからなんじゃないですかね」
と言う。
何がなんでも、自分がそう思いたいということを、他人にも肯定させようとする。
これは平易に言って「甘え」だ。ずっとむかしに土居健郎が指摘したとおりのこと。
彼は典型的に、見本のように、「傷つく」という場所に立つことを避ける。
「先ほどのソウル・シンガーと、現代の病弱にさえ見えるシンガーとを見比べたとき、自分の所属はどちらに近いと思うんだ」
と促しても、
「うーん……」
と、考えるふりをして向き合おうとしない。
生命軸に属する者なら、命を分配された姿と声があるはずだ。
その実物を示してみるほうが手っ取り早いからということで、まずわたしがその実演をしてみて、
「同じようにやってみたらいい」
と彼に促す。
すると彼は、態度を急変させて、
「やっぱりいいです。うーん？　なんかよくわかりません」
と言う。
彼の思いが是か非かの問題ではない。人とやりとりをしているのだし、そもそも彼のほうから問うてきたことなのだから、ここで急に彼だけ引き取って、話はなかったことにしますなんて態度はない。
公私混同だ。私的な思いを公的な学門の中に持ち込んできて、それだけでも異様な感触がするものなのに、しょうがなしに公的な側が引き受けて立つと、こんどは急に「やっぱりいいです」と退き、すべては「私的なことなので」と言い訳して引っ込んでいく。
公私混同というより、公私じたいが存在したことがないのかもしれない。彼の言う公的というのは、「わたしとしての公的」であって、すべては彼の私的なこととして扱われるのだと思う。
じっさいのムンの挙動はこのようだから、わたしはムンに対する説得力を持っていない。
説得力という語には、「力」がついている。
ムンは「力」を持っているだろうか。
ムンは命を持っていないが、力を持っていないわけではない。力を持てないなら誰もムンなんてやらないだろう。
命の代替品として力を持ちうるからムンは使われている。
力を持っていないのはむしろわたしのほうだ。いまここで、わたしはムンに対する説得「力」を持っていない。
それ比べるとムンのほうは、甘え、公私混同し、我が強いままに振る舞うという「力」を持っている。
「あ！　ぼくはあまり、人に死ねとかって思わないたちなので、そのぶんは生命軸に近いタイプと言えるんじゃないですか？」
と、ムンのほうこそわたしにぶつけてくる説得「力」のようなものを持っている。
ムンは力を持っているのだ。その力で、それなりに活躍もしてきているし、実績も得てきている。
実績もあって、そのぶんの自負もあるから、ムンはそんなに簡単に引き下がらない。

ただ、引き下がらないぶん、その突出しつづける「力」を観測して検査するようなことは簡単にできる。

ここでは検査キットを用意しよう。

甘え、公私混同、「あなたは我が強いんだってば」という、この三点セットのようなものを、いつでも手早く使える検査キットのように持っておくことは役に立つ。

ムンとは我慢のことで、我慢とは吾我の驕慢のことだ。吾我の驕慢は他者との峻別をやすやす侵略していくので、このことを「甘え」という。

吾我が驕慢していると、公的なことにも私的なことがやすやす侵略していく。このことを「公私混同」という。

吾我が驕慢していたら、我が強いのは当たり前だ。そして、我が強いというようなことは、本当は誰だって感触だけでわかるものだ。

ムンは性質上、この三点セットの検査を欺瞞することができない。欺瞞することはできないので、欺瞞しようとすると、それは必ずムンからの「パワープレイ」のような、無理のある形になるだろう。

この検査キットは有効だ。

といって、それもけっきょくムンに対する説得力になるわけではないけれども、それでも三点セットがいつも目の前に用意されているなら、ムンとしてもいくらか鼻白むということぐらいはあるだろう。

ムンの圧力に対する、防壁、緩衝材ぐらいにはなるかもしれない。

（だとしたらたいへん有益なことだ）

白黒映像に残っている、魂から叫ぶソウル・シンガーが、歌いながら甘えたり公私混同したりはするわけがない。そんなこと観ただけでわかる。

なぜわれわれは、甘えたり、公私混同したり、我が強かったりということを、果てしなく続けてしまい、やがてはそのことの自覚さえよくわからなくなっていくのだろう？

ヒントをひとつ書き記しておこう。力というものは、対象を解体する。たとえば理解力というものがあったとして、その理解力というのは対象を解体して、その対象にあった命を失わせてしまう。そもそも理解といって「解」の字が含まれている。英語では tell A from B という構文でその解体が表現される。

力は対象を解体し、命は対象を解体しない。

解体しないというのは、分解しないということ、つまり消化不良ということだ。

生命軸と生死軸のことを、理解力によって完全に理解するのはよし。でもいっぽうで、じっさいの命をディールするのは、むしろ消化不良によってだ。

理解不能、ではなく、消化不良だ。

食事を、ドロドロに溶かして飲めば、消化吸収にはいいかもしれないが、「食事」という命は失われる。

解体されていない場合にのみその「命」は残る。

ただ消化不良のまま、じっさいの命をディールし、それが済んだあと理解してみれば、たしかにここで説明されているとおりだ、ということが確かめられるだろう。

あまりここで詳しく述べるべきことではないが、少しだけ言ってしまうと、生死軸というのは、そもそも生と死がきっちり分解されている、ということから発生している。

生と死を分解するのはおかしなことではない。ただ本当には、その分解は、われわれの能力によって、出来るようでいて出来ないのだ。

われわれは自分がいま死んでいないということを証明できないので、じつはわれわれは生死を本当に解するということができない。

医者こそ、その生死を本当に解することはできないと知っていて、だからこそ医者はあくまで死の「兆候」を確認することを死の定義にしている。それで本当に死んだのかと医者に問えば、まともな医者は、

「それはわかりません」

と答えるだろう。

同じようなこととして、たとえばここまで「吾我の驕慢」ということを繰り返しているが、そもそも「我」とは何なのかということを、

じつはわれわれは完全に解することができない。
「いやいやそんなことないよ、わたしはわたしだよ、自我を持っているよ」
と言いたくなるのだが、じつはそうして、ちゃんとすべてを解することができる「気がする」という現象じたいが「我」なのだ。
たとえばあなたの着ている服は、服であって「あなた」ではないだろう。あなたの靴も「あなた」ではない。
ではあなたから切り取った爪はどうか。あなたが散髪した毛はどうか。
日焼けして剥けておちた皮膚はどうか。
あなたから肉を切り取ったとしたら、その肉はあなたか。
あなたから血を抜いたら、それはあなたか。赤血球や白血球があなたか。
神経細胞のひとつを取り出して、それをハワイに送ったとしたら、「あなた」はハワイに行ったのか。
あなたの血と肉と神経細胞と骨のすべてを切り取って抜いたとき、「あなた」はいったいどの部分に入っているのか。
「あなた」が入っている肉の部分は合計で何グラムなのか。
あなたの肉体を、上半身と下半身に切り分けたら、「あなた」はきっと上半身にあるという気がするだろう。
ではあなたの肉体を、左半身と右半身に切り分けたら、「あなた」は右半身と左半身のどちらにあるのか。
「我」といって、それはけっきょく「わたし」というものが肉体を伴ってこうあるという「気がしている」というだけで、本当にそのことを解せているわけではないのだ。
あなたの肉体と、あなたの目の前のボールペンがあったとして、肉体はわたし、ボールペンはわたしじゃない、という「気がしている」だけだ。本当のことではない。
だから本当のことを取り扱うには消化不良をもってするしかない。
生死にせよ我にせよ、それぞれがそのように分解できるという気がしているだけ。
その機能じたいを我と呼ぶが、いまここでしたように、我の機能を揺さぶられたとき、あなたからはなぜか「甘え」「公私混同」「我が強い」という症状が出てくるだろう。
我を保とうとしているのだ。
その三点セットの反対側に「消化不良」があると思え。

身が救われない ムンは 異軸翻訳をする

あなたが自分の頬肉をつまんだとき、その頬肉はあなたの身でもあるし、あなたの体でもある。
身は命に向かうもの、体は生に向かうものだ。
これは概念やことばあそびとして言っているのではない。じっさいのあなたの肉に及ぶ話だ。あなたの肉が単なるタンパク質でしかないなら、われわれが生きることはこんなに複雑ではないし、また単なるタンパク質でしかないならわれわれが生きることにはまったく何の値打ちもないだろう。
ことわざに「芸は身を助（たす）く」というのがあるが、芸は体を助くとは言わない。体を助けてほしい場合は病院に行くかトレーニングジムに通うべきだ。
○○は身を滅ぼすという言い方が多数あり、身が滅ぶということがあるのであれば、反対側には身が救われるということもあるのだろう。
身が救われるということはじっさいにある。身が救われるとき、体

としての肉は極めて落ち着いていくのに、その肉のうちを、何とはわからないものが駆け抜けるように上昇していく。駆け抜けていっているものはさしあたり魂と思っていてよいだろうし、ちょっと厳めしく霊魂と呼んでもよいかもしれない。

ある男が、暴力を振るってストレスを発散したとする。暴力というと社会的に犯罪になるので、ここでは暴力といっても、サンドバッグをしこたま殴ったということにしよう。それで当人は「あーすっきりした」と感じる。いわゆるストレス解消、

「全力を出しきって、本能を解放して、汗を流す、このことでしかすっきりしないからね」

と彼は精悍に言った。

このようなとき、彼は確かに気分としてはすっきりしているし、体調としてもすっきりしているかもしれない。けれども、その「肉」はどうかというと、肉はまるでオーブンで焼かれた直後のビーフのように、その内部のものがぐるぐると沸き立っている。体温のそれではなく、暴力に焼けて熱く、ざわざわと肉が騒いで、その興奮はなりやまない。人によっては何十年間も、あるいは死ぬまで、その肉はそうして騒ぎ続け、興奮し続けているということがある。そういう人もいるというより、われわれのような者はたいていがそうだと思っておいたほうがよいのかもしれない。ていどの差こそ個々人にはあれ。

ある女性が、ホステス業に就いていたとする。彼女はついに太客から数十万円のバッグをせしめることに成功した。そのバッグは同僚からも羨望の目で見られて、これまで軽く見られていた立場が逆転して面目躍如、この上なく痛快に感じた。しかもその高揚のさなか、これまで何かと気に障る不快な知人についての悪い報せを聞いた。聞くところ何かトラブルがあって、当人のミスから大きな損害が出てしまい、現在の立場を失脚させられそうな見込みだという。化けの皮が剥がれたというような状況で、その報せには「あーあ、因果応報だね、残念だけど、ざまあみろってところだよね」と、やはり溜飲が下がる思いがした。

このとき彼女の気分は爽快・愉快に違いなかろうし、彼女の体調はというと、「もう走り出したいぐらい」と笑いだすほどかもしれないが、それでは彼女の「肉」はどうかというと、肉はやはりオーブンで焼かれた直後のビーフのようにぐるぐると沸き立っていよう。その沸き立った肉について、彼女の客は「わー、今日もエロいなあ」と称賛した。「目力がヤバいよね」。彼女はにっこりと笑って「それはどーも」と余裕たっぷりに会釈した。

われわれの身体には肉があるが、肉といってもそれはたいてい血と絡み合っているので血肉と呼ばれる。「血が騒ぐ」という言いようがある以上、肉がぐるぐる騒ぐことは血が騒ぐことと関連していよう。血が静まりかえっているのに肉だけ騒ぐというのは不自然すぎてありえない。

われわれは、牛や豚の食肉はよく目にするが、牛や豚の流血はなるべく目撃しないようにしている。血を見るとわれわれの内にある何かが騒ぎ出す。騒ぎ出すのはやはり血だろう。そのインパクトは大きいから、あらゆるメインカルチャーでは流血表現に慎重な年齢制限等をもうける。性器や性行為の表現に関わっても、性器というのはつまり粘膜だから、皮膚などよりは血に近く、その赤色が透けて見えている。そのぶんだけインパクトが大きくなるので取り扱いに注意が必要だ。女性の唇だけをズームアップした映像に、男性は血の騒ぎを覚える（女性もか）。街中でのちょっとした小競り合いも、単に小突いただけということと、流血にまで及んだということでは話が異なる。たとえ図柄が同じでも、刺青とシールではわれわれが認めるインパクトは異なるだろう。安売りをアピールしたい商店は、ノボリ旗に「出血大サービス」と書いて客に作用しようとする。

そのような、血のはたらきにかかわることは、詳しい知識がなくても、きっと業（カルマ）にかかわることなのだろうと当たりがついてよい。血肉という言い方をするのであれば、血が業（カルマ）であり、肉は霊魂に属する。肉に血が染みることを内出血というが、内出血や青あざをよろこぶ人はいないし、見た目にもそれは痛々しい。肉に血

は染みないほうがいいし、そこに業（カルマ）と霊魂を見い出すなら、霊魂が業（カルマ）に浸食されることはなるべくないほうがよいとわれわれは願っているのだろう。

性風俗業に勤める女性が、生活の事情からそのような業に身をやつしたと、自分でそのことを不本意に思っていたとして、なおもその当人が

「魂としての性愛は、この先に出会う、わたしの愛する人のみに捧げるものです、業はわたしの霊魂にまで浸食したわけではないですから」

と言うのであれば、わたしはその女性の向かおうとすることへ祝福を祈りたく思うのだ。もちろんそのようなことに、悪意に満ちた揶揄を投げかける人が無数にいることは知っているが、それは彼らとしても何かしらの業（カルマ）が自身の肉・霊魂を犯しきってしまった――あるいは抗せる見込みがもうない――ということがあって、そのことの自白として野次馬になっているのではないかとわたしには思える。

身が救われるということはじっさいにある。暴力でストレス発散をしている男は、体調や気分はすっきりしていても、身は救われるどころか沸き立ってぐるぐる、身は焼けつくほうへ進行している。財物をせしめて高揚するホステスは、体調や気分は走り出したいほどであっても、身はやはり焼けつくほうへ進行している。そうしたことはじっさいにあって、その肉に触れればわかるし、その肉を見るだけでもわかるのだ。そのようなことへの視力を得てから後の話ではあるが、身が救われているか否かということは、じつのところ直の接触か、直接の視認でも判断することができる。それはつまり、「どうごまかしてもミエミエだよ」ということでもある。声帯は粘膜だから、その人の声を聞けばその人の身の状況がよくわかる。

身は霊魂であり、霊魂は肉だ。その肉が触れただけでわかる焼けつきぶりということは、そのまま霊魂が焼けついているということを示している。焼けつくほうへ進行していっている。霊魂はどのような火に晒されて焼けこげていくのか、それはよく知られたとおり「業火」というやつなのだろう。

ムンという音でいえば、業火で焼かれている肉と霊魂は、それじたいで常にムンムン音が鳴っているし、そこからさらにムンと言えば、沸き立つ肉に「再加熱」が始まったときなどに特に典型的にムンと鳴る。焼かれているのを「我慢」しているのだから、それはもうムンムン鳴るだろう。

一方で、身が救われて、肉が、霊魂が、静まっていくときはどのような音がするのか。静まっていくときは安直だが予想通り、「スーッ」という感触が聞こえる。騒ぎが極端にまで静まっていくときの空間のように。

静まり返った肉はどのようであるか。それは本当に、何の騒ぎもないのだ。何の騒ぎもない肉。その人の頬肉をつまんだところ、「こんなに何も起こらない身体ってありますか？」「こんなに静かな肉ってありますか？」と不思議なほど。それでもさらにその身に、その肉に、触れて慎重に聞き取ろうとするなら、騒ぎとは異なる清冽な奔流の、高くへと駆け抜けていこうとする音、その音が栄光をともなって「オオオオオ」と吠えているのが聞き取られるだろう。

身と体のうち、どちらを上に置くか。上下を入れ替えるならどのような違いが出るか。

「身」を上に置くなら、「体」は下方向へ静まり、「身」は高くへと浮上していく。「体」を上に置くならば、「身」は沈んでゆき、命を失って冷え、「体」は沸き立って高潮していくだろう。

「身」が上なら身体は命へ上昇してゆき、「体」が上なら身体は生へ上昇してゆく。

ただし、体が生へ「上昇」していくというのはいささか無理のあるところだ。本当は生死軸は逆転させて設置されている。上方に生があるというのは、そう思い込まれているにすぎないのであって、本当は構造上ありえない。しかし何事も錯覚しやすいわれわれの体感としては、生に向けて体が沸き立つ、上昇していくということは、じつにあるような気がするわけだ。われわれはそれをよく実感と呼んでいる。

われわれは現代を生死軸で生きているのだから、われわれは日常、無条件で「身を沈ませる」ということを続けていることになる。身は命を失って冷え、落ち込んでいく。先の暴力男も、財物をせしめたホステス女性も、「身は落ち込んでいっている」「ある種の業界に身を沈めた」ということはなんとなく直観が肯定するのではなかろうか。その彼らが、チャリティに励んでみたりデトックスに励んでみたりしても、彼らは所属軸を変更できないので、何にしても彼らの身は沈み・落ち込んでいく。もちろんその代わりに体は上昇していくけれど。

体は上昇していくのに、加齢と共に、じっさいには長期的に体は降下していくというのは意地悪な仕組みだ。上昇し続けた五十歳は、上昇などしていない小学生よりも先に死ぬ、と医者は言う。「なんでおれのほうが死に近いんだ？」と、つじつまが合わない。とはいえそのことも、われわれが初めから生死軸を逆転させているのが悪いと言われたら、そのとおりすぎてどうしようもない。

血と肉について、再度の説明をしておこう。「肉」は身であり霊魂だが、そこに「血」が染みると、それは体になり業（カルマ）に支配されていく。

まぎらわしい理屈だ。われわれはミカンの果実を食べるし、ミカンの果実はミカンの樹に生るに違いないが、だからといってわれわれはミカンの樹を食べているわけではない。ミカンの樹の味がするミカンの果実があったとしたら、それはただの異物混入であってその味は苦い。

われわれが食べる羊の肉も、たしかに羊の血によって育ったものではあるはずだが、その肉が「血なまぐさい」のはよくない。内出血した獣肉などよろこんで食べるまともな人はいない。

よい血統の馬が凛々しい駿馬だったとして、その馬が流血しながら走っていてうつくしいというわけではない。血は生だが肉は命だ。血が体をもたらすが、肉はできるかぎり身でありたいという性質のものだ。道路や電車が通っていてこそ生きている街だと言えるが、トレーラーや電車の騒音が響きわたって住民をおびやかすのがよい街だということではない。

身が落ち込んでいるということ、身は救われていないというようなこと。そのようなことは、いくらかは直観だけでもわかるものだ。たとえば成績や境遇の違いで赤の他人にマウントを取るような人、性的嗜好を異常化させて特殊な性交に耽るような人、そんな人の身が救われていると考える者は誰もいない。

体感としては、マウント合戦に勝利すれば、その人は自分が上昇した気がするかもしれないし、特殊な性的嗜好に耽ってオーガズムを得れば、その人は体感としては高くまで「絶頂」したような気がするかもしれない。けれどもそれは、ただ生たる体を高揚させたということでしかない。生死軸のダウンフォースの中で、なんとか少しでも生きていくのに足しが欲しいというだけだ。サンドバッグを暴力的に殴り続けてすっきりしたということと本質的に変わらない。そんなことで身が救われるわけはないと、誰でもうすうす知っているのだが、生死軸に所属しているかぎりは、そちら「体」の高揚を継ぎ足していくしかないという矛盾した実情に陥るのだ。

生命軸と生死軸、その所属が異なるという場合、じつに万事がどうしようもないということをここまで示してきているが、その最も直截のあらわれがこの「身と体」になる。

生命軸者が「身をもって」何かを示したとしても、生死軸者はそれを「体感」に翻訳するしかない。

このことは異軸翻訳という呼び方で覚えておきたい。

たとえば、

「こんなに静かな肉ってあります？」

という実物を、身をもって現すことができたとしても、生死軸者はそれを、

「へええ、やっぱり体なんですねえ！」

と翻訳せざるをえない。

わたしはそのような異軸翻訳に直面するとき、なんとか手がかりだけでも残せないかと思い、

「体というか、体質、みたいなものだね」
と言い換えて伝えるようにしている。それが後々になって功を奏す、ということは特になさそうではあるけれど。
身にせよ体にせよ、肉にせよ血にせよ、わたしはいまこのことを概念としてお話ししているのではない。それはそうだろう、具体的といえばこれ以上に具体的なものはないのだから。
あなたには手足があり、胴体があるだろう。それは身でもあり体でもあり、血肉で成り立っているものだ。
あなたに手足や胴体があるように、また、他の誰かにも手足や胴体がある。ただ、一般にはあまりにも知られていないこととして、それに触れたときに知ることは、やはりそれが単なるタンパク質のあつまりではないということなのだ。
人によって、その人の魂によって、その身・肉の感触は、触れてみると感触があまりに違う。びっくりするほど違う。信じられないほど静かな身、信じられないほど軽い身というものがある。逆方向には、おののくほど沸き立った体というのもあるし、おののくほど重い体というのもある。人間離れして重機のように硬く重い体というのもあれば、どのように掴んでいてもなぜかどこかへ抜けていく・消えていってしまうという身もある。オーブンで焼かれた直後のビーフのように、その内部がぐるぐる沸き立っているという体もあるし、よくよく横隔膜を澄ませて聞き取ってみれば、静かな身の中心を貫いて高くまで至ろうとする魂の奔騰がオオオオオと叫んでいるのが聞こえてくるという身もある。
あなたがもし、一度でも、わずかでも、その静かすぎる肉、どこかへ抜けていってしまう身、しかもその内部にほとばしる歓喜の叫びがある、というものにじっさいに触れることができたら、そのことはあなたにとって貴重きわまりない学習になる。またさらには、その静かすぎる肉と身のほうから「触れてもらう」ということが得られたら、あなたの学習はとてつもない飛躍の可能性を持つことになったと言える。
どこかへ抜けていってしまう身は、あなたがどのように抑えようとしても、本当に抜けていってしまうし、またその肉と身のほうから触れられたときには、あなたは何をどう踏ん張ろうとしても、わけもなく動かされてしまうということを知るだろう。そんなバカなとしか思えないことが、何度やっても同じように繰り返される。
その経験はひとしきり、体の高揚を信仰しているあなたを混乱・パニックに陥れるかもしれないが（十中八九そうなるだろうが）、そのパニックの苦悶がいくらかあるとはいえ、その代償を払ってでもあなたはその学習を得ていたほうがよいのだ。人が体をもってただ生きているだけではなく、救われた「身」なるものに本当に至りうるのかもしれないということ、そんなことが本当にあるのかもしれないと、思い始めることができるようにだ。
さらには、ひょっとしたら本当に、「命」というものがあるのかもしれないと、思い始めることができるようにだ。

ありがとうの逆転

本当のことを勉強するつもりがあり、本当のことへ踏み出してみるつもりがあれば、ときに劇的に、身が救われるということがじっさいに起こる。
本当のことへの踏み出しというのは何だろうか、それは何のことはない、<<自分の生を、命の人の「身」の足しにしてみる>>ということだ。
自分の生を、命の人の足しにしてみる。命の人の「身」の足しにし

てみる。どういうことだろうか。わかるような、わからないような話だが、この話は逆の例を採れば把握しやすくなる。

われわれはふだんから、ここでいう「逆」のことをやっているので、無念だがわかりやすさとしては、その「逆」の話のほうがわかりやすい。

たとえばここに宗教施設があり、「命の人」という像が立てられていたとする。

「この像を拝めば、あなたは体の具合がよくなり、長生きできますよ」

とあなたは吹き込まれたとしよう。

そういうことならばと、あなたが真に受けたならば、あなたはその神像を拝むだろう。

それでもしあなたの体の病気が治ったとしたら、そのときは誰が誰の足しになったのだろうか。

そのときはもちろん、神像があなたの足しになっている。

「命の人」があなたの足しになっているのであって、あなたが命の人の足しになっているという成分はまったくない。

あなたは自分の体の病気が治ったことについて、神像に向けて、

「ありがとうございます」

と言うだろう。

それはもう、本当に病気が治ったのだから、ああ、こころの底から全力で感謝するに違いない。

あなたは、

「ウソ偽りない、このわたしの感謝をカミサマに捧げます！　ありがとう、ありがとう！」

と声を高めて神像を拝む。

どこからか「うーん……」と首をかしげる誰かの映像が浮かんできそうだ。

これは、わかりやすい話ではあるのに、どこか納得のいかない感触がある話だ。

だから、安心していいというのも変だが、そのような形で安易に奇蹟が起こったり、病気が治ったりすることはない。

仮に、信じて祈り求めることで祝福的な奇蹟が与えられるのだという設定にしたとしても、このような拝み方ではその奇蹟というやつは仕組みとして起こらない。

神像に対し、

「どうかあなたの権威を称えさせてください、そのために、どうぞこのあわれなわたしの体を治してやってください、わたしがあなたの忠実なしもべであるために」

ということなら、ここでは設定上、その奇蹟というのは与えられる。

讃美歌というのは、カミサマの栄光を讃える歌であって、病気が治った人の「よかったね」を讃える歌ではないのだ。

命の人があり、生きている自分があったとして、生きている自分を高めるのに「ハレルヤ！」と言い出すのはいかにもおかしな話だ。

もし、神社の本殿にお賽銭を投げ入れ、それで願い事が叶うのであれば、その装置はまるで「成就の自動販売機」だ。そんな話はあきらかにおかしいだろう。

あきらかにおかしいはずなのに、何がおかしいかはじつはわかっておらず、本心ではそうした自動販売機こそ「ありがたい」「あってほしい」と願っているほど、われわれは愚かしく、生死軸に自らを括りつけている。

どのようにすればこの違和感と愚かしさは解決されるだろうか。このようなことは、もう単なる知性あるいは一般教養としてでも、自らのうちで解決しておくべきだ。そんなに複雑なロジックを要するものでもない。

あなたは人からまんじゅうをもらったら「ありがとう」と言うだろう。

まんじゅう一個でも、生きることの足しになるから、あなたはその感謝を言う。

あなたが神像を拝んだとき、その足下からまんじゅうが一個、転がり出てきたとする。

あなたはどうするか。とりあえずまんじゅうを拾い上げ、「ありがとうございます」と言うだろう。
もういちど拝んでみたら、もう一個まんじゅうが出てきた。
「二個も、ありがとうございます」
とあなたは言う。
さらにもういちど拝んでみたら、三個めが出てきた。さらに拝むと、もう一個出てきた。またまた拝むと、またまたもう一個。どうやら何個でも出てくるらしい。
それであなたはまんじゅうをパクパク、何個も食べ、
「いや〜　ありがとうございます。満腹ですよ、さすが神！　げふっ」
と言う。
そこからさらに、あなたは思いついて、
「あの、差し支えなければ、持ち帰り用に、あと五個ぐらい拝んでもいいですかね？」
これは何やら危なっかしい感じがしないだろうか。カミサマにまんじゅうをせびって満腹になっていく。そのことをもって「神！」と称える。それは何かがおかしいとわれわれの魂は違和感を告げる。
こんなもの、お金持ちの足許にすり寄っても同じことではないか。
またこのようにも考えてみよう。こんどはあなたが、自分の昼食用に、まんじゅうを三個持ってやってきた。
昼食の準備をしようと、まんじゅう三個をいったん、神像の須弥壇に置いたのだが、ふと見ると、三個あったはずのものが一個減り、二個になっていた。
「あっテメエ、神さまコノヤロウ、神だからっておれのまんじゅうを食いやがったな。神のくせにふてえ野郎だ」
これも聞いていてあきらかにおかしいのだが、何がどうおかしいかというと、われわれはその違和感を明瞭に説明できない。とりあえず、カミサマに向ける態度やことばづかいじゃないだろうとは断言できるのだが、どうもそれだけではじゅうぶんな説明になっていない。

これは何がおかしいのかというと、彼が拝んでいるのはカミサマなどではまったくないということなのだ。彼が拝んでいるものは彼自身の「生」だ。彼は生死軸に所属していて、その軸の頂点には彼自身の「生」がある。彼は自分自身の「生」を見上げているにすぎない。
彼は、自分の「生」が降って湧いてくることを拝み、そのことじたいを「神！」と言っているのだ。
自分の生が降ってくるということが彼にとって神であって、「命」うんぬんなどというものは、びっくりするほど彼とは無関係だ。
だから、彼の目の前に「命の人」が現れたとしても、そのことは彼にとって何もありがたくない。彼にとってありがたいのは、目の前に自分用の「まんじゅう」が現れるということに尽きる。
もし、彼が神像を拝んでも何も起こらず、近くにあった扇風機を拝めばまんじゅうが転がり出てくるということなら、彼はためらいなく扇風機を拝み続けるだろう。
神像を拝み、その祝福やご利益を求めるふうという、外形上は似たようなことをしていても、彼の内にはカミサマを拝むというような成分はわずかもないのだ。
わかりやすさのため「逆」の話をしているのだった。
「順」の話はどうなるかを考えよう。
奇妙なことだが、ここでの設定上正しく奇蹟が起こる場合、拝むほどに彼のまんじゅうは「減っていく」ということでなければならないのだ。
彼が持参してきたまんじゅうが、神像を拝むごとに一個ずつ減っていく。
それで彼が、こころの底から、
「ああ、ありがとうございます」
と言うようでなくてはならない。
これはなんとわかりづらい話だろう。まんじゅうが減って「ありがたい」という話はない。
このことについては、多くの人はさすがに意味がわからないと苦笑

するだろう。
けれども一方で、逆に何かの納得がいく、という遠い直観を覚える人もあるかもしれない。
次々にまんじゅうが減っていって、何がありがたいのか。
このことは、じっさいに体験したことがある人にはわかる。宗教的な話ではない。むしろじっさいにこのことを体験した人は、わざとらしい宗教など要らないときっぱりと言うだろう。
まんじゅうが減るごとに、
「あれっ？」
景色が変わっていき、自分は何か外国のようなところに立っている。
いつもの景色のはずが、ぜんぜん違うところに自分はいる。
「何これ」
スーッと何かが消えていく音がする。
あっというまのことで、理解はとうてい追いつかず、そのことは進行していく。
「えっ、えっ」
身が救われていく音がするのだ。
自分が何かをしているわけではない。
ただ、これまでの「しんどかったもの」が、どこへともなく消え去っていく。
「これまで、こんなにしんどかったのか」
何がしんどかったのかはわからない。ただ、「しんどかったもの」があったらしい。
それが何だったのかも、いまはもうよくわからない。それはいま消えていってしまったので、それが何だったのかは、もう推測するぐらいしかできない。
「わたしは、本当は、こういうことがしたかったのか」
こういうこととは何か。それもうまく説明できない。
まんじゅうが消えて何がうれしかったのか。
わからないが、ただ自分は本当はこういうことがしたかったんだと知って驚いている。
当人が驚いているのだ。
なぜそういうことがしたかったのかと訊けば、彼は、
「わからない」
としか答えられない。彼はもちろん、生まれてこの方、まんじゅうが消えてほしい・減ってほしいなんて思ったことがない。
何もかも、彼の理解が追いつくところではない。彼は消化不良のままこのことを捉えるしかない。
とにかく、じっさいに身に降りかかるものとして、ヤバいぐらい「しんどいもの」があるということ。自分はこれまでずっとそれに囚われていたということ。
その「しんどいもの」を、取り去ってくれる存在があるということ。
その「しんどいもの」は、どうやっても自力では取り去れないもので、そんなものを、一撃で一瞬で、あっさり消し去ってしまう、すごいものが存在しているということ。
彼はそのとき、真に神像を見上げて、
「この人なんだ」
と知り、全身で震える。全霊は歓喜している。
話をわかりやすくするために、ここでは神像という設定にしている。
設定のことはどうでもいいのだ、本質は「ありがとうの逆転」にある。
まんじゅうをもらうことや、まんじゅうを差し出すことは、われわれにとってありふれたことだ。
それに対して「ありがとう」が言われることもありふれている。
ただ、まんじゅうを差し出した側が「ありがとう」を言うという文脈はまずない。
ふつう、まんじゅうをもらった側が「ありがとう」と言うのであって、そちらの文脈はいかにも正常だから、ここで話していることは、「ありがとうの逆転」と呼ぶことができる。
病気が治って神像にありがとうを連呼したという例にあった違和

感が、これで解決されよう。
まんじゅうをもらってありがとうというのは、正常だが、祈りでもないし奇蹟でもない。
じっさいの例をふたつレポートしよう。
ある人は、大事な客先に持っていくための高級な菓子を買いに出ていた。ただし、彼女自身の用事ではない。
彼女の友人が忙しくしていて、その菓子を買いに行くヒマもないという様子だったので、彼女のほうから「わたしが買ってくるよ」と申し出たのだ。彼女は自転車で駅前に向かった。
駅前で数店舗を検索したところ、思いがけず品ぞろえは不十分だった。大事な客先に持っていくのにふさわしいものを買おうとしたら、二駅向こうのデパートまで行くしかなさそうだ。自転車で行くにはかなりの距離となる。
「うわ、それはちょっと……」
と彼女は思った。この駅前の時点ですでに日も暮れ始めており、人込みに揉まれてすでに疲労感が蓄積してきている。
けれども、忙しくしている友人のことを思い出すと、彼女はひるがえって、
「いいや、わたしがやりきろう。どこまででも、買いに行くよ」
と決意した。
するとそのときから、彼女の身にはまったく不思議なことが起こったそうだ。彼女はこれまで、何かが根本的に「しんどい」と感じながら生きていたのだが、なぜかその二駅ぶんを自転車で往き、お目当ての菓子を見つけて買い、また復すとき、彼女の身は果てしなく軽く、「どこまで行っても疲れない」
という状態になったそうだ。
そんなことは、彼女にとって生まれて初めての経験で、
「あの手前で止まっていたら、つまり駅前の時点で引き返していたら、そっちのほうがぜったいにしんどかった。あそこで、二駅向こうのデパートまで行くって自分で決めて、自転車を漕ぎ出したときから、大げさじゃなく人生がガラッと変わった。いままで何もかもが根本的にしんどかったのに、しんどさがぜんぶどこかへ消えていって、本当にこんなことあるんだって驚いた。信じられないようなことだった」
ということだそうだ。
またある人は、かなり長い期間、理由もなく暗い気分に追い詰められていた。まともな学校を出て、まともな仕事につき、すべてのことを頑張っているけれど、いつも夜眠るとき、
「もう朝なんか来なければいいのに」
という思いがしていたそう。それでも朝はやってくるので、寝床で目覚めたとき、
「絶望、で目が覚めるんです」
ということだった。
彼女は、この絶望的なものをどうしたらいいんだろうと、いろんなところに行って勉強しようとしていた。そうして彼女なりの努力も勉強もするのだけれど、けっきょくのところ絶望は消えず、自分から悲しい声や、悲しい表情が出るのを止めることはできなかった。
「とにかく、つらいんです、何がつらいのかわからない、こんなことで騒いだら迷惑だってわかっているんですけど、でも本当につらいんです、どうしたらいいんでしょうか」
それは本当にまったくどうしようもないことだった。原因があるなら解決の方法もあるかもしれないけれど、原因が見当たらないので解決のしようがない。一般的な宗教の聖典もなるべく読んでみたけれど、それが解決をもたらすということはけっきょくなかった。
何かしらの勉強会に出ても、彼女の「つらさ」が先行して、じっさいの現場では勉強どころじゃない、手につかなくて頭に入ってこない、という状態だった。
本当にもう、何もかも終わりなのだろうかと、彼女がほとんど絶望に呑み込まれかけていたとき、彼女に向けて友人が、
「どうしても、何もかも終わりだというなら、この勉強会の資金面でもバックアップさせてもらったら？　それだって、参加していること

になるし、協力していることになるんだから」
と彼女に勧めてみた。すると彼女は、なぜか急にはっきりとした声で顔を上げ、
「え、いいんですか？　そんなこと、させてもらえるんですか？」
と言った。
そのとき周囲にいた全員は、彼女の様子に、
「あれ、なんなんだこの感じは」
と打たれるような思いがした。
直観に聞こえているところに慎重になり、彼女には仮名が与えられることになった。彼女はあくまでその仮名でしばらく勉強会の資金面をバックアップすることになった。
彼女の言うところ、その仮名が与えられて、その仮名の基金を自分が担うことになった瞬間から、
「すーっと、すべてのものが消えていったんです」
ということだった。彼女は身振り手振りをつけて、その消失のときのことを何度でも話す。
「本当にすーっと、すべてが消えていって、わたし本当は、こういうことがしたかったんだって、そのときはじめて知りました」
そのとき以来、彼女が絶望の中で目が覚めること、また絶望の中で眠りにつくというようなことは、一切なくなった。悲しい声や悲しい表情が出ることはなくなり、彼女はむしろどう見ても明るいムードを持ち込むタイプの人になり、その意味ではまったく別人のようになってしまった。
以前は何に絶望していたのか、そしてそれがどのような絶望だったのか、いまはもう思い出すことさえできない。何がつらかったのかと訊いても、何がつらかったんでしょうね？　と本人がとまどって笑うことしかできない。
ただ、
「それはとんでもない絶望で、ひたすらつらくて、自分ではどうすることもできないんです。それだけは覚えています」
ということだそうだ。
彼女もまたはっきりと、その瞬間から、大げさでなく人生がガラッと変わったと言うだろう。
そうした現象がじっさいにある。じっさいにあると言っても、測定ができるわけではないし、実験して再現性が確かめられるものでもないので、根拠や証拠が示せるわけではないけれども、かといってこれまで何度も繰り返し起こるこうした現象のことを、証拠がないからといってレポートせずにおくというのも不誠実なことだ。
じっさいの例をふたつレポートした。同じ現象は他にも無数に目撃してきているが、その中でも最も劇的で、その際やかさがわかりやすいものをレポートした。この現象のあらわれ方にはいくつか変形のパターンも見られるように思うが、どれもこれも、いくつかの順序が前後するようなところがあるだけで、現象としては同じもの、仕組みとして同じもののようだ。
その本質は「ありがとうの逆転」にある。端的に言って、<<消耗した側が「ありがとうございます」と言う>>ということ。まんじゅうが減った側がありがとうを言い、体力と時間を消耗した側がありがとうを言い、資金を支出した側がありがとうを言う。
そんなことが有り得るのだろうか、という気がする。もちろん常識的な文脈の中では有り得ないことだ。少なくとも、そんなことが有り易いということはあるまい。そのようなことは、もしあったとしても有り難いことだ。
けれどもわれわれは、そのことをまさに「有難うございます」と言っているのだから、むしろその有り得ないようなことのほうこそが、本来の有難いことなのかもしれない。
生死軸に属するわれわれは、軸上に自分の「生」を見上げている。まるでそれが神であるかのように。
そして誰かからダウンフォースを向けられたときには、ムンを立ち上がらせ、我慢スコアを足して、立場を入れ替えるということをしている。

ムンが「しんどい」のかもしれない。それはそうだ、我慢が「しんどい」のは当たり前だ。

そして自分が、自分の生だけを崇めて、今日も明日もムンばかりを繰り返すということが絶望なのかもしれない。

わたしが本当にやりたかったことはそんなことじゃない、と、自分では気づけないのかもしれない。

スーッと消えていくというのは、ムンが消えていくということの聞こえ方だろう。

消耗する側が「ありがとうございます」と言うのは、生死軸においてはイレギュラーだ。生死軸上、ダウンフォースを受ける側は、悲しみと痛みで傷つく立場にある。死ねと言われるのは悲しく、さらに生を吸い上げられるのは屈辱だった。それを「ありがとうございます」なんて言わない。

消耗する側が「ありがとうございます」と言い出したなら、それは生死軸そのものの破綻を意味している。死ねと言われたら悲しいが、生きろと言われたら励まされる。生を吸い上げられたら屈辱だが、命を分配されたら身に余る光栄だ。それはもう生死軸ではない。

冗談でなく、「身」がギューンと上方へ引っ張り上げられる感覚が起こる。命のほうへ引っ張り上げられ、自分の身の中心に上昇する奔騰を感じ、オオオオオという叫びが起こっているのが聞こえてくる。これまで何もかもにあった「しんどい」はどこへともなく消えていった。自分はこれまでとまったく違う景色の中に立っている。わたしはいまどこにいるんだ、というより、これまでのわたしは何だったんだ。

それが現象の本質であって、その現象を目前に見れば、その中で急にちょっとした病気が治ったとしても、

「そりゃあな」

というふうに、なぜかそれは納得するほうが当たり前のことに見える。

わざとらしく宗教的な設定など持ち出す必要はない。

むかし、急にわたしのところに、

「うなぎをオゴりたくなった」

という人がやってきて、とにかくわたしはうなぎをごちそうになったのだが、その後その人から、

「あれ以来、持病だった不整脈が治った！」

という連絡を受けたことがある。

たしか文末に、「とにかくありがとうございます！」と書いてあったっけ。

いまにして思えば、病気が治ったというより、ムンで病気が起こっていたところ、ムンが消えたので病気も消えたということなのじゃないかと思う。

消耗した側が「ありがとうございます」と言う、あるいは、傷ついた側が「ありがとうございます」と言う。

ありがとうが逆転するとき、生死軸は破綻し、ムンは消失する。

生死軸の例外が「かわいい」という現象

昼間に空を見上げれば太陽があるはずで、あなたがそれを見上げたら、そこにはあなたの太陽があるはずだ。

太陽というのは不思議なもので、人それぞれ見上げればそれが「わたしの太陽」に見える。にもかかわらず、その太陽は他の誰に対しても太陽のはずだということが理屈でわかっているのだ。誰に対しても同じ平等な太陽のはずなのに、われわれはそれを見上げたとき特別な「わたしの太陽」とも体験する。

そしてさらに奇妙なことには、その太陽は自分にとって宇宙で一番身近な存在のようにも感じるのだ。それでいて当然、太陽はわれわれから最も遠いところにあり、どのようにジャンプしてみても最も手が届かず、何をどう努力したところで横並びにはなりえない高さにある。そうして一番及ばないものでありながら、生涯を通して最も身近な存在でもあるのだ。最も失いようのないものでありながら、最も手に入りようがないもの。

この太陽にかかわる体験の謎は、逆に身近すぎるがゆえに考えるのを後回しにして、おそらくわれわれは最後までその謎には取り掛からないのだろう。それでもなお、太陽はこちらを見捨てることはせず、そっぽを向くとしたら太陽ではなくわれわれのほうだ、「わたし」がそれに背を向けるということがあるだけだ……

仮に太陽が命の存在であるとすれば、われわれは太陽に「命じてください」と求めればよさそうなものだ。太陽はわれわれに向けて「生きろ」と言い続けているだろう。それがリフトフォースとダウンフォースだが、それぞれのフォースは自分の所属する軸によって翻訳されるので、太陽の側がどうであっても、われわれはわれわれの側でそれぞれの翻訳をする。するといっそ面白いことに、生死軸にいる者にとっては、太陽が自分に向けて「死ね」と言っているように聞こえるということになる。太陽がこちらの生を吸い上げて、そのぶんお前は「死ね」と言いつけているように聞こえるのだ。

馬鹿馬鹿しい話に聞こえるかもしれないが、歴史的に太陽神に「いけにえ」を捧げてきた民族は存在したのだ。いけにえを捧げるというのがじっさいどのような魂の光景だったのかはわかりようがないが、もし単純に太陽が「生きろ」と命じていると聞こえていたならば、そう安易に人々は「いけにえ」という死の儀式を敢行はしなかったはず。

吸血鬼ドラキュラは太陽の光を浴びたら砕け散ってしまうが、太陽の光を浴びず、夜に人の生き血を啜り続けるうちはずっと生きていられるのだ。

人々がこれまで太陽のダウンフォースに「生」を聞き取ってきたか「死」を聞き取ってきたかは定かではない。

かつて、ウェブ上で見かけたコメントでわたしが面白いなと思われたものがある。アニメ映画「耳を澄ませば」を観た人々が、一部にはっきりとした傾向として、

「死にたくなる」

と言い出したことがあったのだ。わたし自身にはその感覚はなかったけれど、言われてみるとどこか、なるほどな、という感触を覚えもした。

まぶしすぎるから死にたい、というようなこと。まぶしすぎるものを直視させられて、何かが砕け散りそうだ、死にたい、というようなこと。どれだけ背伸びしても、ジャンプしても、手の届かない世界。それを最も親しく見せられて「死にたい」と思うことがあるようだ。

太陽にせよ世界にせよ、そのダウンフォースがどのようであるかというより、そのダウンフォースを翻訳するのはけっきょくわれわれの側だということのようだ。わたしは「わたしの太陽」としては、わたしに死ねと言っているようには聞こえないので、ひとまずわたしとしては、太陽は「生きろ」と命じているということで話を進めよう。

太陽あるいは世界そのものに命があるとして、そのまぶしい命はやはりわれわれに「生きろ」と命じている。けれどもそれは異軸翻訳されるから、生死軸の者には「死ね」に聞こえる。

「世界は自分に死ねと言っている」

「だから、正直に言えば、死にてー」

もしそのように聞こえている人が思いがけず多いのだとしたら、われわれはいよいよ、

「みんなどうやって生きているんだろう?」

ということを考えていかなくてはならない。

朝起きた瞬間から「死ね」と言われっぱなしで、夜寝るときまで変わらず、さらに翌日も翌々日もそれは変わらないとなれば、生きていくことに活力やよろこびなど持ちようがない。太陽も世界も風も雲も、木々も花々も、小川のせせらぎも山の稜線も、自分に向けて「生きろ」

と言っていてほしいものだ。そのすべてから一斉に「死ね」と言われ続けるのはさすがにごめんこうむりたい。

「生きろ」と言ってもらえること、そう命じてもらえることが必要で、特に年齢の若いうちはそうしたものに励まされる必要があるだろう。「生きろ」という声。その声を聞き取ることができれば、いまふうに言うところの「元気がもらえる」ということがあるかもしれない。元気というのは「元の気」だから、本来はヨソからもらうものではないけれども、ここではそういう意地悪な言いようは控えよう。ここでは「いわゆる」元気がもらえるもの、ということで話を進めたい。

天の太陽の次は、地下に目を向けてみるとして、たとえば地下アイドルでも、人気があるのはファンたちにとって「元気がもらえる」存在だからだろう。Vtuber などに至っては、もはや合成されたイメージであって当人というものじたいが存在しないアイドルだが、それでもかまわないしむしろ新しくて良いというふうに多くのファンを獲得している。それもやはり、じっさい「元気がもらえる」から人気があるのだろう。

そしてなぜ元気をもらえるかというと、アイドルが「かわいい」からのようだ。そのように取扱説明書に書いてあるわけではないが、どうやら「かわいい」ならば「元気がもらえる」という因果関係があるらしい。そこは、状況から見て明らかな蓋然性だけでよいだろう。たしかに、竹やぶに祀られているお地蔵様を眺めていたからといって元気をもらえるわけではないだろうけれども、一方でなぜ「かわいい」なら元気をもらえるのかについて、これまでよく考えられているわけでもない。

「握手会に行って、推しから『がんばってね』って言ってもらえて、またそれが超かわいくて、ものすごい元気もらった、生きがいだわ」

太陽から「生きろ」と言ってもらえて元気がもらえるならそちらのほうが安上がりでよいだろうが、そうもいかず、太陽が「生きろ」とは言ってくれないので地下に通ってアイドルのパフォーマンスを観る。その会場まで足を運び、グッズを一通り買うというようなコアなファンでなくても、いまやアイドルの「推し」なり「担当」なりを持っているのは若年層においてごく一般的なことらしい。そしてじっさいに、そこから「元気をもらっている」という向きはすでに既定のこととしてあるようなのだ。

わたしがわたしの年齢で「推し」を持っていたとしても若い人たちはわたしを笑わないだろうが、わたしが「太陽が生きろと言っている」などと言い出せば、そのときこそ彼らはわたしのことを笑いそうだ。それはまったく健全なことだと思うしわたしも逆の立場だったら確実にそうしたと思うが、それはともかくとして、なぜ「かわいい」なら「元気をもらえる」のかはやはりあるていど解明しなくてはならない。

生死軸において、下向きには「死ね」のダウンフォースが出るのだから、アイドルに対してファンたちは、下の立場にあってはいけない。かといって平等というのも変なので、つまりファンたちはアイドルたち、特に「推し」に対しては、自分（たち）のほうが上にあるという感覚があるはず。自分たちが上にあるからこそ、その対象アイドルを「推し」と言うのだろうし、推しに対して「応援している」という言い方になるのだろう。

野球のチームがあったとして、監督が若い選手を「推す」ことはありえても、若い選手の側が監督を「推す」ということはありえない。われわれが立候補者から誰かを推して議院に選出するのは、われわれの側が主権者であって上位だからだ。為政者の側から「キミを国民として推そう」というような発想があっては不気味でたまらない。子供のピアノ発表会があれば、母親は自分の子を「応援」するだろうし、現代では舞台上のパフォーマーより観客席の消費者のほうが上という感覚があるのだろう。

二十年前には、アイドルグループのセンターを「選挙」で決めるというような発想はなかった。選挙があるということは、有権者があるということで、それが民主的であるならば主権は民たちの側にある。そうしてファンの側に主権があるのであれば、たしかにアイドル側か

らファンの側へ「死ね」のダウンフォースは発生しないことになる。そのことの安心感をもって、ファンたちはライブ会場に足を運んでいるのかもしれない。

ただそれではここに疑問が残る。それは、ファンの側が「上」なのであれば、こんどはファンの側からアイドルの側へ「死ね」のダウンフォースが起こってしまうはずだということだ。わざわざライブ会場に来て「死ね」をぶつけるようでは、まともにライブ活動などやっていられない。若いころのボブディランのライブではないのだから。

この疑問については単純な解答がある。ファンたちからアイドルに向けては「死ね」のダウンフォースは発生しない。それは「かわいい」からだ。子猫などを見ればわかるように、「かわいい」というのは弱い者のほうに発生するものだ。母親にとって子供はかわいくても、子供から見て母親をかわいいとはあまり言わない。老人になって完全に腰が曲がり、髪の毛のすべても真っ白になっていったというなら話は別だが、それにしても「かわいい」は基本的に弱い方に発生するのだ。

たとえ生き死にの戦争をしている真っ最中の兵士たちでも、戦地で民間人の子供たちを見て、その子供たちが「かわいい」ものに見えた瞬間、彼らの銃口はその子供たちのほうには向かなくなる。子供たちも武装しているかもしれないが、兵士たちは全力で、子供たちに「余計なことをするな、じっとしていろ」と命じるだろうし、そのように全力で念じるだろう。

生死軸・生きもの・体の中で生じるイレギュラーの現象がこの「かわいい」だ。小さくか弱いうち、強者の庇護を求める本能的シグナルを発信できるように造られている。また大人の側も、それを強く受信してしまうように造られている。山で獲物を捕る猟師も、まだ敵意や危険を知らずこちらに寄ってきてしまう子供の動物は狩猟の対象にせず、大きな声を出して追っ払う。

とはいえ、われわれが堪能しているアイドルやアニメの「かわいい」には、ある種の警告音が鳴り響いているように思える。なぜなら本来の「かわいい」は、じっさい子猫のように強者の庇護が必要なか弱いものが生をなるべくまっとうするために具えられたシグナルの機能であって、それを「かわいいは作れる」という発想から模造して使用することは、咎（とが）に及ぶ可能性があるからだ。

子猫がニーニー鳴けば、母猫は乳を与えにやってくるだろうし、それどころか異種のわれわれヒトでさえ、猫用ミルクを与えようとして割と必死にやってくるだろう。仮にそのシグナルを発生させる装置を自分の体内に仕込むことができたとして、その装置のボタンを押して本当によいものだろうか？　そのボタンを押せば、食事も衣服もあたたかい寝床も、誰かが必死で与えようと持ってきてくれて、さらには欲するならアクセサリーや花束や、目立ってちやほやされる立場なども与えようと必死になってくれるとしたら、そのボタンをわれわれは本当に押してよいのだろうか。

さらには、そうした一方的な献身は、そのボタンを押すことでしか自分には与えられそうにないというとき、果たしてわれわれはすべてをあきらめて、そのボタンと装置をいさぎよく放棄し、解体することに向かえるのかということにもなってくるけれど……

われわれはこの「かわいい」について考えるべきことを残している。もう少し考え進めてゆくとしよう。

われわれはなぜ、作られた「かわいい」を見下ろして「元気をもらう」と言い出すのだろう。

太陽を見上げて元気をもらうということなら、こうした話は必要なかったのに。

太陽は彼に「生きろ」とは言ってくれなかったか。

幻想を強化した

インタラクティブ性

じっさい「かわいい」は現代では大きな評価を受ける。動画の再生数もファボの獲得数も、かわいくないものに比して一万倍になる。一万倍というのは冗談ではないし誇張でもない。かわいくなければ「は？」と無視されるか、あるいはどことなく「死ね」という風を吹き込まれるのに対し、「かわいい」ということであれば向きは一気に反転して「ありがとう」「いつも元気もらっています」となる。かわいいというのは生のもので、生は体のものだから、極論でもなくかわいい「体」だけを表示していてもこのことは成り立つ。性的にムンという音の鳴っていそうな、若い女性の体をこれ見よがしに表示し、顔から上は映し出すことをせず、ただ編み物をえんえん続けているような動画でも、それに対して「元気をもらいました」という露骨なコメントが多数つく。コンテンツとは呼ばれていても内容はまったく無関係なのだ。高校生の女子が陸上競技の大会に出ている動画があったとして、彼女がその競技に鍛えられた体を示し、その体が美貌めいて「かわいい」ものだった場合、それだけを理由に再生数といわゆるファボは数百倍から数千倍になる。そして彼女がその大会でどのようなスコアを得たかは誰も覚えていない。それどころか目撃さえしていない。視聴者たちは彼女の「体・かわいい」を見下ろして愛でているだけだから。もちろん視聴者たちが空想に描き出したかわいいその女子高校生は、彼女本人ではなく彼らが幻想で創生したものにすぎないが、それでも堂々と彼らはその自分で生み出した幻想の彼女に向けるものとしてコメントを書く。

そのコメントが数千件に及ぶとき、よもやその女子高校生がひとつひとつのコメントに目を通しているとは考えられないだろう。もし何かしらのコメントを見かけたとして、彼女は「気持ち悪い」としか思わないだろう。「応援してくれていることはありがたいような気もするけれど、それより気持ち悪さが……」。そのようなことは誰でもわかっていそうなことなのに、数千のコメント側にはもう躊躇はない。これはコメントを入力する側が、すっかり幻想で創り出した彼女に「やりとり」を向けることに慣れ切っていて、じっさいの彼女がどう思うか、どう体験するかということは感覚の外側へ追いやられてしまったからだ。

インターネットと特にＳＮＳを契機にして、メディアは双方向性・インタラクティブ性を持つようになり、このことがわれわれの幻想強化に弾みをもたらした。相手に読まれていないコメントでも、入力した側は相手と「やりとり」をした錯覚に耽ることができるのだ。「体・かわいい」の彼女と、「元気をもらいました、ありがとう！」「がんばってください、応援しています」「すっかりファンです、これからも活躍を楽しみにしています」というようなやりとりをした。そのようにして、創り出した幻想と架空の関係までを幻想するようになったわけだ。

ひいては先の段に示したところの、アイドルまがいの「かわいい」女性が目の前の人をまるで認識しないという、これまでの人の機能性とは違う異様さを示すということも、成り立ちとしてつじつまが合ってくる。数千のコメントはすべて、ファンたちが幻想で創った下方アイドルに向けたものなのだから、彼女の側としても、これまでに誰かが彼女になにかを向けたわけではないのだ。誰も自分のことを見ないのであれば、彼女も誰のことも見ないだろう。ファンたちは「かわいい」という情感から下方に幻想のアイドルを創り出しているだけ。じっさい、現在（二〇二三年）すでに Vtuber などはよく知られたコンテンツで、Vtuber はもちろんその実物じたいが存在していない。それでも「かわいい」からいいのだということで多くのファンがついている。「かわいい」という情感だけがコンテンツなのであって、それは「誰」ということではない。ましてこの先はすぐにでも、その Vtuber のアイドル的なやりとりを、人工知能が代行しそうなのだ。音声も言語も、表情さえもまったく適切なものをモデルとマーケティングから選びとって。

人は文化的には、チョコレートケーキが好きたったり、イチゴのショートケーキが好きだったりするだろう。これが蟻だった場合、蟻は甘いものによってくるが、蟻は文化的ではないので、ただ甘いものに機械的に寄ってくるのみ。そのことと同じように、人はすでに「かわいい」ものに機械的に寄ってくるだけという状態を解発している。それが誰とか何とかいうことではなく、ただ「かわいい」という情感だけに寄ってくる。せいぜい、趣味や性癖などはあるかもしれないが、それにしたってそれは誰ということではないのだ。

そうして、「かわいい」のファンたちにとってはそこに「誰」もいないのだから、アイドルの側だって自分を「誰」として目の前の人に応接する必要はない。極端な話、そのへんの電柱に「かわいいスプレー」を噴きかければ、彼らは虫と同じようにその電柱に寄ってくるのだ。そのようなものに対してアイドル女性の側はもちろん死ねと思うだろう。だから彼女が相手をしているファンは彼らではない。彼女もまたそこに誰もいないファンに元気を与えているのだ。

現代を生きるわれわれは誰しもこのことについて相応の見解を持っておくべきだと思う。インターネットおよびSNSから膨らんでいったインタラクティブ性について、それは<<相互のやりとりを活性化することにはたらかず、相互が創生した幻想とやりとりをすること、その活性化にはたらいた>>。もし厳めしい言い方をするなら、かつて双方向性と思われていた機能は、じっさいには「相互独我共生」の機能として実用されたということになる。

相互独我共生だから、目の前に誰もいないような挙動になるのは当然だ。それでいてわかりやすい傍若無人というのとは異なる、まるで「仲良し」のような挙動をするのは、そのように共生しているからだと理解されるべきだろう。まったく思いがけない意味で、アイドルはファンを必要としているし、ファンはそのアイドルを必要としている。かわいい彼女はカレのことを必要としているし、またカレもかわいい彼女のことを必要としている。それはいわゆる相利共生だが、それだからこそ相手が「誰」という要素は存在していない。テッポウエビとハゼは相利共生するが、翌日にハゼが別のハゼに入れ替わっていたとしても、テッポウエビは何も思わないだろう。それは冷淡ということではなく、ただわれわれが旧来持っていた「人」への認知とまったく現象が異なるのだ。

「かわいい」と「ファン」は相互幻想によって成り立っている

ファンたちがアイドルを「推し」と呼ぶのは、ファンたちがアイドルを下方に見ていることの現れに他ならない。他に若くうつくしい、目立った女性なら、彼のクラスメートにもいるだろうし、彼の最寄りの都心部にもいると思うが、その彼女らは彼らに対して下方には立ってくれないので、彼らの側が「死ね」のダウンフォースを向けられるリスクがある。リスクがあるというよりは確実にそうなるだろう。彼らがそうして日常的には下位の者として扱われるとして、彼ら自身がその地位をよしとして受容したわけではない。彼らはそのような扱いを受けることに我慢をしていて、我慢スコアの付与で自分の地位を上位に巻き返している。そうして、土台のほとんどが我慢スコアだったにせよ、彼らは自らを上位者として、下位に「かわいい」を探している。かわいくないものに対してはいつもどおり、現代の「死ね」の風を吹き降ろすとして、例外的に「かわいい」があれば、それに対しては「死ね」とは思わない。ここに起こる奇妙な満足感を指して「推し」と呼び、現代のわれわれはその「推し」から「元気をもらえる」とい

うことを、日常にありふれたものとした。いまやその「元気をもらえる」というのは、われわれにとって不可欠の活力ともなってきているのだった。

いっぽうで、「かわいい」を代表するアイドルのほうも、じつのところ自分を下位の存在だなどと思っていない。彼女らはただの若い女性であって、むしろ一般の人よりも野心的な人たちでもあろうから、一般よりもずっと上昇志向が強く、何が好きかといえば「金持ちのイケメン」のほうがはっきりと好きだろう。野心的な彼女らが、本心からアイドル・オタクの彼らに向けて愛のほほえみやセクシーな嬌態を向けるということはありえない。

彼女らにとって、上位者とは思えない様相の男性ファンたちからジロジロ眺められるのは不快かつ屈辱でしかありえないはずだし、ゆがんだ欲望を体内に溜め込んだプロデューサーに媚びなくてはならない自分を認めるのも苦痛でたまらないだろう。ただ彼女らは、その耐えがたい不快と屈辱、その苦痛を「我慢」することで、自分の「かわいい」が極点を超えて発生するということにどこかで気づいた。彼女らの場合、その我慢スコアが直接の「かわいい」となって、彼女らに自信を与えたといえよう。

彼女らの「かわいい」はそうして、天然に付与されたものではなく、作られたかわいいであり、我慢から生じている「ムンかわいい」だ。そんなこと、当人らにとってはどうでもいいことだろう。ただ彼女らはライバルとの「かわいい合戦」で後れを取りたくないという一心に違いない。

ここで奇妙なことが見つかる。ファンたちは、自分の下方に「かわいい」アイドルを見つけているのに、当のアイドルのほうは、そんな下方には存在していないということだ。彼女らは、アイドルとして人に「元気を出させる」存在たるを自負しているだろうが、彼女らに対して上から目線で何かを言ってくるものに対して元気を出させたいとは思っていない。ファンたちが自分の下方にある「かわいい」ものだけが好きであるように、アイドルの彼女もまた、自分の下方にある「かわいい」ものだけが好きだ。だから彼女が「元気を出させる」という対象にしているのは、たとえば、

「○○ちゃんが生きがいです！」

とウェブ上にコメントを書いている誰かに対してのみ。

そしてそれは、彼女にとって架空の、作られた幻想の「かわいいファン」なのだ。

ファンが下方に架空の「かわいい」を見つけているように、アイドルも下方に架空の「かわいい」を見つけている。

本当はどちらの下方にも「誰もいない」のだ。会場には誰もいないという舞台の上で彼女ははしゃぎ、また舞台には誰もいないという会場の席でファンははしゃいでいる。

この、相互の不存在、相互の無関係ということが、思いがけずこの両者の関係を結果的に相利共生にしている。

ただしこの相利共生を成り立たせている、幻想を破壊してはだめだ。幻想を破壊する者は、ただちにもとの生死軸のとおり、一方的なダウンフォースを向けられる。

ひとつには、ファンがアイドルに対し、上位のものとして接触しようとすること。

「○○ちゃんには、ボクがいないとダメなんです、ボクが守ってやらないと」

と言い出すストーカーはむろんだめだし、

「ダンス中、ひとりだけターンのタイミングが合ってなくない？」

「芸能界で生き残っていくのに、もう料理キャラは供給過多なんじゃない？」

と口出ししてくるようなものもだめだ。

アイドルは、ファンがずっと下方にある「かわいい」ものだという幻想でその活動をしているのだから、急に「そうではないよ」と言い出すのは禁忌となる。まともな事務所なら、スタッフがその粘着をただちに「剥がし」にかかるだろう。

彼女にとってこの男はファンでも何でもないので、楽屋では全力で

「死ね」が言われる。

同様に、アイドルが金持ちイケメンの誰かと交際するのもだめだ。それが発覚した途端、やはり元のファンから全力で「死ねブス」が言われる。

このときの「死ねブス」は、思いがけず本心であって、うそいつわりないダウンフォースだ。「かわいい」は下方にのみ発生するので、アイドルが下方でなくなった瞬間、もうかわいくなくなる。かわいくないならブスだ。だからまったく真実味を帯びて、彼らは「死ねブス」を全力で言う。

某日に、その金持ちイケメンとの交際が発覚したとして、彼女の風貌はその前日と何ら変わっていないのだが、じっさいに彼女は彼らにとって「ブス」になるのだ。まったく、「かわいい」は下方にだけ存在し、彼女がその下方から逸脱した瞬間ブスになるということ、その原理に比べたら顔面がどうとかはどうでもいいのだということを如実に示している。このことについては元のファンたちの言いようにどうしようもない説得力がある、

「顔面が整っているスケベボディというだけなら、他にいくらでもいるわ、うぬぼれんなブス」

アイドルとファンの関係、また、敷衍して「かわいい」とそれが「好き」という関係は、相互が存在していないということによって成り立っている。この両者が近づき、両者の実態が接触してしまうと、むしろこの「かわいい」と「好き」の関係は壊れてしまう。「かわいい」は下方にだけ発生し、アイドルはその位置にのみ発生するのだが、その位置に「金持ちイケメン」のような強者を接続してはならない。金持ちイケメンはファンたちにとって幻想の対象ではないから。そのとき、圧力のかかった強化ガラスの端に致命的なくさびを撃ち込んだときのように、全面にわたって幻想が砕け散ってしまう。

アイドルから出発して、途中から本性をあらわし、むしろ命のものになりおおせたという例も、極少だが存在する。代表的にはビートルズなどがそれだ。ビートルズはもともとアイドル・バンドとして売り出されたそうだが、途中からそれはアイドルでも何でもない、世界と歴史を代表するミュージック・バンドになった。

そうした極少の例でないかぎり、アイドルとファンの関係は、相互が相互にとって「存在しない」ということでのみ成り立つ。ファン側はファン側の幻想、アイドル側はアイドル側の幻想に向き合っており、その相互幻想が、奇妙に相互に「元気をもらえる」ということを成り立たせている。

パフォーマンスが錯覚され、あこがれの生命軸が逆転する

「かわいい」ものに対して、一種の信仰のようなものが看取される。信者というような呼び方がされるのもあるし、アイドルのライブなどは、現場としてはたしかに新興宗教のような盛り上がりが見受けられるだろう。じっさい、多くの人はその「かわいい」から「元気がもらえる」ということは否定しないのだし、厭世的な世の中で例外的にそこからは生きる気力がもらえるということなら、それは信仰の対象となっておかしくない。竹藪に祀られているお地蔵様を拝んだところで「元気がもらえる」わけではない。

それなら、お地蔵様よりは「かわいい」のほうがリアルに、

「天使でしょ」

ということであっておかしくない。おかしくないと言っても、われわれは未だそのことの違和感を無視できるほどには至っていないが。

生命軸といって、こんにち誰も「命」なんてものは信じてもいないしアテにもしていないというのが実情だが、それでも「命」というのは人々にとってあこがれではある。青春の命、恋あいの命。仕事の命、芸術の命、あるいはちょっとしたやりとりや、ささやかなジョーク、何でもない日常すべての光景にさえ、命というものがあるなら、ぜひあってほしいものだとわれわれは思っている。もしそうした、愛や光や命というものへのあこがれがまるで存在しないのであれば、われわれの生はもっと単純でわかりやすかっただろう。上位者が生きるだけ、下位者が死ぬだけ、何の命もない世界だ、本心からそれでいいというならこれ以上わかりやすい話はない。

じっさいにはわれわれは、生死軸に納得していないし、なんでもかんでもに「死ね」というガスを噴き出す自分たちと周囲のありように、本心では辟易している。もううんざりなのだ。自分が「死ね」のダウンフォースを受けたくないものだから、吾我を驕慢させて、すべてのものをほんのり「死ねば」と思って眺めている。そうしてずっと自分を我慢スコアで守っている。自分がそうしているということは、他人もそうしているということで、自分も他人も相互にほんのり「死ねば」と言い合っている。それで、どうしても水面下では常にマウント合戦が発生し、マウント合戦に負ければ激しい屈辱を受け、マウント合戦に勝てばみっともないほど「スッキリ」する。こうしたことを八十年続けてあとは死ぬだけということが、こころの底からよろこべないということは明らかで、それでも脱出する方法がなくて絶望しているのだ。

そんなところに、どんな演出であれアイドルのように「かわいい」ものがひょっこり現れたら、絶望の中の例外として、

「癒されたわ、元気をもらった。もう"生きがい"になっているよ、いつもありがとう」

ということになっておかしくない。

ここでの生死軸うんぬんの話をしても、彼は彼女のことに関しては、

「あのコに関しては、そういうことの例外だと思う。死ねとかまったく思わないし、彼女もまた、誰の悪口も言わない純粋なコだから」

と断じるだろう。

「かわいい」は生死軸における例外だと述べたが、生死軸における例外ということは、

「つまり彼女は、命の中にあるんじゃないの？」

という気がしてくる。ここまで三つの軸、

・順生死軸
・逆生死軸
・生命軸

の話をしてきているのだから、生死軸の例外ということならば、「かわいい」という現象はやはり生命軸に属するんじゃないかと言いたくなってくる。

「かわいい」彼女が衣装を着、あるいは制服を着、かわいい体をあらわにして、かわいい表情を見せて、唄ったり踊ったりする。

そのパフォーマンスはすべて、生死軸のフォースを受けないのだから、

「命のパフォーマンスなんじゃないの？」

という気がしてくる。

じっさい、なんでもない放課後の教室に、制服を着た「かわいい」女の子が座っていたら、それだけで無条件の、青春の命があるように見える。

なんでもない坂道を、青年が走っていたら、ただのジョギングか、ただの急いでいる人だが、「かわいい」衣装を着た、「かわいい」体の、「かわいい」女の子が走っていたら、そこには何か人を惹きつける「命」があるように見える。

中年の女が駅前で泣いていても、「なんだコイツ」としか思わないが、スカートを短くした制服姿の女子高校生が泣いていたら、

「放っとけないだろ？」

と、そこに命があるような、そういう空想が湧く。

アニメ映画「サマーウォーズ」で、主人公の健二は、アルバイトがてらあこがれの先輩・夏希の実家に行くことになる。このヒロインの設定および、その夏希の実家という場所の設定は、サマーウォーズのストーリー構造には「まったく」関係ないのだが、もしここで夏希が夏男で、男の先輩の実家という場所設定だったら、そのサマーウォーズはまったく人気のないアニメ映画になったはずだろう。本作は夏希先輩が「かわいい」ということだけで、「これが夏でしょ、青春でしょ、命でしょ」と言い張られている。

もし「かわいい」がイコール命であったならば、「かわいい」は至便の、「命への特急券」ということになる。たとえばテレビドラマひとつを作るのでも、女の子にかわいい衣装を着せ、かわいい化粧をし、オープニングに意味ありげな表情をさせてそこに立たせておけば、それだけでもうそのテレビドラマには「命」があるということになる。じっさい、アイドルのパフォーマンスとしては、特級に「かわいい」女の子を中央に配し、「かわいい」衣装を着せ、「かわいい」体を露出し、「かわいい」ジャンプでもさせれば、それだけで客席はドカーンと盛り上がるわけだろう。「かわいい」女の子を橋の上に立たせ、待ち合わせでもさせておけば、それだけで何か物語の「命」があるように見える。これは真実としてやはり「命への特急券」なのだろうか。「かわいい」は生死軸の例外なのだから、

「そのとおり、命への特急券だよ、誰もあらがえない、『かわいい』は正義だ」

ということにしてしまえば、話のすべては簡単になり、まるでそのまま大団円を迎えそうな気さえしてくる。

われわれは「かわいい」女の子に（男の子にもか）、あれこれパフォーマンスをさせたがる。着せ替え人形のように、さまざまな衣装や制服を着せたがるし、歌わせたり、踊らせたりしたがる。笑顔にさせてみたり、走らせてみたり、泣かせてみたりしたがる。同じことを中年の男性には求めない。

われわれは「かわいい」に何を求めているのだろう。

われわれは潜在的に「命」にあこがれているのだが、「かわいい」にパフォーマンスをさせれば、「かわいい」は生死軸の例外であるため、すべてのパフォーマンスが命のパフォーマンスであるかのように見えてくる。あこがれているものが、特急券を得たごとく、ばかすか自分の体験として得られてくる。

仮に、あなたが演劇の脚本を書いたとして、その主人公は女の子だったとしよう。その劇作を命のものとするのはとてつもなくむつかしいことで、多くの場合は客席から「うーん」「つまんないなあ」という態度がこぼれてくるものだが、その主人公にとびきり「かわいい」女の子をキャスティングした途端、

「！」

客席は一気に主人公に惹きつけられる。そのための、わかりやすくかわいい衣装、肢体が大きく露出する衣装も用意した。主人公がくじけて泣くシーンでは、観客たちがグッと入れ込んでくるのがわかった。アンケートにも、

「主人公役の◯◯ちゃんが、かわいくて入り込めました！　最後の台詞のシーンでは泣きました、元気をもらいました！」

と高評価が殺到している。

命というものはどういうものなのだろうか。たとえば、急に話が変わるようだけれど、マーティン・ルーサー・キング牧師の最後の演説は、まるで人々に対して怒鳴るような声の強さだった。

山の頂上から、われわれに向けて、

「私の両目は、主の到来の栄光を見たのだ！」

と怒鳴りつけるようだった。

それを聞いていると、わたしなどは、上から押しつぶされてほうほうのていになりながら、それでも「生きなくては」と励ましを受けるここちがするのだが……

キング牧師の演説を、ひとまずパフォーマンスとして捉えたとき、そのパフォーマンスに対して、

「元気をもらいました！」
と返答するのはいかにもおかしい。
われわれは潜在的に「命」にあこがれているため、その命への特急券として、「かわいい」ものにパフォーマンスをさせたがる。「かわいい」は生死軸における例外なのだから、「かわいい」のパフォーマンスはたしかに、生死軸におけるそれとは違う性質のパフォーマンスを発揮する。
仮に、あなたの母親が年甲斐もなく酒に酔い、どこから引っ張り出してきたのか若いころの服を着て、もう体形に合わないそれを不格好にゆがませながら、腰を振って、
「イェイ！」
と言っていたら、あなたはそれをみてうんざりするだろう。
もちろん本心をこめてのものではないけれど、率直なところ、
（うざ。死んでくれ）
と思うはずだ。
それとまったく同じことを、「かわいい」がやったとしたら、あなたはそれに向けて「死んでくれ」とは言わなくなる。
それとまったく同じことを、あなたはあなたのパフォーマンスについて気にかけている。
自分が腰を振って踊ったとき、「死ね」と言われるようなものだったらつらいのだ。
その逆、
「元気をもらいました！」
と言ってもらいたい。
「かわいい」ということさえあれば、そのあなたのその希望は叶えられる。
その特急券を得たがっている人が多いのだが、なぜかその「元気をもらいました！」というのは、キング牧師のパフォーマンスとは違う。
このことは、こう説明されるとよい。
^^「かわいい」は、たしかに生死軸の例外だけれど、もしそれを「命」とするならば、生命軸は逆転し、あなたは逆生命軸に属する^^。
先ほど、ここまでに言及してきた三つの軸を再確認してきたけれど、じつはその三つですべてが語られたわけではなく、もうひとつ、逆生命軸というのがある。

・順生死軸
・逆生死軸
・順生命軸
・逆生命軸

逆生命軸においては、命が下で、生が上だ。
だから、逆生命軸における「生きろ」の励ましは、ダウンフォースではなくリフトフォースになる。
このリフトフォースの感触によって、
「元気をもらいました！」
というコメントが出ている。
順生命軸における「生きろ」はダウンフォースなので、打ちのめされてほうほうのていになるが、逆生命軸における「生きろ」は、リフトフォースなので"持ち上げられる"ように感じる。こちらの「生きろ」は浮上してふわふわするのだ。
そのように捉えることですべてが整合する。「かわいい」は下方・弱いほうにしか発生しないのだから、「かわいい」を命とするなら、その命は下方に発生するということになる。
生命軸といっても、逆生命軸は、「命を踏んづけて、自分の生に転化する」という軸だ。
だから、自分の下方に「かわいい」を置き、それにパフォーマンスをさせて、「命」へのあこがれを満たすと共に、それを自分の生に転化して、
「元気をもらいました、もう"生きがい"です」
とコメントしている。

「かわいいは作れる」といって、それを作って使用することには咎（とが）があるかもしれないと先の段で指摘した。その咎とはこのとおり、^^「かわいい」を作ってそれを命のごときに振り回すということは、生命軸にあこがれるあまり、逆生命軸に転属するという結果になる^^ということだ。もし命そのものに無上の価値があるのだとしたら、その命を踏んづけて自分の生に転化することには咎があるだろう。「かわいい」はやはり、生死軸における例外ということにとどまり、生命軸への特急券ではありえない。

ただ、われわれは潜在的に「命」にあこがれ続けているから、その生死軸の例外にわざとらしいパフォーマンスをさせたとき、それがあたかも命のパフォーマンスに見える・錯覚されるという誘惑に引き込まれるのだ。

現代のマンガもアニメも、コスプレも日常的な個人も、いかに「かわいい」を描くかということを競争のかなめにしているだろう。「かわいい」が描けたら特急券、生死軸から離脱して、あこがれの生命軸に転属できる気がしている。

でもその転属は逆生命軸への転属だ。なにしろ、もともとが「逆」生死軸にいたのだから、そのまま転属すれば「逆」生命軸に転属してしまうだろう。その典型は、「元気をもらいました」といって、「生きろ」という励ましがリフトフォースとして掛かるということに見つかる。持ち上げられるように感じ、浮上してふわふわする。

「計算が合わない」と感じるムン

「かわいい」場合は、評価が数千倍になったり一万倍になったりする。それは何もウェブ上だけのことではなくて、たとえば「かわいい」が達筆だったらその達筆についての評価も何倍かになる。かわいくないオバサンが達筆だったとしても「へー、すごーい」というぐらいなのに、「かわいい」が達筆だったら「すごい、こんな才能あるんだ！」「いや、彼女が努力家ってだけだよ」という踏み込んでエモーショナルな評価になる。ちょっとしたやる気のセリフを言ってみても、「すごい、カッコいい」ということになるし、たとえば就職面接で「わたしは○○をがんばってきました」と言えば、そのがんばってきたというのは何倍かグッと説得力とエモーションを強化されたぐあいで聞こえがちだ。それでよく「美人はトクよねえ」という言われ方をするが、こんにちでは美人にもさらに「かわいい」という要素を足したいところ。われわれはハリウッド映画に出てくる美女についても、なんとか「その素顔」というような切り口で、その女性が「かわいい」ということを見つけて、それを命だの愛だのということにすりかえて浸ろうとする。その美女が自宅で子犬をかわいがっている映像をレポートされると、われわれは映画を観る前にその女優が〝名演〟しているものだと前もって決めつけている。

こうして「かわいい」ということは、評価されるために何十倍も有利で、それだからこそ多くの人は、いまは男女にかかわらず自分に「かわいい」を獲得しようとしている。にもかかわらず、じっさいにその「かわいい」の有利を大きく得ている人も、思いがけないところで不満を抱えている。あるいはどこかで不満を抱えることになる。

計算が合わない、と当人は感じるのだ。そのことはあまり一般に知られていない。

たとえば 1000 の評価を得ているのであれば、自分の係る作品において、自分からは 1000 の命が現れ、1000 の愛が実現されるはずだ。「かわいい」だけに、実作はたしかにそれっぽい印象にはなる。「やっぱりプロの迫力は素人のそれとは違うよね」。

しかし、もし厳密に純粋に「作品」ということに向かって本当に魂で聞き取るならば、なぜか彼女の示した作品には彼女から 10 の命しか現れていないということが聞き取られる。そんな、計算の合わないことがあろうか。もちろん彼女自身も、自分の出演した作品、自分の手掛けた作品を、客観的な視点で見直すという機会はある。余裕をもって、しかし内心の奥深くでは、不安や傷つきやすさ、深い違和感などを抱えたまま。

出演している彼女の姿からは、やはり 10 点 の命しか聞き取れなかった。このとき彼女は、点数として 10 点 しか獲れなかったとは感じず、体感としては マイナス 990 点 になったと感じる。周囲の期待としても自分の見込みとしても自分は 1000 点 は出すはずだったのだから。

彼女はその巨大なマイナススコアにとてつもなく強いストレスを覚える。何が悪かったんだろう、と考える。彼女はひきつづき、自分が獲りえたスコアは暫定で 1000 点 であって、何か別のマイナス要因で――「たぶん何かに足を引っ張られて」――そのような惨憺たる実作が出来てしまったのだと考える。それはそうだろう、彼女のことをこれまで 10 点 と評価した人などひとりもいないのだから。

「こういうことには初挑戦だったし」

「まだまだ勉強不足のところが否めないな」

「現場の人間関係もあるよね。息が合わないな、と思ったまま、スケジュールに追われるようにやらざるを得ないところがあったから」

「これまですっごくがんばってきたし、今回はなんかすごいやれた気がしているから、その結果、できあがったものがこんな薄っぺらい、"ペラペラ" なもののはずないよね？　なんでこんなふうに見えるんだろう。でも、評価してくれている人は評価してくれているから、当事者からはよくわからないってだけなのかな」

何にしても マイナス 990 点 というスコアは甘受しがたい。彼女は精神的に不安定になる。彼女は「自信を失う」というとても苦しい精神状態になる。正確には、自信を失うという恐怖の穴に転落しそうになる。これからすぐ、また同じような仕事があるのに、その現場で自信がないなんてことになったら……そう考えると、彼女は夜な夜な恐怖におびやかされて、まともに眠ることもできなくなっていく。

そこで彼女は、自分のことを絶賛してくれる「ファン」たちの声をやさしくあたたかいものに感じざるをえない。

「すごい頑張っていたと思う」

「初めてのことに挑戦する、そのことじたいに感動した、元気をもらった」

「あれだけやってのけたのに、なおも勉強不足だと自分を戒めるところがすごい。人間的に謙虚なのだと思う」

彼女はふだん、1000 点の自分として、他の一般的な人たちを 30 点にも満たない者たちとして下に見ており、彼女が生きようとする強さのぶん下方向には無関心な「死ね」のダウンフォースを向けているのだが、このときばかりは例外的にファンたちの存在がありがたい。ファンたちはこのとき自分にとって大切なかわいい者たちで、

「わたしはじっさい、こういうファンの人たちに支えられているって本当に思います」

と本心から言う。彼女は引き続き 1000 点 の命の人で、ファンたちは彼女によって「元気をもらっています」と言い、彼女もまたファンたちの生の声を聞いているから頑張れるというように感じる。ただしファンたちのうち鈍感な者が、本当の芸術エンターテイメントを撮りうる人の名前を出して、

「〇〇監督の映画に出たらいいのに！　向こうもあなたのことを知ったらオファー出しますよ」

とでも言いだせば、それについてはたちまち切り替わりを見せて「死ね」のガスを噴出する。彼女にとって本当の命あるものは、彼女に自信を失わせる不安材料なのだ。

自信を失うということは、人にとって耐えがたい苦痛だ。しかもそれが自覚 1000 点 から 10 点 への転落では、とてもじゃないが受容できない。彼女はもうそこまで若いわけではなく、思春期のようにす

べてを一から捉えなおすというほどの余裕はない。

こうして彼女の内部は分裂する。片側では、自分は 1000 点 の命の人に違いないという自信および、それを裏打ちするファンたちの声。もう片側では、自分は 10 点 しか出せない、マイナス 990 点 のパフォーマンスを人前にさらしてしまう恥ずかしい者なのではないかという不安。それぞれに分裂する。ここではわかりやすく女優業のような例を採っているが、そうした職業に限定されず、これはわれわれの生きるすべてのことに当てはまる。すべての「かわいい」にあてはまるし、すべての「ムン」に当てはまるのだ。内部に分裂が起き、片側は「誇り高く安堵したわたし」がある一方で、もう片側には「容赦なく傷つくわたし」が用意されている。このような分岐路において、人は我慢・吾我の驕慢の道へ入っていくよりなくなるというのは以前の段で示したとおりだ。引き続きわかりやすさのため、「かわいい」を例にしてその典型的なムンの現象を追跡していこう。

現代において「かわいい」は本当にちやほやされているのだ。数十倍、数百倍、ときには一万倍も高く評価を受ける。ところが、肝腎なことにかかわると、なぜかいつも自分はみじめな思いをさせられる。SNSなどで何かについて意見を言うと、そのことは数万の「いいね」に追い風を受けて評価されるのだ。けれども、人々が未来に触れて本当に命のあるやりとりをするとき、そこで自分が意見の声を発すると、その声はものの見事に周波数が違う。自分の声がいかにそこにあった命をシラけさせるか、それは体験した自分が一番ゾッとするほどなのだ。

命のある思い出、命のある表現。命を帯びて本当に人をゲラゲラ笑わせること。命を帯びた友人、命を帯びた歴史、命を帯びた場所、命を帯びた姿、命を帯びた声。命を帯びた作品、命を帯びた「あのとき」のこと。そうした本当のものに包囲されたとき、自分の周波数がそれとはまったく合わないということを繰り返し体験させられる。なぜ？ 彼女としては計算が合わないのだ。本当の命を帯びたやりとりが現れるとき、そういうときこそ待ちに待った「わたしの出番」ではないのか。わたしはそこで権威を示すために、これまで安っぽくちやほやされることにもニッコリ笑って我慢を続けてきたのではないのか。

「計算が合わない」

そうしたことが繰り返される。

次第に彼女も自覚していかざるをえないところ、たとえば彼女が内心では「どうでもいい」と思っている映画に対して、ほんのり涙ぐんで見せて「感動しました、本当に泣ける映画ですね」と言ってみれば、そのことはやはり高く評価される。映画ではなくて彼女が高く評価される。「ヒロインの〇〇が△△するところ、あそこの演出へのこだわりが、観るものを惹きつけていますよね。ヒロインの心理描写がすごくよく表現されていてすごいと思います」。彼女がそうコメントすれば、「そういうのをちゃんと見抜けるあなたがすごいよ、やっぱ根本的にセンスあるんだ」という一般コメントがわんさか湧く。彼女は自分がかつて目論んだように、あるいは夢見たように、若くから文化人寄りの人物として評価される身になった。この夢の実現と実力にいったい何の暗雲があろう。

ところが彼女は内心でこう思っている。本当の文化の命を帯びた者を目前にして、本当の命を帯びた映画の話をさせられるのはいやだ、かんべんしてくれと。「風と共に去りぬ」はどうだったか、それについてコメントを求められて、自分の寒々しいコメントが虚空へ霧散していく、あのキツい時間と体験は本当にかんべんしてくれ。あれ本当に傷つくから！ わたしの意見やコメントは、誰もが「……」という感じで聞き流し、「なかったこと」「聞かなかったこと」にして、文化の命を帯びた者同士で、わたしにはわからない周波数で共鳴しあうのをやめてくれ。わたしの胸はこんなに大きいし、わたしの若い脚はこんなに美肌で生き生きしているのよ？ この股間がほんのり開かれることに惹かれない人はいないし、その力を超える人なんて存在していないでしょう？ われわれは生きるか死ぬかの存在で、命がどうこうなんてたわごとを見せつけられるのは気分が悪いわ。

彼女はこれまで他人の例としては致命的なシーンを見てきている。

意見を求められて、それっぽいことを言ってみた誰かが、その発言の空虚さについて、
「いや……なんつーか、話ズレているし、何言っているかわからないし。というかあなた、いまわれわれが何について話しているか根本的にわかっていないでしょ？　わかんないなら無理に入ってこないでよ。たぶんあなたって根本的にこういうことの経験も感動もないんでしょ、そういうのってバレるしごまかせないから。わざわざ恥を掻きに入ってこないでよね。あなたはいつもどおり、そのへんでかわいらしくニッコリ笑っていなさいよ」
　と、致命的なことを言われるのを見たことがある。また、それは致命的なことでありながら、周囲からは「そう言われて当然だよ」という認識で見下され、さらには笑われて当然という意味での冷笑もこうむったのだ。他ならぬ彼女自身、そのときにその冷笑をひらめかせた周囲の一人だった。自分はそういうふうに「どんずべり」したことはないし、自分にセンスがないとか、根本的にズレているとか、そういう致命的なことを言われたことはない。言われる由もない、言われる筋もない。ましてそれで人に見下げられて笑われるなんて、彼女は、「もし自分がそういうのだったら、わたし耐えられない、っていうかもう自分で死ぬと思う笑」
　と笑ってきた側だった。
　自分はそうしたみじめな存在とは対極の、一般から見上げられるほどの 1000 点 の人だ。それが今さら、いつぞや見たみじめな彼のように、致命的なことを言われて冷笑を受けて、晒し者になって醜くあわれな表情をさらせというのか。そんなことが受容できようはずがない。そんなことは、彼女が現代のポップスやアニメ・マンガから想定している「傷つく」ということのレベルにない。
　彼女は破格のムンをする。これまでにない大音量のムンを鳴らす。
「いや、だからさあ。ハー、なんつーか、たぶんわたしの言っていること、わかってもらえないと思うんですけど」
　何もかもを、誰も彼もを、下に見られるほどの高さへ行くしかない。我慢スコアを膨大に付与するしかない。事実、わたしのことをちやほやする人はこれまでにたくさんいた。他の人って、いうほどそんなにちやほやされてきていないんじゃない？　それってつまり、わたしのほうが上ってことだから。まあ、わかんない人には何を言ってもわかんないよね。根本的に頭の出来が違うというか、人間としての出来が違うからしょうがないんだと思う。脳が何かに支配されている人にわたしが取り合ってもしょうがない笑。
　ここに百人のムンがいたとする。この百人はぜんいんが自らで我慢スコアを付与している。よって、彼らの現わそうとする命や愛は、どこまでいっても計算が合わないことになる。仮に、百人の中で一人だけがムンで、他の人がそうでなかったなら、そのひとりだけのムンはいかにもおかしいと見え、計算が合わないというよりは「あなた自身が何かを誤解しているのだと思うよ」と周囲の声は満ちようが、百人が百人ともムンなら、相互が打算的にちやほやしあい、誰がムンだとは言われなくなるだろう。あるいは、百人うちの誰かが、他の誰かを「命がない」と罵倒したとして、その罵倒する当人も命がないのだから説得力にかけ、そのやりとりはただの炎上ショーになる。そうして互いにちやほやしたり、互いにショーじみて罵倒しあうことの中、それぞれのムンは自分についてだけ、
「おかしい、計算が合わない」
　と不満を覚えている。
　ぜんいんがそうなので、現代、ムンが流行し、「かわいい」が大流行し、それらのやり方で大成功を収めている人たちがたくさんいたとしても、その成功ぶりとは裏腹に、内面では「計算が合わない」ということで不安と不満が交錯している。計算上、自分がスーパースターならスーパースターの命が発揮されなくてはおかしいだろう？　それがまさか、一介のみじめな“しょぼくれ”と同程度、センスがなくて何もわかっていないかわいそうな人と同列というようなことが認められようはずがない。
「わたしがトンチンカンってことはないので笑」

ムンは自分の意見が通らず、自分の意見が自分でもなんとなく支離滅裂に思え、自分の意見が的外れでヒステリックで、自分のやることが自分のための言い訳に満ちているということ、本当に命がとびかう場面では冷笑の対象になること、それらすべてのことに、

「おかしい、計算が合わない」

と思い、不満でいながら、ずっとその真相に傷つくことに怯えている。そしてそのように「傷つくことに向かえない」ということにおいては、見下すところの一介の〝しょぼくれ〟と同程度なので、計算は合わないどころかやはりきっちり合っているのだ。ムンはそのしょぼくれと比較して、ムンの音量が大きいだけだ。

ムンが魔境入りする

都市伝説のたぐいは、どこまでが本当なのか、ただの都市伝説なのか、誰にもわかりようがない。むかし、ヨーロッパにアフリカのゴリラの存在が報告されたときには、あまりに信じがたくてＵＭＡ扱いされたそうだし、ベトナム戦争に先立ってアメリカの船がトンキン湾で攻撃されたというのは、アメリカの自作自演で陰謀だったという説が有力だ。いまでは禁止どころが悪魔の所業のように言われているロボトミー手術は、当時ノーベル生理学・医学賞を受けた。足裏の反射区を刺激して全身の調子を良くしようというマッサージだって、人によってはただのオカルトということになる。脳を電磁波から守るために金属箔を巻いて寝るという人もいるそうだが、そうしたもののすべてはウソかまことかよくわからない。われわれが一般に使う鎮痛剤だって、「どのていど効く」のかは未だ定量化できていない。ただ習慣的に効くと知られているから使われているだけだ。現代、インターネットが普及して、調べればあたかも何もかもが身体に悪く、何もかもが陰謀に満ちているように言われている。まさかそれらのすべてを真に受けるわけにはいかないし、すべてを真に受けている人はさすがに少数だ。わたしが子供だったころには、マクドナルドのハンバーガーの肉はミミズの肉らしいという都市伝説がまことしやかにささやかれたし、コーラを飲むと骨が溶けるという都市伝説、自分で耳にピアス穴をあけると視神経が飛びだして失明するという都市伝説がまことしやかに言われた。けっきょくのところ、ハンバーガーの肉をミミズで用意するほうがはるかに困難で不利益だし、コーラを飲んでアメリカ人の大半が骨を溶かして死んだという事実はないし、わたしの知りあいでピアス穴のせいで失明したという人はひとりもいない。それでも当時の人々はそれなりに真に受けて震えていたのだ。一九九九年に「ノストラダムスの大予言」らしきことが何も起こらなかったとき、当時のわれわれは安心というより何かタチの悪い落胆さえいくらか覚えたように記憶している。

ムンが魔境入りする。「魔境」というのはここでこしらえたファンタジー用語ではなくて、古くから座禅にかかわって警句として用いられることばだ。人は解脱を目指そうとすると、その手前で典型的に誘惑に引っかかって魔境入りするらしい。つまり、解脱なんかしていないのに、自分は解脱した、法力を得た、三千世界を観た、というような誤解に入り込む、その「いつものパターン」をむかしの僧侶たちは魔境入りと呼んだ。どのような口調でそう呼んだのだろう、現代のわれわれのように「はいはい、魔境魔境」という具合にだろうか。

ムンは「計算が合わない」という不安と不満にぶつかる。この計算が合わないという納得のいかなさを、どのように解決すればぐっすり眠れるだろう。あるいは、どう考えれば「なあんだ」となって意気揚々とベッドから起き上がれるだろう。

誰にも相談できないけれど、
「このごろ、わたし自身が何かヘンな気がする。気のせいだとは思うけど」
なぜか知らないが、自分の声に違和感がある。これまでになかった「キャキャキャッ」とのけぞるような笑い方をするようになった。そのとき、自分から汚い声、冷たく病んだような声が出る。聞き慣れない周波数が鳴っていて、なじみのない情緒に支配されていく感じがする。これまでになかった、「死ね」という感情が湧いて笑いが止まらなくなる。
たまに、不意に鏡に映った自分の顔が、何か知らない人の顔をしていて、
「これ誰？」
と見えることもある。
おかしい。わたしは命の者としての歩みを続けてきて、こんなにちやほやされるまでになったのになぜ？　誰からも「かわいい」と言われて、「ありがとう」と答えるのにも抵抗がなくなってきたのに。
この不調と違和感は何のせいだろう。
ムンはひまつぶしがてら、そうした漠然とした調子の悪さ、違和感について検索してみた。すると近隣に、エステサロンと兼業で、オーラ診断をやっているところがあるという。
ムンはエステサロンには行きなれていたので、そこでそのオーラ診断というのをやってみた。
「なんか、自分から違和感のある声が出るんです。あと、笑い方とかも変わったかなーって」
「それはね、あなたの、繊細なところが前面に出てきてねえ、それが〝毒電波〟に干渉されるようになったからですよ。誰にでもあることだから、浄化が必要で……ひとまず、このお香を焚いて眠ってみなさい。お風呂で半身浴して、粗塩で体を清めてからですよ。できたら窓の外に満月を見て、深呼吸を七回してから眠ってください」
後日、
「不思議なことに、言われたとおりにして眠るようにしてから、こころなしかぐっすり眠れるようになって。毒電波って、なんとなくわかる気がします。あ、それで、周囲と声の周波数が合わなくなった件なんですが、あれって」
「そうそう」
「こっちが向こうに合わなくなったというか、こっちが新しい次元に進んでいて、向こうが毒電波に犯されたままだから、合わなくなってきたってことですよね」
「そうなんですよ。現代人は、いろんな毒物を食べていますし、そのことにかかわって、いろんな陰謀がはたらいていますからねえ。ノーガードだと、そういうふうになっていっちゃうんですよ。だから、流されないようにしていかなきゃいけない」
「それってどうやって防御していけばいいんでしょう」
「そうですね、たとえば代表的には……」
健康問題にかかわって、環境や飲食物に慎重になることはあるていど当然だ。さまざまな健康法に関心が湧くのもそれじたいは異常なことではないだろう。
けれどもいまから三十年前、一九九〇年代に、けっこうな数の人が「飲尿療法」といって、自分の尿を毎朝コップ二杯ぶん飲むという健康法を実践していたことは、現代の弱年層をそれなりに驚かせるだろう。いまこのときにそのような健康法を推奨してみても、まず現実味がないに違いない。この飲尿療法にしたって、その効果がウソかまことかはいまもってわからないのだが、ただ事実なのは当時に比べて現在もそれを続けている人はきわめて少なくなっているだろうということだ。
そしてこれらのすべては、現在の自分に不安を覚えていない人は多くの場合で深入りしないということだ。飲尿療法といって、「うーん、そういったことは、本当にあるのかもしれないけれど」、でもいまの自分の調子が何か悪いわけではないから、遠慮しておくわ、ということになる。頭に金属箔を巻いて毒電波を防御したり、満月を見上げて七

回深呼吸して「浄化」したり、そういったことのすべては、自分について不安がある・調子が悪い・違和感を覚える・「なんなんだろうこの気持ち悪さは」「何かがうまくいかない」「眠れない」「異様にイライラして八つ当たりが止まらない」という悩みがあるときにかかわって生じてくる。

「こんなはずじゃないって、どこかで思っていたんですよね。これまで自分のやってきたことと照らし合わせると、なんか計算合わないなって思っていました」

ムンは我慢スコアや「かわいい」による倍増評価が、自分の実体と適合しなくてずっと「おかしい」と感じているので、必然、こうした都市伝説にかかわっても魔境入りしやすくなる。もちろんそれでも、都市伝説のすべてはどれがウソでどれがまことなのかはわからない。すべての陰謀論がウソということではないのだろうし、すべての陰謀論が本当ということもむろんないだろう。

ただ、ムンが魔境入りするという「仕組み」だけ前もって知っておき、自己判断の材料にするということは誰にとっても健全だ。自分がうまくいかない理由を外部的な「毒」に帰するのか、世の中のいかがわしさをすべて「陰謀」に結びつけるのか。道を究めようとしたかつての僧侶たちだって魔境入りが警句として言われたということはわれわれを戒めつつ励ますこととして知識に持っておいて損はない。

帳簿上のスコアとして 1000 点 の自分が、なぜか実体として 10 点しか出せていないように思え、自信を失いそうだと、激しい苦しみが足許に迫りくるとき、われわれはいくらでも簡単に魔境入りするだろう。

「こういうこと、本当にわかっている人はわかっていてさあ。わたしね、最近こういう人と知り合ったんだけど……」

魔境入りすると、とうぜん同じく魔境入りしている人たちと友人になっていく。その新しい友人（たち）に「あれっ？」とヘンなところを感じることがあったら、あるていど「自分は魔境入りしていないか？」と点検してみることは正当なことだ。魔境はムンの悩みじたいには救済的に作用するように感じられるけれども、けっきょくトータルで見たら「祝福よりわざわいのほうが多い」ということがあるので、「わざわいのほうが多いなら浄化とか言っても意味ないよね、というかそれって逆効果ってことだよね」と合理的な思考を持つべきだ。中にはどうしても、わざわいより自己評価のほうが大切ですと、ムンでも魔境でも抱きかかえていくという人もいるけれども。

ムンは自分を恐いもの知らずと思い込む

人は大切なものを持たなければ、傷つくことはないし、大切なものを差し出さないかぎりは、やはり傷つくことがない。その意味で、たとえば「どんな仕事でもやります！」と意気揚々と見える者が、必ずしも与えられた業務に対して責任感と集中力を発揮するわけではないということがすでに一般に知られている。

どんな仕事でもやりますと宣言するところ、機械を操作する単純な業務を与えてみたとして、じっさいにはろくに集中して真剣にその操作を続けられず、操作手順でミスをして、彼は同僚の従業員を負傷させてしまったとする。

「何をやっていたんだ！　この手順だけは守れって、さんざん言ったし、ここにもそうデカデカと書いてあるだろうが！」

「ごめんなさい！　本当にごめんなさい！　頭がパニックになってしまって。今後このようなことがないように気をつけます」

彼にとっては業務や自分の良心や、同僚の健康や安全など、何ら「大

切なもの」ではないので、彼としては傷つくものがない。彼はどれだけ反省しているふりをしようとも、彼の内で傷つくものはないので、彼の反省というのは反省の「気分」ということに留まる。

「うわー、われながら、やっちゃったな」

彼は何ら大切なものを差し出していないのだから、彼がやっていることは一種の「真面目プレイ」でしかない。真面目ふうのキャラクターを押し出して遊んでいるということだ。もちろん彼は、それがふざけたことだとは知らず、彼はそうしたキャラクターを押し出しているかぎりは本当に自分は真面目で真剣にやっているのだと思い込んでいる。なぜそのような思い違いが起こるかというと、彼はこれまでに、他の人に大切なものがあると知らないできているからだ。あるいは他の人に大切なものがあるという可能性を否定してここまできているからだ。

ムンはおうおうにして、このように自分を「怖いもの知らず」と思い込む。またじっさい表面的には怖いもの知らずそのものとして振る舞う。あるいはキャラクター的には控えめで臆病でも、その内側はエッと驚かされるほど怖いもの知らずで、その極端な例は内部がどこか壊れているんじゃないかと周囲に疑わせるものがある。それは疑いというよりただの判断なのかもしれないが。

たとえば、人に嫌われるのが怖いと言っておきながら、唐突に女性に「あの、セックスさせてください」と言い出すような人は実在する。ほとんど知り合いとも言えないような女性に対してだ。彼は人に嫌われるのが怖いので、こころを閉ざし、女性に好意をもってアプローチすることなどできようがないのだが、彼は他人が「大切なもの」を持っているという前提がないので、彼が少し勇気を振り絞ったときには、彼にとって最大の利益と率直な望みを言う。その女性にとって、それが大切な人に向ける大切な愛の営為だということが根本的にわからない。そしてもちろんそのように申し出られた女性はエッと怯えながら、「イヤです、イヤに決まっています」と拒否する。それで彼は「そうですか、それってなぜですか？　あなたと、ふつうのセックスがしたいだけです。みんなやっているんですよね」と食い下がり、「ちょっとマジでキモいんだけど」と嫌悪を明らかにして追い払うと、「わかりました」と去っていく。彼はそれによって傷つくわけではないし、彼の内部ではむしろ「勇気を出して女性を口説いてみた」というエピソードになっている。

そうしたことがあまり極端な形で出てこないのは、われわれが漠然と「空気を読む」ということをしているからだ。それでもほころびが出て、やはりその大切なもののあるなしと、それによる見当違いな「怖いもの知らず」は出現する。冗談でなくじっさいにあるのだ。

このばあい、公人は具体例に挙げられてもやむをえないと覚悟しているべきだと思うが、じっさいに二〇二一年に名古屋市長が、オリンピックで金メダルを受賞した女子選手の表敬訪問を受け、何を思ったか、その市長はメダルの獲得選手がそうするごとく、自分で受賞したわけではないその金メダルを手に取って、その口でガブリと噛んで見せたのだ。金メダルに齧りつくパフォーマンスじたい、そもそもよくわからない不明の趣きがあるように思うけれども、あろうことかその競技にもオリンピックにも無関係の市長が、その他人の栄光たる金メダルをその口腔で食んだ。わけのわからない、これは金メダルに対する凌辱のような行為で、市長は大きなバッシングを受けた。その凌辱されようがあまりにもおぞましく、選手の心中が痛ましいということで、その噛まれた金メダルは特例として協会から「再発行」されることになった。再発行といっても本来、彼女がチームメイトらと共に首にかけられた金メダルは、世界でひとつ、史上でひとつのはずだったのに。

市長はこの凌辱について、もちろんお詫びをし、「最大の愛情表現のつもりだった」と弁明した。そこから先は当事者でないわたしが口出しするところではないが、あくまでわたし自身の思うところを述べるとするなら、そもそもそこで「愛情表現」をしようとすることじたいがおかしいと思える。自分の愛妻や愛犬に対しては愛情表現をしてもよいかもしれないが、若い女性の金メダリストは市長の愛を口腔を通

じて受けることを求めていない。もしその金メダリストがクリスチャンで、光り輝くイエス・キリストが降臨し、その救世主が祝福を与えるものとして金メダルにキスをしたということなら、彼女はその栄光をよろこんだ可能性もあるが、われわれの誰もオリンピックの金メダルに金メダルであること以上の祝福を与えようがない。少なくともわたしはそう考えている。金メダルや金メダリストに「愛情表現」を向けることで祝福を与えることができるのだという発想それじたいがわたしには怖いもの知らずに思えるのだが、それはともかくとして、じっさいにそういう例はあるということだ。そうした性根のことは、ふだんわれわれが「空気を読む」ということでカバーしているので露見しづらい。

人は大切なものがあるからこそ傷つく。ところがムンは、この傷つくという現象と場所を知らない。ムンは傷つくという分岐路に立つことがなく、もう長いこと、自動的に「我慢・吾我の驕慢」というルートへ入るということが続いている。ムンは傷つきようがないのでいつも、

「どんなことでも割とへっちゃらです」

と思っている。物事にびくびくしているような弱い者と自分は違うのだと思っている。ふだんはキャラクターとして気弱で臆病な感じかもしれないけれど、それはあくまでキャラクターであって、「基本的に怖がりではないです」と思っている。「どうしたらいいかよくわからない、という状況が多いだけで、何かが怖いとか、怖がっているということではないです」。

ムンにおける「大切なもの」はどうなっているのだろうか。ムンは傷つくという分岐路には立たないで、自動的に我慢のルートへ吸い込まれていくのだから、ムンの「大切なもの」はどこにも捧げられずに守られていく。ムンの「大切なもの」は、彼の内にずっと抱えられ続けるものとしてのみ存在している。彼の内にずっと抱えられ続けるもの、つまり、ムンにとって唯一かつ最大の大切なものは自己愛のみだ。自己愛はどこにも捧げられないので、けっきょくのところムンは傷つかない。だからムンは自分を「何かが怖い、とは思ったことないですね」というふうに恐いもの知らずだと思い込む。

ムンは本当は、自分がちょっとしたことで傷つくのにも耐えられない。ささいなことでわずかに傷つくということも耐えられずに、そのささいなことに対しても爆発的なムンで対抗するのがムンだ。自分を怖いもの知らずだと思い込むムンは、「いざ本気で怒ったらわたしのほうが怖いから」と思っている。そのことじたいも吾我の驕慢スコアとなって加点でムンを励ましているのだ。

ムンの怖いもの知らずはけっきょくのところ、

「自己愛を抱えて何にも捧げずに死んでいきます」

ということに落ち着く。破天荒な行動や、無鉄砲な振る舞いが散見され、あたかも彼を恐いもの知らずに見せかけるけれども、じっさいはわずかでも傷つくのが怖くて、その怖い思いをするぐらいなら「ヒステリーを起こして行方不明になるほうがマシです」と、じっさいには堂々たる逃げの口上が多い。

「怖いもの知らずで、何かを恐いとは思わない、怖がるということをしたことがないというのなら、人の前で、ちょっとは落ち着いて、力まずに、表情を作らず、そっぽを向かず、何かまともなことを話してみなさい。自分の愛や夢について。また、希望や光り輝くものについて」

そのような単純なことを要求されると、ムンは途端に強い音圧のムンを発する。全身を力ませて、力んでいることを自覚すると、そのことを取り消そうとして、次は「やけくそ」という態度に出る。そこから、どこかから借りてきただけの発想を、まるで自分の発見したことのように話す。その声の調子と顔つきは、余裕のあるふりをしながら、明らかに人を威圧しようという内心が浮き出ている。まともなことを話そうとしてもヒステリーで話は散逸、そうすると慌ててハハッと失笑したふうにして、人に対し根拠のないマウント気分を取って自分の安全を守ろうとする。さらに、そうした小細工のすべてが通じないと見るや、こんどは泣き落としや、パニックに陥って苦しむ「かわいそ

うなわたし」という立場に転じようとする。
「ガタガタじゃないか。まともなことをまともな調子で簡単に話すことさえできないのか。こちらをまともに見ることもしないし、ちぐはぐな表情と言いようをいくつも投げつけてきてごまかす。その上なおも自分の見栄だけ空気を読んでもらおうと、作為と甘えを仕掛けてきているじゃないか」
そうまで言われたらその人はそこから走って逃げだそうとする。比喩ではなく、本当に走って逃げだすということがあるのだ。そして、そうした遁走にさえ、やはりムンという音は鳴っていて、総じて芝居がかっているという事実から逃れられない。
「こんなの耐えられないです！」
「怖いものはないんじゃなかったのか」
「わたしに死ねっていうことですか！」
この場合、よくよく視認してもらうとわかることだが、わたしからこの人に何かを言いつけているわけではない。この人が自らを恐いもの知らずだというので、そのとおりかどうか、その人自身にその場で点検してもらっただけだ。
わたしは人は傷つくものだと思う。そして、傷つくことが怖くない、自分は怖いもの知らずだと思っている人がいたとしたら、その人はただのあさはかな思い込み屋すぎないと思っている。人は傷つくものだ。だからじっさいには、ここで示したようなひどいことはやらないし、やるべきでないと考えている。ただ、どこまでも当人が「怖いもの知らず」を言い張る場合は、話がどこまでも合わないので、そのように自分で点検してもらうよりないという場合がある。
その場合でも、
「傷つくよね、怖いよね」
ということに同意してもらえたら、それ以上の話はわたしからはない。
もちろんそのような点検をけしかけたからには、わたし自身は、まったく同じ場所に立ってまったく同じことをしろと要請されたとき、必ずそれを請け負おう。自分で立てない場所に他人を立たせてふんぞり返るというほどまでにはわたしもさすがに愚かではない。わたしはいまこのときも、人の前で、ちょっとは落ち着いて、力まずに、表情を作らず、そっぽを向かず、何かまともなことを話そうとしている。自分の愛や夢について、また、希望や光り輝くものについて。
わたしはわたしなりに、そこに立ち続けてきたつもりだから、この場所がどれだけ傷つく場所かを人より知っているつもりなのだ。ここに、命や世界が降ってきてくれなければ、わたしはまったく守られずに、かといって吾我の驕慢に耽る気にもなれなくて、そこにはただのズタズタに打ちのめされてふさぎこむ者が残っただろう。
わたしは恐いもの知らずではない。むしろわたしは、この傷つく場所がどれだけ「おっかない」ものかを直接知っている者のつもりだ。
そしてわたしが知っていることは、そこで見苦しくチャカムンさえしなければ、そのおっかないものはむしろ「生きろ」とわれわれに言っているということだ。
怖いもの知らずなんてとんでもない。勇敢で破天荒なふりをして、じっさいには、わずかな傷口にわずかな塩水が染みるということにさえ、割れそうなほど高くムンの音を立て、我慢スコアで手当てをほどこしているのがわれわれだ。肝腎な場所、正々堂々たる場所に立たされたとき、本当にはひどいボンクラぶりを露見させるしかないというみじめなわれわれ。その場所で「おっかないもの」にひとり向き合わされる。その「おっかないもの」は、性懲りもなく言い逃れしようとするあなたの醜ささえ、満座の前で暴露する。
それでも、その「おっかないもの」は、われわれに死ねと言っているのではない。おっかないものは、われわれに生きろと言っている。だからわれわれは、おっかないものを恐れはしても、それを遠ざけたりする必要はないし、そこから走って逃げだすという必要もない。怯える必要も本当はないし、泣きついて媚びるという必要もない。そんな、役に立たないことは何一つしなくていい。
むしろその「おっかないもの」に対しては、"寄る"というのが本来

のあるべきやりようだ。われわれは、生きる励ましを得るために、そのおっかない場所と声にみずから〝寄る〟。

ムンは恐いもの知らずなどではまったくない。ただおっかないものに〝寄る〟という、本来の勇気を持てずに生きてきた、そのことをいつまでも自白しているだけだ。

イラストを模すムン

「かわいい」は下方に発生する感情だ。生死軸に立つかぎりは、世界は弱肉強食で、上から下には「死ね」、下から上には「生をください」というフォースの風が吹くけれども、例外的に「かわいい」に関しては上から下へ能動的な守護・バックアップをしようという衝動が湧く。「かわいい」というのは、下から上へ、そうして保護を求めるシグナルなのだと説明した。またその現象が生死軸においては例外的なために、人は「かわいい」にかかわって自分が生命軸に所属しているような錯覚も覚える。けれどもそのとき転属する先は残念ながら「逆生命軸」なのだと、ここまでに説明してきた。われわれが生死軸に所属していながら生死軸の風に辟易しているなら、そこから脱出できるような錯覚を与える「かわいい」はわれわれのよりどころになり、われわれのヘイヴンにもなってしまうだろう。そのことは、現在のわれわれの実態によく当てはまっている。

以前、ある旅館でわたしはこのようなことを経験した。ありふれたことだが、通路を歩いていると、窓の外にヤモリがいた。ヤモリは無防備な腹側をガラス越しにこちらに見せ、愛らしい手のひらで窓に貼り付き、大きな目をくるくるさせ、電燈に寄ってくる蛾たちにしのびよっては、それらを懸命に食べていた。生きものが生きている姿、生きようとしている姿だ。わたしはそうした光景を見るのが好きで、素直にこころを奪われるところがあると認める。

その翌日の夜のこと。掃除か何かで紛れ込んだのであろう、同じ個体に違いないと思えるヤモリが、今度は建屋の内側にいた。白い壁と赤い絨毯の直交部分に、所在なげにたたずんでいた。わたしは引き続きその愛らしい姿にこころを惹かれてオヤオヤと思ったが、思うに、館内にはそこまで蛾が入り込んでこないのだから、ヤモリにとって建屋に入り込んだのは偶然かつ不本意なことではなかったろうか。もちろん建屋内にいれば、不意に鳥に襲われることがないというメリットもあるだろうが、それよりは食餌が得られずに困窮するということのほうがこのヤモリにとっては危機的なのではないかとわたしには思えた。もちろん当人にそのあたりを問いただして確かめることはできないのだけれども、わたしはそのヤモリを窓の外に出してやることにした。

窓を少し開け、そちらのほうへ追いやってやろうとするのだが、もちろんヤモリにとってはわかりようがないことなので、ヤモリは何やら大きな影が自分の頭上に迫ってくるのを察し、とりあえず前方へ数歩、素早く逃げてみるという様子。爬虫類らしいそういう挙動は何度か繰り返された。それでさすがに埒が明かないので、わたしは彼の前方を手で閉ざし、前後から挟み撃ちにする形でゆっくり彼を手中に捕えることにした。こうした生きものにとっては、人の体は温度が高すぎ、長く持っているとやけどになるという話を聞いたことがあるような気がして、なるべくいじくりまわすことはせずに、手中に捕えたそれを窓の外側、つかまりやすい網戸のところに張り付けてやった。手中に捕えられているあいだ、ヤモリは状況がわからないので、わたしの手の中で右へ左へ、とりあえず焦って動き回る様子で、その生命の感触もやはりかわいらしいものだとわたしには体験されたが、もちろ

んこうした爬虫類は苦手でかわいいとはまったく思えないという性癖の人もあろう。

わたしは知らず識らず、そうしてヤモリをかわいいと思い、余計なお世話で逆効果だったのかもしれないにせよ、わたしなりに彼がよりよく生きられるようにと思い、彼をふたたび餌の豊富な窓の外側へ逃がしてやった。このことについて、わたしのやりようはともかく、ヤモリの側に何かの咎があるとはまったく思えない。ヤモリは作為的に「かわいい」をわたしに見せつけようと工作したわけではなく、ただよくわからないうちに建屋内にいて、よくわからないうちにわたしに捕まり、よくわからないうちにふたたび窓の外に張り付けられただけだ。彼が「かわいい」うんぬんはわたしの側の主観であって、彼の側はあずかり知らぬことだ。

もちろんそうしてヤモリを窓の外に出してやるということは、そのぶん餌となる蛾たちが犠牲になるということだが、もしそこだけを抽出して見るなら、わたしはヤモリに生きろといい、蛾たちには死ねと言いつけたということになる。あるいは抜け目ない鳥がいつか彼を見つけて、飛び掛かってきて彼をついばんでしまうのだとすると、わたしは結果的にその鳥に生きる餌をやったことになるだろうか。そこまで含めれば、「生きもの」の全体に対してわたしが何をやったのかは一概には言えなくなる。一概には言えなくなるので、同じようなこととして、野生の動物を観察する学者は、自然環境で起こることになるべく手出しをしないということが一般的なルールになっている。野生のプレーリードッグの一家を観察していれば、彼らの子供の一匹がハゲワシにさらわれることもあるだろう。そのときに「危ない！」と言ってプレーリードッグの子を脅かして巣穴に逃げ込ませたり、「あっちにいけ！」といってハゲワシに小石を投げるようなことは、自然の仕組みに不当な干渉をするルール違反だと学者たちのあいだでは捉えられている。もちろん、そのルールを守ることだって人為的なことでしかないから、そのルールを守るのが正しいとも誰にも断言はできないけれども。

わたしはこのように考えている。これはわたしがそのように考えているというだけであって、何らの正しさも誰にも保証されていないものだけれども、ヤモリが蛾を食べて生きているなら、それはそのように生きろと命じられてのものだとわたしには思える。そして蛾がそのようにヤモリに食べられてしまうのであれば、蛾たちはそのように生きろと命じられているように思える。そのように死ねと命じられているのではなく、そのように生きろと。ヤモリに食べられてよくわからないうちに死ぬということまで含めて蛾の生なのではないかと思うのだ。そのヤモリが、やはりよくわからないままに鳥についばまれて死んでしまうのだとしたら、それもやはりヤモリはそのように生きろと命じられているように思う。このことを、弱肉強食といって殺伐とした利己的遺伝子の力学でのみ捉えようとする人も多いけれど、わたしはその殺伐ぶりのほうこそ感情が入り込んで恣意的な捉え方に崩れているように思う。プレーンに考えて、ヤモリに食べられてしまうことがあるのも蛾の生であり、鳥に食べられてしまうことがあるのもヤモリの生なのではないか。そのことに比較して、ヤモリが迷い込んだ館内で水や食餌を得られずに干からびていくのだとしたら、わたしには彼が「そのように生きろ」と命じられている気がしない。

わたしは本来の「かわいい」という現象は、そのように「蛾なのでヤモリに食べられちゃった」「ヤモリなので鳥に食べられちゃった」ということ、生をまっとうすることに向かう――そのように命じられたままであろうとする――ことに博（ひろ）く寄与しようとする、われわれの魂のはたらき、およびそのあらわれなのではないかと思っている。

まだ目も開いていないような子猫が、母猫とはぐれてニーニー鳴いていたとする。そのままではカラスに襲われてしまうかもしれない。そのような危機が迫っていることは、もちろん生まれたての子猫の側は知らない。自分の鳴き声がどのような周波数とシグナルを持っているかも子猫の側は知りようがない。このことについてわたしに起こる率直な感情をいえば、ニーニー鳴いている子猫がカラスの餌にされて

ついばまれるというようなことはあってほしくないのだ。カラスの餌にされてついばまれてしまうということについて、子猫は「そのように生きろ」と命じられていると思えない。カラスだって餌をさがして飛び回っているのは当然だが、そうしたカラスたちはいつもどおり街中の生ごみを見つけて拾えばいいではないか？　カラスたちには申し訳ないのだが、わたしは率直にはそう思っているのだ。もちろんこれは同じ哺乳類として、鳥類に向けるそれよりも贔屓（ひいき）が掛かっていると指摘されるだろうが、それについてはわたしは堂々と「そうです」と答えよう。それでもなお、カラスが子猫をついばむというのがそれぞれに命じられたことの結果だとわたしには思えない。その子猫たちは、カラスたちの餌にならないため、人の住む町中で地域猫として生まれてきたのではないか。

　わたしが思うに、これは「子猫がかわいいからカラスに襲われてはいけない」のではなく、「カラスに襲われてはいけないからかわいい」のではなかろうか。カラスに襲われて餌になってしまうということについて、子猫はおそらく「そのように生きろ」とは命じられていない。そのまま母乳も与えられず干からびて朽ちなさいとも命じられていない。そんなことになってはいけない、もっと別の「このように生きろ」と命じられているものがその子猫にはあるのだ。もしそのように命じられているということが確認可能なのであれば、その子猫に厚かましく寄ってきたカラスに対しては、人は堂々と小石を投げて追っ払っていいだろう。「それはお前の餌じゃない」と。そうすればカラスも、愚かでなければ、「これは失礼しました」と焦った様子を示し、同時にどこかホッとした様子も示して退散していくはずだ。

　このように本来の「かわいい」というのは、当人が所属する軸を選びようもない無力な者であるうち、前もって特権が与えられ、一種の寵愛として「このように生きなさい」という命令が与えられてある状態なのだと思う。これに対して、「カラスに襲われたら子猫は死ねよ、自然の摂理なんだからしょうがないだろ」とわざとらしく傍観を決め込むというのは、むしろ自然の摂理とやらを言い張ることで、真の節理から目を背けようとする・させる悪意がはたらいているように思う。

「かわいい」ということはあちこちに起こる。イラストに描かれたもこもこのキャラクターでも「かわいい」と感じるし、工事現場で働く屈強なおじさんが、コンビニエンスストアで昼食のカップラーメンを選ぶとき、どれにしようか真剣に、指差してまで検討しているさまはじつにかわいいものだ。

　かわいいものはよく生かさなくてはならない。われわれには知りえないこととして「このように生きろ」と命じられているのだから、それがまっとうされるように、かわいいものはよく生かされなくてはならない。イラストに描かれたもこもこのキャラクターについては、それを生かすも何も、そもそも生きものではないのだからわれわれは安心してそれを眺めていられるだろう。

　ここまで来て、この「かわいい」は、本当に人為的に「作る」ことができるのだろうか？　という疑問が湧く。わたしは、窓に貼り付いて無防備な腹をこちらに見せ、懸命に蛾を食べているヤモリをかわいいと描写したが、じゃあ「わたしはヤモリ人間です」と言って人が裸で窓に張り付き、目をくるくるさせて蛾を食べるようにすれば、それで「かわいい」となるのだろうか。そんな不気味な行状のものをかわいいとは言わない。なぜかわいくならないのか。それは、人は「そのように生きろ」とは命じられていないからだ。もし人がヤモリ化してそれを「かわいい」と言ってもらおうとするなら、美少女にファンシーなヤモリの着ぐるみをかぶせ、やはりファンシーな背景とＢＧＭの前に立たせて、彼女の稚気めいてふざける表情とポージングを見せつけて、さりげなくバストと性的な腿などを浮き立たせながら、それを「かわいい」と思ってもらうしかない。

　われわれは何をやっているのか。この「かわいい」にまつわる混乱を整合させるには、ひとつの矛盾を看破する必要がある。それは、かわいいというのは生のバックアップを求めるシグナルなのに、生きていないもの、イラストや記号にもその「かわいい」のシグナルは乗せられるということだ。生きものでないそれに生のバックアップ信号を

乗せるということは矛盾している。

その矛盾したものが、ただ「かわいいね」というだけなら何の罪もなさそうだが、それを生きるものの「かわいい」と混同させたとき、われわれの魂によくないことが起こる。

生きていないものに「かわいい」のシグナルが乗っかっているのは"偶像"なのだ。偶像は生きていない。そこで、偶像は生のバックアップを受け取りようもないので何も起こらないが、その偶像を利用して誰かが生のバックアップをかすめ取るなら、そこには大きな罪が起こる。イラストに描かれたもこもこのキャラクターは、同じイラストで描かれたカミサマに護られればよいし、同じイラストで描かれた豊かな牧草を食べて生きればよい。イラストに描かれたもこもこのキャラクターに地上の黄金や上等なワインを奉じてやる必要はない。女性がもし美少女のイラストを模するなら、そのかわいさはイラストに描かれたかわいさであって彼女のかわいさではない。わたしが旅館で見かけたヤモリは、懸命に生きるヤモリのイラストを模したヤモリではなく、懸命に生きようとする生きもの当人のかわいさなのだ。

本来、この世界にあるものを模してイラストが描かれる。あるいは、夢に体験する世界を模してイラストが描かれる。たとえばわたしが先ほど話したところのヤモリを、話されたところのイメージからイラストに描いてみることは何も罪深いことではないだろう。またそこに、余計なお世話かもしれないがヤモリを外に逃がしてやろうとするわたしのイラストを描き添えることも可能なはず。そうして、「われわれを模したイラスト」というのは通常のこととしてありえても、その逆、「イラストを模したわれわれ」というのは元来イレギュラーなものだ。

たとえば漫画「サザエさん」や「ドラえもん」は、東京の世田谷区や練馬区の、庶民的な人々あるいは子供たちというイメージを模して描かれた漫画だが、ここから逆に、世田谷区民がサザエさんを模したり、練馬区民がドラえもんを模したりすると、その逆転はイレギュラーだ。あるいは幼児らが、大人たちのする家庭の暮らしぶりを模して「ままごと」をやるのはありふれたことだけれど、わざわざその家庭の暮らしぶりをいったんアニメーションにし、そのアニメーションを模して幼児らが「ままごと」をやるのだとしたら、その幼児らがやっていることはイレギュラーだ。その幼児らがやっているのは「ままごと」ではなくて「ままごとアニメーション・プレイ」だということになり、彼らは家庭を模しているのではなくてアニメを模していることになる。

このイレギュラーは昨今ではあまりイレギュラーでもなくなってきて、つまりそれは「コスプレ」の類としてじっさいに趣味や表現として流通している。コスチューム・プレイを省略してわれわれが「コスプレ」と言い慣れていくうち、われわれはそこに「プレイ」という奇態なことへの語が当てられていることを見落としていくように思う。ゲーム中にそれぞれのプレイヤーが中世的職業の「役割(ロール)」を担ってゲームを進める形態のことをロールプレイングゲームと呼ぶが、それと同じ「プレイ」がコスプレの中にもあるということ。じっさいにはコスチュームそのものをプレイすることはできないのだから、本当にやっていることはきっと、コスチュームにあやかってのキャラクター・プレイなのだろう。衣装に関心を寄せているような言い方はギミックにすぎず、本当のところのお楽しみはキャラクターへのなりきりプレイにあるはずだ。

ここまでいくつかの「かわいい」に言及してきた。旅館で見かけたかわいいヤモリの話、あるいは子猫がニーニー鳴いてかわいいという話、昼食のカップラーメンを真剣に選んでいるおじさんがかわいいという話、イスラトに描かれたもこもこのキャラクターがかわいいという話。これらについては、それを「かわいい」といって特に違和感はないはず。だがここで、コスプレをしてなりきりの表情をしている美少女が、その性的な露出も加わって「かわいい」ということには、なにか後ろ暗い違和感が残る。このコスプレ美少女に対する「かわいい」は、どうも旅館で見かけたヤモリの「かわいい」と性質が異なるのではないか。それについては次のように考えればよい。

前者の「かわいい」群は、そのかわいさから「イラストに描かれて

もおかしくない」と感じられるのだが、後者、コスプレ美少女をイラストに描くのは何かがおかしいということだ。

なぜコスプレ美少女をイラストに描くのはおかしいのかというと、本来の仕組みから逆転しているからだ。コスプレ美少女は、もともとイラストに描かれていたものを自分で模してそのような「プレイ」の姿になっているはず。それをふたたびイラストに模すというのは循環していて不毛だ。本物の紙幣をもとにニセ札が作られて、今度はニセ札をもとにして本物の紙幣を作ろうという話にはならない。

モネが睡蓮の池を絵に描いたとして、それはおかしなことではない。けれども、こんどはモネの絵をもとにして、自宅の庭池をモネの絵画を模したものに造っていった人がいたとしたら、そのことはどのように評されるべきだろうか。モネの絵画に惹かれて、そのあこがれからこのように造園しまして、ということなら「なるほどね」という納得のみで留まるだろう。だがこの庭の主がそこから「モネプレイ」に耽るようなら、われわれは彼に対して怪訝な眼差しを向けるはずだ。

蓮池から絵画を描くことがレギュラーで、絵画から蓮池を造成することはイレギュラーだ。同じように、銀幕の中のオードリー・ヘップバーンをイラストに描くことはレギュラーだが、イラストに描かれたオードリー・ヘップバーンを自分の顔面で模すというのはイレギュラーだ。現代における「かわいい」の違和感はここにある。本来、生きているものを「メディア化」するということがレギュラーであるのに、いまはその逆転が主流で、メディアを「生きているもの化」するということが行われている。世田谷区や練馬区の人々を「サザエさん」「ドラえもん」に描こうとするのではなく、サザエさんに描かれているものを人々が模そうとし、ドラえもんに描かれているものを人々が模そうとする。じっさいそうして「サザエさんをやってみた」という動画チャンネルがあれば、それは相当量のファボを稼ぎそうだという予感をわれわれは覚える。

現代の作られた「かわいい」は、何かしらのメディアを模するというイレギュラーで作られているのだ。各種、かわいい女の子のイラストがあって、そのイラストをじっさいの女の子たちが模すことで「かわいい」が作られている。コスプレの現象になぞらえて言えば、各種のかわいい女の子「プレイ」が行われているということ。もちろんそれは女の子に限らず、いまやかわいい青年プレイや、かわいいおじいさんプレイなどもありえよう。教師の前で子供たちはかわいい児童たちプレイをするかもしれないし、教師の側も、児童たちの前で熱心でかわいい先生プレイをするかもしれない。

その他、たとえばもともと人を笑わせることに長け、人を笑わせる魂に満ち、人を笑わせることに際限のなかった人が、かつて漫才師やコント師のようなお笑い芸人になったかもしれない。それが次第に逆転してきて、いまはメディアに現れるお笑い芸人のイメージをもとに、自分たちがそれを模していくということで、若く新しいお笑い芸人が作られていくという向きがある。それはどこまでも「お笑い芸人プレイ」というなりきりプレイでしかないだろう。

またかつて、人々に潜む滑稽さを暴き立てて模し、チャップリンは喜劇映画を作ったが、それが高名になると、こんどはその喜劇映画を模して喜劇作品をでっちあげようとする向きが出てくる。するとそれは作品にはならないし、その演者もチャップリンにはならない。インスパイアというもっともらしい語で言い逃れされるとしても、その行為は構造上どこまでも二次創作にすぎず、われわれはそれにわざとらしい拍手をさせられるのを内心で不快で不本意に思っている。

あるいは、こんにちでは邦画というとその多くがアニメのいわゆる「実写化」ということが主流になったけれども、アニメ人気にほだされてそれを愉しんでいるうちには気づきにくいにせよ、もし冷静にそれについて、

「この"実写化"というのは、全員でコスプレして、全員でキャラクターのなりきりプレイをしていることと、何が違うの？」

と問われたら、われわれはその問いには答えあぐねる。

こんにちの「かわいい」を作り出すためには、まずその背後に偶像を立てねばならない。この場合の偶像とは、「かわいい」ということの

メディア・イメージだ。イラストの一枚でもいいし、アニメのキャラクターでもいい、加工された女優の画像イメージでもかまわない。装飾や配色だって「かわいい」のイメージになりうる。その「かわいい」イメージというのは、直接の具体的な一個の例でなくてもかまわない。

それじたい生きているわけではないそのメディア・イメージは、生きてはいないのだから偶像だ。この偶像を崇拝して、その偶像の「かわいい」を模すること。それで、自分が「かわいい」という評を得ていくようになる。それが現代で言われるところの「かわいいは作れる」という技術だ。その「かわいい」の性質によって、生のバックアップを要請するということ、その恩恵を受けていくということまで含めてが、現代の「かわいい」の技術体系だと言っていいだろう。

その成り立ちの背後に偶像崇拝があることから、現代の「かわいい」はすべてアイドル由来・アイドル的と言ってよい（idol は「偶像」を意味する）。

われわれはかわいいイラストを観たとき、少なくともそれに「死ね」とは思わないのだ。イラストにもこもこのキャラクターが描かれていたとして、そのような作為的なデザインを過剰に見せつけてくることにしばしば閉口することはあっても、その罪のないキャラクターじたいに「死ね」とは思わない。「死ね」も何も、イラストに描かれたキャラクターは地上に生きておらず、死ぬとしたらそのメディアの中で死が描かれるだけだ。それだってかわいそうなものだから、何も死ななくていいだろうとわれわれは庇護的になる。もこもこに描かれたかわいいキャラクターが、鉄の斧で裁断される絵面などわれわれは見たくない。

現代においてわれわれは生死軸に所属し、その「死ね」だのいうダウンフォースに辟易している。のみならず、若く実力もじゅうぶんには具えない若年者においては、じっさいに生きていくことへの不安、生そのものへのおびやかしに苦しめられるというところがあるだろう。そこで少なくとも「死ね」とは言われないかわいいイラストは、まるで自分の上位の存在と思える。

「このイラストみたいになりたい」

自分もこのイラストに描かれたもののようにかわいいものになれたら、「死ね」というダウンフォースは向けられなくなるのではないか。誰もがわたしに向けて「生きろ」という風を向けてくれるのではないか。

そのようにして、偶像にひざまずき、

「わたしもかわいくなりたい」

と、その崇拝を示し、恩恵に浴するを求めるということが起こっている。

現代、すでに何もかもについて、生きているわれわれを起点にして「どうするか」と考え出すというようなスタイルではなくなっている。先に脳内にこびりついたものとして、イメージ、イラスト、キャラ、その偶像群が佇立しており、適宜にその偶像の「なりきりプレイ」をするということが万事についての主流になっている。それはもはや生き方と呼べるようなものではなく、生き方を失ったわれわれの実情としか言えない。

イメージ、イラスト、キャラ、偶像だけが「死ね」とは言われず、だから自分もそれを模していくしかないという状態だ。両親は親というなりきりプレイ、その子は子供というなりきりプレイ、教師は教師というなりきりプレイ、児童は児童というなりきりプレイ、社会人は社会人というなりきりプレイ、お笑い芸人はお笑い芸人というなりきりプレイ、文化人は文化人というなりきりプレイ、恋人は恋人というなりきりプレイ、芸術家は芸術家というなりきりプレイをする。その一点張りになっていよう。それがあくまでおふざけのプレイに留まるならわれわれに咎はなかろうが、われわれはそれでじっさいに生きようとしているし、それをなるべく「かわいい」ものにして、なるべく多く生のバックアップを乞おうとしている。そのことに咎があることはわれわれの魂が直接後ろ暗さにおいて知っていよう。

現代のすべてを見分けるのはつまるところ背後に偶像を崇拝した「プレイでしょ」という視点に尽きる。その中でも特に、「かわいい」

という偶像を背後においたなりきりの「かわいいプレイ」が強い勢力を誇っている。

役割になりきるムン

アメリカの古いテレビドラマ「刑事コロンボ」を見ると、ピーターフォークという俳優がコロンボ警部補を演じているが、その演技力はもはや演技という領域を超えていて、誰がどう見てもそれは「コロンボ警部」にしか見えなかった。見せられているものがテレビドラマだということは理解の中に留まっているのだが、ふと気を抜くと、どこまでも「コロンボ警部がテレビドラマに出演しているんだろ？」と視えてしまうのだ。気を取り直して、そうではない、ピーターフォークという俳優が刑事コロンボを演じているのだと捉えなおそうとするのだが、どのようにその観念を強くしても、そこにそのような俳優があるような感じはまったくしなくて、ただちに観念の側が見失われていく。世代によっては誰でも知っていることだが、ピーターフォークが別の映画に出演していたとしても、誰もが彼を観た瞬間、こころの中で、

（あ、コロンボだ）

とつぶやいたはず。俳優ピーターフォークが亡くなったとき、刑事コロンボにあやかって、ロサンゼルス市警は「偉大な同僚の死を悼む」というコメントを出した。アメリカ人に彼の写真を見せてまわって調査すれば、コロンボ警部という名前の知名度は、ピーターフォークという名前の知名度をはるかに上回っているだろう。

このような「コロンボ警部」の出現はどのようにして起こったのだろうか。これを単なる俳優の「なりきり」で捉えて説明することは不可能だ。単に「なりきり」でいうなら、それらしい自己洗脳をかけることは、そうした精神傾向のある人においてはそんなにむつかしいことではないのだから、言ってしまえばそれは「誰でもできるでしょこんなの」というものになるはず。けれどもじっさい、それは誰でもできるものではなかった。それどころか、「刑事コロンボ」の出現はもう故人となったピーターフォークにしか不可能なことになっている。

当人が「なりきった」つもりになったとしても、それによって刑事コロンボが出現するわけではない。

極端な話、精神病の一種で、自分が著名人の誰々のつもりになりきるという症状はじっさいにある。当人はそう演技しているつもりではなく、本当にそのように思い込んでいるのだ。これは本来の意味での「妄想」が起こっているということになるが、それでもやはり、そこに「なりきり」を得た誰かが出現するわけではない。「なりきり」はどこまでも当人がその「つもり」というだけでしかなく、周囲がそれに同調して付き合わないかぎりは、そこにいるのはどこまでもいつもの当人だけだ。

じっさいわれわれはよく見かけるだろう、たとえば俳優Xが「織田信長」を演じたとして、いちおうその“設定”には付き合うけれども、画面の中に見ているのはやはり「演技を頑張っている俳優のXさん」だ。わたしがここで述べているのはそうではなく、画面の中にはどう見ても「演技を頑張っている俳優のピーターフォークなどはいなかった」ということなのだ。

刑事コロンボの出現は次のように説明できる。むろん、説明できたからといって、そのままそれが容易に実現可能というわけではないけれども。

生命軸における上下の関係は、下向きに「生きろ」、上向きに「命じてください」というフォースを起こす。ここで俳優ピーターフォーク

は、俳優としての生を上に奉じ、その捧げたぶんだけ命を享けたのだ。つまりピーターフォークの生を捧げたことでコロンボ警部の命を授かったということになる。刑事コロンボがどのように動き、どのような表情を見せるか、どのような詰め寄り方をするかは、命じられたところであって、ピーターフォーク氏の絞り出すところにない。監督やピーターフォークがイメージしたキャラクターとしてコロンボ警部が設定されたのではなく、彼らが生を捧げたぶん、その命がどこからともなく与えられたということだ。よって、われわれはそこに「生」のピーターフォーク氏を目撃することはできず、コロンボ警部の「命」だけを目撃することになる。だからそこに俳優ピーターフォークを探すということじたいが見当違いなのだ。われわれがそこに俳優ピーターフォークを見つけようとするなら、それはもう作品そのもの・ドラマそのものを観ないように遮断して、スタッフロールだけを眺めるこころもちで画面に向かうしかない。

生を捧げてしまったピーターフォーク氏は、生を失って「死ぬ」だろうか。もちろん生きものとしては加齢や病気によって死んでしまうが、生命軸においては死の項目はないので、生命軸において彼は死なない。生命軸に所属する者は誰ひとり死ぬことがない。じっさい、^^コロンボ警部は死んでいない^^ではないか？　コロンボ警部は永遠に命を持っていよう。荒っぽい言い方をするなら、有限の生を永遠の命に「両替」できるなら、誰だってその永遠の口座のほうへ両替を望むのじゃないか。そしてどうせなら、なるべく大量の生を、大量の命に両替したいものだから、われわれは好きこのんで早死にしようとはしない。なるべく長生きして、可能なかぎり大量の両替をしてやろうと考えるだろう。ひたすら長時間生きるだけで何の両替もしない生というのをわれわれは最期までよろこびはしない。両替できたら永遠の命になるけれど、両替しなければ時間と共に「生」の残高は目減りしてゆき、けっきょくは残高が尽きて生の終わりを迎えるのだから。

こんにち、たとえばアニメの声優は、ファンたちにとって「中の人」と呼ばれる存在で、その「中の人」の人気は、アニメ本体をそっちのけにするほどのもののようだ。声優の側もそうして、「中の人」という立場を礎にし、そこから当人じたいがアイドル的な人気を博していくということが、むしろ自己の成功と指向しているように思う。

そのことの是非については、わたしは門外漢として、ただ旧来は明らかにそうではなかったということを記憶から想いだせる。たとえば大山のぶ代さんはかつてドラえもんの「中の人」とは呼ばれなかった。そうではなく、大山のぶ代さんがバラエティ番組に出て一声を発したとき、その声について「ドラえもんだ！」と驚いたものだった。つまり、「大山のぶ代さんの中にドラえもんがいる」と体験されたのであって、ドラえもんの中に大山のぶ代がいるというふうには体験されなかった。大山のぶ代さんが「ドラえもんの声を出している」のではなくて、大山のぶ代さんから「ドラえもんの声が出ている」と体験された。ドラえもんという実在があって、その“依り代（よりしろ）”を大山のぶ代さんが担っているのだというふうにしか見えなかった。

大山のぶ代さんが一声発したときに「ドラえもんだ！」と思わない人はいなかったぶん、ドラえもんの声を聞いたときに「大山のぶ代だ！」と思う人はひとりもいなかった。それは刑事コロンボを観たときに「ピーターフォークだ！」と思う人はひとりもいなかったことと同じ現象だ。だからこれも「なりきり」というようなたぐいではなく、その声にドラえもんの「命」を享けていたとしか言えない。ドラえもんの「中の人」が大山のぶ代なのではなくて、大山のぶ代の「中の命」がドラえもんだった。

現代においてわれわれは生死軸に所属しているので、自分の「役」について命を享けるということはない。生死軸のどこを探しても命はない。そしてこの「役」というのは、必ずしも演劇であてがわれる配役ということに限らず、それぞれがこの世界で本来あてがわれるべき「役」あるいは「役割」というのにも当てはまる。子に対して母は母の役割、父は父の役割、児童に対して教師は教師の役割、男に対して女性の役割、女性に対して男は男の役割を果たすにしても、その役割に「命」が与えられない。だからわれわれはじっさいの生活にもその

「なりきり」を用いている。そのなりきりは、精神の傾向によっては、妄想じみて思い込まれることもあると先に指摘したとおり。

たとえばあなたがホテルマンとして就職したとして、あなたはやがてホテルマンとしての命を享けることになるだろうか。そうあれば無上の価値があって何よりだが、現在のわれわれはそういうことのムードにいない。それよりはじっさいのところ、ただ業務に慣れていって、就業中はホテルマンに「なりきる」ということ、それで日々をやりくりしていくことになるという可能性のほうが高いと想像されるのではないだろうか。なぜそのような「なりきり」をしなくてはいけないのかと訊かれれば、「それが生業なんだからしょうがないでしょ」「そうして働かないと生きていけないでしょ」「だから我慢してやっているんだよ、誰だってそうでしょ」と答えることが大いにありえそうだ。

生死軸においては、生がただ頂点なので、無条件で裕福に生きていけるのであれば、それ以上の高みはない。我慢して「なりきり」をやるのも、ただ生きていくためであって、できることならこんなことすぐにでもやめてしまいたい。「お金があったらすぐやめますよこんな仕事」。

だから現代では誰もが、不労所得と一攫千金だけを求めており、自分が何をやるかということには本質的な興味を持っていない。たとえば現在、お笑い芸人として成り上がろうとする人は、人を笑わせることに命を見い出しているわけではない。ただ、その職種が自分にとって最大の「生」の高みへの可能性を含んでいるから、そのジャンルを採用してがんばっているというだけだ。もし途中でもっと別の、もっとおいしくて自分に向いているものが見つかれば、彼は何のためらいもなくそちらに「乗り換え」をするだろう。人を笑わせるというようなことに彼はさして興味はないのだ。彼には何の命もなく、ただ自己の生をなるべく高みへ持ちあげたいという衝動しかない。

生命軸においてはそうではない。生命軸においては命が唯一の高みだから、笑いに命を享けたお笑い芸人は、自分の成り上がりに衝動を覚えるのではなく、ただ目の前の人に対して笑わせようとする衝動を覚える。笑いの命が彼の唯一の高みだから。

彼はむしろ、自覚としては「大金持ちになってやる」という野心でお笑いの舞台に立ったのに、舞台で目の前のお客さんと対峙したとき、何かがむらむらして、

「よし、こいつらをなんとか笑わせてやろう」

ということに火がついてしまう。そのときにはけっきょく、大金持ちになるだのなんだのという野心を彼はすっかり忘れてしまっていて、別の汗をだらだら掻いているのだ。

彼がやがて人気者になっていって、いわゆる成り上がりを得たとしても、彼はけっきょく、その立場やお金のゆとりから、

「じゃあこんどは、こういうやり方で人を笑わせることができるじゃないか」

ということを考えてしまう。そうして考え始めるとけっきょく夢中になっていって、人気のない新人や若手が力尽きていくのを置き去りに、彼だけがずっと夜中まで新しい idea を形成しつづけていく。

もし政治家が、国・自治体を治めることに命を見い出す人たちであるなら、その国は最上の状態にあると言えよう。だが権力は腐敗するもので、なかなかそのようなうつくしい状態は恒久的には望みようもない。また警察官の多くが、警察官たること・治安を維持することに命を見い出しているならば、われわれにとって世の中はとてもありがたい状態だと言えよう。あるいは自衛官のほとんどが国を守ることに命を見い出してくれているならば、われわれの国は称えるべき安寧の中にあるのであって、そのことについてはわたしは現在も「そのとおりにあるのだ」と言っておきたい。医者が患者の治癒と健康に命を見い出してくれているなら、われわれは仁の中を生かしてもらっており、料理人が料理および、人に安全かつ旨いものを食べさせるのだということに命を見い出してくれているなら、われわれはじつに文化的な空間の中を生きさせてもらっていると言える。

彼らは真面目ぶった理想像をイメージしてそれを自分で模しているのではなく、本当に己の生をその命に捧げているのだ。彼らは命の

人たちであって、彼らは死なない。もし永遠の命という概念を仮想するなら、誰でも永遠の命は彼らのような人々に与えられるものだと考えるだろう。

生死軸に「命」はないので、生死軸に所属する者は、どこまでいっても「なりきり」に尽きるしかない。「なりきり」といって、何になりきるのか。なりきるためには、これになりきるというようなイメージが必要だ。そのイメージは、生きているものではないので偶像と呼ばれる。偶像をイメージに持ち、それを崇拝して、「これになりきろう」とする。生死軸においてはそうして役をこなそうとするのだ。それはフィクション上の配役をこなそうとするときもそうだし、ノンフィクション上での役割を果たそうとするときも同じだ。

「なりきり」をしなかったときの無様さはどれほどだろう。仮にあなたがフィクション上で「ロミオとジュリエット」を舞台に立ってやるにせよ、ノンフィクション上で教師をやって教壇に立つにせよ、それならばその役に「なりきり」をしなければあまりにも無様だ。あなたはロミオ役であれジュリエット役であれ、それをネタとして茶化す以外の方法としては、無理やりにでもそれに「なりきる」という方法しか持ちえないのではないか。「なりきり」もできずにロミオ役としてジュリエットの名を叫べば、観衆らは容赦のない失笑をあなたに向け、すべてのレビューはウェブ上であなたに遠回しに「死ね」という嘲笑と罵倒を向けるだろう。「なりきり」をせずに教職として教壇に立ったとしたら、児童らはすかさずあなたが無様で隙だらけであることを見抜いてきて、反抗的な態度であなたを嘲弄し、あなたに恥を掻かせて笑い、あなたに死にそうな思いをさせるだろう。

一所懸命という四字熟語があるが、「命」がないのであれば「懸命」ということはできない。霊魂がないなら全身全霊ということもできないだろう。身体の性質として、体を鍛えて「全力」ということしかできないはずだ。全力で何をするといって、全力でその「なりきり」をするしかない。どこまでいっても、あなたは生きものとしてはロミオではないしジュリエットでもないのだから、できることといえば「なりきり」しかない。

現代においてはいわば、その「なりきり」に向けて、我慢の極点を超えたときに、人はそのことのプロになると言ってよい。我慢の極点を超えたとき、必然「ムン」の音が強烈に鳴る。何もかもを我慢して「なりきり」を選ぶ。政治家も有権者の前では憂国の市民代表という「なりきり」をする。ただしその強烈な我慢の苦しみについては、「相応のギャランティをぜったいにもらいます」という灼熱の決意がみなぎる。「この我慢をしなきゃ生きていけないというのですから、この我慢をしたぶん豊かに生きていけるという、じっさいの報酬をいただきます。それ以外に、この我慢にかかわって、あなたがたを許すことは決してないでしょう」。

与えられた役、獲得した役割があるのであれば、その役割に「なりきり」をするということでよい。ただ、どちらにせよ我慢の極点を超えさせられ、その我慢の果てで「生をください」が認められるという仕組みは同じわけだ。どうせなら我慢のしがいがある役割で我慢をしたいが、具体的にそのような役割は見当たらないというとき、「わたしの役割は『かわいい』です。わたしはかわいいものが好きだし、得意なので」

という発想もとうぜん湧く。

だから言ってみれば、^^政治家もアイドルも同じ音が鳴っている^^わけだ。どちらも我慢の極点を越えて「なりきり」を振る舞い、内心で「そのぶんの報酬はぜったいにもらいます」と決意している。内心で、下方に向けては「死ね」という大声を発している。政治家やアイドルに限らず、生死軸で生きていく者は全員そうなる。「なりきり」をしないと無様で、四方から「死ね」の嘲笑を受ける。だから我慢の極点を超えるまで「なりきり」をやる。友人という役にも我慢して「なりきり」をするし、陽気で気さくな人、社会人としてちゃんとしている人、他人にやさしい人、男、女、伴侶、家族、どうせやるなら「なりきり」までやらないと馬鹿にされて損だ。生を乞うために、役割になりきること、役割をロールと呼ぶならば、やはりそのロールを「プ

レイ」すること、そのプレイも「なりきり」までやらなければどうせ生かしてもらえないのだから、遊びでない以上は「なりきり」までやれ。

あるいは、自分がギリギリ生きていけるだけの資金状況にあるなら、自室に引きこもって、遠くからすべての「なりきり」どもを下に見て、内心とウェブで「死ね」とつぶやき続けるのもひとつの方法かもしれないが……

これは生死軸に所属する以上、どうしても行き着かざるをえない必然的な仕組みで、どのようにも回避の仕方はない。

命がないかぎりすべては「生きるための我慢」でしかありえないのだから。

もしその我慢からオリようとするなら、嘲笑を覚悟の上で自死を選ぶしかない。そのような、実行をしてしまった人はいまここにいないはずだが、そのような発想を持ったことがある人は少なくないはずだ。

わたしはそのような悲しい選択を、選択肢ごと不要にするために、このような長大な書き話しをしている。

生死軸において、人は我慢をするほど「偉く」なっていく。我慢は「吾我の驕慢」なのだから当然だ。我慢の極点を超えたとき、そのムンという音と共に、吾我は無限というほどに膨張して、「誰よりもわたしが一番偉いんですけど？」という調子になる。吾我の、一種の全能感のようなものにまで至る。この全能感は幼児のうちにあるものだから、そのとき「自分は子供のように純粋」とも思い込むというオマケつきだ。そうしてますますムンに命は聞こえなくなり、生命軸の存在などはるかに遠ざかっていくのだけれど、それでも仕組みが変わるわけではない。見失うというだけで、仕組みそのものはずっと変わらない。自分の役・自分の役割に、命を見い出してそれを高みにしている人はじっさいにいる。ムンはそのことに恭順せず、ムンはむしろその命に対抗するために発明されたものだけれど、それでも矛盾してあなたが「命の人は存在する」と言い張ることは、あなたがその気にさえなれば可能だ。

このことも考えていてほしい。あなたが誰かに「バカタレ！」と怒鳴られ、叱られたとして、あなたは本当に「死にたい」と思う必要があるだろうか？

さきほど、お笑い芸人といってもいろいろあって、けっきょく裕福に生きたいだけの人がいる一方、けっきょくは生を笑いに捧げてしまう人、「それがあなたの命なんですね」という人もいると説明した。そうして生を命に捧げてしまう人が、あなたのボンクラぶりに「バカタレ！」と怒鳴りつけたとして、その人はあなたに「死ね」と言っているだろうか。

命のビンタは、ときに勢いがすさまじくておっかないかもしれないけれど、あなたがその勢いに愚かな「ムン」で対抗しないなら、あなたには別のものが聞こえるはず。そのときあなたはきっと、そこに聞こえてくるものを、一言で「やさしい」と表現するだろう。

余談① アニメ「推しの子」が流行している

二〇二三年七月現在、わたしは流行しているアニメ「推しの子」の第一話を観た。第一話だけ長く一時間半ほどあり、アニメ映画のような仕上がりになっている。わたしはそうしたアニメ作品そのものに対してはさすがに自分が門外漢という感想しか持たなかったが、「かわいい」ということおよびこの現在時点での「アイドル」という現象に対して、現代人がある意味では素直な恐怖を悲鳴じみて表明しているところがあるというように思えて、わたしはこのタイミングで当作を

観たことに奇遇の感を覚えた。もちろん、わたしの側の一方的な思い入れによる感慨にすぎないにせよ。

「推しの子」の作中で、主人公格のアイドルの女性は、そのアイドルたるの「かわいい」がニセモノ・作り物にすぎないということを内心のつぶやきとして述懐する。そしてそのことが、

「ニセモノかもしれないけれど、いつか本物になればいいなって」

と泣き落としするような展開になり、そこからはいわゆるメンタル的な怨憎劇の方向を見せていくのだが、そこの展開じたいは陳腐かもしれないにせよ、それ以前に主役側のアイドルに自分のことをニセモノ・作り物にすぎないと述懐させたという一点については、現代のアイドル文化に対して一石を投じようとするものだとわたしは居住まいを正すことになった。

ただ一方で、もし当作をアイドル文化に対する斬新な切り込みのものとするのであれば、その描写は片手落ちで、肝腎なところが抜け落ちている、あるいは肝腎なところから逃避していると言わざるをえない。もちろんこのマンガ・アニメ作品はそのような強硬なモチーフを意図して作られたものではないだろうからわたしの指摘も空転しているだろうけれども、当作では舞台上の露骨なアイドルパフォーマンスの者が、プライベートの自室でもその露骨なアイドルパフォーマンスを続けてしまっているというところが気にかかる。これはじっさいにはないことだ。彼女は、舞台上ではどのようなアイドルにでも「なりきり」を示すにせよ、生きている人の実像としてはそのようなものではありえない。睡眠不足で体調を崩すこともあるだろうし、スマートフォンで業務連絡のテキストを送信するときはただの社会人の調子にもなろう。忙しくなれば疲労もしてくるし部屋の中も散らかっていく。ストレス発散のためにはやけ食いのひとつもしたくなるけれど、その中で体型維持のために食欲と戦わなくてはならない。どれだけ疲れていても、肌荒れしてはいけないので寝る前にスキンケアをしなくてはならない。翌日は朝八時から撮影があり、朝っぱらからでも飛び跳ねて強烈な笑顔と声を出力しなくてはならない。だから日常的にはイライラしていることが多くあるだろう。彼女らは人前やカメラの前で決してそういうところを見せないが、それを見せないというのは彼女らがそのときプライベートではないからにすぎない。アイドルだって排泄はする。アニメ作品で少女をトイレに行かせるというのは作中のイメージを汚染しかねない危険な描写で、ほとんど唯一の例として、宮崎駿監督が「魔女の宅急便」で主人公の少女キキをトイレに行かせるという描写をしたことがあった。この描写は勇敢な描写で、それ以上に慎重な描写だった。

「推しの子」ではプライベートの描写をごまかしていたが、もし本作のほのめかした「アイドルの裏側」を真正面から表現の意図とするならば、本来は何より、「人は〝さびしさ〟から逃れられない」ということが描写されるべきだったろう。人はさびしさから逃れられないので、性行為、自慰、変態行為などをその逃げ口としてむさぼるし、悪趣味なマンガや動画をむさぼるということもする。匿名あるいは「裏垢」を使ってどぎつい悪口をＳＮＳやその他のウェブサイトに書きこむこともあるだろう。そんなことは不健全だとわかっていても、いくらかでもさびしさを慰めないでは眠れないのだ。すでに円熟した芸の極みにあるという達人のような人ならともかく、とにかく派手さで仕事をするという若年の女性が、夜中の二時までステージの光と音響を浴びて、それから帰宅して三十分でぐっすり眠るということは不可能だ。一度でも精神的に調子を崩せば、食事も睡眠もまともに摂れなくなる。そうなる前に、何かしらでさびしさを慰めるしかなく、しかもその慰めるというのも次第に「飽きて」くるから、そのたびに悪趣味の度合いや、どぎつさの程度を増していかざるをえない。

本来はそこまで描写していよいよ「アイドルの裏側」という表現の意図が達成されるものと思う。もちろん当作のファンの人から見れば、そのようなことが描写されたらそれはもう別の作品であって、そんなものは現在のような人気作にはならなかっただろうけれども。

舞台上のアイドル、あるいは映像の中のアイドルを見て、その溌剌とした印象を知る人は多い一方、じっさいには衣装を脱いだ彼女らの

身体と肌が、おそろしく疲れており、異様に重々しく、その肌質や目の色もどこか蝋人形のようだということを、直接知る人はあまり多くないように思う。「推しの子」も単純には、そこまで生々しい彼女らの具体の実情を知った上でアイドルを裏面ごと描写しているというものではないように思う。アイドルのような稼業をする以上は、スポンサーや、極端な太客というべきファンや、テレビに出演するならそのプロデューサー等、あるいは自分の事務所のプロデューサー等に向けてもそうだが、性接待とまでは言わなくても、酒の席に呼ばれてのセクハラを含んだ接待というものはありがちだろうし、その中でやはり強烈な、極点を超えた「我慢」をして、彼女らは素人のそれとは異なる「かわいい」を発現させていくのでもあろうが、我慢によって「必ずそのぶんの報酬はいただきます」という憤怒の業火は燃えさかっているのだから、それが平たくいって彼女らの心身を内部からボロボロにしているものだ。わたしが見てきた限りでは、そうした職業の女性たちは、実物としては「艶やか」ではないことがどうしても多い。胴体も四肢も、触れたときの感触が石のように重く冷たく、その表面がまるで薬物中毒者のようにゴムめいた質感になることもある。平たくいって実物の彼女らは、一般の目の前に置くとその質感が「不気味」なものでさえあるのだが、それに衣装を着せて照明を当て、カメラを回して音楽をかけると、彼女らはプロとしてそこで「化ける」ということをするのだ。しばしば、いかにも「無理やり」であっても。

「推しの子」ではその肌質・体質に及ぶような不気味さの描写の一切を、典型的な現代アニメの「キャラ」「ネタ」でごまかすことで潜り抜けている。潜り抜けてしまっている。このことが、アイドル文化の裏側を描写するふうの創作物として自己矛盾しているように思う。アイドル文化の裏側を描くなら、本当に描いてしまえばいいのにと、門外漢であるわたしなどは思った。言わずもがな、じっさいの業界人は作中のような「ネタ」の軽快さでは存在していない。もし業界が作中で描写されるような「ネタっぽい」ものなら、アイドル業界は裏表とも平和なものでありえように。

もし、内心にこっそりアイドル志望を抱えている女性が「推しの子」を観たとしたら、その志望がしぼむというよりは、むしろ膨らむということのほうが多いのではなかろうかと思う。それだと当作は結果的に、アイドル文化の裏側を暴いたふりをしながら、じっさいにはより業界のファンタジーを後押ししたとみなすべきだろう。

わたしは「推しの子」の第一話を見てそのような感想を持ったが、それで、ひとりの視聴者として何か不快に思うところがあったかと問われたら、それは不思議に「まったくなかった」と言いたい。話の組み立てが、いわゆるネタバレになるからおおむねは伏せるとして、観た人は知っているとおり、斬新というよりは荒唐無稽の、そもそもが「ネタ」の言いようをストーリー構造の根幹に据えたものだ。一種のバカ話のような構造で、そこにシリアスな風味を強引に持ち込んでいるので、全体の描写は当然ちぐはぐになっている。そしてそのちぐはぐ具合が、失敗というのではなくもとよりそのつもりなのだろうと受け取られるので、観ている側としては不快さはなかった。シリアスに描写したら都合が悪いところがありすぎるし、かといってコメディにしてしまっても話は進まないのだろう。だから全体がちぐはぐで、画面のすべてから、そのちぐはぐうんぬんなどについては、

「もう正直どうでもいいでしょ？　そんなこと」

と言い放っている声が聞こえてくる。わたしはそれにすんなり賛同させられたここちがして、わりと従順にその――前もってちぐはぐな――ストーリーテリングについていくことができた。これがもし、かつての「新世紀エヴァンゲリオン」のようなものなら、いまさらコメディにするわけにはいかないので、ストーリー構造のちぐはぐさには「おいおい」とつっこみどころが出てきてしまうが、「推しの子」は初めからそのつっこみどころを放置したまま、勢いだけでストーリーテリングのリードをしている。「そんなわけないだろ！」というつっこみように対して前もって「そうですよ！」と言い放って話を進めているのだ。^^「そんなことより、かわいい女の子と、おいしい男キャラ、この組み合わせに敵はないでしょ？　そしてそれ以外に何も要らな

いでしょ？」><と遠くを見遣りながら。その点は、時代として新しい段階に至ったと思わされる作品で、わたしは素直にそのことを「ついに向こう側にまで至ったらしい」と友人に報告した。

もう一度たしかめておきたい。ついに完成したらしい「向こう側」の新しいストーリーテリングのモットーは、いまこのときに強力な説得力を持っている。

「そんなことより、かわいい女の子と、おいしい男キャラ、この組み合わせに敵はないでしょ？　そしてそれ以外に何も要らないでしょ？」

冒頭に説明したとおり、わたしは十年前に「メンヘラ文化」の台頭が危惧されるという話を書いた。それでけっきょく、「推しの子」もモチーフとしてはその「メンヘラまがい」を動力にしないとストーリーの構築ができなかったわけだが、そのストーリー構築とまったく無関係あるいはストーリー構築を損傷までする具合で、「かわいい」の大暴れが描かれており、それについての素直な痴愚と恐怖が当作からは悲鳴のように響きわたっているとわたしには思える。ひいてはここに余談として、「推しの子」が流行する現代を背景にして、じっさいにどのように恐怖すべき「かわいい」が成り立ってゆき、それに対する悲鳴が上がるようになるのかを、わたしとしても描写していきたいと思った。その描写がきっと直接的に、「いま何がどうなっているのか」ということの理解を助けるだろう。

「推しの子」で、アイドルの「かわいい」なんてニセモノだと語られているのに、なぜ当人も周辺も、そのニセモノ・作り物の「かわいい」の周囲で浮かれて踊り狂っているのだろう？　そこから悲鳴は聞こえてくるが、彼らが「助けてくれ」と悲鳴をあげているのか、それともすでにそうではない悲鳴をあげているのか、その悲鳴の内容まではわれわれにはわからない。

余談②　じつは何もかも「わからない」と感じている人がいる

仮にあなたが、何もかもについて「よくわからない」と感じていたとする。あなたはまだ若く、幼さもある、思春期というような年齢だとしよう。あなたは学校で読書感想文を書かされ、歴史の問題で「大化の改新」という穴埋め問題を解答させられる。それが正解だというのはわかる、わかるというよりは覚えているだけだが、その覚えている正解が何のことなのかよくわからないと感じている。数学でXとYの一次方程式を出されたら、とにかく足すか引くかして変数のひとつを消し、出てきた数字を「代入」すればいいのだとして、ふたつの直線の交点を求める。交点の座標がそれで正解だというのはわかるが、なぜ交点の座標なのか、なぜそれを解答するのかということじたいがよくわからない。ホームルームの道徳じみた授業の中で、どのようなことを発言すればいいのかはだいたいわかるが、なぜそれを言えば良しと評価されるのかはよくわからないし、評価されたところでどうなるのかよくわからない。あなたは読書感想文を「めんどくさ」と思いながら書くが、そのことに別種の不快とストレスを覚えている。率直に言って、古臭い小説じみて書かれている文章に「感想」というのは特になかった。感想といえば「はあ、そうですか」としか思わなかった。テレビで見るかっこいい○○くんのことについてなら感想は山ほどあるのだが、中野重治とかいう知らない人が文章でぶつくさ言っていたとして、「話はなんとなくわかるけど、感想なんか特にないよ」というのが正直なところ。それでもとりあえずそれっぽいものは書く。そのことにあなたは不快とストレスを覚えていて、苦しんでいるのだ

が、そのことにも慣れ切ってしまい、その苦しみをいつも我慢しているということをあなた自身で忘れてしまった。

あなたは将来のことについて考えるように言われて、考えたけれども「よくわからない」というのが正直なところだった。将来、なりたいものはないかと言われると、「なれるものならセレブみたいなものになりたい」と思ったが、そうはいってもそんなものになれるとは思わないし、なり方がわからない。そして本当にセレブになりたいのかと〝マジ〟で訊かれても、そこまで言われると「よくわからない」としか答えられない。花屋になるのとパン屋さんになるのと、どちらがいいかと限定的に訊かれたなら、「パン屋さんのほうになりたい」とは答えうるのだが、「本当に？」と訊かれると「うーん、たぶん」というぐらいで、それ以上訊かれると本当のところは「よくわからない」。恋愛については、それなりに願望があって、恋愛は「したい、です」と思っている。けれども、誰とどういうことがしたいかと訊かれると、「ディズニーランドとかに行って、その後、おしゃれなホテルのレストランで食事して」と、どこかで刷り込まれたらしいイメージしか出てこない。それについても「本当にそうしたいの？」とわざわざ訊かれると、やはり「うーん、いや、どうだろ、よくわからない」とあなたは言う。バリバリにキャリアを積んだ丸の内ＯＬにあこがれがあるが、そうなりたいのかと訊かれると「うーん？　どうなんだろ、よくわかりません」となる。学者になるのはどうだろうか、あるいはミュージシャンやアーティストはどうか。スイスの山奥のようなところで暮らすとか、フィジーのような透明な海のそばで暮らすとか。パイロットになるとか医者になるとか、職人になるとか美容師になるとか、学校の先生になるとか警察官になるとか。すべてのことについて、「どうだろう、よくわからないです」となる。

そこから苦し紛れにあなたの本心を言おうとすると、

「なんというか、ずっと部屋で寝ていたいです。たまに友達と遊んで。ゲームしたり、映画を観たり、好きなアニメとかずっと見ていたいです。あと、ケーキをずっと食べていたい。それでも太らないというのがいいです。季節はずっと五月ぐらいの気温がいいです」

というのが本心だとして出てくる。

先日、社会科より理科のほうがどちらかというと好きだと言いはしたが、やれイオンだの運動方程式だの言われると、急に気が変わって、「先日は理科のほうが好きだと言いましたけど、ちょっとよくわからないです」と言い出す。これはあなたがふざけてそう言っているのではなく、真剣に、本気の本心でまったくこのとおりなのだ。

「よくわかりません」

活躍しているスポーツ選手がすごいというのはわかります。わかる？　いや、うーん。本当はよくわかっていないかもです。戦争はいけない、というのはわかります。わかる？　いや、うーん、とにかく自分が巻き込まれるのはいやです。それでも戦争になったらどうするかといって、それはよくわからないです。人を思いやる気持ちが大事というのはわかります。わかる？　いや、うーん、それが大事というのはわかりますが、何をどうしたら人を思いやっていることになるのかがよくわかっていないです。○○くんがかっこいいのはわかります！　あ、でもどうだろ、先日○○くんがドラマに出ていて、がんばっていたんですが、なーんかイメージと違うなっていうのがあって、ちょっとよくわからなくなっています。△△くんのほうがかっこいいと言われたら、あっそうかもって思うところがあります。よくわかりません。

よくわかりませんが、前向きに頑張っていこうと思います。前向きに？　前向きってどういうのが前向きかよくわかりませんが、前向きにいこうと思います。前向き……？

あなたはそうして、何もかも「よくわからない」中を生きていたとする。たまに何かに強めに「その気」になって、「ガンガンやっていこうよ！」と思えるときもあれば、「なんかいろいろ無理。あはは」とダルいのが当たり前と思えるときもある。こんなに何もかもやる気になれないのはおかしい！　と泣きそうに思える日もあれば、その翌日には「いや、そうでもないのかな。別にフツーじゃん」と笑いながらお

菓子をつまんでいる日もある。
　あなたはなんとなく、ショート動画で流行っているダンスの動きを真似してみた。鏡の前で、「どんなのになるかな？」とやってみた。すると案の定、そこには不明の動きをする、奇怪な、よくわからないものが立っていた。立って動いていた。指でピースサインなどを作ってみると、別に悪くはないけれど、特に何の意味もない、「何これ」というようなものがそこには立っていた。あなたは自分の存在そのものに首をかしげている。
　何なのかな、こいつ。
　別に自分のことがきらいではないし、自己嫌悪も卑下もするつもりもないけれど、とにかく何もかもについて「よくわからない」。自分自身がそこに立っているということじたいが一番「よくわからない」ものだった。そのよくわからないものが、指先でピースサインを作ってみるのは、あなた自身にとって最も首をかしげたくなる姿のものだった。
　あなたはこのようなとき、自分自身に対して「意味がない」ということばしか持っていないが、正しくことばを当てはめるならこのときあなたには「祝福がない」ということになる。祝福を受けているピースサインは意味があるが、祝福を受けていないピースサインは意味がない。
　女性誌に載っている女性のそれっぽい表情を真似してみるが、それだって祝福がないので「意味ねー」と無様なものになる。美少女アイドルの真似をしてにっこりやわらかい笑顔みたいなものをやってみるが、それもやはり祝福がなくて「意味ねー」と無様なものだ。
　季節がやや過ぎて、あなたは学校の制服を夏服に変えた。鏡の前で夏服姿の自分を見てあなたは、
「あ、やっぱりけっこう、胸が大きくなった」
　というのを発見した。
　そしてふと、ふたたびピースサインをしてみた。
　あ、これはけっこういけるかもしれない、とあなたは思った。
「これは、制服の力だな、制服の力ってすげえな」
　とあなたは思った。
　あなたは制服のスカートを、腹の側へ折り込んでいって、ややためらわれるほど、性的な露出があるだろうと思えるところまでスカートを短くした。
　そして同じようにピースサインをしてみた。
「うん、やっぱりいける。うちの制服、かわいいのでよかった」
　あなたは文化祭に関わって、友人から誘いを受けた。文化祭の演し物として仮装のたぐいをやるらしい。
　友人が、
「あたし、このキャラやりたいから、あなたその相方の、こっちのやつやってよ」
　と、友人は雑誌のキャラクターを指差した。あなたは三角帽子をかぶった若い魔女のような役で、友人はタキシードを着た殺し屋のような役らしい。
　あなたはラメ入りの紫色の三角帽子をかぶり、頬に赤いタトゥーのようなラインを入れる。カラーコンタクトまでするのは抵抗があったので拒絶したけれど。
　ぎざぎざに切り込みの入った衣装は、一部の肌をきわどく露出して、クラスメートたちを照れくさそうに「おお」と言わせた。
「先生は、中に襦袢（じゅばん）着なさいって言っていたけど、本番はぶっちゃけ無しでいいよね。襦袢とか、言い方が笑える」
　と友人はあなたをけしかける。
　文化祭の本番では、文化祭全体のムードもあり、演し物の仮装でするパレードは来客によく注目され、あなたは写真撮影の的になった。いちおう鏡の前で練習してきた、ステッキの構え方などを披露すると、そうしたものを撮影しなれているらしい、ずんぐりした風貌の男が高価そうな一眼レフを構えてあなたを撮影した。ちょっとその男の気配は気色悪くも感じたけれど、その男に釣られて周囲の人たちも遠慮なくあなたを撮影する向きになっている。だからあなたは、

「まあいいか」
と思って、思いがけず調子が乗ってきたポージングのいくつかを続けた。
家族に連れられた小さな男の子が、あなたとあなたの衣装を見上げてポカーンとしている、あなたが手を振ると、少年はますますポカーンとするようだった。
あなたがキャラクターの装いに合わせてにっこりほほえみ、ピースサインをして見せると、少年はドキッとしたらしく、母親の陰にパッと隠れて、その向こうから恥ずかしそうにあなたを見ていた。
あなたは愉快になり、
「いいなあ、少年は純真だな」
と、なんとなくのけぞった。
文化祭の日は音楽室も開放されていた。あなたは仮装の姿のまま、一緒にいた級友たちに、
「そういえばいちおう、わたしピアノ弾けるんだよ。バイエル修了ぐらいまでだけど」
そうしてひさしぶりに、たどたどしくではあるがピアノを弾いてみた。すると周囲は、
「うわ、なんかその恰好でピアノ弾かれると、すごい萌えるな」
「正直、その足もとエロくね？」
「◯◯ちゃんさ、そうしてメイクしたらすごい映(ば)えるんだから、ふだんから自分磨きしないとぜったい損だよ。努力したらたぶんめっちゃかわいくなるって」
あなたに前向きなアドバイスをしてくる同級生の男は、その視線がこちらのざっくりした衣装の胸元をちらちら覗き込んでしまっており、あなたはそのことに苦笑した。
あなたは、
（こういうのは、わたしイケるのか）
としみじみ学習して知ったという気がした。
（なんでもやってみるもんだな笑）

あなたはそれから以降、私服もこだわるようになっていった。高いものは買えないけれど、試着をとっかえひっかえしていくうち、
「あ」
あなたは服のラインが自分の脚を長く細く見せ、バランスによってさらにバストが恰好よく見えるということを発見した。
「そっか、わたしはここがダボついている服着たらだめなんだ、ここはこのへんからタイトになっていないとだめなんだな」
「あと、青系のパステルカラーは思ったよりだめだ、わたしの顔色がなんか暗く見える」
「このスカート、生足でここまでやると、ちょっとエロすぎるか。でもなあ、エロくしておくと、バイト先で楽できるしなあ、思い切ってこれで行っちゃうか。別に襲われるわけでもなし」
あなたは同級生の男からお出かけに誘われた。デートのつもりなのかどうか、向こうがはっきり言いださないのがもどかしかったし、あなたにとって好みの男というわけでもなかったけれど、好奇心や楽しみが勝るのであなたは誘いを受けることにした。
誘ってきた男と街中を歩いているとき、交差点のＬＥＤヴィジョンにスポーツ選手の号外が出て、あなたはそれを見上げ、
「この◯◯って人すごいよね。こうやって、海外に出て活躍できる人とかめっちゃ尊敬する」
と言った。
「そうなんだ」
「うん。なんていうか、やっぱり人を元気にしてくれるよね。活躍とかしてくれると。なんかさ、戦争のニュースとかばっかり流れていると、やっぱ戦争とかはだめだなって思うじゃん。聞いてて元気なくなるし」
「そうだね」
「人がお互いに思いやりを持てたら、戦争とかなくなるのにね。そう思わない？」
「その通りだね」

「あ、見て。△△くん映った！　彼、新曲でセンターやっているんだけど、途中のフリがめっちゃカッコいいんだよね。見たことある？」
「いや、ないな」
「ぜひ見てよ、すっごいカッコいいから。△△くん、輝いていて、チョー元気もらえるから。それでいて△△くん、バラエティとかに出ると、トークもできるし、カッコいいくせにおいしいキャラしててさ。それ見ていると、なんかね、もう、わたしもガンガンやっていこう！って気にさせられるの」
「へえ、そうなんだ」
「わたしやっぱり、そうやって、人に元気あげられるような人になりたいな。そのために、もっと自分磨きとか、努力しようと思ってんの。最近いちおう、筋トレとかも初めていたり。お金ないからジム通いまではできないけど」
「アイドルとかなれんじゃない？」
「アイドル？　いやあ、それはさすがに無理っしょ。プロの人たちはもっとはるか上の存在で、わたしなんかがやっても、きっともっとしょうもないものになっちゃうよ。いいとこ、ちょっとだけ人気のあるインフルエンサーどまりじゃない。いやそれもじっさいには難しいか」
「そうかなあ、けっこういい線いけるかもとかって思うけどな。おれじっさい〇〇ちゃんから元気もらってるし」
「またまた、おだてるの上手だねえ。でもやっぱり、ワンチャンそういう舞台に立って、一時期だけでもいいから、有名人とかセレブみたいな暮らしをしてみたいって、あこがれはあるよね。妄想だけど」
　あなたはそのまま、その男といい仲にはならなかったけれど、向こうはあなたのことを好いているようで、あなたとしては気分は悪くなかった。わたしなんかにありがたいことだと思う一方、内心ですでに「ごめんなさい」という言いようも準備している。
（お付き合いとかはさすがに無理だけど、とりあえず、わたしはこういうのはイケるらしい。それなりにというかふつうにドキドキはしたわ）

　あなたはそう学習してこころよく思った。
（彼がもうちょっとおいしいキャラしていたらまだよかったんだけどなあ……彼、ヘンなところで真面目なんだよな。それにしても、なんだろうこの感じ。足許ふわっふわする）
（そっか、わたしわかった。恋愛とはまた別だけど、こうして誰かに「推し」にしてもらえるって、すごく満たされることなんだ。すごい自信になる）
（わたしけっこう肉食なんだな、意外）
　帰り道、あなたは複数の男に声をかけられた。うさんくさい男が一名、まともそうな男が二名だった。まともそうなうちのひとりは背の高い外国の男だったので、会釈だけで通り過ぎたけれど、内心では「おっ」と思った。
　あなたは自分のことを、なんだかんだイケているらしいと思い、「いっぺん、もっと都心のほうまで出るか。そんで、有名なところで髪切ってもらおう」
　と思った。
「髪の色どうしようかな……あとやっぱわたし、こっちの角度からのほうがかわいく見えるんだよな」
　あなたはこうして「自信」を得たのだが、かつてのあなたはいったいどこへ消え去ったのだろう。何もかもについて「よくわからない」と言っていたあなたは。
　あなたは「かわいい」を得て、周囲から認められるようになった、あるいは単純にはちやほやされるようになった。
　個人的な「推し」になれるまでになった。
　あなたは「祝福」を得たのだろうか？
　それはわからないし、誰にもわかりようのないことだけれど、少なくともあなたの体感としては、自分のするピースサインが「意味ない」無様なものとは感じられていない。
　現実問題、二〇二三年の七月現在、「かわいい女の子とおいしいキャラの男」の組み合わせが“最強”になっている。先の段に紹介したア

ニメ「推しの子」でもまさにそのようになっており、その組み合わせが最強ということだけで、どのようなちぐはぐなストーリーテリングも力ずくで押し通れるということが事実になっている。

あなたもその〝最強〟の組み合わせの一角に入るなら、あなたのすべての言いようは、どれだけちぐはぐでも力ずくで押し通るだろう。

ここであなたにもう一度、読書感想文が課されるとしたら。読書感想文なんて課題はそもそもが悪しき習慣のように思うので、単にその読書からの話でも聞かせてもらうことにしよう。かつてあなたは「感想なんか特にないよ」と弱々しく言っていたけれど、いまはどうだろう。「かわいい」を手に入れたあとのあなたは、「感想なんか特にない」と、まったく同じことを言うだろう。ただし精悍に言うのであって、弱々しく迷うようには言わないだろう。

余談③ アイドルのアイドルたるゆえん

アニメ「推しの子」の第一話では、偶像崇拝を「してしまう」ということが赤裸々に描かれていた。そのことについては包み隠すところがない描写がされていて、作り手の側の、偽りない真の体験が開示されているのだろうという、むきだしの説得力があった。アイドルの「かわいい」が作り物のニセモノだと知ってはいるのに、なぜかそれを崇拝してしまうのだということ、それによってしか元気がもらえないのだということが、本当にあるがままというふうに描かれていた。

なぜ偽物と知っているのに、矛盾して崇拝してしまうのだろう。その矛盾に対する違和感や恐怖が奥底で叫ばれているのだが、そのことは取り扱いきれないようで隠蔽される。隠蔽するために、突如そこで関係する登場人物らを「ネタです」「キャラです」と描写することに切り替えて、そこに聞こえていた問いかけをみずからで雲散霧消させてしまう。それは卑怯なやり方・破綻している切り替えであるには違いないだろうけれど、そうした切り替えが起こってしまうのだということまで含めて、それらはすべて実情の赤裸々な自白表現なのだと思う。自分の中で何かがムンとなって、脳みそが問いかけを「茶化す」ということが止まらないのだろう。向き合うということじたいができないということまで含めての悲鳴が聞こえる。そのことをわたしは勝手に受け取め、勝手に応じて、その悲鳴が何の悲鳴であるのかを解き明かしてゆきたい。またその悲鳴は「かわいい」「アイドル」とどう関係しているのかについても率直に解き明かしてゆきたい。

単純に考えて、アイドルに必要な要素とは何だろうか。ひとつには、顔が美麗であることが望ましい。肌がうつくしく、髪がつややかであることが望ましい。性的に魅力があるほうが望ましい。明るく元気いっぱいでいるか、そうでなければ何か「オーラがある」というほうが望ましい。現在はグループアイドルのほうが盛んだから、チームメイトと仲良く親しいというほうが望ましい。衣装は派手で、動きは大胆、声も目立っているほうが望ましい。年齢は若いほうが望ましい。全体の印象はキラキラしていたほうが望ましいし、じっさいのところ大きなお金が動いているほうが望ましい。キメるところでキメるのが望ましいし、勝利の中に立っているのが望ましい。

これらの要素をハリウッド女優が具えている場合、なぜかハリウッド女優はわれわれの言うところの「アイドル」にはならない。オートクチュールの下着をつけてキャットウォークで新作をアピールするスーパーモデルにおいても同様だ。なぜハリウッド女優やスーパーモデルの彼女らは「アイドル」にはならないのかというと、やはりダウンフォースの問題だ。ハリウッド女優やスーパーモデルは、一般の

人々に対して上位者のようにふるまう。ファンたちが「アイドル」に求めているのはそれではない。ファンたちがアイドルに求めているのは、それらの要素を具えた者が自分の下風に立ってくれることなのだ。だから「アイドル」は、制服姿も含めて全体のふるまいと印象を「まだ子供なんです」というふうにしていく。大人としてファンたちの前に屹立してしまってはそれはアイドルではないわけだ。アイドルがそうして彼らの下風に立ってくれるからこそ、彼らはふだん受けているダウンフォースの脅威から一時的に逃れられる。それで彼らにとっては、アイドルコンテンツに視聴覚を取り囲まれているうちは、自分のいる場所が一種のヘイヴンのように感じられるのだ。

「アイドル」が大人として彼らの前に屹立してしまっては、彼らのヘイヴンは終わってしまう。「アイドル」が、ふてぶてしくハードリカーを飲み、煙草を吸って、高級な腕時計を吟味して愉しみ、たくましい男性と性的交際をしているようでは、彼女らは大人であってアイドルではない。それではファンたちはヘイヴンを失い、いつも受けているダウンフォースの脅威に無防備にさらされるわけで、そうした破壊行為はファンたちにとって「裏切り」と感じられる。彼らは自分たちの避難所・ヘイヴンに投資してきたのであって、このような破壊を行うならこれまでの投資を返還しろ、と請求したくなる。そうした業態と消費者のありようが、是なのか非なのかはわからないが、是非はともかくとして仕組みとしてはそうなっているものだ。

それで、なぜその「ヘイヴン」は、美麗な顔や性的な肢体、大胆な声やダンスなどで作られるのだろうか。地上で模擬的に作り出されたヘイヴンといえば、たとえば日本では平等院鳳凰堂などがそれにあたるが、平等院鳳凰堂に性的な肢体はないし、大胆なダンスもない。平等院鳳凰堂を「かわいい」とはさすがに言わない。いくらなんでもそのヘイヴンとここで話しているヘイヴンはものが違いすぎる。

なぜここで話しているところの「ヘイヴン」は、美麗な顔、性的な肢体、大胆な声やダンス、「かわいい」で形成されるのか。

このことは、「弱点」をキーワードにして考えていくとわかる。われわれは生死軸のダウンフォースの中、傷つく場所に勇敢に立つということができず、そのおびやかしにいちいちの我慢スコアで対抗してきているのだった。その我慢のときにムンという音が鳴るということ。そしてその「おびやかし」「傷つくということ」は、きわだって"弱点にかかわって"生じるということに注目しよう。背の高い男に「ちび」と言い放っても、言われた側はおびやかされないし傷つくこともない。そこに彼の弱点はないからだ。人はそれぞれの弱点においてこそ、大きくおびやかされ、深く傷つくということが起こる。

人の弱点はどこにあるだろうか。人それぞれとはいえ、一般的に性的なことは誰でも大きな弱点になりやすい。たとえば、下半身を露出して自慰行為をしているところ、それをもし知人に見られたら、そのとき多くの人はそのことを「大ピンチ」と感じるだろう。まして性的な自己を未だ確立できていない人の場合、その「大ピンチ」にしどろもどろの言い訳さえしようと取り乱すだろう。そのような場面においての言い訳など成り立つわけがないのだけれども、それ以上の動揺がその弱点にかかわって起こる。ここを見られたら終わり、ここを突かれたら終わり。だから隠しきり、守り切っていかなくてはならない。人は誰しもそうした弱点の負担を抱えながら生きている。

性的なことはそうして多くの人にとって大きな弱点としてある。それで、その弱点に対応するかたちで、「アイドル」の要素が決定してくる。

ここで性的な自己の未確立を弱点にしている男がいたとすると、彼に対しては、性的な魅力をあきらかにしている女性がアイドルたりうる。性的な魅力をあきらかにしている女性が、あえて彼の下風に立つ。彼女が下風に立つのであれば、彼はその大きな弱点におびやかしを受けなくて済む。彼はその弱点について解放される。大きな弱点について解放された彼は、そのことをヘイヴンのように体験する。

彼は未だ性的な自己も経験も自信も確立できていないので、きれいな言いようをすると彼は「うぶ」なのだが、この彼の未熟におびやかしをかけないように、アイドルの彼女は彼よりも増して「うぶ」でな

くてはならないわけだ。ただし「うぶ」といって、性的に魅力を持っていない女性が「うぶ」ということではだめだ。性的な魅力としては平均よりずっと高いものを持っている彼女が、あえて「うぶ」で、性的に彼の下風に立つということでなくてはならない。

いささか面倒くささが目立つところではあるが、この仕組みは正しく見抜いていなくてはならない。

「弱点」がキーワードで、彼はその弱点において際立って、日常的に強者からダウンフォースを受けている。彼の弱点が性的に未確立の自己である場合、彼は日常的に「性的強者」からダウンフォースを受けている。このダウンフォースよりも勝る権威としてヘイヴンを成り立たせようとする場合、アイドルの彼女はその日常的な性的強者を上回るほどの性的強者であるほうが望ましいのだ。日常的な性的強者Aよりも、アイドルBのほうがなお性的強者である。そのアイドルBが自分の下風に立つということは、そのときの自分の立ち位置は性的強者Aなどものともしないほど高みにあるということになり、彼はこれまで受けてきたダウンフォースのすべてを吹き払うことができる。

彼はアイドルBの上位者気分を味わうことで、日常的に性的強者Aから受けるダウンフォースに対しても、

「あんなのけっきょく、狭い地元の、地味な女どもに、デカい面しているってだけだろ？」

と対抗できるヘイヴンを持つようになる。

性的なことが人の弱点になりやすいが、他のことも大いに弱点になる。これらの弱点を単純に列挙するだけで、われわれが「アイドル」にどのようなヘイヴンを見い出しているかが浮き彫りになってこよう。

・性的に自信を確立していないのが弱点だ
・ぞんぶんにお金はなく、みすぼらしいのが弱点だ
・勝利に縁遠いのが弱点だ
・本当に打ち解けた友人がいないのが弱点だ
・大胆にうごけず、もぞもぞ話してしまうのが弱点だ
・顔がぶさいくなのが弱点だ
・肌や髪がくすんでいるのが弱点だ
・何をしてもまぬけで迫力がないのが弱点だ
・元気がなくて弱そうなのが弱点だ
・きれいな服が似合わないのが弱点だ
・この年齢でこのレベルというのが弱点だ
・キメるところでキメられないのが弱点だ

これらすべての弱点について、深く傷つきそうになり、精神的な防衛をしなくてはならなくなっている者をイメージするなら、そこには率直なところわれわれがイメージする「アイドルオタク」のようなものができあがる。そしていまやこの性向はそうした「オタク」に限ったものではないということは、これまでに説明してきているとおり。

この列挙された弱点に、それぞれ対極する強者を設定してみる。

・性的に魅力があるのが強みだ
・お金が使われて、キラキラしているのが強みだ
・勝利の中に立っているのが強みだ
・本当に打ち解けた友人がいるのが強みだ
・大胆に動き、目立って話せるのが強みだ
・顔がかわいいのが強みだ
・肌や髪がつややかなのが強みだ
・何をしてもオーラがあるのが強みだ
・エネルギーにあふれて何にもくじけないのが強みだ
・きれいな服が映えるのが強みだ
・まだこの年齢なのにもうこのレベルというのが強みだ
・キメるところでキメられるのが強みだ

こうして弱点の対極に強みを並べ、この強者をあえて弱者の下風に

立たせるなら、そこにはいかにもわれわれが現在知っている「アイドル」という像が浮かび上がってくる。
ここで言う「弱点」というのは、安易な言い方でいうならいわゆる「コンプレックス」と捉えてもよい。
（※コンプレックスは「劣等感」ではありません。抑圧下の構造体のことを指します）
よって、ここでアイドルのアイドルたるゆえんはついに、
<<コンプレックスの補填として下風に立つ>>
ことにあるのだということになる。
コンプレックスが未解決ということは、一般的に彼はいわゆる「大人になれない人」ということになる。それでも、世間的なことはそれなりにこなしていけるようになるだろうが、人格・精神の根幹が、どこか「ちゃんとした人」になれない。大人ぶっているというだけで中身はコドモだ。冷淡ぶったり、リアリズムぶったり、ニヒリズムぶったりするが、体の「老い」がそのことに貫録ふうの雰囲気を増加させていくだけで、その身に一個の人たる権威は現れてこない。コンプレックスを残したままなので、どのように糊塗したとしても、いちいちのことで彼の内面はヒステリックに挙動する。
生死軸のダウンフォースが猛烈なものになった現在、人は傷つく場所にはとうてい立てなくなり、コンプレックスの解決に向かうなどということは何やら不可能じみたものになった。もし自分の魂が、そうしてもはや一歩も進めないというのなら、われわれはいったい何のために苦労して生きているのか。
そこに燦然と、
「そんなことないんじゃない？　一緒に、がんばろ」
と、絵に描いたような「かわいい」ものが現れる。
彼の抱えているコンプレックス、その弱点群の、まったく正反対のものが舞台上に展開される。
すべての演出が、彼の思念を吹き飛ばしていき、彼は自分の観ているものが何なのかよくわからなくなる。
ただ、キラキラしている。
セクシーで、かわいくて、大胆で、つややかだ。
彼は、
「これだ、これなんだよ！」
と励まされて興奮する。
彼は手続き上、コンプレックスを解決したわけではないはずだが、このときなぜかコンプレックスがどこかへいってしまっている。
彼はいつのまにか拳を握り、胸が熱くなり、汗をかいて、腹の中で、
「うおおおお」
と叫んでいた。
それほど彼は“元気をもらった”。
ステージの終わり、彼が拍手をしないことがありえようか。
こうして彼は偶像崇拝をする。偶像を模した彼女の「かわいい」を崇拝する。
これまで解除は不可能と思えてきた彼の重荷を、壇上から一息で軽くしてくれたのだから、彼は彼女のことをやはり天使か救世主のように体験する。
彼はハリウッド女優を「応援」はしないし、スーパーモデルも「応援」しない。アイドルに対しては「応援」する。自分は彼女を「推す」と考える。
アイドルは、強みをもった強者なのに、彼の下風に立ってくれるからだ。
彼は自分をアイドルの上位に立たせて、下位の彼女を「応援」する。
彼は自分の見立てた救世主さえ、自分の下風に置くのだから、そのヘイヴンはやはり命の位置が入れ替わっている。
逆生命軸だ。
ここで悲鳴があがっている。
魂が天国（ヘイヴン）を拒絶することはできない。万歳！　しかし、何かこのヘイヴンは違う気がする。違和感がある。それでも逆らうことはできない。ここはヘイヴンなのだから。どれだけ逃れようとして

も、天国を拒絶できる魂などありはしないのだから、そんなの無駄な抵抗ではないか。わたしはこの崇拝から逃れられない。そういう悲鳴があがっている。

コンプレックスを解決できず、コドモのままでいる彼は、自己愛・自己中心性・自己万能感によって、命を踏んづけて「ぼくの生」を至高のものとした。

そのことへ、決定的な踏み出しをさせるために、いま「アイドル」「かわいい」というのが大きな役割を果たしているということだ。

アイドルに限らず、近年に流行のマンガもアニメも、その他のメディアも、すべてこれで成り立っていると見てよい。

むしろ、そのようにひとまず断じてしまうことが、あなたの前方を切り拓くのではないかとわたしは思う。

いま、何もかもがそうした「コドモ」に向けたものではないか？

それらのメディアに触れるとき、

「コンプレックスがどこかへ行ってしまう」

ということに気づけ。

それで、コンプレックスの重荷がどこかへいき、そのぶん、

「癒された、元気をもらった」

と言っている。

それで、

「応援します！」

ということちになっている、そのことに気づけ。

そう知った上で、魂を一時的にサボらせるだけというなら、そのことは深く罰されはしないだろう。

現代の、吹きすさぶ生死軸のダウンフォースの中、コンプレックスを解決する、そのために傷つく場所に立つというようなことは、絶望的に不可能じみて感じられる。この絶望的な魂の課題に対し、

「そんなことしなくていいんだよ？」

と、突如あなたをヘイヴンに案内する「かわいい」ものがやってくる。

そのときその案内人は、必ずあなたの下風に入り込んでいる。

下風に立ってくれるその「かわいい」ものは、あなたを安らがせるかもしれないが、よくよく考えろ。

その案内人は、本当に「やさしい人」か。

何かのイラストイメージを模しているだけの人じゃないのか。

あなたはあなたの弱みに負けてはならない。

弱者は、強者よりも強くないが、弱者が命の道に入れないというわけではないし、強者の側が命の道に入ると決まっているわけでもない。

誰にとっても困難なことではあるが、もし命の道に入れたとしたら、そのとき誰でも自分が弱者だったことを肯定するだろう。「わたしは弱い者でさいわいだった」と。

順転魔王

誰もが生死軸のダウンフォースに辟易しているところ、「かわいい」だけは例外に思える。「かわいい」彼女に対しては、誰も「死ね」の声は向けないし、また「かわいい」彼女からこちらに向けても、やはり「死ね」の声はまったく聞こえてこない。いつも純粋で屈託のない笑顔がこちらに向けられているじゃないか。それが彼女らにとっての“営業”なのだと言われたらたしかにそのとおりかもしれないけれども、かといって誰でも彼でも彼女のように「かわいい」ができるわけではあるまい？

あそこまで本当の「かわいい」ができるということは、やはり彼女には特別なものがあるということなのじゃないか。彼女の営業スタイルというのはあくまで、彼女の本質をカバーする社会的な立場・装い

にすぎず、彼女は本当に根っから「かわいい」のじゃないか。単なる営業として、表面的に「かわいい」をやっている連中が他にあるのも知っている。そうした表面的なものに、これまでだまされてきた、裏切られてきた、という体験も少なからずある。けれど、彼女および彼女らに限っては、そうではないと思うのだ。彼女らこそは〝ホンモノ〟なのだと思う……

やはり「かわいい」というのは正義であって特別なものだ、ふだんマウントやら「死ね」のダウンフォースやらに辟易している自分が馬鹿らしいと思えるぐらい、「かわいい」彼女は正義だ。その「かわいい」彼女が、たとえ遠くにでもいてくれることは本当に癒しになるし、励まされるし、元気がもらえる。自分にどんな弱点があったとしても、「かわいい」彼女にかかわってはヘイヴンなのだからその弱点の負担も免除してもらえる、だから生きていく気になれる。

これらの実効はどう見ても、

「やっぱり彼女こそ、命の人なんじゃないの？」

とわれわれに思わせるに足りる。

「その『かわいい』が作られたものだとか、イメージ・イラストを模しているもので、それに〝なりきり〟をしているだけと言われたら、そういう部分もあるのかもしれないけれど、そこってそんなに厳しく捉える必要があるのかな？　彼女はそうして、自分がかわいくなる〝努力〟をしているってだけなんじゃないのかなあ。彼女は単に、若くてピュアだから、そうしたイメージ・イラストのいちいちにも、影響されてしまう、それのまねをしてしまうというだけなんじゃないのかな。そのことまで含めて、やはり全体が『かわいい』って思うんだけど」

と思える。

まさかここで、「それは〝逆生命軸〟への転属作用なのである」なんてややこしいことを考える人はいないだろう。

ただそれでも、見逃せない一点、あるいはお目こぼしとはいかない一点がどうしてもある。ここまで説明してきたとおり、たしかにその「かわいい」彼女から受ける「生きろ」という励ましの声は、こちらが「ふわふわさせられる」ような感触ではたらきかけてくるということなのだ。持ち上げられるような、浮上させられるようなはたらきかけ。それは明らかにリフトフォースの感触だ。

もし彼女が命の人だったら、彼女からの〝リフトフォース〟として「生きろ」という励ましが聞こえてくるのはおかしい。生命軸において「生きろ」はダウンフォースのはずだ。

なぜ「かわいい」からの「生きろ」はリフトフォースとしてはたらきかけてくるのか。構造上、どのような可能性があるだろう。

このあたりは仕組みが煩雑に思えてわれわれは混乱させられる。

整理してみるとこうだ。「生きろ」というリフトフォースを受けるには、構造上、上位に「生」がある必要がある。

だから、「生きろ」というリフトフォースを受ける可能性があるのは、

・逆生死軸（一般的な生死軸）
・逆生命軸

のどちらかだ。

一般的な生死軸については、ここまでさんざん説明してきたけれど、ここで改めてもうひとつの、逆生命軸というのは何なのか。生命軸というだけでわかりにくいのに、それがさらに「逆」になっているので、逆生命軸というのはますますわかりにくい。

もし「かわいい」にかかわってすべてのことが、一般的な生死軸の中だけでやりとりされるのだとしたら、話はとても簡単だ。舞台上のアイドルは自分の満ちた生をファンに下賜し、客席のファンたちは自分たちの痩せた「死」をアイドルに捧げる。「わたしの生を満たすために、あなたたちは死になさい」という構図になる。じっさいわれわれは、他人事としては重度のファンがそうしてアイドルの「養分」にされているという構図を視認しているところがある。養分にされたファンたちは可能性や財産や身分を痩せこけさせていくのであって、けっ

きょくのところ、ファンは死ぬまですべてを捧げないとそのアイドルの真のファンではないということになる。じっさい、アイドルの生を満たすためにすべてを捧げて死んだファンがいたら、アイドルはそのファンのことを肯定的に認めてよろこぶだろう。もう死んでしまっているのだから、そのファンにつきまとわれるという心配もないので一石二鳥だ。

簡単化するために言ってしまえば、アイドルはファンに向けて、

「わたしの生を満たすために、あなたたちの身は養分になりきって死になさい、あなたたちはそのための存在でしょう」

「その代わり、わたしの豊かな生とその体は、あなたたちに見せつけてやるから、あなたたちはそれを抱きかかえて満足して死になさい」

と言っていることになる。

そんな恐ろしいことが、本当にあるのかないのか。

説明のために、本来の「命の人」の場合も説明しておこう。本来の「命の人」の場合、「主なる命を満たすために、あなたたちは生きなさい」という構図になる。

生きる者の頭上に「命」があるのだから、

「主なる命を満たすために、お前らは体を捧げて生きろよ、お前らはそのための存在だろ」

「その代わり、主なる命の栄光にお前らを浴させてやるから、お前らはそれを一身に受けて満足して生きろ」

ということになる。

もとの説明に戻る。アイドルのファンがその「かわいい」から〝リフトフォース〟の「生きろ」を受けてふわふわするということは、一般的な生死軸か、逆生命軸のどちらかで起こっているはずだ。それで、もし一般的な生死軸がそのまま露出しているだけであれば、ファンたちはアイドルのファンになりようがない。日常と同じ「死ね」のダウンフォースをそのまま受けるのであれば、彼らはそこに何らのヘイヴンも見出さないのでファナティクにはなりようがないだろう。

そこから、先に説明した「相互幻想」が見つかる。じつはファンたちの前には本質的にアイドルは存在しておらず、またアイドルの前にも本質的にはファンたちは存在していないということ。「相互幻想」の状態が、このアイドルとファンの関係を成り立たせていると説明した。そのことはそのとおりなのだが、では彼らが相互に見ている「幻想」とは何なのだろうか。彼らが何も知らないまま逆生命軸に転属するとして、そこで「生きろ」というふわふわさせられるリフトフォースを受けるとして、そこにある、真のヘイヴンではないらしいものとはいったい何なのだろうか。

逆生命軸の構造はつまり、「生が命を踏んづけて立っている」状態だと言える。生が上位にあり、命が下位にある。上位の生は、下位に命をやらせ、それを捧げさせて生として満ちようとしている。もし「命の人」が存在するのであれば、その「命の人」こそを下僕にして仕えさせ、自らの生を満たそうとしている。それが構造から逆生命軸だと言いうる。

いわば、神殿の命ために生きる誰かがあるのではなく、自分が生きるための生業として神殿に命をやらせようとする者があるというような状態。

あなたは誰を下僕にしたら、最上の持ち上げられた、最上の「ふわふわ」するここちを得るだろうか？

ふわふわさせられるここち、持ち上げられ、浮上するように「生きろ」と励まされる気がするあのここちは、そうして足許に命を踏んづけていることから得られるここちだと捉えていい。「ムン」はそもそも、そうして命の人を膝下にねじ伏せて自らを王とするために生み出されてきたものだ。最上の命を踏んづければ、最上の「ふわふわ」した浮上のここちが得られるのは必然と言える。そのここちの甘美さの無上たるは、ムンにとって耐えようもなく抗しがたい。

本来の生命軸、本来の「命の人」を仮設して考えてみよう。本来の「命の人」というものが存在したとすれば、陳腐なイメージだが、その人こそわれわれの目の前で「ふわふわ」と浮上していてもらわなくてはならないだろう。その命の人の足許にあるのが生たるわれわれと

いうことでなくてはならない。このとき、「ふわふわ」浮上している命の人からわれわれはダウンフォースを受けるが、そのダウンフォースはこの陳腐なイメージの中でさえ「生きろ」と聞こえてくる予感があるだろう。

ところが現代の「かわいい」に代表されて得られる「生きろ」の励ましは、自分の側がその「ふわふわ」浮上するという形で受け取られるのだ。自分こそが、持ち上げられて浮上する者。その足許には、命の人や神殿がある。最も踏みにじりたかったもの、最も膝下にねじ伏せたかったものがその足許にある。

かつて、日本で隠れキリシタンを弾圧するのに用いられた「踏み絵」のようなものをイメージしてもらうとして、その踏み絵を踏んづけて立つことで、いよいよその足許から生を満たすリフトフォースが湧いてくるということだ。

あるいはもっと単純に、青春の命を踏んづけ、恋あいの命を踏んづけ、芸術の命を踏んづけ、場所の命を踏んづけると、その足許からリフトフォースが湧いてきて、自分が「ふわふわ」持ち上げられるということ。

それで「元気がもらえる」「生きていく気になれる」そうだ。「かわいい」で偽装しながら。

われわれがいま、日常で最もありふれていることとして、「かわいい」から励ましを受けるということ、それで「ふわふわ」浮上した感じになるということには、どうもここまでの構造が組み込まれているらしい。ムン文化の中で人々は、単純に言って、「わたしはふわふわ浮上している地位のはず」という驕慢を発想の原点にしている。

仮に「命の人」が、清らかな花園に立っていて、まるで浮上しているようにその身がふわふわしていたとしたら、ムンはたちまち彼に駆け寄って彼の襟首を掴み上げ、投げ飛ばして地面にたたきつけ、鞭で打って「命の人」を四つん這いにさせ、土下座させる。

ムンは、そのふわふわする清らかな花園について、魂の底から、

「そこはわたしの場所でしょ！」

と怒鳴るのだ。引きずり降ろされ、地に叩きつけられて流血させられ、晒し者にされた「命の人」をそうして足蹴にして、怒鳴りつけ、説教を向けてやるとき、ムンは最も「ふわふわ」する。

「命の人」を〝傷つく場所〟に貶めているとき、耐えがたく抗しがたい浮上を得るのだ。

ムンは、「命の人」が直接憎かったわけではない。ただどこまでも「そこはわたしの場所」と思っていたのだ。命の人とその花園で横並びになれるのならともかく、そうではない、自分はその花園に立てない・入れてもらえないということを繰り返し経験させられる。そうなると、そこに立っている「命の人」が憎い。

どんな方法でもいいから、最大の力をもって、彼を花園から引きずりだして、地面にたたきつけてやる。

そうしたときに、自分は正当に〝失地回復〟し、わたしはわたしにふさわしい清らかな花園に立っているだろう。

極端な話に聞こえるかもしれないが、はたしてそうか。

われわれが見る「かわいい」アイドルの写真集には、「清らかな花園にふわふわ立っているわたし」というイメージがじっさいに掲載されているのではないか。

インフルエンサーでも何でも、イメージ豊かな背景の中に、「ふわふわ立っているわたし」を撮影してそれをアピールしているのではないか。

「ここはわたしの場所で、わたしはこういう場所にいる人なんです」

とアピールしているのではないか。

命の人が立つ栄光の場所に、自分が立つ。他のすべてのことはどうでもよいけれど、その「栄光の場所」だけはわたしの場所だ、そのことだけは譲らない。

そうして栄光の場所を強奪して、その壇上ではしゃぐアイドルを見て、人々はいまや、

「元気がもらえました！」

と呼応する。

そうした呼応が起こるということは、両者は同士、同類であって、同じ穴のむじなのだろう。

われわれは何と出会っているのか？

逆生死軸のまま、命にあこがれて転属しようとすると、逆生命軸に転属することになる。そこで出会うものは本来の「命」などではまったくなく、もはや「魔王」のようなものに出会っているようなのだ。そしてそれが魔王であるからこそ、じっさいにそれだけの力も持っているということらしい。ふわふわした「生きろ」のリフトフォースは生存本能にかかわって快感らしく、多くの人をとりこにしている。命の人を栄光の場所から引きずりおろしたことで、魔王がそうした報酬を与えてくれている。

アイドルもファンも、そこまで特殊なことをしているつもりはもちろんない。アイドルもファンも、ごくふつうに一般的な生死軸に属しており、その生死軸とは異なる一時的な避難所を持ちたい・作りたいとありふれて考えているだけだ。アイドルはファンの下風に立っているつもりはないし、ファンの側も「推し」の下風に立っているつもりはない。だから相互は向き合っておらず、相互はそれぞれに都合のよい幻想に向かっているだけのはず。だがその中で、どうやら本当にそうではないもの、単なる幻想とは言えないものと出会っているようだ。いわば逆生命軸における命の王に出会っている。少なくともそのアプローチは成立している。逆生命軸における命の王は、順転してみればやはり「魔王」だ。

われわれはどうも、アイドルを代表とした、作られた「かわいい」のアピール装置に篭絡されていくことで、いつのまにか順転魔王と呼ぶべきものに会うということを日々の常態にしているらしい。ちょうど、カルトまで含めたありとあらゆる宗教の、原理主義的な人たちが神殿の方向を拝むような頻度で、つまり一日に五回でも十回でも、われわれは「かわいい」をサムネイルからタップして崇めるということを常態にしている。タップしなくてもテレヴィＣＭにいくらでも流れてくる。じっさいわれわれが「生きる」という生活の実態は、老若男女、そうした娯楽メディアなしには成り立たなくなっている。急遽すべてのテレヴィ放送がなくなり、動画サイトの配信もなくなれば、老人はたちまち「生きる元気」を失って暗くなり死んでいくだろう。

「生きろ」と励ましてくれる声は必要だ。

けれども本来その声は、生命軸におけるダウンフォースでなくてはならない。

「生きろ」という声に、ふわふわさせられる・持ち上げられる・浮上させられるという感触が伴うのがその順転魔王の特徴だ。

「生きろ」というリフトフォースが、一般的な生死軸の中で得られてふわふわするとき、それはただのマウント合戦で酸鼻な勝利を得たということの結果でしかないが、その生死軸について――いつもマウント勝利できるというわけでもなし――嫌気がさして、生命軸と期待したものに向かう。その中で「生きろ」というリフトフォースが得られて持ち上げられてふわふわするとき、われわれが出会っているのは命の人ではなく順転魔王だ。その魔王は、「生きろ」と言ってくれて、自分を魂から励ましてくれる、だから順転しないうちはたしかに仕組み上、

「天使かな」

とも思えることにもなる。でも順転したら天使どころかそれは魔王、少なくとも魔王の使いであることは間違いない。

あなたはこのことについて、次のように考えなくてはならない。ここまで考えることができたら、あなたはこのことについてすでに高いレベルでの理論と判断力を具えているということになる。

「なぜわたしは、けっきょく〝傷つくという場所〟に立つことないまま、命を見つけた気がしているのだろう？　傷つく場所に立つことなしに、なぜわたしは世界が与えられたような気がしているのだろう？」

仕組み上、「傷つく」という分岐点に立たないまま、世界・命を与えられているのはおかしいのだ。そのときは不当な誰かが傷ついている。あなたは自分自身を地面に叩きつけなかった。代わりに、何か他の誰かを地面に叩きつけている。

あなたが踏んづけている足許で、命の人が傷ついている。その足許で、踏んづけた命の人が傷ついている。だからムンのリフトフォースが湧いているのだ。順転魔王からの報酬として。

だから、そのリフトフォースの中にいるとき、あなたの気分は持ち上げられてふわふわ浮上しているが、あなたの双眸はビー玉のように空虚な上、その奥は暗く蝕まれている。その瞳を深く覗き込むと何かがゾッとするのだ。

ニ.ムンは実績を捨てられない

どれが命であって、どれがムンであるか。区別はつけにくいものだ。リトマス試験紙のように、パッと見分けがつくものであれば話はかんたんなのだが、じっさいのところはそうではなく、ただその「ムン」という音でしか区別がつかない。「命」のほうは、触れると横隔膜が解きほぐされて広がっていくようだけれど、「ムン」のほうは、出てくると横隔膜が硬く萎縮するように感じられる。「命」はこだわりから離脱したまるで別世界での出来事のように聞こえるけれど、「ムン」はこだわりが強く人情に訴えてリアルな「事情」のように聞こえる。

わたしの友人らは、わたしの若いころのバカ話をよく聞きたがる。わたしは、同じ話を二度も三度もするのは老人じみていて好みではないので、なるべく避けようとするのだが、裏腹に、わたしの友人らはことあるごとに同じ話を聞きたがる。

「あの話めっちゃ好きなんですよ」

たしかに、優れた小説というのは何度でも読みたくなるからこそ優れた小説だ。だから小説家を気取るわたしとしては、そのように期待されたら何度でも同じ話をしなくてはならない。

たとえばわたしが学生の頃にインドを旅したとき、わたしは、デリー、ジャイプル、アーグラー、カジュラホー、バラナシ、ガヤー、ブッダガヤー、カルカッタ、と移動していった、その道中はどこもかしこもわけのわからない笑い話で満ちていたが、一方でカルカッタについては、

「サダルストリートはうつくしかった。あの朝、おれがドミトリーから出たとき、サダルストリートは光り輝いていた」

とだけ短く言う。なぜかわからないが、それが事実だったのだ。だからそのようにしか言えない。その何でもないような話を、わたしの友人らは聞きたがり、聞くたびに、

「いいんですよねえ」

「何かがいいんですよ」

と言う。

では、ここで架空のAさんを登場させるとして、

A「でもそれって、あくまで大学に行けるだけの経済的な余力があって、さらにそこから、そうした長期の海外旅行にもいける経済的余力があってのことですよね？　先立つもの、というのがいくらでもあるわけで。当時はまだ円高というのもありましたよね。いまは多くの人が貧困ですから、そういう旅行とか、そもそも大学に行けない人もたくさんいるんじゃないかなって思います。いちおうわたしは自力で、不労所得で暮らせるぐらいにまではなりましたけど」

と発言させてみたらどうだろうか。

このときのAさんに対し、横隔膜が解きほぐされるように感じる人はいないだろう。Aさんの発言の意図は不明だが、とりあえずAさんからは「ムン」っという何かの音が聞こえてきそうだ。

Aさんはこのとき、自らの発言によって一定の「ハイ／high」になっているようにも予感される。この場合はもともとが論説ではないの

でいわゆる「論破」ということにはならないが、なんとなくAさんには、その「論破」と類似した興奮物質のようなものが体内に湧き出ていて、それによってハイになっていることが想像される。近年ではこの、ハイとローを取り合うせめぎあいのことを、一般に「マウント」と呼ぶようになった。

ハイになるということを、ビルの階層にたとえてみよう。

ビルの十階より二十階のほうが高く、二十階より三十階のほうが高い。当たり前だ。そして、高くなればなるほど、地面から遠くなるのも当たり前だ。

階層が高ければ高いほど、見晴らしがよく、気分がよいのも当たり前だ。まだまだ上はいるだろうけれど、比較的、上から見下されるということも少なくて済む。自分は基本的には見下す側であって、見下される側ではない。

階層が高くなるのは、いいことづくめのように思えるが、そうではないこともある。階層が高くなればなるほど、そう簡単には地面に降りられないということがあるのだ。

ビルの二階から地面階にまで下りるのは簡単なことで、

「いまさら一階も二階も同じようなもんだろ」

という気分で済むが、それが三十階から地面階まで下りるとなると、

「同じようなもんだろ」というわけにはいかない。

三十階から一階に下りるのは「凋落」だ。これまでさんざん見下していた、二十階層の人や十階層の人たちよりも下に落ち、これまで見下してきたぶんを、倍増したかたちで自分が見下されなくてはならない。これまでの見晴らしのよさも気分のよさも、すべて捨てなくては一階にまで下りられない。

あなたが「ムンビル」の三十階に住んでいたとする。あなたはその住居がなかなかに快適で、気分を良くしていた。ところが最近なってあなたは、向かいにあるビルがムンビルではなく「命ビル」らしいということを知った。あなたはその「命ビル」に転属したがっている。命ビルの、同じ三十階でなくてもいいので、その五階や十階に移り住みたいと思っている。あなたはそのことを自分でこっそり「謙虚」だとも思っている。何も命ビルの最上階に住みたいと言っているわけではない。いまのような階層でなくていい、もっと低くてもいい。どうしてもダメなら一番低い地面の階でもいい。そうしてささやかに、けれどもやはり命ビルに住みたいのだ。こんな、ムンでおっ立てたバベルの塔に住むのではなくて……あなたはそう思っている。

けれども、これはアクション映画ではないので、ムンビルの三十階から命ビルの十階にジップラインを通し、そこに滑車をかけてすべっていくというわけにはいかない。命ビルに移り住むには、そのことが可能か不可能かはわからないまま、何にせよ地面階まで下りなくてはならない。

地面階まで下りるということは、ムンビルの三十階にいるという実績と誉れをすべて捨てるということだ。

「ムンビルの三十階に栄光はない」

そう信じるからこそ、あなたは命ビルに移り住みたがっている。こんなことで階層を高くしても値打ちはないんだ。あなたはそう宣言して勇敢に、階段を駆け下りていこうとする。

けれどもそうは簡単にいかない。実績があなたを許さない。ムンの実績、ムンとしての能力があなたを許さない。

あなたは二十階層まで下りてきた。そこでその階層の住民に見つかって、

「なに？　落ちぶれてきたの？」

と笑われる。

憎たらしい、いやな顔。

あなたはその瞬間、

（よりによって、こいつに鼻で笑われる筋合いはない）

と、不快と憤りを覚える。

あなたは、先のAさんと同じ何かの興奮物質を湧かせ、

「いや、そういうことではないですけど？　わたしはいちおう上の住民ですので」

と言って、二十階層の人にマウントを取る。あなたは「ハイ／high」になる。

ハイになったので、あなたは二十五階ぐらいまで戻っている。

あなたは地面にまで下りられないのだ。

あなたのこれまでのムンには、強い「こだわり」がひそんでいる。そのこだわりは、あなたのムンとしての「歴史」だと言ってもいい。

あなたはもともと、十階層に住んでいる特定の者に対して憎悪を持っていた。それでこれまで、

「こいつにだけは負けてたまるか」

ということで、ムンビルの三十階にまで到達してきたのだった。あなたの歴史。ムンビルの三十階から、そいつのことを常に見下すということが、まるであなたの人生の本質というようにこれまであなたを満たしてきた。

あなたは、やけくその思いで二十階を突破することはできても、その「いわくつき」の十階を突破することはできない。これまで、そいつを見下すために生きてきた・がんばってきたというのがあなたの人生だ。あなたはあなたの人生を否定してまで地面階に下りることはできない。

上り詰めてきたものを下っていくことは苦渋に満ちている。どんな天上人も、天上人だからこそ「下りるのはいやだ」ということで苦しむ。あなたはその苦渋を覚悟の上で、決死の思いで階段を下っていこうとするのだが、あなたにとって最大の関所は十階だ。苦渋は最もシャレにならない厭（いや）らしさであなたに迫って来、あなたの脳内はたちまち、

「なんでこんな思いをさせられなくてはならないんだ。ひたすらいやすぎる。なぜ、こんなことをしなくてはならないのか、さっぱり意味がわからない」

という思念に塗りつぶされていく。

そこからあなたはポーンと、エレベーターに乗り換えたここちで、気がつくといつもの三十階、自分の部屋に戻っている。

そのときの快適さ、居心地のよさ、見晴らしのよさ、気分のよさといったら。

「これがわたしの身分だもんね。自分でがんばって、自分で獲得したもの。誰に対しても後ろめたいところはない」

あなたの歴史。あなたはかつて、深く傷つけられたのだ。かつてのあなたは、深く傷つけられる場所に立たされていて、そのことが耐えがたく、とてもじゃないが受容することはできず、あなたはムンビルの上層階へと上り詰めていった。誰も自分のことを守ってくれなかった。自分で自分を守るしかなかった。だから我慢によってムンビルの上層階へ進んでいった。

そうして、かつて自分が傷つけられる場所にあったこと、そこから自力で脱出したのだということが、あなたの「こだわり」になっている。

何がどうなって、わざわざその悪夢のような「傷つけられる場所」へふたたび下っていかねばならないというのか。馬鹿げている。

三十階の自室にいるときは、「それでもなんとかして、命ビルに転属しないといけないんだよね」と思っているのだが、それは自室にいるときだからであって、階段を下りていく最中にはやはり、

「馬鹿げている。こんなことに意味はない」

という思念が脳内を支配していく。

数字のあてはめをわかりやすくするために、架空に年齢をあてがっていくが、数字の調整のため、年齢としては妥当でない話をする。

あなたは五歳のときに、「ブスだ」と言われて馬鹿にされたとしよう。また、十歳のときに、男子に暴力を振るわれていじめられたとする。十五歳のときに、貧乏と言われて馬鹿にされた。二十歳のときに、センスがないと言われて馬鹿にされた。二十五歳のときに、さびしそうでかわいそうと言われて馬鹿にされた。

あなたはブスだと馬鹿にされたことに対し、勉強して成績をよくし、クラスで一番の成績になって、馬鹿にしてきた人たちを「見返してやる」ことに成功した。暴力を振るわれたことに対して、法律や手続き

に詳しくなり、相手の弱みにつけこむことを覚えて「やりこめる」ということを覚えた。貧乏と馬鹿にされたことに対し、努力して資格をとり、高給をもらえる職業につくことで見返してやった。センスがないと馬鹿にされたことに対し、文化活動で表彰されることで見返してやった。さびしそうでかわいそうと馬鹿にされたことについて、著名人にコネをつけてパーティに参加するようになり、それをＳＮＳで発信し、自分が「影響力のある人」になることで見返してやった。

そうして三十歳になると、もうそんな簡単には馬鹿にされない人になった。あなたはそうして生きてきて、そうして優秀になっていった。このことはあなたの「歴史」と言えるだろうし、何しろ優秀になっていって力をつけていったのだから、悪く言われる要素はないように思える。

逆でも同じだ。成績が悪いということで馬鹿にされた人が、かわいくなって見返すことに成功する。立ち回りがわからなくて馬鹿にされた人は、膂力・暴力を味方につけてやりこめる。給料が少ないといって馬鹿にされた人は、投資や財テクのたぐいで成功して見返そうとする。文化的なかかわりがないと馬鹿にされた人はセンスをとがらせて見返そうとし、影響力がないと馬鹿にされた人は、「幸せな家庭」で反撃してやりこめようとする。

どちらにせよ、そうして上り詰めていった、強くなっていった、優秀になっていった、そしてついに馬鹿にされなくなった自分を、いまさら三十階から地面階まで下ろすことなどそうそうできない。実績があなたを許さない。二十五階、二十階、十五階、十階、五階、それぞれに強いこだわりと怨恨の歴史が染みついている階層を突破して、地面階までたどり着くというのはまるで不可能じみているのだ。

いっそ、

「誰かムンビルを爆破してくれんかな」

という心境に、誰でもなるだろう。

いっそ認知症にでもなれば、これらすべての認識は粉砕されてどこかへ消えて行ってしまうのかもしれない。

あるいはずっと昔に、あなたは命ビルの三階に住んでいたかもしれない。そのときのあなたは、命ビルの三階の景色に胸を打たれながら、さらにがんばって命ビルの五階にまでたどり着きたいと、素直に熱意を持っていた。

けれどもあるときあなたは、ムンビルの住民たちにこぞって馬鹿にされた。

「なんか、レベル低いですよね？　ごめんなさい、わたしたち、ずっと前からもう十階に住んでいるので、あなたの話を聞いているとどうしても笑ってしまって」

あなたはこの嘲弄にカッとなった。彼らのムンとした気配と、そのいやらしい表情は、まるで呪いのようにあなたに突き刺さり、あなたの血を憎悪と嫌悪に沸き立たせた。

あなたは直観的に、自分がムンビルに転属すれば、数年後には十五階か二十階ぐらいまでいく、と思った。

いったん本気になってそのことに取り組めば、ぜったいに負ける気がしない。

本当の上層にまで行くのは無理かもしれないけれど、少なくとも、あいつらごときにはぜったいに負けない自信がある。

あなたはムンビルに転属することを決めた。

命ビルの三階まで進んでいた、その実績と栄光は捨て去られ、あなたはムンビルに転属し、たしかにたちまち十五階、二十階へと進んでいった。

そうして、かつて自分を馬鹿にした連中を見返してやることに成功した。

そのときのあなたは、体内にマウントの興奮物質を湧かせ、当人としては「スカッとした」と言っているが、体は重い。

かつての、素直な熱意を持っていたあなたはもういない。

ずっと昔の、命ビルの三階にいたときのことを思い出そうとすると、脳内にザザッとノイズが掛かり、記憶は視えなくなって、何かが無性に不快になる。

そこからふたたび、地面階まで下りていくことなど、いったいどうして出来ようか。
生命軸への転属を望むとして、その実現の困難は、生命軸が得られないということにあるのではないのだ。
獲得するのが困難なのではなく、手放すことが困難なのだ。
生死軸での実績、自分の high-ムンたる実績が手放せない。
優秀なら優秀で、「かわいい」なら「かわいい」で、自力で獲得してきた、その high-ムンの実績が手放せない。
high-ムンとなって"乗り越えて"きたのだ。そうするしかなかったのだ。誰も助けてくれず、自分を自力で救済してきた。それが自分の歴史だった。
その high-ムンがどうしてふたたび傷つく場所に立てよう。
「サダルストリートはうつくしかった。あの朝、おれがドミトリーから出たとき、サダルストリートは光り輝いていた」
「でもそれって、あくまで大学に行けるだけの経済的な余力があって、さらにそこから、そうした長期の海外旅行にもいける経済的余力があってのことですよね？」
だからわたしは、すべてに対してへりくだり、すべてのことをフィクションで話す。ムンといっても、わたしが下ならば問題ないだろう。わたしが下ならばわたしからダウンフォースを受けることはないのだから。そしてフィクションで話すかぎりは、しょせんフィクションとして見下され、やはりその話からダウンフォースを受けることはないだろう。だから問題ない。いつもそうしていれば、わたしは誰に対してもいさかいの空気を起こさずに済む。
それで、わたしはわたしの話をすることについて、いくらでもへりくだって平気だ。なぜか知らないが、わたしはそのことにすっかり慣れている。もうずっと前からだ。"地べた"に貼り付くことなど、いまさらなんでもない、ずっと前から慣れっこのことだ。
そのことは、かつてのわたしが、たいして高くもない階層から地べたの階層まで下りたことがあるという、その経験があることを反映している。
幾度となく繰り返してきたことだ、何をいまさら……
地べたのわたしを、誰かが踏むにせよ踏まないにせよ。
地べたには慣れているし、むしろいまでも、高層階は尻の据わりが悪くて困っている。わたしは何度でも地べたに立って話そう。サダルストリートはうつくしかった。

ここまでのまとめと、最後のムンに向かって

ずっと前の段で「慟哭するムン」について述べた。かつて求めた命の周波数、魂の周波数、世界の周波数が、自分には得られなかった。いつからかそのことをすっかり忘れていたものの、ふとしたとき、まったく別の誰かのところに、そのかつて求めていた周波数は現れた。なつかしい思いがして、自分もその周波数に加わってみようと思った。しかし自分から鳴る周波数は「ムン」で、彼の周波数とはまったく噛み合わなかった。自分が近寄ろうとすればするほど、自分は彼らとは噛み合わないのだということを思い知らされる。やがて彼らは、何らムンとしていない栄光の旅路へ出発する。それを見送る自分のほほえみは、ひどい偽物で、彼らを見送ったあとには、慟哭が湧いてこざるをえない……そういう話だった。
そこでムンが慟哭するのはとうぜんのことだ。だが現実的にはここで閉幕というわけにはいかない、われわれのじっさいの生は続く。そうして慟哭させられるということじたい「傷つく」ということに含ま

れるのだから、彼はやがてその慟哭するということが耐えられなくなっていく。

それで彼は、次の段階、「居直るムン」へと進行していく。

「居直るムン」が、さしあたり、われわれが目撃するムンの最終段階だと見てよい。最後のムンだ。そして最後のムンに向けて述べてゆくことができるということは、今回の話もいよいよ終盤に近付いたということになる。

ムンはもともと、「命」が得られないことから、その代替として発明され、台頭してきたものだった。なぜ「命」が得られないかといえば、「傷つく」という場所に立てなかったからだ。「傷つく」という場所に立つことができれば、そこに分岐路があることに気づき、人は分岐路の先に「世界」を発見する。その世界には「命」が降っている。われわれの生は、ままならぬこと多くして、あわれみに満ちているかもしれないけれど、だからこそ「生きろ」という声がその世界の空から降り注いでいる。あわれなわれわれは「生きろ」と命じられているのだ。

ただしその声を受け取るのは、「傷つく」という場所に立つことができた人のみで、ふつうはその「傷つく」という場面がやってくると、人はただちに習慣化した「我慢」のメカニズムを立ち上がらせてその場面から遁走する。そうして傷つくことに我慢で対抗するのは、むしろ「偉いでしょ？」と一般には思われている。我慢というのが「吾我の驕慢」という意味だとは教わらないでわれわれは生きている。自分は美人ではなかった。自分は走るのが遅かった。自分は異性にモテなかった。自分は大学に進学できなかった。自分は馬鹿にされた。そんないちいちのことで傷つくのがわれわれだ。生死軸において、そうして下位につけられるということは、上から「死ね」と嘲笑されて圧迫されるということだ。生を吸い上げられるということだ。つらすぎて耐えられない。だから「我慢」をする。我慢スコアを付与し、なんだかんだ「自分のほうが偉い」ということになれば、自分が彼の下風に立つ必要はなくなるわけだ。むしろ自分から向こうに「死ね」の風を送りこむほうが正当だろう？　そうした我慢スコアの上でのマウント合戦になるだけだから、「何かを怖いと思ったことはないですね、僕はけっこう怖いもの知らずですよ」と思う。

我慢スコアを付与することで彼は「死ね」のダウンフォースに直撃されることを免れたわけだが、我慢スコアで膨張した彼の自我は、万事についての結果がスコアに相当しないので「おかしいな、計算が合わない」と不満に思う。もし、自分の魂が直面している真のスコアについて「こちらが本当のスコアなのでは」などと思い始めれば、一気に自信を失うことになる。自信を失うというのはとてもつらいことで、耐えられるようなことではない。だから、そんなときでも自分をちやほやしてくれる誰かの存在は、そのときこそひとしおありがたいものと感じる。そのとき、自分をちやほやしてくれる人だけがけっきょく自分にとって正しく許せる誰かなのだと確信する。自分はそうした正しく許せる誰かと一緒に、下方に見立てた他人に向けて楽しく「死ね」を発揮しているほうがずいぶん幸せだ。始めは吾我驕慢の音がムンムン鳴っていることに違和感を覚えたものだったが、一度そのムンの恩恵にあずかってみれば、違和感は気にならなくなっていった。むしろそのムン仲間が自分を支えているということを本心から認めようという気さえしている。なんだかんだあったけれど、けっきょく周波数が合うということがわかった。共鳴できる人たちといたいでしょ、そりゃ。ただ、もし冷静に観察するなら、そのムン仲間たちによって結果的に、祝福というよりは「わざわい」のほうがずっと多くなっているという事実はある。それもわかるのだが、だからといってもはや何をどうしようもない。ムン仲間たちはときおり、内在させていた「死ね」をこちらにも露出してくるなどして、ムン仲間としても脱落していったりするけれど、そんなことも今さらどうでもいいのだ。われわれはけっきょく生きるか死ぬかで生きているのだから。「誰でも内心でお互いにマウント取り合っているところはあるんじゃない？　あんまりそれを露骨にされると付き合いきれなくなるけど」。

そんなに日常的に「死ね」と思っているわけではない。内心の奥深くで、と言われても、いちいちそんなに深く考え込んでいるわけじゃ

ない。「むしろ、今あるものに、ありがとうってずっと思っているぐらいだけど？」というのも嘘ではない。「一般的なことで十分だし、一般的なことを大事にしていけばそれでいいんじゃないの？」。こんなことを言いあっていても何の意味もないので、「茶化す」ということを差し込んでうやむやにすべてを消去していくことは、実際的なわれわれの“気の利いた”手法になっている。「命！　っていうと、アレだよね、ゴルゴ松本のやつだよね」「あーそれすごいなつかしい笑」。そして何を権威にしているかというと、「えーこれ、超ヤバい、超かわいくない？　マジ尊いんだけど」と、生命軸を錯覚する「かわいい」に帰依とやすらぎを得ているし、いっぽうでは、何かの役に「なりきり」の顔面と演出を見せている誰かのことを「リスペクト」している。

「むかしは確かに、世界とか命とか、そういうのが聞こえていたときもあったかもしれないけれど。子供のころの夏休みとかかな。でも、いつまでもそんな子供でいられるわけじゃないし。なんかむしろ、その世界だの命だのっていうことを考えると、逆にずっと死ねって言われているような気がするんだけど」（異軸翻訳）

こうした現代の生死軸文化、ムン文化はどのようにして始まったのだろうか。その端緒を明確に言うことはできないだろうが、ひとつの発端としてはやはり、命への分岐路として「傷つく」という場所に立てなかった者が「かわいい」に目をつけたということがあったのだと思う。idea と創造を繰り返し、たしかにそこに命と世界を現していたAに対し、Bは横並びに入り込もうとしたが、まともに相手されなかった。Bは始め、いろいろ言いたがり、言ってはみたものの発言は幼稚で支離滅裂だったので、Bは黙り込むことになった。BはAにまともに相手されなかったけれども、そのことに「傷ついた」と感じ、Aに対して攻撃的な気持ちを持ち始める。

Bはこのときすでに、「こんなに傷つけられて、わたし我慢している。この我慢だけでも偉いと認めてほしい」ということに主題を切り替えている。idea やら創造やら、命やら世界やらはどうでもいいことになった。わたしのこの我慢をどうしてくれるの。Cがそれについて警告に来る。もちろん警告の対象はAであって、「Bが、すんごい傷ついているんだけど。あなた、どう責任とるつもり？」。Bの行動はAに対して一方的かつ荒唐無稽だったのだが、「それはそうかもしれないけれど、Bがすごく傷ついたのは事実でしょ。謝ってよ」とCは言う。Cはこのとき、論理を超えて自分の言いようとBへの庇護が正義だと確信している。そのことのほうに命があると確信している。なぜなら、AとBのどちらが「かわいい」かと言えば、「かわいい」と目されるのはBのほうだからだ。Aのほうは、か弱さの中になく、生のバックアップを要請するシグナルを発してはいない。

Cは生死軸に所属していた。だからAが活動している idea や創造、その命や世界のことはわからなかった。そのことはこれまで、Cにとっても差別的なことだったのだ。それが今このときは、Cのほうが命の側へ所属していると、C自身には確信されている。Cはそれで正義の高ぶりの中にいるのだ。Aの「わからずや」ぶりに向けて堂々とため息をついて見せるほどに。

Bの「かわいい」に恭順することで、Cは自分が生命軸に所属する者だと錯覚することができた。もちろんこのときCは真相を知らないし、Bも自分のやっていることの仕組みに気づいていない。メディアから刷り込まれたイラストイメージがすでにBの脳裏にあり、Bは単純に、「純粋すぎて、すぐか弱く泣き出してしまう女の子」という偶像を模していた。Bはその偶像を模したときはじめて、人から「かわいい」「大切にしなきゃ」という扱いを受けた。Cを含めいろんな人が自分に「生きろ」という声をかけてくれるので、この「かわいい」自分が本来の自分であって、正しい自分なのだと学習した、あるいはそのように思い込んだ。

このかわいいものを護るために、Aに謝罪をさせなくてはいけないと、奮い立ったCは正義に満ちてよもや引き下がりようはなかった。その後、弾劾されたAは、BCとのかかわりからは離脱し、BとCは正義を完遂したのだが、なぜかBとCのところには命や世界は残らず、何かの闇を感じながら、BとCは互いに友人の「なりきり」を可能な

かぎりつづけることになった。
　こうして、偶像崇拝から「なりきり」によって生成される「かわいい」および、それによる逆生命軸への転属、命を踏みつけて自己至高性にまで踏み切った正義確信の高ぶりによって、人々はもともとの生命軸を駆逐し、ある意味では勝利を収めていった。「ムン」が勝利を収めたのだ。勝利を収めたのに、結果として得られる報酬はなぜか「計算が合わない」と感じられて不服なのだが、やがてそのことじたいにもムンは勝利しようとする。
　永遠の「命」なるものじたいに否定と攻撃を向ける、最後のムンが登場する。

居直るムンは
ピンと来ないことを
威張る

　じっさいのこととして、われわれは〝困る〟のだ。いやもちろん、何にも直面しないように、すべての日々をごまかして生きるのであれば、われわれは困りようもないのだが、そこまで自暴自棄にもならず、なんとかしてささやかでもその「命」「世界」というものに向き合ってみようとするとき、われわれはその本当に〝困る〟という単純な状態に陥る。それはあまりにも単純なことすぎて、次第にシリアスさも抜け落ちていってしまうほど。初めのうちは動揺するのだが、あまりにも同じことが繰り返されるので、「なんなんだこの機械的な繰り返しは」といいかげん馬鹿らしく思えてきて、もう動揺もしなくなる。困るというのは、じっさい、その「ムン」が消えないし、「かわいい」が引き取ってくれないということ。たとえばXさんを人前に立たせ、何の意味もなく、ただ右手を高く挙げてもらうということをしてみる。ただそれだけのことなのだから、ムンもへったくれもないだろう？にもかかわらず、Xはそこで右手を高く挙げるというだけのことに、なぜか「ムン」という音を立てる。あるいはムンとして「かわいい」を得意とする人であれば、その右手を高く挙げるということを「かわいい」ものとしてする。
「そういう、かわいいのは要りませんから」
　と指導すると、誰でも、
「そりゃそうですよね」
　と理解する。
　それでもう一度トライしてみるのだが、なぜか、その右手の挙上を、その人はやはり「かわいい」ものとしてやってしまうのだ。
「そういう、かわいいのは要りませんから……」
　どれだけ繰り返しても、その「かわいい」やら「ムン」やらは消えない。
　わたしがXさんに、「そこに立って右手を高く挙げろ」と〝命じて〟いるのだが、Xさんはこれまでずっと「命」に対して「ムン」なり「かわいい」なりで対抗してきた。
　だからXさんは、わたしの命によっては動かず、吾我に湧き出す「ムン」によってのみ動く。
「わたしの命じたとおりに、わたしの命じたことだけをやってください」
　どれだけ単純化して指導しても、必ず、このXさんは挙動の原理を「吾我のムン」に切り替えてから動く。
　わたしはこうしたことで人を責めるつもりはまったくない。馬鹿にする意図など微塵も持ち合わせていない。ただじっさいのこととして〝困る〟ということに、これまでいやというほど直面してきている。わたしも困っているし、Xさんも困っているのだ。Xさんだって、自分でそうしたくてそうしているわけではない。Xさんはこころの底から、

わたしに命じられたままに動こうとし、命じられたことのみで動きたいと望んでいる。

^^けれども、けっきょくXさんは傷つく場所には立てない^^。

だからXさんは「我慢」の中に立ち続ける。その音がムンと鳴る。わたしが右手の挙上を命じたとき、その「命」に対してこそ、その「ムン」はいっそう甲高く鳴る。

ムンはもともと「命」に対抗するために発明されたものなのだから。

Xさんは頑張るだろう。じっさい頑張るのだ。けれどもXさんにとって頑張るというのは、これまで「ムンムンする」ということだった。

ムンはもともと命に対抗するために、代替のものとして台頭してきたものだから、そうしてムンムンするということは、^^それだけもともとは命への希求が強いということ^^でもある。コピーブランド品をたくさん買わされた人は、もともとは正規ブランド品への希求が強かったに違いないように。

Xさんは、命じられたとおりにしようとし、「命じられたとおりにする人」というイメージに全力で「なりきり」をしようとする。それでますますムンムンする。

このことの解決不能は、驚くべきことに、どこまでもさかのぼって「傷つく場所に立てない」ということに起因しているのだ。

ここにYさんがやってきて、わたしがYさんに「はい、右手を高く挙上」と命じると、Yさんは「？」という顔のまま、ただ命じられたとおりに動く。そしてなぜかうれしそうで幸せそうだ。よろこびに満ちている。かといってはしゃぐわけでもない。言われたとおりにする、ただそれだけのことに敬虔さと畏れを現している。命そのもののよろこび。生命軸における高みとの接触。

そしてYさんはなぜか、右手の挙上を命じられたことについて直後、

「ありがとうございます」

と言った。

何が「ありがとう」なのか、一般にはよくわからない。どちらかというと、指示を聞いてもらった側がありがとうと言うものじゃないのか？　そう思えるのだが、なぜかそのときのYの相貌と姿には犯しがたい権威がただよっている。

これを目の当たりにすると、Xはさしあたり慟哭ぐらいしかすることがない。

慟哭されても、それはそれで困るし、慟哭しても何も解決しないし、慟哭の周波数だってムン側の周波数なので、申し訳ないが「ちょっと離れていてください」とお願いするハメになるのだが、それでもまだ、ここまでは笑える話で、総体としてはまだ希望の残る話だ。

これが次の段階、最後のムンに転じたとき、おおよそすべての希望は終わる。

われわれは非常に危険ながけっぷちに立たされているのだ。希望の中にある者でさえがけっぷちにあり、そうでない者の多くはすでに崖から転落していると考えなくてはならない。

「命」に対して「ムン」で対抗する。命じられたことに応えず、吾我のムンに変換してから挙動する。そうしたことが一般的になり、また多くの人は、そちら「ムン」を強化することによって、これまでにそれぞれなりの実績を獲得してきた。それなりの高い評価も得てきた。今まさにそのムンで活躍しているという人もとうぜん多くいるだろう。ここからけっきょくは、すべて引き返して「傷つく場所に立てるか」というところに帰結する。命とムンの分岐点。けっきょく傷つく場所に立たないんじゃないか。ここまでですでに誇れるほどの実績も高い評価も得てきている者が、今さらそんな「傷つく」というようなプリミティブな場所に立てるのだろうか。彼はこれまで一般的なこととして十分な地歩を得てきていて、それなりに「色んな人から、いちおうありがとうって言われてきているんですけど」という立場になっている。「今さらそんな、何もできない人みたいな扱いをされるのは、率直に言って腹が立つんですが」という、その言いようは一般にいってごく正当だ。

それで、

「なんか、わかるような気もするんですけど、ピンとこないですね」

ということになる。
あるいは、
「あー、なんというか、こういうの自分は無理っすね」
という感じになる。
「んー？　なんだか、わかんない笑。まったく、ピンとこないです笑」
「わたしそういうの無理なんですよね」
「あー、そういうの、むかし考えていたんですけどね。なんか、飽きた笑」
ムンは慟哭する。ただし、それは傷つく場所の手前までだ。傷つく場所に踏み出そうとするとき、ムンはむしろ居直る。ムンはもともと命に対抗するために発明されたものだ。その本質が最前面に出てきて、彼の所属を完全決定する。ムンは命の上位に立って、^^命に「死ね」のダウンフォースを投げかける^^。命と世界、その聖なる霊を帯びたものに、もっとも汚らわしいものを投げつけて、その聖なるものを傷つく地獄へ叩き落とそうとする。
そうして命に対して上位に立てば、ムンは「傷つく」ということから逃れられるから。
本来、われわれが「ピンとこない」あるいは「無理です」と言う場合、多くの場合は引け目と申し訳なさを覚えてその言い方を用いるはずだ。
たとえば、自分が物理学を学びに来たところ、
「加速度と距離の関係。距離というのは速さと時間の掛け算だから、いわば面積とも言えるじゃないか？　速さをタテ軸、時間をヨコ軸に置けば四角形の面積になる。そこで、加速度の計算をするということは、速さじたいが時間に比例していくということになる。加速度がａで時間がｔなら、速度はａｔであって、初速度をゼロとするなら、つまり速度は v = at という、これは一次方程式じゃないか。じゃあ面積といっても今度は四角形じゃない、三角形だ。三角形の面積といえば、底辺かける高さ割る2だ。この場合、底辺は時間ｔ、高さはａｔじゃないか。じゃあその面積はというと、1/2at^2 だ。このことじたいは、じつは二次関数でなく一次関数の範囲で計算できるんだよ」
と説明されたとする。これでただちに「ピンとくる」という人はあまりに聡明すぎるだろう。
そこで、架空の少年Ａは、
「いやいや、これだけでピンとくるほど、自分は頭良くないですよ。これ、自分にとってはすごくむつかしい話です。これをいますぐわかれというのは、ごめんなさい、僕にはちょっと無理です。これはきちんと勉強しないと」
と頭を掻くかもしれない。
一方で、架空の少女Ｂは、
「なんか、ぜんぜんピンとこない笑。というか、わかった、わたしやっぱりこういうの無理だわ。説明しているの見ててあー無理ーって思った笑。なんか生理的に無理。絶望的に無理。こういうの何の役に立つのかぜんぜんわかんないし、ぶっちゃけキモくてキツい笑」
と瘴気を発するかもしれない。
もし厳密に「物理学を学びにきた」という前提を採るなら、少女Ｂの態度は不当だ。そしてわれわれはいまここで、「我慢」をしているのは少年Ａと少女Ｂのどちらかということを、確信を持って言い当てることができるだろう。「我慢」をしているのは少女Ｂのほうだ。その瘴気というのもムンのガスだろう。少年Ａのほうは何ら「我慢」はしていないし、何らムンとはしていない。
（少年Ａはこのとき「何をしている」だろうか、考えてみてくれ、解答はすぐ後に示す）
むろん、ここで少女Ｂが、そもそも物理学を学びに来たわけではなく、一方的にそこに置かれただけであれば、彼女がそれをピンとこないだの何だのと、好きに捉えるのは彼女の自由だ。好きに「言う」のは公共の福祉としてどうかと思うが、内面で好きに捉えるのはすべての人格に認められた基本的人権だろう。
だがそんなことより、ここではムンが「居直る」という現象を見ている。物理学という学問の命と出会おうとしたが、それはそんなに簡

単なことではなく、命に出会えなかった少女Bは、ただちに「ムン」で対抗した。のみならず、彼女は居直って、ムンで命を踏みにじり、汚物をぶつけて学門の命を傷つけて地獄に落とそうとした。彼女は物理学に対して「死んでほしい」と笑った。彼女がファッション雑誌を読んでいるときにマハトマ・ガンジーの話は「無理」だろうし、彼女がソーシャル・ゲームに耽っているときにボブ・ディランの歌声は「ピンとこない」だろう。彼女が「かわいい」インフルエンサーの踊る動画を観ているときに、吉田松陰の話を聞かされても、彼女は「は？　キモ」としか思わないだろう。

彼女にとっては命の人の何もかもが「無理」だし「ピンとこない」のだ。ただし、^^彼女が「傷つく」場所から遠いときはそうでもない気がしている^^。彼女は自分が傷つく場所から遠いときは、勉強もしてみたいと思っているし、聖なるものはあると思っているし、本当に感動することはあると思っていて、また本当の恋愛や青春というようなものにもあこがれを持っている。すべて、彼女が傷つく場所から遠いときに限られるが。

先ほどのクイズの回答を示す。同じ物理学の説明を聞いて、ピンとこなかった、さしあたり理解は無理だった少年Aは、そのとき何をしていたのか。そのとき彼は“傷ついて”いたのだ。物理学の初歩は、初歩のくせに自分にとっては関門と思えるほど手ごわかった。スイスイ理解できるような容易なものではなく、また、スイスイ理解できるような天才的な知能の持ち主では自分はなかった。彼はその傷つく場所に立ち、傷つくということを選んだ。「我慢」で手当てするということを選ばなかった。彼の心境を描写するなら単純に「とほほ」の三文字で済む。だがそのとき彼は、若い時間の、若い季節の中におり、窓から吹き込む若い風になぶられている。黒板に書かれた単純な作図に、tやらvやらが添えられている。すべてのものが彼を呼んでいるように視えているのだが、彼は若いのでそのことに気づかない。気づかないままただ呼ばれている。彼がこれから勉強するにせよ、聖なるものに出くわすにせよ、本当に感動することがあるにせよ、本当の恋愛や青春というものに出くわすにせよ、彼はそのすべてに傷つきながら生きていくのだろうなという予感に満ちている。彼自身、そうして傷ついて生きていこうということをすでに無自覚に決定しているのだ。

人は本心からムンを愛しているわけではない。自分からムンとした音と気配が出ることについては、もともと違和感を持ち続けているものだ。けれどそれらもすべて、「傷つく」場所から遠いときだけ。自分が「傷つく」場所に立たされる瞬間、あるいはその直前の手前、あいまいにしていたすべては投げ出されて本性をあらわし、自分はすっかりムンの使途だということを明らかにする。どれだけ命の側を信奉しようとし、またそのように言い張り、ムンの側を汚物のように言おうとしていても、自分が「傷つく」場所に置かれそうになった瞬間、すべての手のひらを返し、すべての馬脚をあらわして、唐突な、それでいてけっきょくはその予定だった、「居直り」を起こす。そして、その「命」とやらに汚物をぶつけてその権威を否定し、地獄に叩き落とそうとする。その「命」とやらが傷つけばいいのだ、それだけで自分は傷つかずに済む。

ムンの本性はここに現れ、ここでこの人はムンであると最後の定義が為される。ここまでくれば、ついにすべては単純な話、^^自分が傷つかないために、命を身代わりに傷つける^^というだけだ。少女Bは、これまでの物理学者のすべてを汚物入れに放り込めば、自分が傷つかずに済むわけだろう。われわれはそうしたことをそのときは平気でやるし、そのときは「それが正義でしょ」と声高に言うのがムンだ。

学門やら、聖なるものうんぬん、感動、恋あい、青春、そうしたものを汚物入れに投げ込むという人を探すのに、いまわれわれはそんなに苦労するだろうか。そうした命のものを大切にしているというのはウソだ、それがウソだというのは、われわれが「傷つく」場所に立たされそうになったときに急遽あきらかになる。自分が学門の命から遠く、聖なるものの命から遠く、感動、恋あい、青春、そうしたものの命から遠いとき、われわれは自分が傷つかないようにすべてのそれらを汚物入れに放り込む。「だってさあ」とそのときは正義を高らかに言

う。それがムンだ。汚物入れに放り込まれたすべての命は深く傷つくが、そのぶん自分は傷つかずに済んでへっちゃらだし、ムンの本音を言えば、

「わたしに傷つけって言うの！？　そんなのぜったい無理だし、何言われてもピンとこない、とにかくわたしじゃない命が勝手に傷つけばいいんです、わたし知りません！　なんでわたしがその命とかいうもののせいで傷つかなくちゃいけないわけ？　命だか何だか知りませんが、率直に言って死ねとしか思いません！」

というところなのだ。

こうして完全なムンができあがる。

ムンの本性とは何だろうか。ムンの本性はけっきょく、「命が傷ついていることを知らない」ということに尽きる。ムンは<<命が傷ついているということ、命がこれまで傷ついてきたということを信じない>>のだ。

ムンは自分が傷つくことを完全に拒絶してきた。傷つくということには「我慢」の手当てをして対処してきた。当人がそれだから、命の側が手当てもなしにそのまま傷つき、ずっと傷ついているということが信じられない。信じようがないのかもしれない。少女Bは少年Aが堂々とそこで傷ついているということを知らないし、そのように信じることもできない。

少女Bが別の場所にいて、自分としては傷つく場所から遠ければ、テレビ番組を観ている視聴者のような安全な気分で、「少年Aは堂々と傷ついて、勇敢だよ」と言えるかもしれないが、自分が同じ場所に立たされそうになったとき、すべての偽装は吹き飛んでムンの本性が出る。

説明をいったん中止して、わたしからの話をしよう。命が傷ついていることを知れ。それだけですべて済むことだ。あなたがこれまで避けようとしてきたすべてのものについて、命が身代わりになって傷ついてきたのだ。そのことを知れば、あなたも今さら自分が傷つくというようなことに「なあんだ」と思うようになる。たとえ震えながらでもあっても。そういう勇気を当然とした魂を得る。これまでに先に傷ついてきてくれた命があるのだし、これまでに命が傷ついてきた量に比べれば、あなたがこれから引き受ける量などまったくたいしたものではない。あなたがそのていどで震えるあなたであったとしてもだ。

傷つく場所に立つとき、「あの人と同じ場所に立てた」と思うようになる。「あの人」というのは、人によって誰のことかわからないし、特定の「誰」ということではないのかもしれないが、とにかく命の人だ。「あの人」と同じ場所に立てたと思うようになり、その場所に立ったとたん、世界が現れて、自分が世界によって護られているということを知るようになる。あの人と同じ世界に自分は立っていて、あの人がそうであったように、自分もこの世界に護られている、「あの人と同じ世界にいて、同じ世界に護られている」と、その傷つく場所をむしろ栄光に思うようになる。あの人が先におらずに、自分が単独でこの場所に立って切り拓くということはきっと不可能だったろうけれど、ただ「あの人と同じ場所なんだ」ということであれば、それだけで急に話は「やれる」という思いに満ちる。そしてむしろ、その場所に立たず、あの人と同じ場所に立たず、あの人と同じ世界に護られずに、自力で生き死にのバトルだけ繰り広げてけっきょく死ぬということのほうが、どれだけ無謀で勝ち目がないかと思うようになる。あの人と同じ場所に立たずに、ただ生死をやりくりしてどうなる。どれだけリアリストふうに、「生きるか死ぬかよね」と昂って言い放ってみたとしても、けっきょく衰弱して死ぬんじゃないか。それよりは、あの人と同じ場所に立ち、あの人と同じ世界に護られるほうがどれだけ理知的で安らぎを得るか、あなたは自然にそう考えて自然に笑うようになっている。

傷つくといっても、ほとんどは「とほほ」の三文字で済むようなことでしかない。まさかそれを避けるために、傷ついた命をさらに傷つけてことごとく汚物入れの中に放り込むというのか。そんなブッとんだまねがよくできるな。自分が傷つくことだけ針小棒大、大山鳴動して鼠一匹、自分が1傷つくのが百億の騒動で、そのために命を百億傷

つけることは、あなたにとっては1の騒動でしかないということか。そういうことなのだろうな。本当の本当に、これまで命が傷ついてきているということを知らないのだろう。

いまわたしが話していることを、あなた自身がとうぜん同じように、あなたの話としてゆきますように。

説明を再開する。ムンとは何であるのか、命とは何であるのか。そのことは最大まで単純化すると、

・命は傷ついている
・ムンは我慢している

と言える。

それで、ここまで入念な説明を経てきてもなお、あなたがじっさいに直面する矛盾と閉塞はきっと、

「傷ついたとして、それを"我慢しない"というのが意味わからないです」

という文脈で現れてくるだろう。

どうしたってムンが出てくるのだ。ムンを隠すぐらいしかできなくて、けれども隠すといっても、そのムンという音はもちろん周囲のすべての人に聞き取られている。自分の内部にも響き渡っている。

命が傷ついていることを知れと言っても、そのときのあなたからは、

「わたしも傷ついています！」

という反撃が湧いてきてしまう。

唯一の違いだけ覚えておくべきだ。そのとき命はムンとしていないが、あなたはムンとしているということ。

あなたはむしろ、命がムンとしていないがために、命は傷ついていないと誤解している。

その誤解が消えるとき、つまりあなたが、命が傷ついているということを知ったとき、このムンにかかわる騒動は終わる。

「あなたは傷つくままにいたから、こうも静かだったのですね」

命はこれまでに一度もあなたに死ねなんて言わなかったのに、あなたはどこかで「死にたい」と思ってきた、その誤解の謎が消える。

あなたに死ねと言いつけてきたのは、あなたの所属する軸だ。あなたの所属軸の翻訳だ。つまりあなた自身の声があなたに「死ね」と聞こえていたのであって、命の側はあなたに死ねなんて一度も言っていない。命の側はずっとあなたに「生きろ」と言い、あなたの死ねの声を消し飛ばそうと懸命だった。

偶像を崇拝してそれを模し、「かわいい」なんて作らなくても、命はずっとあなたに「かわいい」と言い、「生きろ」と言い続けてきた。

命があなたに死ねと言いつけたことは一度もなく、むしろあなたが命に向けて、これまで「死ね」と言いそうになって、それをずっとこらえてきた。しばしば汚物をぶつけることはやめられず、その中でもどうしてか、それに向けて「死ね」と言ってはならないという最後の直観が、あなたをぎりぎりがけっぷちに留めてきた。

もう崖から落ちてしまった人も多い。

臨床心理学者のユングは子供のころ、神の大便（糞尿）が天空から降り注ぎ、地上の大聖堂をこなごなに打ち砕くという夢を見た。そのことになぞらえていえば、あなたはむしろ、命から汚物を投げつけられるほうが、一瞬「ありがとうございます」と言いたくなるという、魂の直観を持っているではないか。なぜ汚物を下されてあなたは「ありがとうございます」と言い出しかねないのか。それはその瞬間、あなたがムンから解き放たれるからだ。汚物を下されるというような露骨なときにだけ、吾我の驕慢がスッと消失するからだ。我慢スコアで膨張したあなたが消えて、ふと、世界に護られているようなあなたを一瞬体験するからだ。もちろんそのとき、あなたは自分に与えられた命の汚物を、まったく汚物だなんて思ってはいないわけだけれど。そのときの千載一遇の「ありがとうございます」をあなたは取り逃してはいけない。

あなたが恐れるべきことは、いまはすんなり読めているこの話が、いつかの先、読み返しても、

「ぜんぜんピンとこない笑。というか、こういうの無理。途中で飽きる」

と体験されることなのだ。居直るムンはピンとこないことを威張る。そうして居直ったムンが最後のムンだ。ムンはもともと命に対抗するために発明されたもので、その最終目標は当然ながら、「命」を下方に置いて「死ね」と言いつけることにある。そのことを為し遂げたとき、彼は完全なムンになったと定義される。

終わりに、予選落ちうんぬんを述べて

じっさいに女性がお出かけするときに、かわいい服とかわいくない服があったとして、わざわざかわいくない服のほうを選んで出かけるのは不可能だろう。現代において「かわいい」ということにはさまざまな咎が見え隠れすることを指摘してきたが、本来の「かわいい」がそのまま罪になるわけではないし、いまさら取ってつけたように表面的な「かわいい」の忌避をしたところで何かの足しになるわけでもない。堂々とこれまでどおり、かわいいほうの服を着て出かければいいだろう。何にせよそんなにせまっ苦しいことを主張しているのではないのだ。「かわいい」ということが、それだけで命たりえるということはまったくないということを述べたにすぎない。「かわいい」ということで多くの人は生命軸を錯覚するが、それで命の人としての機能を果たしているとは考えないほうがいい。命を求めて、世界を求めて、もしそれと出会うことがあったらそのときはせめてかわいがってもらえるようにと、祈りをこめているのですということで、そのいつもどおりの「かわいい」をやればいい。

自らが生命軸の者・命の人なのだという主張で「かわいい」をやっている人は、生きものとは異なる偶像イメージを背後において、ずっとそれを模しているだろう、そのことからは早めに手を引くべきだ。それから手を引いたら自分は驚くほどペラペラの空っぽになってしまうという恐怖に駆られる人があるのも知っている。でもそれは正当に恐怖すべきことだからしょうがないのだ。事実を他人に見せる義務なんてないが、事実を自分に隠蔽する努力なんてものもない。事実を自分に隠蔽しているということを「うまくやっている」とは言わない。同じうまくやるなら本当にうまくやれ。「かわいい」ということだけじゃない、すべて、偶像イメージを模して「なりきり」をしたらそれになれると思っていたり、それ以外にやり方を知らなかったりするということもあるだろうけれど、何にせよそれは誤りだ。そうではない直接の「命」という現象がある。そんなもの見たことないし触れたこともないとしても、そういう現象があるということにしておけ。なんでもかんでもすぐに自分のものとして言い張ろうとしなくていい。生きているうちに本当の恋あいに触れる人なんてごくわずかだし、本当の青春を得て生きていく人もごく少数派だ。それでも恋あいや青春という魂・命・世界の現象はある「らしい」と言い張っている奴のほうがまともだろう。それが自分のものじゃないからといって何なんだ、伝説のすべては自分のものじゃないけれど誰だって言い張っていいものじゃないか。あなたが伝説の人である必要はなくて、あなたの世界の伝説であればじゅうぶんだろう、あなたはそれを吾我の驕慢に使わないかぎりは、あなたの世界の伝説を言い張ってよい。

生死軸には誰もがウンザリしている。命のないものがあふれかえり、誰も彼も、アーティスティックに見せてけっきょく「自分は上」「自分のほうが上」「自分だけが上」ということをなんとしても主張としているだけということがあまりに多い。自分が上なら自分は死ねと言われなくて済むから。自分のほうが上ですと言い張るだけのアーティスト

とは何なのか。成り上がりたいという気持ちは肯定できても、その気持ちの出どころが「これ以上、人の下風にいて、死ねのダウンフォースを受けるのはイヤなんです」では、存在と行為そのものがしょぼくれすぎだろう。何がダウンフォースだ、他人のことなんかアテにするな、アテにするならせめて己が見上げる星空や太陽をアテにすればいい。

命というものがじっさいにある、本当にある、それが直接わかるなら、スピリチュアルは必要ない。デトックスも必要ない。デトックスをしてもかまわないけれど、それで自分の体内の毒や悪霊を排除できると思うな。自分が悪霊の棲み処になっているという事実から目を背けるな、自分が毒の源泉になっているということから目を背けるな。自分が悪霊の棲み処になっていない者、および自分が毒の源泉になっていない者は、誰かからディスられたり悪口を言われたりしても「な、なんだ？」とよくわからないだけで終わるのだ。そうした悪霊さわぎ・毒さわぎとがっちり噛み合ってしまうのは、自分が悪霊や毒と共鳴する者だからだ。パワースポットに行って元気になるというのも、ネタや気休めを通り越せば病気になってしまう。元気な者はどこにいたって元気だし、同じ行くならパワースポットでなく「自分の場所」に行けばいい。身体にいいものを食べるべきだし、身体に悪いものは大量に食べ続けないほうがいいが、それにしたって自分の元気のあるなしを食い物になすりつけるな、加熱している健康志向じたいが病気じみているということは往々にしてあるだろう。

わたしの書き話しに命はあるだろうか。ある、それぐらい自分でわかっている。そもそもわたしは、そこに命がないならまともに書けないし、自分で命があると断言できないものを人に読ませるなんてことはしない。あなたが同じように何かを書き話したら命があるだろうか。あなたは書くことをもっぱらにした人ではないだろうから、あなたはただ話してみるか。あなたが話すことには命があるだろうか。そのときはわたしも口頭で応じるけれど、それに命があるとかないとかいうことが露出してくる気配なら、あなたはたいていその場所からビューッと逃げてしまうということをおれは知っている。それでかまわない。なんでもかんでも挑戦したいと思っているのは、傷つくということを想定に入れていない人だけだろう。いや、想定に入れていたとしても、それがどれぐらい傷つくものなのか知らないで想定に入れているものだ。やめておいたほうがいいし、ピューッと逃げ出すのが正解だ。何のネタでもなし、茶化すでもなし、かといってマジになるわけでもなし、ただ命のあるやなしやだけを焦点に、書いたり話したりして示すとかいうのは、ふつうの人がやることではない。神経がイカレている奴しかやらないようなことだ。そして神経のイカレている人にはたいてい命なんか降りてこず、そのまま本当に神経がダメになって恢復しない人になってしまう。おれはただ幸運だった。なんで幸運なのかは知らない、たぶん生まれた瞬間からずーっと幸運だった。

幸運だったといっても、おれは万事について、たぶんふつうの人が想像するよりも、入念に、しつこく、大量に、すりきれるまで、ヘトヘトのボロボロになって、色んなことをやっている。何につけ、同じ量をやるというだけでふつうの人は真似ができないだろう。三日間は真似できても、それを毎日、十年間、黙って続けていろと言われたらできない。人は、必ず結果が出ることなら努力できるが、結果が出るかどうかわからないこと、努力になっているかどうかもわからないことを続けることはなかなかできない。すべてが無意味だったとなったら十年後に致命的に傷つくからだ。そんなこと、神経がイカレていなかったらやっていられない。それでも、ずっと神経の安定のために逃げ回るというだけですべての生の時間を費やすわけにもいかない。どこかで何かをやらなくちゃいけないだろう。生きているうちに一度や二度は、命があった、世界があった、魂があった、そういう時間と場所を過ごさなくてはならない。それが一度でも二度でもあったなら、他のすべてがスッカスカだったとしても、ぎりぎり「まあいいか」と思えなくもないものだ。おれは精神がぜいたくで貪欲なので、すべての時間と場所を命のそれにしたいと思って、厚かましくそのように生き続けているけれども、誰もがここまで貪欲にならないといけないと

は思わない。おれも作られたアイドルの「かわいい」にだまされて、推しでも持てたらいいのになあと馬鹿げたことを思うことがある。そうしたら休憩になるのかもしれないのになあと。でも残念ながら、おれにはけっきょくそういう性癖は一ミリも解発されないみたいだ。

ムンというやつは、ここ最近で特に、まったくシャレにならないものになってきている。自分の喉から汚物のような声しか出なくなった少年を知っているか。おれはすでにそういう奴をたくさん見てきている。もちろん通りすがりに見かけるだけで、知人になどなりようがない誰かだけれど。そうして自分から、命のない、汚らしい声しか出なくなり、また汚らしい目つきしか出なくなり、汚らしい粘膜、呼吸の空気さえ、汚らしいものしか出なくなっている、そういう少年がすでにいくらでもいる。もちろん少年だけでなく、青年でも大人の女性でも、中年でも老人でもだ。老人がもし、あるときから、汚い目つきと汚い声、汚い姿しか出なくなったらどうしよう？　自分が生きてきた結果がこれか、でも今さらやりなおす時間も気力もない。天国うんぬんがあるのかどうかは知らないが、もしあるのだとしたら、自分はこの汚らしい者としてその魂を審判されなくてはならないらしい。そんなときどうする。どうするといっても、もうどうしようもない。どうするという以前に、日々その症状が加速していくほうがずっと速い。何かの手当てでどうこうなるような速度じゃない。少年のうちに自分の魂のすべてを否定しなくてはならないというのもつらいが、老人になってこれまでの自分の魂のすべてを否定しなくてはならないというのもつらい。少年は、これから我慢して生きていっても自分の魂はなぜか汚らしいと決まっていて、老人は、これまで我慢して生きてきたのに自分の魂はなぜか汚らしいものと決定された。なんてひどい話なんだ。ひどい話かもしれないが、かといってそれで絡まれたとしてもそんなものにはお付き合いのしようがない。その実物に向けては、おれもある意味相手を尊重するという思想をこめて、ありふれて「死ね」と想念するよりないのが正直なところなのだ。おれの内に死ねという発想は存在しないが、彼らから響いている声をそのまま山びこかオウムのように返すなら、そのままを率直にお返しするしかないのだ。おれがそう言っているのではなく、あなたからのすべてはそうとしか聞こえてこないという意味で。悲しみがないわけではないが、悲しいからといってどうにもできないことも存在する。

なぜか少年のうちに汚らしいものに決定してしまった彼に「あなたはムンです」と言ったって、彼は傷つくだけだろうし、もう老年になってしまった人に「あなたはムンです」と言ったって、やはり彼は傷つくだけだろう。その傷つくということに、友人も得ていない少年が耐えられるわけがないし、敬老といって敬われるのが大前提のつもりの老人が、やはりその傷つくということに耐えられるわけがない。いつも思うことだが、こんな話をしているとき、おれの言っていることのすべてが誤りであったらいいのにと思う。いつもそういう埒もない願いを最後に覚えているような気がする。他のすべての人が正常でまともで、清らかで聖なるもので、おれひとりだけが誤っている汚らしいものであったとしたら、そのときはおれが傷つけばいいだけだろう、もしそうだったら気が楽だ。おれはそうしたことに慣れているから。でもそうしたことに慣れているぶん、それが、慣れていない人にとってどれだけキツく、耐えられないことかということにも想像がついてしまう。お前は汚らしい少年なんだ、あなたは汚らしいジジイなんです、そんなことに誰が耐えられるのだ。そんなことに慣れているおれのほうがおかしい。

おれの場合は、こうしてずっとよくわからない書き話しをしており、しかもその書き話しに「命」がないとイヤだっていうのだから、しょうがなかったのだ。書き話しだけでなく、けっきょくこれまでのすべてのことにおいて。おれは、自分のやることに命がないのはイヤだった。命がないなら、おれの生きたすべてのことは0点でかまわない、と思っていた。0点でもかまわないので、おれは自分に対してなるべく公正でいたかった。おれはここに書き話したことが0点と評価されてもまったく何も思わない。あなたの場合はそうじゃないだろう、あなたが精いっぱい、何日もかけて、目をこすりながら頭をひねって文

化的あるいは芸術的な作品をなんとか作り上げて人に示したとして、0点とか「ゴミ」とか言われたら傷つくだろう。おれにとってはそんなことが日常なのだから神経がイカレている。じっさいおれの書き話しには何ら「いいね」がつくわけではない。誰との共同作業でもない、ただのおれひとりかぎりの、命へのアプローチだ。0点と言われてもおれは「そうですか」としか思わないし、百億点と言われても「そうですか」としか思わない。「ゴミ」と言われたら「もともとそのつもりだけど」とおれは言うだろうし、そのときウソ発見器にかけてもらってもかまわない。じっさい、ここに一万の人を集めて、おれの横に衣装を着たかわいいアイドルを立たせて微笑ませ、その横におれの書いたものを示せば、九九九九人はアイドルのほうを「かわいい」といい、おれの書いたものを「ゴミ」というだろう。その中で一人ぐらいは「うーんどうなんだろう」首をかしげているかもしれない。おれの学門としての関心はただ一点、その九九九九人が結果的に祝福を受けるか否かなのだ。祝福を受けるとしたら、それは彼らが崇めた「かわいい」アイドルが命の人だったということ。もしその「かわいい」アイドルが命の人でなかったとしたら、彼らの行為は自らの呪いとなり、祝福ではないわざわいを多く受けることになるだろう。

話のついでに、ひとつだけ警告しておきたい。年長者としてのありがちなアナウンスだ。人はふつう、命のあるやなしやなんて、そんなことじたいに挑戦しないし、そんなことに自ら踏み入ろうとしない。そういうことに興味あるんだよねと言いながら、本当には踏み出さないのがふつうだ、「興味あります」という場所に留まり続けるというのがふつうのこと。そこから数センチでも本当に踏み出せば、本当にシャレにならない「傷つく」ということが起こり始める。そうなるとどうなる。奇蹟的に「世界」へ流れ込む可能性もあるけれど、そうでないかぎり、急激にムンが加速する。傷つくということに対して手当てをし、得られない命の代替として発生してくるのがムンなのだから。

命のあるやなしやに、無謀に野放図に挑戦してしまうと、そこからムンが急激に発生してしまうということ。その急激さは、日常で発生するムンのいきおいとは比較にならない。だからといってやめておけとは言えないけれど、とにかく、気をつけようねということだ。本来、ここで友人やら師匠やら、先輩やら先生やらが必要になってくる。あなたがムンっとなったときにただちに咎めてくれる友人、あなたがムンっとなったときに「なんだコラ」とブッつぶしてくれる先輩、命ということでいえばムンで対抗しても「だ、だめだ、勝てねえ〜」と実力でわからせてくれる師匠や先生、そういったものが必要だ。そういったものに囲まれていれば、あなたのムンはそのたびごとにつぶされて、あなたは何度でも健全なまま、あるべき笑顔とうつくしさで、その命のあるやなしやに挑戦することができる。ただそれも、最近は「かわいい」ということのほうが上回りがちで、「かわいい」ということでちやほやされる人を止めることはたぶんほとんどの人に不可能だろう。まあそれはしょうがないとして、とにかく、作品やら芸術やら、恋あいやら青春やらでもそうだが、命のあるやなしやに挑戦すると、ムンは急加速する可能性があるからそのつもりで向かわねばならない。命のあるやなしやに挑戦した人が、半年後にはスピリチュアルな人になっていて、その二年後にはカルト宗教の熱心な広報係になっていたとしても、おれは何も驚かない。

おれは懐かしいことを思い出す。思い出すというのはウソか、別に忘れていたわけではない。ずっと覚えていることだが、おれは自分が運営するウェブサイトのタイトルを、あまり考えずに Quali, とつけた。なぜ最後にカンマが足されているかなのだが、このことにはおれなりの、どうでもいい含みがある。おれがまだ二十歳やそこらのころから思っていたことだが、物事には、出来のよしあし以前に、まず予選を通過しているかどうかということがあると思うのだ。予選を通過して資格を持っている者のことを英語で Qualified と表記する。

われわれは、自分が生きることに、そうたいそうな願望を抱えるべきではない。誰も彼もが歴史に残る伝説のチャンピオンになれるわけではないだろう。けれどもいっぽうで、しょぼくれて閉鎖した、黄ばんだ目の者になるべきでもない。たいそうな奴ではないにせよ、同じ

世界に立っている、快活で夢のある奴であるべきだ。

このあたり、わたしの言いたいことはつまり「予選は通過しようぜ」ということなのだ。決勝に出ればもちろん、もっと勝負にならないような強豪もウヨウヨいるのかもしれず、そうしたエリートたちや天才たちには及ぶべくもないのかもしれないけれど、それと予選落ちはまた話が別ではないか。予選を通過して、"同じ場所"に立つ資格を得ること。その上でフラれろよ、とおれはむかしよく話していた。不気味な男が不気味な態度で不気味に女の子に言い寄っても、ひたすら不気味なだけであって、そんなもの恋あいでも何でもないだろう。「そんなのはそもそも、恋あいという同じ場所にさえ立てていないから」。恋あいうんぬんというなら、冴えない男でもまず予選は通過しないといけないのだ。それからでないとそもそも恋あいにならないし、「恋あいにならないということは失恋にもなってねえんだよ」と、むかしのおれはよく言っていた。その考え方はいまもまったく変わっていない。

そしてその「予選通過」とは何を指しているのかというと、それこそが、今回話してきた中での「傷つく」という場所のことなのだと思う。たとえば恋あいといって、単に恋愛願望の強い人と話をしていてもしょうがない。恋あいの話というと、恋あいで傷つくということを体験してきた、そこで我慢などに膨張せず、命を、世界を見つけてきた、そういう人としか恋あいの話はできない。青春の話といって、単に若かったころの話というのは誰にでもあると思うが、それだけで青春の話にはならない。体育会系の部活動をやっていましたというだけで青春の話になるわけではない。いかにも若いころにある営為の中で、傷つくということを経験した、そこで我慢などに膨張せず、命を、世界を見つけてきた、そういう人と青春の話をするべきだ。そこで傷つくということと、そこから我慢になど膨張せず世界を見つけてきたということ、それをもって予選通過であって、われわれはこの予選通過してきた同士とのみまともに話すことができるのだ。

表面上は同じような経歴で生きてきたとしても、その中で「傷つく」ということじたいを体験してきていなかったり、そのことごとくで「我慢」を膨らませてムンとしてきたという人とは、噛み合ってお話することはできない。予選落ちだ、とおれは率直に思う。予選落ちと予選通過者のあいだには差別があるべきだとおれは思っているし、それを無理やり「みんないっしょ〜」にするのは、不正なだけでなく不気味で、しかもすべての意味を解体することにしかならないとおれは思う。

言ってみればムンは、予選通過していないのに、決勝の会場に首を突っ込んできている奴、ということでもあるだろう。それは、ムンムンしていて当然だ。本当は自分はそこに立っている資格を持っていないということを知っているのだから。周波数が合わないというのも当然だし、ムンはムン同士で共鳴するというのも当然だ。ムンがやがて命の人を攻撃し始めるというのも当然だろう。ムンの人と命の人は、レベルや能力や違うということではなく、そもそも"同じ場所にいない"のだ。そもそも「傷つく」ということにかかわって双方は違うほうへ向かっていったのだから当然のことだ。

予選を通過するのはそんなに簡単なことではない。われわれのような凡人にとっては、万事が、予選通過できたらもうゴールみたいなものだ。決勝で何位になるかなんてたいそうなことは、ほとんどのばあいわれわれは考えなくていい。ただ、予選通過して、同じ場所、伝説の場所に立ちたかったのだ。少なくともおれはそれだけだ。

予選通過はそんなに簡単なことではなくて、予選通過できなかったときはどうする。ムンっとするのか。そんなアホな話があるか。ムンっとして、さらに同じようにムンっとした人たちと肩を組んで、ムンムンして、予選通過した人たちを圧迫して、自分たちも決勝の会場に割り込むのか。そして「わたしたち、かわいいよね」と庇護を求めるのか。そんなアホな話に付き合っていられるか。

どれだけ美少女で、どれだけおっぱいが大きくて、どれだけセンスのある洋服を着ていても、予選通過していないなら恋あいはない。青春もないし芸術もないし、物語もないし場所もない、命もない。まず予選通過の道筋を探せ。どれだけごまかしても、必ず行き詰って、そ

の行き詰まりには必ず同じ「そもそも予選通過していないでしょ」という文句に出くわすから、そのことの回避ルートを探し回るだけ無駄なのだ。どれだけ美少女で「かわいい」とちやほやされても、予選通過していない彼女に物語はない。ちやほやされてアイドル活動として舞台に上がっても、そこに芸術はないし場所も文化もない。我慢で膨れ上がった女子高生には何もないし、彼女についているプロデューサーにも何もないのだ。そこに独特のオーラがあるように誤解しているのは、まさに誤解であって、彼ら・彼女らはただ「ムンっ」としているだけだ。その「かわいい」に対する「ファン」たちも、ムンっとしているだけで何もないのだ。舞台上のアイドルは、客席のファンたちを内心で、「この人たちは、基本すべてに予選落ちしてきた人たちですよね」と堂々と思っているじゃないか。

予選通過はそんなに簡単なことではない。傷つくこと、傷つく場所、その分岐点で、命を見つけること、世界を見つけること、そのような、ともすれば一生に一度の体験というようなやつで、なんとかギリギリ予選を通過する。他人から見たらしょうもないことでも自分にとっては一大事なのだ。われわれって本来そんなものだろう。われわれは本当は、そのちっぽけな一大事の予選通過もできないまま、オピニオン（意見）やフェイバリット（お気に入り）みたいなふざけたものを振り回すのはバカのすることだと知っているんじゃないか。

今回、生命軸と生死軸ということで話をした。最後に予選通過という話をしたが、予選通過はつまり、わずかでも命に触れることがあり、生命軸への縁を持ったという状態を指す。まだ縁を持ったというだけで、それだけでただちに生命軸に所属が転じたとまでは言えないとしても、縁を持っているのと持っていないのとでは大違いだ。その両者は存在じたいが違う。

この生命軸への縁、所属の可能性を、ふたたび断ち切るものがあるとしたらそれはムンだ。かつて予選通過して資格を得たはずの者でさえ、その資格を取り消されてしまうことがある。

いまから十年前、わたしは今とは違う街に住んでいた。違う家屋の違う書斎におり、今とは違う窓からの景色を眺めていた。それらをいつまでもなつかしく思い出すということは素直に自白するとして、それと同時に、わたしはいまも同じ場所にいるということも宣言したい。あのころ、わたしは傷つくということに今よりも鋭敏だったと思うが、今はそのときより鈍感になったのかというと、そんなことはない。ただあのときより強くなったのだ。今はかつてよりもさらに鋭敏になり、ただその鋭敏さは、わたしがかねてから世界に護られてきたということまで発見させたのだと報告したい。わたしはその発見の中でますます真っすぐ立つようになり、それによって、前よりはずっと強くなったのだ。

十年前のあのとき、あの場所でわたしが危惧したのは、メンヘラ文化がどうこうという言い方のものだった。その言い方も現在の状況と比較すれば、ずいぶん柔和な言い方のもので済んでいたのだと思う。いまは「ムン」であって、しかもそれはすでに精神的なことの「問題」だとは取り扱われていない。ウェブ上であれじっさいのことであれ、人々のあいだではマウント合戦が常のことになり、下方への「死ね」の声が大合唱を起こすのも、ふつうのこと・いつものこととされるようになった。この状況下、われわれは偶像を模して形成される「かわいい」を愛でるだけで、癒された気になり・生命軸を誤解した気分に浸り、それだけを頼りにこの現在のすべてのことを無視しきろうという、無謀で勝ち目のない発想の中にいる。

二〇二三年八月十日、増大するアメリカでの自殺者数に関連して、アメリカのベセラ厚生長官は、「アメリカ人の十人に九人はメンタルヘルスの危機に直面していると考えている」と述べたそうだ。国家が国民に対して「九割の人がメンタルやばい」と発言するというのはどういう状況なのだろう。驚くべきことのはずだが、もはやこうしたことに対して市民からのリアクションは起こらない。仮に小学校の担任教師が「このクラスの九割はメンタルヘルスの危機に直面しています」と児童たちに言ったとしたら本来はもっと衝撃を受けるべきことであるはずなのに、もう何のリアクションも起こらないのが現実となっ

た。わたしが十年前に危惧した「メンヘラ文化」うんぬん、涙ぐましいサイズのものとして鳴らした警鐘は、いまこのときまったくの現実になったとも言いうると思うが、そのことを予言が的中したといって誇るような気分にはわたしはなれない。ただわたしはせめてもの抵抗として、わたしが単なる思いつきを自己主張として言いふらそうとしているわけではないのだということに、何でもいいから可能性と説得力を添えたいのだ。現在のわれわれはこうしたことを、なんでもかんでも貧富の格差のせいに括り付けて、話を終わらせて就寝しようとする向きにあるが、いいかげんその説もアテにならないということを本心のところではわかっていよう。われわれは、親しく観ていたはずの明るく快活なテレヴィでの著名人が、十分な所得と立場を持っていながら唐突に自死したというニュースをもう何度も聞かされているはずだ。

生命軸との縁が絶たれてしまい、「死ね」のダウンフォースに晒されているのだ。

「死ね」のダウンフォースが吹き荒れる中、さらには命から下される「生きろ」の声も異軸翻訳されて「死ね」と聞こえてきかねない中で、われわれは引き返して、よりによって「傷つく」ということを恢復しなくてはならないという。ただでさえ耐えがたく困難なそのことを、このダウンフォースの中でやれというのか。命のまるで見当たらない現代の中でそれをやれというのか。それは一歩誤れば、本当にそのまま生死軸のダウンフォースに直撃されて死に転落する危険まであるような行為ではないのか。そのように詰め寄られたとしたら、わたしはそれについて、そのとおりかもしれないと無力な返答をせざるをえない。

それでけっきょく、最後まで言いうる微弱な希望は、「命あるいは命の人は、いまもなお傷ついているのだ」ということになってくる。予選通過などできない、そのやり方もわからないという人は、自分のことの前に、予選通過者が傷つくことに生きたということを知らなくてはならない。それをもとにして対比的に、予選通過していない者は、我慢することに生きたということに気づかなくてはならない。我慢の人の攻撃的な矛先が命の人に向けられるのは、命の人が傷ついた人だということを彼らが知らないからに違いない。我慢の人は、自分が傷つくということに対して我慢の手当てをすることしか知らないため、我慢の手当てをしていない様子の命の人のことを、「傷ついていない人！」と憎らしく思っている。そうではないのだ。十年前にわたしが書き示したところには「陶酔がよろこびに取って代わる」とあるけれど、命の人はいまも世界というよろこびの中にあり、自分が傷つくということに陶酔はしていない。現代の言い方でいうなら、命の人が“エモくない”と言うほうがわかりやすいのだろうか。命の人がエモくないということが、命の人が傷ついていないという誤解を生み出している。命の人は、初め果てしなく「やさしい」と直観され、その直観は消えないのに、我慢の人はやがてその命の人に攻撃の矛先を向けるようになっていく。なぜそんな矛盾したことになるのかと訊かれれば、我慢の人は「わからないです」と言いながらそれを続ける。

さらにさかのぼって、わたしは四半世紀前のことに答えよう。やはり傷つくと言って、その傷つくということには実体がない。傷つくなんて、言いだせばキリがない、言った者勝ちのものにしかならないということは、すでに二十五年も前に知られている。

傷つくというのはどういうことだろうか。二十五年前に答えられなかったことについてわたしは今ようやく答える。あなたを傷つけるためにはどうすればいいだろうか、あなたが遅刻してきたときに、体育教師が、

「このボンクラが！」

と天まで轟くような大声で怒鳴りつければよいだろうか。そのようにすればあなたはきっと傷つくだろう。何しろ遅刻呼ばわりではなく“ボンクラ”呼ばわりだ、傷つくに違いない。そして、援護を得ればあなたはそれをパワハラだといって裁判所に訴え出るかもしれない。

わたしはそのときのあなたと同じように、かつてその「ボンクラが！」という怒声を浴びたことがある。いまもそのI先生の姿は記憶

に刻まれているが、わたしはなぜかそのとき、I先生の怒声に対して自らの魂が〝寄った〟ということをはっきり覚えている。I先生の怒号は、大人からクソガキに向ける直截のダウンフォースに違いなかったけれども、その声の中には、

「お前らは、これから生きていかなあかんねんぞ！」

という響きがあった。I先生の声はわれわれに「生きろ」というダウンフォースをぶつけてきていた。そのぶつけようが、あまりにも荒っぽいといえばたしかにそうだったが、そのことは苦笑まじりに肯うとして、わたしは、

「じゃあお前も同じだけやってみたらどうだ」

と、代理で反撃する準備を整えている。これはI先生の名誉を護るために、大人になったわたしが責務としてする反撃だ。

一学年で五百人近くいる生徒たちを、一声ですみずみまで怒鳴りつけてその肝をつぶすという、そんな声を日常的に発せるというならやってみればいい。マイクなんかなしだ。しかもI先生は、同僚の教職員からもあまりいいようには思われていなかった。「また説教か、長くなるなあ」と、冷酷な同僚たちからは嫌われていたのだ。

わたしにはとても同じことはやれそうにない。ただ、場合によっては、準じたことはできるようでいなくてはならないのだろうなとは思っている。そうでなければ、わたしは命じられたことに反して、本当の「ボンクラ」になってしまったということになるから。

I先生は体育の教師だったから、それなりに筋骨隆々だったはずだが、わたしはその体の印象を覚えていない。I先生の姿は覚えているし、体つき・体躯という意味ではその造形を覚えてはいるが、体という印象は覚えていない。背丈は高くなく、そのぶん横幅が広い、いかにも頑丈そうな体躯だった。そうしたI先生の、身や姿は覚えているのだが、そこに体という印象は覚えなかった。

I先生がわれわれ生徒たちのボンクラぶりを怒鳴りつけるのが、ていどの問題として過剰だったということにはわたしも同意する。けれどもわたしは、「過剰だったからって何なのだ」と反論する構えでいる。適切に出来る者が99人いて、1人が過剰というならその話もわかる。けれどもそうではなく、出来る人が1人で、他の99人にはそもそも出来ないことであれば、過剰もヘッタクレもないんじゃないのか？目の前でダムが決壊しそうになっている、その緊急の補修ができるのはこの人だけだ。それでこの人のする補修の処置がいささか過剰だったとして、何を責められるところがあるだろう。「この傷口にこの絆創膏は大きすぎるよ」と言って、「この絆創膏しかなかったの」と言い返されたとき、なおも「でも大きすぎだよ」と攻撃し続けるのか。

I先生がたびたび怒鳴りつけるのに対して、わたしの隣にいたTという女子生徒が、

「マジうっとくない？」

と嫌悪感まるだしで言った。現在の標準語に言い換えれば、「マジうっざ」になるだろう。

「なんで遅刻してないウチらまで我慢させられなあかんの？　マジうっといわー」

傷つけるということでいえば、I先生が女子生徒Tを傷つけたのだろうか。

それとも、女子生徒TがI先生を裏口で傷つけたのだろうか。

傷つくことに生きた人は誰だろう。女子生徒Tだろうか、I先生だろうか。

吾我が驕慢しているのはどちらか。

ムンという音が鳴っているのはどちらか。

わたしは奇妙なことを記憶している。女子生徒Tのみならず、同様のタイプが一定数いて、嫌悪感まるだしで「マジうっと」という、言いようと態度を万事について振り回していたのだが、なぜかわたしはそちら側の彼女らの「体」に視線と意識が誘引されたのを覚えている。わたしも当時は思春期だったわけだから、その性的衝動は生々しいものとしてわたしに予感され、わたしを快とも不快ともつかない感触でぞわぞわさせた。

奇妙なことだ、わたしはわたしの精神か魂かにおいて、彼女ら「マ

ジうっと」組を、悍（おぞ）ましいとはっきり嫌悪したのだ。にもかかわらず、その皮膚や粘膜の感触はぞわぞわと予感されて、その予感の淫靡さは、気を抜くと当時のわたしの自慰行為に伴う空想の中にも流れ込んできかねなかった。

ただ当時は、「マジうっと」組が、その体に「かわいい」を作り出すテクノロジーがなかった。あるいは、そのテクノロジーがあったとしても稚拙だった。それでわたしは、彼女らを「かわいい」と思うことはけっきょくなく、さいわいなことに、総じて悍ましいものだという体験でわたしの記憶は結ばれている。

同じ学校、同じ教室、同じ体育館にいながら、わたしと女子生徒Tが「同じ場所」にはいなかったことは明らか。そこでもし、女子生徒Tらが、現代のように「かわいい」というテクノロジーを履修していたらどうなっていただろう。その「体」のぞわぞわする感触の予感に「かわいい」が付与され、わたしがそれに引き込まれることがあったとしたら、そのときは、気づけばわたしの側が女子生徒Tらと同じ場所に立たされることになっていただろう。

現代人はどうあがいても、体、特に女性の「かわいい」をアピールした体に惹きつけられているという事実がある。それは男女の「身」の交合へ向かうものではなく、「体・かわいい」へのぞわぞわした誘引だ。俗には「エロい」「シコい」と呼ばれたりしている。女性の姿がそこにあるのではなく、バストや尻や脚といった部位が、それじたい切り取られた生きものようにムンっと主張を放っている。もちろん男性へ向ける性愛の側でも、そうした体の部位に対する「エロい」の反応は起こっているだろう。現代人の視力はごまかしようなくその部位ごとの「エロい」に引き込まれており、この事実はすでに言い逃れのしようのない既成の文化にまでなりおおせてわれわれの世間に横行してしまっている。

かつてはこのようではなかったのだ。女性が体をかがめたときにシャツの胸元へ視線が入り込むことがあったとして、そのシャツの内側は、かつてここまで異様な誘引力を持ってはいなかった。より生々しい例で言うなら、わたしは若かったころにした女性との交合について、その「体感」を覚えているものはひとつもない。かつて人々はここまで「体」の存在ではなかったのだ。人々が現在のように「体」の存在になりはじめたのはいつごろからだったろうか。それは、仕組み上とうぜんのことではあるが、人々がダウンフォースとして「死ね」を振りまき始めた時期と一致している。「マジうっと、死んでほしいわー」。

現代人は生命軸への所属を致命的に失い、生死軸に転属した。生死軸といって、生きものたるわれわれが、生存本能に逆らって自ら死に向かって進行することを“高み”とすることはできない。だからわれわれは生死軸を反転させて、生に向かって上昇するのだと言い張る。この言い張ることはしらふではできないので、我慢してそう言い張るしかない。ムンという音を立てて、「生に向かって上昇しているんだよね」と言い張る。

そうした「我慢」が体に詰まっているのだ。特に生死軸を信奉しきり、生命軸に唾を吐いた者は、その体に詰まった「我慢」をなぜか視認できる視力を持つようになる。自分の体に我慢が詰まっているので、同じ状態のものが視認できるのだろう。命の人が、他の命の響きを身をもって聞き取ることができるように、ムンもその体をもって他の体の我慢を聞き取ることができる。

ムンにとっては、その体に詰まった我慢の「ムン」という音が、その人そのものだと捉えられているのだろう。

生死軸においては、人々は我慢合戦で、上を取られたら下向きに「死ね」のダウンフォースを受けてしまう、だから水面下でマウント合戦に余念がなくなる。そこで用いられているすべての我慢が体に詰まっていって「ムン」という音を立てるのだが、現代に生きる女性は内心でこっそり考えるだけでいいので次のことを確かめてみてほしい。自慰に用いるイメージがあったとして、あなたは、「我慢に我慢を重ねてきた男、我慢が体に詰まりきって破裂しそうな男、その男の『体』に、性感を加える」というイメージに自慰の衝動をそそられていないだろうか。同じように男性も、自慰に「エロい」イメージを用いるとして、

そのイメージの中の女性は身の晴れやかな解放として交合するのではなく、やはり体に詰まりきった我慢という我慢を、ついに投げ出して嬌声を上げる、そういうイメージとして自慰用の空想に当てはめられているのではないだろうか。

体に我慢が詰まっている。その蓄積が立ち上がるときに鳴る音が「ムン」だ。

そうなると、いまやセックスというのも、性的交合というのが本旨ではなくなっている。性的な我慢、その他の蓄積した我慢の一切を、体から一気に叫ばせるというのが現代のセックスではなかろうか。そういうことであれば、たしかに現代の兆候にあるように、セックスをするのに異性や同性ということはあまり関係なくなってくるのかもしれない。その体の我慢の「叫び」をなるべくありったけ解放させてくれるものなら、その対象は器具でもよいということになるし、そのセックスは一般的な形態から逸脱して、いわゆる「性癖」の極端なイメージ・プレイのほうがよいということにもなってくる。

女性の場合、自慰に用いるイメージと、じっさいに交合する相手はまったく別だろうが、それにしても「我慢に我慢を重ねた男の体に性感を加える」というイメージがあなたの情欲を誘うという点に限定すれば、そのセックスの本旨は我慢合戦の咆哮であって、そのムンの叫びに己の体もムンっと誘引されていると言い得てしまうだろう。何でもない自慰行為においてならそのていどのことは何も問題ではないだろうが、気をつけておくべきことは一点、自慰であれ何であれ、ムン・我慢の詰まった体に耽りすぎれば、そのぶんあなたは「傷つく」という場所へ入りにくくなるということだ。これは「原理」として覚えておく必要がある。吾我が驕慢してムンっとなり、もう傷つくという場所には立てませんというとき、その理由が「オナニーへの耽りすぎです」というのではあまりにもまぬけすぎる。

さてようやく、長大な「ムン」についての話が終わった。十年前と比較して、状況はより厳しくなったと言わざるを得ないけれど、わたし自身はそれ以上のものを提出できるまでに、無事進んでこられたのだと、ここに実物をもって報告できる。そのことをささやかながらうれしく思う。

ムンは我慢の音で、その反対のことは「傷つく」という場所にある。その場所に立ったとき、傷つくということはあるけれど、ムンとは逆にスーッと静かになっていく音がする。地の熱気と天空の冷涼が交錯する、静かで広大な世界が現れてくる音。傷つく場所においては、体の弱点がさらけ出される。われわれの体は弱点だらけで、偉容も誇っていないし、万能も誇っていない。だがなぜか、そこに命が降ってきて、世界が現れて、

「お前はそのように生きよ」

と命じられているということに気づく。弱点をもって傷つくということと同時に、それがなぜか護られているということに気づく。

最大の弱点さえついになんとかしてくれよう。

それでは最後に、ことの発端、反転した生死軸を、順方向に戻しておこう。

逆生死軸から転属を考えても、順生命軸に転属はできない。転属先は必ず逆生命軸になってしまう。

順生死軸からしか、順生命軸には転属できない。

このことを菩提心という。

生死軸は死に向かって上昇・進行するのが本来だった。われわれは生きものとして、そのことを受容できないから、その軸を反転させて、生に向かって上昇しているのですと我慢して言い張ってきた。

そこに我慢が必要なのは、やはり体の弱点がさらけ出されているからだ。我慢の端緒、体の弱点の最初にして最大のもの、それは体が「死ぬ」ということだ。体は「死ぬ」ということを最大の弱点として持っている。その最大の弱点を覆い隠すために、われわれは最初の我慢、吾我の驕慢によって、

「生のほうが死よりも上だし」

ということを言い張った。自分の生に我慢スコアを付加し、死よりも上位につけたのだ。

体の最大の弱点は「死ぬ」ということ。人はこの体の弱点によって傷つく。体が死ぬということは、いかにも祝福を受けていないことの確証だと思えて傷つく。

ただ、それを傷つくままにして、傷つく場所に立ち続けるならば、

「お前はそのように生きよ」

と命じられていることに気がつく。命が降ってきて、世界が現れる。世界によって護られて、命が永遠のものとしてその身に与えられるのであれば、体が死ぬといっても、そのことについて我慢スコアを足す必要はなくなる。もとのまま、生は死に向かっているという生死軸でよい。

これでようやく、生死軸は順生死軸に戻った。

体は順生死軸を上昇する。身は生命軸を上昇する。体は死に向かい、身は命に向かっている。どちらも生から始まっていて、体はどれだけ死にきったかという償却を問われ、身はどれだけ命に近づいたかという到達を問われる。あなたの体がそれだけ死にきれば、あなたの身はそれだけ命に及んだだろう。このことにあなたの我慢などはわずかもない。

そのときあなたの身は、命じられたとおりに「そのように生きた」のだ。

［ムン／了］